

JICA横浜 海外移住資料館
研究紀要

9

2014年度

論文

ハワイ盆踊りにみられる伝統文化の継承
— 岩国音頭のケースを中心に —

島田 法子

研究ノート

サンパウロ市における日本料理（店）の位置・イメージ・受容のかたち

森 幸一

ブラジルからの移住第2世代とバイリンガル絵本プロジェクト
— 浜松市における静岡文化芸術大学の試み —

池上 重弘
上田ナンシー直美

資料紹介

ブラジル東山農場所蔵「酒造工場沿革誌」から見るブラジル産〈日本酒〉事始め

赤木 妙子

アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書

桑井 輝子

菅野武雄「最後の手記」(三)
— 日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想 —

柳田 利夫

はじめに

JICA 横浜海外移住資料館は昨年 10 月に創設 12 周年を迎えました。立地する横浜みなとみらい 21 地域の整備が進み、地域の諸活動と連動する企画等も立ち上げ、関連の媒体からも広報を行うことにより、来館者が年々着実に増加し、今年度の資料館への来館者数は 4 万人の大台に迫る勢いです。

また、資料館の新たな試みと致しましては、昨年の 3 月から 5 月までの 2 ヶ月間、沖縄移民特別展を沖縄県と連携の上で開催し、期間中に 1 万人を超える来館者をお迎えすることができました。本展示では準備段階から、沖縄県立博物館・美術館の皆様と展示内容、展示方法に係る連携を図り、広報等に関しましても、沖縄県の各部局関係者と協力し進めさせて頂きました。県側からのご要望もあり、当館での展示の後、6 月 18 日の海外移住の日（沖縄県における海外移民の日）に合わせて沖縄県庁ロビー及び県立博物館・美術館内での巡回展示も開催することができました。展示パネルはその後、浦添市立図書館、JICA 沖縄国際センターでも展示され、広く沖縄県民の皆様にご覧になって頂きました。当資料館と致しましては、今後とも国内の主要な移住者送出県を中心とした各県との連携強化を図り、移住史に加え、移住先の国々における各県系人の皆様と日系社会の現在も紹介する企画展の開催に努めて行きたいと考えております。この観点から、本年 3 月の開催に向けて、現在、和歌山県との連携による移住企画展を鋭意準備中です。

さて、当資料館の目的の一つに次世代を担う若い方々に多文化共生社会を生きる一員としての学びの場を提供するというものがあります。先般、横浜市立大学との連携講座の中で当資料館の見学を含めた日系人・日系社会に関する授業を一コマ実施致しました。参加した 100 名近い学生から提出された受講感想文の多くから、「歴史の流れの中で海外に旅立った日本人移住者の海外での人生そのものから、グローバル化、多文化化が進む現在に生きるための多くの示唆を得られた」、「自分が移住者になることを具体的に想像できるようになり、日本に来られる日系人をはじめとする外国からの方々に対する思いを新たにすることができた」と言う感想を読み取ることができました。当資料館の提供する教育プログラムへの参加者は今年度 7 千人に達する見込みです。当資料館として、学びの場としての有効性を今後一層高め、広く活用して頂けるよう努力して行く所存ですが、今後の学術のためにも、こうした教育プログラムのためにも、その学びの素材となる過去から現在に至る日系社会に関する幅広い調査研究が必要となります。

「研究紀要」は今回で第 9 号を数えます。当資料館学術委員をはじめとする執筆者の皆様のご尽力に感謝申し上げますと共に、その内容が、読者の皆様の海外移住や各国の日系人社会・文化に関する新しい発見やご関心の広がり、そしてご理解につながることを願ってやみません。また、国内外の読者の皆様の間で本紀要を基に研究成果の考察、活用、発展、そして次なる研究課題の設定、議論、調査、研究へと繋がって行きますことを期待しております。

2015 年 1 月

独立行政法人 国際協力機構

横浜国際センター 海外移住資料館 館長

小 幡 俊 弘

『研究紀要』第9号の発刊によせて

『研究紀要』第9号が完成いたしましたので、お手元にお届けいたします。学術委員会が立ち上げました研究プロジェクトの成果の一部が、ここに掲載されております。海外移住資料館の目的である「海外移住と日系人社会に関する知識の普及」と「移住に関する資料・情報の整備と提供」を達成するための努力が、このような形で実りましたことを、大変、誇らしく思っております。

現在進行中（平成24年度－26年度）の学術委員会研究プロジェクトは以下のとおりです。本年は最終年度で、この3年間の最終的な成果は、さらに『研究紀要』の次号で報告されると思いますが、地に足のついた堅実な歩みははっきりと見られます。

①「ニッポンの伝統、ニッケイの祭り——日本文化の伝承と変容を女性の役割を軸に一」

②「移住資料ネットワーク化プロジェクトの充実と拡張」

上記①の成果の一部は、すでにメンバーによる論文や研究ノートとして『研究紀要』第7号および第8号に掲載されていますが、本号にも論文1点、研究ノート1点、資料紹介2点となって示されています。②のプロジェクトの成果は、本号の資料紹介1点に加え、すでに「ペルー日本人移住史料館デジタルミュージアム」サイト、および「ペルー日本人契約移民検索システム」となって公開されています。さらに、このプロジェクトの一環として、当館で所蔵している架蔵史資料の公開可能性とその際の公開基準について問題の検討を行っています。昨年度公開されたペルー契約移民検索システム（Pioneros）の時代幅を拡張するためのデジタルデータベース構築作業も、進んでいます。

これまでの研究プロジェクトの成果は、『研究紀要』以外にも公表されています。たとえば、展示・イベント関連では、「よこはま国際フォーラム2015」の一環として開催されたシンポジウム「『食』を通じて考える多文化共生——南北アメリカにおける日系社会と日本食」において、上記研究プロジェクト①のメンバーが、研究成果を発表しました。そのシンポジウムでは、インターンとして来日中の南米の日系人数人も、自身の食に関する経験を話し、大勢の聴衆に楽しんでもいただける企画が実現したと思います。また、3月に実施される公開勉強会「ニッケイの祭りと音楽」では、研究プロジェクト①のメンバーに加えて音楽の分野の研究者も報告することになっています。研究プロジェクトがこのような形で広がりを見せることは、大変うれしい発展だと思っております。

また、ロサンジェルス の全米日系人博物館との連携や、広島市で多言語化の取り組みを行っている移住資料デジタルネットワーク化プロジェクトサイト「広島デジタル移民博物館」の監修にも、学術委員が協力しています。

こうした形で海外移住資料館の活発な活動が国内外で示されることは、『研究紀要』とともに、海外移住資料館の目的達成につながるものであり、大変喜ばしく、また誇らしいことです。このような成果が今後も増えることを願う次第です。

この『研究紀要』が、読者および関係者のみなさまのご支援を得て成長し、海外移住資料館の活動の一端が、より多くの方々に理解・認識していただけますよう、願っております。

飯野正子

津田塾大学名誉教授・前学長・海外移住資料館学術委員会委員長

研究紀要

〈目次〉

はじめに 小幡 俊弘

『研究紀要』第9号の発刊によせて 飯野 正子

論文

ハワイ盆踊りにみられる伝統文化の継承—岩国音頭のケースを中心に—
.....1
島田 法子

研究ノート

サンパウロ市における日本料理（店）の位置・イメージ・受容のかたち
.....21
森 幸一

ブラジルからの移住第2世代とバイリンガル絵本プロジェクト
—浜松市における静岡文化芸術大学の試み—
.....59
池上 重弘・上田 ナンシー 直美

資料紹介

ブラジル東山農場所蔵「酒造工場沿革誌」から見るブラジル産〈日本酒〉事始め
.....71
赤木 妙子

アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書
.....95
叅井 輝子

菅野武雄「最後の手記」（三）
—日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想—
.....116
柳田 利夫

ハワイ盆踊りにみられる伝統文化の継承

— 岩国音頭のケースを中心に —

島田法子（日本女子大学・名誉教授）

<目次>

はじめに

- I. ハワイの日本人移民略史
- II. ハワイのボンダンス略史
 - 2-1 戦前の盆踊り
 - 2-2 終戦後の盆踊り
 - 2-3 50年代以降のボンダンス
 - 2-4 現在のボンダンス
- III. 岩国音頭のケーススタディ
 - 3-1 岩国音頭の特徴
 - 3-2 人口という要因
 - 3-3 「語り」による日本との繋がり
 - 3-4 岩国踊り愛好会とジェイムズ・クニチカ

おわりに

キーワード：ハワイの盆踊り、文化継承、岩国音頭、岩国踊り愛好会、ハワイ日系人史

はじめに

ハワイの日系人社会の最大の年中行事は、昔も今もお正月とお盆であろう。お正月には餅をついてお節料理を食べ、神社に初詣でにでかける。夏には墓参りをしてボンダンス（盆踊り）で夜をすごす。この小論は、ボンダンスをとりあげ、日本人移民がその文化をどのようにハワイに移植し、継承してきたかを検証する。

英文の先行研究には新しいものがない。ハワイ大学社会科学部の研究誌に、いくつかの報告（1938、1943、1948）が掲載されているが、いずれも、日系人社会の風習を参加観察した報告書であり、学術的分析に乏しい¹。それ以外では、日系人社会の文化を紹介したジョン・デ・フランシスの著作（1973）が一つの章をボンダンスにさいしている。一般書ではあるが、当時のボンダンスの状況が詳しく報告されている。ジュディ・ヴァン・ザイルによる著作（1982）は、80年代のボンダンスの状況を知るのに役に立つ。クリスティン・R・ヤノによる修士論文（1984）はボンダンスの歴史とその変容を分析しているが、特に当時のボンダンス関係者との多くのインタビューが役に立つ²。邦語論文としては、中原ゆかりがボンダンスの変遷を概観した論文（2002a）、日系人によって太平洋戦争をテーマに作られた盆踊り歌を扱った論文（2002b）、そしてモロカイ島を事例として島外からの協同を分析した論文（2003）を発表している。また最近出版されたハワイ日系人の音楽を扱った著作（2014）の中でも一つの章でボンダンスを取り上げている。早稲田みな子は、ディアスポラ概念を用いてハワイと南カリフォルニアの盆踊りを比較研究した論文（2010）と、福島音頭と岩国音頭の文化変容

と日本との結びつきを分析した論文(2012)を発表している。その他、ホノルル市の日本文化センターの展示を分析した秋山かおり(2010)がある³⁾。

しかしながら文化継承の視点から、なぜ古い日本語の盆踊り曲が現代にまで歌い継がれているのかを取り上げた先行研究はない。本稿は特に岩国音頭をケーススタディとして取り上げ、なぜ岩国音頭が日本人移民史の初期から現代にいたるまで、長期にわたって受け継がれてきたのかを、山口県移民の特色、岩国音頭の特色、そして岩国踊り愛好会という組織とその指導者ジェイムズ・クニチカが果たした役割を取り上げて分析する。

I. ハワイの日本人移民略史

ハワイの盆踊りを分析するまえに、その背景として、ハワイに盆踊りを移植した日本人移民の歴史を簡単に捉えておきたい。ハワイの特殊事情として、かつて日系人人口が全人口の40%を超えてハワイで一番多かったことを覚えておく必要がある。1930年代以降、他民族人口の増加によりその割合はわずかに減っていくが、日米開戦の1941年でも、日系人人口は37%を占めていた。2000年の国勢調査によると、日系人はハワイ人口の20%を占め、今なお主要なエスニック集団の一つとなっている。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本人移民が急増し、1900年代のプランテーション労働者に日本人移民が占める割合は70%にも達した(ハワイ日本人移民史1964:264)。当時ハワイの砂糖産業は世界市場を相手に爆発的に成長し、大変な労働力不足が生じ、安い労働力を海外から輸入する必要に迫られていた。最初は中国人労働力が輸入されるが、19世紀末には代わって日本人が移住するようになった。日本政府とハワイ王国政府(当時ハワイは独立王国)との間で協定が締結されたため、1885年から本格的な日本人の移住が始まった。ハワイは1898年にアメリカ合衆国に併合され、1900年にはその準州となり、以後、1924年の移民法(排日移民法と呼ばれている)の成立によって全面的に入国禁止になるまで、日本人移民は急速に増加し、二世の誕生もあいまって他のエスニック集団を凌ぐ存在となった。

当初は、サトウキビ・プランテーションの労働者として働き、貯蓄ができれば故郷に錦を飾るといいう出稼ぎ移民であった。ハワイに定住する意図はなく、祖国日本が彼らの意識の中心にあった。3年契約の契約労働者で、賃金は月26日の労働で男15ドル、女8ドル。日本の当時の大工や石工の賃金月3円と比べると、破格の労賃であった。しかし現実には厳しく、掘立小屋の住まいと炎天下のサトウキビ畑での重労働に耐え、節約に徹した者だけが故郷に送金し錦旗帰郷を果たした(ハワイ日本人移民史:269;小林2005:49)。初期のプランテーションでは、日本人移民はまとまった居住区(キャンプと呼ばれる)を与えられ、集住して社会生活を送った。また同じ出身町村、出身県の人々は組織を作り、互いに助け合った。この生活様式が盆踊りの背景にある。

1910年代以降、日本人移民の職業、居住地には大きな変化が生じた。日本人移民はプランテーションを離れて都市に住む傾向が強くなり、急速な都市集住が始まった。オアフ島のプランテーションでは、1909年4月から8月にかけて、日本人労働者が賃上げを要求して大ストライキに打って出たため、居住地から追放され、ホノルルに流入した。さらに1920年、第2次オアフ島大ストライキが起り、プランテーション労働からの離職がさらに進んだ。その他の各島においても、プランテーションを去ってヒロなどの都市部への集住傾向が進み、またホノルルへは、オアフ島のみならず、ハワイ全島から移住者が集まった。日本人のプランテーションの農業労働者比率は1930年には20パーセントを切った(ハワイ日本人移民史:264)。

1930年代になると、都市集住がさらに進展した。都市においても、日系人は比較的他のエスニック集団から分離して、日系人で固まって生活をしてきた。例えばホノルルでは、モイリリ地区、カカアコ地区、パラマ地区、カリヒ地区等に集中して住んだ。また、日系以外の民族との結婚(民族通婚intermarriage)率は大変低く、1920年代には男性2.7パーセント、女性3.1パーセント、1930年代になっても男性4.3パーセント、女性6.3パーセントに過ぎず、日系人は日系人同士で結婚した(353)。日系人社会では日本語が用いられ、日本語新聞が発行され、日本語のラジオ放送局まであった。子どもたちは公立学校の放課後に日本語学校に通って日本語を学んだ。また味噌、醤油、酒などの日本食を現地生産した。日本人であることに誇りをもち、家庭には天皇陛下の写真が掲げられていた。日曜日には毎週仏教寺院で礼拝した。なかでも仏教寺院は日系人社会の核であり、盆踊りは仏教行事として盛んになっていく。盆踊りの継承に、仏教寺院が果たした役割は大きい。

1941年12月、真珠湾奇襲によって太平洋戦争が勃発すると、ハワイには戒厳令が発令され、軍政が敷かれた。ハワイ人口の3分の1以上が、敵の血を引く日系人であり、ハワイ防衛のために様々な対策が矢継ぎ早にとられた。日本人移民は「敵性外国人」となり、監視・抑圧の対象となった。日本語を公的な場で話すことは禁止され、電話は盗聴され、手紙は開封されて検閲をうけた。日本人10人以上の集会を開く事も禁止された。仏教寺院、神道神社、日本語学校は閉鎖され、盆踊りを含めて日本の文化行事や伝統も廃止、中止に追いやられた。(ただし、西海岸の日系人が全員強制立ち退き・強制収容されたのと比べると、強制収容されたのはハワイ日系人の0.9パーセントのみで、大多数の日系人は戦時下にあっても比較的平穏な日常生活を送った。)

戦後の日系人は、政治的経済的にも、社会的文化的にもハワイの多民族社会に溶け込んでいく。そして日系人をめぐる民族構成は複雑になっていった。混血人口、つまり複数の民族に出自を持つ日系人人口が増加したためである。たとえばある人は3つの民族の血を引く「ハワイ系・中国系・日系人」であり、他の人は4つの、あるいは5つの民族の血を引くということも起きており、「日系人」が混血によって多様化していったのである。戦後になっても日系人は他の民族との結婚率が低く、1950年代においてハワイ全体の平均が30%強のところ、日系人男子7%、女子18%に過ぎなかったが、50年代以降、三世が結婚する頃からこの比率は急速に高まり、90年代には他のエスニック集団とほぼ変わらなくなった(353)。日系という言葉は、もはや意味を失っているともいえる程である。さらに、日系人の中でも沖縄県出身者は、戦後オキナワンという呼称を意識的に選択・主張するようになった。彼らは日系を名のらず、ハワイ社会ではオキナワンとして認知されている。

現在、日本語を知らない世代が日系人社会の中心となり、その民族性をめぐる状況はますます複雑になっている。六世が生まれる時代となり、新たな日本人の移住が少ない中で、次第に血は薄まっていく。「盆踊り」は「ボンダンス」と呼ばれるようになり、ボンダンスの参加者の中に、日本語を話せる人はほとんどおらず、ボンダンス曲の歌詞を理解している人は極少数といっても過言ではない。そんな中でボンダンスがますます盛んになっているというのは、不思議な現象である。ボンダンスは、多民族社会ハワイにおいて、ハワイ人や白人をはじめたくさん民族が参加して楽しめるオープンな多民族・多文化行事として定着している。

II. ハワイのボンダンス略史

盆踊りからボンダンスへと変容していった歴史過程を追ってみよう。盆踊りはどのように始まりどのような変化を経て、今日見るようなボンダンスになったのだろうか。ハワイの盆踊りは、上記の日本人移民の歴史を背景に、まずプランテーションの日本人労働者のあいだで始まり、移民の都

市移住と共に、やがてホノルル等の都市の仏教寺院で、仏教行事として定着していった。

2-1 戦前の盆踊り

19世紀末から20世紀初頭にかけて、日本人移民は主に広大なサトウキビ畑で、厳しい労働の日々を送った。ハワイにおける最初の盆踊りもまた、19世紀末頃にサトウキビ・プランテーションで行われたものと想定されている。プランテーションという環境で、同じ出身地域を背景に、移民たちが故郷の盆踊りを懐かしんで、記憶に従って再生したのがハワイ盆踊り文化の始まりと言えよう。ボウマンは、「最初移民たちは、働いていたプランテーションの畑や、労働者用の長屋と長屋の間の敷地で盆踊りを踊ったと思われる」（Bowman 1974: 42）と述べる。

プランテーションにおける盆踊りは、日系人労働者にとって待ちに待った祭りで、皆胸躍らせて待っていたようだ。64歳になる盆踊りの太鼓打ちのスエキチ・アベは、自分が14歳だった1915年当時を回想して、「盆踊りの季節になると、プランテーションの監督助手が、私らをトラックやサトウキビ運搬車に乗せて、ワイルクヤパイアの盆踊りに連れて行ってくれた。私らはトラックの上でも大騒ぎで踊ったよ。」と述べている（Krauss 1966）。時には何千人も集まり、酒を飲み、おにぎりや沢庵が振る舞われ、子どもにはゲームブースもあり、カーニバルの雰囲気があった。休憩時間には芝居があったりした。「あの頃は本当に大きなことだった。だって他に何もなかったからね。」とある老人は思い出を語った（Yano 1984: 22-23）。

また、20世紀初頭、プランテーションの居住地区では、仏教寺院における盆踊り、いわゆる「寺の盆踊り」も始まっていた（19）。19世紀末には、本派本願寺（西本願寺）による本格的な布教が開始され、1906年までにハワイ全島のプランテーションに30以上の仏教寺院が開設された（17）。他の宗派も次々とハワイに進出した。現在ハワイで見られる仏教寺院の盂蘭盆会の一部としての盆踊りは、プランテーションで始まり、日系人の都市移住にともない、都市部での盆踊りの主流をかたちづくっていったと言えよう。寺院における盆踊りによって、当初の各県人同士が集まって故郷の踊りだけを夜通し踊るスタイルから、出身地の異なる人々が混ざって様々な踊りを踊るスタイルへという変化がみられるようになった。すなわち県人意識に基づく文化から日本人意識に基づく文化へと変容していった（早稲田 2010: 113）。

寺院で盆踊りが盛んになった理由のひとつは、経済的利益が関係していた。カツミ・オオニシの報告によると、「盆踊りは主催する寺院にとって収入源であった。太鼓打ち、演奏者、歌い手、食糧、手拭という出費を差し引いても、150ドルから200ドルというかなりの利益になることも珍しくなかった」（Onishi 1938: 54）。一世の寄付金も相当あった。当時としてはかなりの収益である。

1930年代になると、新たにイベントにおける盆踊りが見られるようになる。世俗の盆踊りが、寺院以外の場所、すなわち日系人居住区の公園等でも行われるようになった（“Japanese Bon Festival” 1937）。そして1930年代初期に、盆踊りの商業化という現象が起きた。日本からハワイに、レコード化された「音頭」と呼ばれる新しい盆踊り曲が伝えられ、若い世代にも大流行し、この音頭人気をみた芸能プロモーターたちが、グループ対抗の踊りのコンペを催すようになり、1937年には賞金が提供されるまでになった（Onishi: 56; Uyehara 1937: 31）。このような商業化は仏教寺院の反発を招いた。僧侶の一人ハンターは、「宗教的行事の一部であったはずのものが商業化、世俗化された。寺院関係者は新しい踊りと、踊りを巡る新しい状況を深刻な問題だととらえた。」と書いている（Hunter 1971: 172）。寺院の反発によって、盆踊りのコンペは中止されていったが、伝承の盆踊りに加えてレコードによる新しい「音頭」を踊ることは続いたし、盆踊りの商業化も消えたわけではなかった（Onishi: 56; Van Zile 1982: 5）。

2-2 終戦後の盆踊り

太平洋戦争が勃発すると、日本人移民の文化活動は全面的に停止し、盆踊りを楽しむことは許されなくなった。戦争は1945年8月、日本の敗戦で終結したが、戦後すぐに盆踊りを復活させることは困難であった⁵。1946年、ホノルル国際クラブという団体が、邦語新聞に、7月13日と14日夜、ホノルル・スタジアムで、戦死者追悼のために盆踊りを開催し、個人にも団体にも賞金を提供するという広告を出したが、帰還した二世兵士団体や、二世の仏教青年会等が反対の声をあげ、盆踊り復活計画は頓挫した。特に賞金を出すという商業化された側面に批判が集まった（“Aroused Opposition” 1946）。

復活は翌1947年の夏で、戦死者記念碑の募金という名目で開催された。7月5日付の『ハワイ報知』の編集者コラムに、「ワイアルア戦死者記念碑資金募集カーニバルと盆踊りは今晚まで催される。明日はサンデーじゃよ——踊りにお出で……今晚限りだから大いに踊りんさい。」という短い記事が掲載されている（「カバチ」1947）。ただしこの年、邦語新聞に掲載されたホノルル市内どこの仏教寺院の盂蘭盆会のお知らせにも、「盆踊りなし」と書かれているので、多分ワイアルアの盆踊りは例外だったのであろう。

1948年になると盆踊りは本格的に復活し、邦語新聞には、盆踊り復活を紹介する記事が写真とともに掲載された。

・・・東本願寺別院では昨夜先亡並に戦没勇士諸霊追悼の盆法要を執行した後境内で盆踊りを催したが、ホノルル市では終戦後最初の盆踊りであったので踊り子五百名を越え、また見物人数千名の多数で身動きのとれぬ程の大盛況を呈した。岩国音頭、鹿児島小原節、佐渡おけさ、花見おどり、仏教音頭等各種の踊りがあって興味深く、殊に娘、婦人たちが全部日本キモノで綺麗に飾った提灯の火に照らされながら踊る情景は美しい限りであった。盆踊りは本土曜、明日曜夜も引続き行はれることになっている。（「市内で最初の盆踊り」1948）

同じ新聞には、他の2か所の地方寺院の盆踊り復活の広告も掲載されている。

戦後の盆踊りは戦死者慰霊のために開催されたのが特徴である。一番大々的に開催されたのは、仏教寺院の主催ではなく、4つの日系の退役軍人団体（第100大隊クラブ、第442退役軍人クラブ、MIS言語兵協会、第1399大隊退役兵クラブ）合同の主催で、1951年夏にアラモアナ公園を会場として開催された。第二次世界大戦と朝鮮戦争で戦死したハワイ出身の日系人兵士への慰霊のためであった。「準州で今までに開催された中で最大規模のそして最も華やかなボン・フェスティバルが開催され、2万5000人と推定される人々を引きつけた」と報じられている。踊りは3晩にわたって続き、初日の晩には、ハワイのすべての仏教宗派の35人の僧侶が列席し、踊りの前に宗教的な追悼式と死者を讃えるスピーチが捧げられた（Otani 1951）。

2-3 50年代以降のボンダンス

その後、日系人社会は一世の時代から二世の時代へと変わり、日本人の盆踊りは、「ハワイ化」してボンダンスへと変容していく。まず盆踊り曲に、ハワイ化と言える現象が起きた。すなわちハワイの生活に基づく、ハワイをテーマにした新しい曲がハワイで作られた。第二次大戦中の二世兵士の勇敢さを讃えた「ああ第442部隊」などである（下記3-3を参照）。また、ハワイをテーマにした曲が日本で作られ、ハワイに持ち込まれた。1950年に日本からやってきたグループがハワイに伝えた「ハワイ音頭」は、フラの手振りを取り入れた踊りであった。またサトウキビ・プランテーションにおける日本人移民の労働歌であった「ホレホレ節」をもとに作られた「ホレホレ音頭」は、1957年に日本のコロンビア・レコードのレイモンド・服部によって作曲されたものである（Van

Zile: 29)。1960年代になると、「仏教系」の曲がいくつも導入された。曹洞宗の「仏教踊り」、真言宗の「大師音頭」、本派本願寺の「親鸞音頭」などで、ボンダンスと仏教寺院とのかかわりが強いハワイならではのハワイ化現象と言えよう。

さらに1950年代には、ハワイ政府による「観光資源化」が始まり、盆踊りからボンダンスへの変容が一層進む。ハワイ観光局が、アメリカ本土の旅行誌編集者や観光局、他の情報関係者に配布するために準備した文書が1951年のホノルルの新聞に掲載されている。それによると、「・・・7月、8月は、1951年のボンダンスの季節で、ハワイの日系人は色鮮やかな新しいオリエンタル衣装に身を包み、寺院や公園に大勢集まり、祖先を讃えるために伝統的な踊りに身を躍らせます」と宣伝されていた(9)。1958年には、国際マーケット・プレイスというワイキキの観光客向けの娯楽の中心地で、ボンダンスが開催された。観光資源化されたボンダンスに、寺院は当然反対したが、観光資源化はその後も続いた。例えば1978年夏には、カピオラニ公園で、ホノルル公園・娯楽局がスポンサーとなり、少なくとも2回のボンダンスが、日本人観光客をターゲットに開催された(9-11)。

またボンダンスは、多民族社会ハワイにおいて日系文化を表象するシンボルとなり、世俗的な記念行事に取り入れられるようになった。1959年にハワイが準州から州に昇格した際には、祝賀行事としてボンダンスが開催され、翌1960年5月には日米修好100周年を記念する民族踊りのプログラムに岩国音頭と沖縄盆踊りが参加した。1968年、ハワイへの日本人移民百周年の記念行事でも、ボンダンスが公園で開催された。また1976年7月には、日米ハワイ文化交流百周年祭の開催初日の特別行事としてボンダンスが開催された(10)。このように、ボンダンスはハワイの日本人性、日系文化を表象するものとなり、日本に係わる祝祭の一部となっていったのである。

2-4 現在のボンダンス

ハワイの夏は、ボンダンスに彩られる。6月末から9月初旬までの足掛け4か月間に、どこの島でも、毎週末ボンダンスが開催される。ハワイ全体の開催スケジュールが毎年5月に『ハワイ・ヘラルド』紙上に掲載され、他にウェブ上を含めてさまざまところに掲載される。スケジュールは各島の仏教連盟によって、近隣の会場が同じ週末にぶつからないように調整されている。生演奏のミュージシャンや踊り手の予定ががち合って、参加できなくなると困るからである。2013年度をみると、ハワイ6島全部で83回(オアフ島では31回、ハワイ島



ハワイ浄土宗別院のボンダンス(2013年著者撮影)

は28回、カウアイ島は9回、マウイ島・ラナイ島・モロカイ島では小計で15回)開催された。

ハワイのボンダンスの特色は、今でも83回中、78回が宗教関係の主催だということである(現在ハワイには、本派本願寺を中心とする多数の宗派の仏教寺院が百数十ヶ寺ある)。その他は、ホテル主催が1回、オキナワン・フェスティバル2回、コミュニティセンター主催2回のみである。会場によっては、踊りだけでなく、灯籠流しなども行われる。またボンダンスの開催日程にあわせて、各寺院では新盆供養の行事も行われる。踊りの開始前や終了後にしっかり盆行事がなされる点は、ボンダンスにおける宗教的側面の強さを物語っている。一方、近年盛んになってきている和太鼓などのさまざまなパフォーマンスは、現代的なイベントとしての側面を見せている。

寺院では、中庭や駐車場、あるいは隣接する広場がボンダンスの会場となる。会場中央には櫓が

設けられ、その周囲に踊りの輪が二重、三重とできる。会場の周囲には見物客のための椅子が沢山並べられ、手作りの菓子や軽食、そしてドリンクを売るテントの屋台が設営される。子ども向けのゲームブースもある。会場の入り口には、帳場とよばれるテントがあり、寺のメンバーが数名すわって寄付を受付けたり、その寺院独特のデザインのボンダンス用手拭や、時には食物を購入するためのチケットを売ったりする。

戦前との大きな違いは、その多文化性である。当日は、寺院の婦人会が中心となって早朝から作った菓子や軽食と、お酒を除く飲み物が販売されるが、ハワイならではの多様なエスニック・フードが並ぶ。沖縄のサーターアングギー(ドーナツ)、ハワイのスパムむすび(スパムは缶詰ソーセージ)、日本のむすびや漬物、太巻き寿司、焼きそば、餅、そしてアメリカのハンバーガー、パーベキュー・チキンなど、多様で人気がある。ハワイの多民族食として知られる「ミックス・プレート」(ご飯と多様なエスニックおかずを盛った一皿)も飛ぶように売れる。曹洞宗別院では踊り手が数百人、見物が数百人集まるし(コマガタ2013)、モイリリ地区(モイリリ本派本願寺とモイリリ地域社会の共同開催)のボンダンスでは2日間で1万人に近い人が集まるとい(イケダ2013)。現在のボンダンスの参加者は、日系人だけでなく、多様な人々が踊りに来る。日系人社会を基盤としつつも、踊りの輪への参加はオープンで、どの民族の人も分け隔てなく参加することができるからである。またいわゆる「非日系人」だけでなく、上述のように日系人の中でもパート・ジャパニーズの増加という形で、民族構成の多様化・複雑化が見られる。かつては日本人としてのアイデンティティの中核にある日本文化としての「盆踊り」であったが、戦後になると多民族社会ハワイを反映して、多文化化された「ボンダンス」となっていった。

現在のボンダンス曲は、CDやテープに録音された現代の曲と、生演奏による伝承の曲に大別される。前者には炭坑節のような民謡やボケモン音頭のような現代の音頭があり、毎年新しい曲が導入され続けている。後者については、移民の出身県と関係が深い。日本からの移民は、日本全体から均等にハワイへやってきたわけではなく、その出身地域にはきわめて大きな偏りがあった。1924年の日系人人口の総計は125,361人で、多かったのは、広島県、山口県、熊本県、沖縄県、福岡県、新潟県、福島県、和歌山県の順であった。この中で戦後まで盆踊り曲が伝承されてきたのは、下記表のようになる。

出身県別日系人人口(1924)と戦後に残る盆踊り曲

出身県	人口	割合	盆踊り曲
広島県	30,534人	24.4%	小河踊り
山口県	25,878人	20.6%	岩国音頭
熊本県	19,551人	15.6%	
沖縄県	16,512人	13.2%	エイサー系踊り
福岡県	7,563人	6.0%	
新潟県	5,036人	4.0%	新潟音頭
福島県	4,936人	3.9%	福島音頭
和歌山県	1,124人	0.9%	

(出典：ハワイ日本人移民史：314)

現在は、生演奏される伝承曲として、山口県の岩国音頭、福島県の福島音頭、そして沖縄県のエイサー系の3つだけが存続している⁷⁾。しかし、1958年版の『ハワイ事情』は、夏の行事としてのボンダンスについて、「7月から8月にかけて各宗及び青年会、地方人会主催で各地で催される。岩国、

福島、新潟、琉球など、日本各地の音頭が聞かれ、外人の男女も参加するのが見受けられる」と紹介しており、この時点では新潟音頭も健在であったことが分かる（布哇タイムス編集局 1957: 178）⁸。また、広島県の「小河踊り」と「新潟音頭」については、1969年の時点で上田喜三郎がハワイ実地調査で確認している（上田 2002: 37）。現在の3つの伝承曲に絞られたのは比較的最近のことであるらしいことが推察される。

III. 岩国音頭のケーススタディ

盆踊りからボンダンスへの変容は、日系人社会の世代交代、日系人の多人種化、日本文化の多文化化、踊り手や曲の変化等、様々な要因によって起きた。その過程で、沢山あった伝承曲も時代の変化の波を受け、現在まで残ったのは岩国音頭、福島音頭、そして沖縄系エイサーのみとなった。ここでは岩国音頭をとりあげ、なぜ岩国音頭が残ったのかを考察したい。残った踊りと消えた踊りの間には、どのような相違があったのだろうか。岩国音頭というひとつの文化が世代を超えて継承されてきたのには、どのような条件が必要だったのだろうか。

3-1 岩国音頭の特徴

岩国音頭とはどのような踊りなのであろうか。岩国音頭の音頭取りは、櫓の上に立ち、傘を差し、七五調の口説節で様々な日本の歴史物語などを独特な節にのせて語る（岩国音頭では、「曲を歌う」のではなく、「演目を語る」のである）。傘は、まだマイクがなかった時代に、櫓の上から下の踊り手まで声を届けるために使われたと考えられている⁹。また音頭取りは扇を持つ。扇には歌詞が書かれていて記憶を助けたり、歌うリズムをとるために打って使われたり、太鼓打ちに合図を送るのに使われる。櫓の上には他に数名の囃子がたつ。楽器は、櫓の下に置かれた大太鼓一つのみで、太鼓が全体のリズムを刻む。踊り手は時計回りに回り、仕草は優雅に手をくるりくるりと回す特徴がある。

岩国音頭の歴史については、ほとんど文献がなく、詳しく知るすべがない。岩国市中央図書館によって収集された「岩国音頭についての資料ファイル」が唯一の手がかりを与えてくれる。その資料によると、「1630年以降の文献にこの岩国音頭の事が書かれているので、かなり古いようである。農民が盛んに踊った様で、明治の後期、岩国音頭として庶民の踊りとなり、曲も従来のものより早くなり現在の踊りになったようである。」とある（外崎）。また盆踊りの階級性について言及した資料があり、「昔は階級制度というものが社会の根本にあって、侍と農民と町民が、一緒になって歌ったり踊ったりということはなかった。だから岩国のような城下町には、侍の盆踊り〔南條踊り〕、農民の盆踊り〔岩国音頭〕、町人の盆踊り〔小糠踊り〕と、三つの盆踊りがあって、別々に踊っていたのである」と述べている（岩国市教育委員会）。岩国音頭保存会の竹中平一前会長によると、現在30の演目が伝承されているという（岩国音頭保存会: 1）¹⁰。

岩国音頭の踊りはかつて小道具を使わない簡素な手踊りであったが、明治以降に扇子踊り、日傘踊り、花笠踊りなど小道具を使う踊りもつくられ、刀をもつ踊りもあったという。そして農民の盆踊りらしく、つい最近まで3人の男が農民の化粧・扮装をし、農民らしい小道具を持ち、踊りの輪に加わる組踊りもあった（竹中 2014）。

ハワイへ渡航した移民の大部分が農村出身者であったから、ハワイでは農民の盆踊りであった岩国音頭が、山口県東部の岩国周辺出身の移民たちによって楽しまれたのである。一晩中、岩国音頭ばかりを踊ったという。やがて寺院で盆踊りが開催されるようになると、様々な出身地からの移民たちが混じりあい、岩国音頭は日本人移民全体の人気の盆踊りの一つになっていった。

ハワイにおける盆踊りの資料によると、明らかに岩国音頭が初期から広く愛された人気の盆踊りだったことが推察される。ハワイ大学のヴァン・ザイルは、1905年に邦語新聞『やまと新聞』に盆踊りの記録が掲載されていることを指摘している。それによると8月19日に盆踊りが開催される予定で、特に「岩国踊り」が演じられるだろうと報じている（Van Zile: 4）。盆踊りの写真記録については、最も古いと思われるものが、20世紀初頭（自由移民時代 1900-1907）にカウアイ島のリフエで撮られたもので、男たちが岩国音頭の「四十七士」らしき扮装で刀を手にポーズをとっている写真である（ハワイ日本人移民史: 33）。1924年のカウアイ島の新聞は、「今年も去年と同じく、砂糖精製所の裏の広場、つまり海の近くで、海の東側の新しい労働者住居のあたりで」開催され、ここでの踊りもまた「岩国踊り」だったと報じている（“Japanese People” ; Van Zile: 26）。ある老ミュージシャンも、「昔は岩国ばかりだった。一晩中、踊って、踊った。とどまることなく、音頭取りが次々交替し、太鼓打ちも次々交替した。夜中の2時まで踊ったよ。」と述べる（Yano: 17）。盆踊りに関する古い記録には、岩国音頭についての言及ばかりが出てくることは注目に値する。

3-2 人口という要因

容易に推測できることだが、同じ踊り文化を共有する同じ地域の出身者が多く集まっていることが、ハワイの盆踊りが継承されるための必要条件だったであろう。しかし、熊本県や福岡県の盆踊りはなぜ伝承されなかったのか、あるいは岩国音頭のように今に伝えられる曲と、広島県の小河踊りのように消滅してしまった曲とのあいだに、どのような条件の差があったのかは、移民数の大小では説明がつかない。他県の盆踊りに関する調査は本研究の及ばないところであることを前提に、なぜ岩国音頭は継承されてきたかの視点から、この項では山口県の移民人口の特質を捉えておこう。

岩国音頭の故郷は、山口県岩国市を中心とする山口県の東部、旧吉川藩（岩国藩）の地域である。吉川藩は、大島郡の一部鳴門村、神代村（現在は柳井市の一部）及び玖珂郡南部（現在の岩国市、和木町）を領地としていた。山口県からの移民は、官約移民の第1回の944名中420名を占め、また官約移民時代8年間の山口県からの移民数は全体の35.8パーセントを占めており、移民送出県としては広島県につき2番目であった。山口県の中では、東部の大島郡から37.5パーセント、玖珂郡から35.4パーセントを送り出し、この2郡で72.9パーセントを占め、初期段階からその集中的な移民送出が山口県の特徴であった（土井: 60）。その後も山口県からの移民は続き、1924年の移民法によって日本人移民が入国禁止になった時点でも、山口県は、広島県に次ぐ2番目の移民送出県であった（ハワイ日本人移民史: 314）。そして1926年の時点での山口県の出身郡市別のハワイ在住人口数調査によると（下表）、玖珂郡出身者と大島郡出身者で、70.6%を占めた（土井: 75）。

山口県出身郡市別ハワイ在留者数（1926年）

玖珂	6,511人	43.7%	吉敷	358人	2.4%
大島	4,013人	26.9%	佐波	326人	2.2%
熊毛	2,456人	16.5%	その他*	258人	1.7%
都濃	971人	6.5%	合計	14,893人	100.0%

*その他には、厚狭、豊浦、美祢、大津、阿武、下関、宇部が含まれる。

日本では、岩国音頭は岩国を含めた玖珂郡を中心に、その周辺の「柳井市や大島郡大島町、久賀町椋野」さらに広島県西部の大竹市まで、広く踊られていた（柳井市史編纂委員会: 818-9；戒谷 2001: 22；「岩国音頭」）。要するに、山口県からの移民の大多数が玖珂郡と大島郡周辺から送出され

ており、岩国音頭の文化圏からの移民が大多数であったということになる。このような移民人口の集中が、盆踊りの継承に大きな役割を果たしたと考えることができるだろう。

3-3 「語り」による日本との繋がり

上述したように、岩国音頭の特徴は、七五調の口説節で、日本人の情念を込めた語りが多いことである。岩国音頭の演目には、「浄るりや義太夫から取材した『関取千両幟』や『八百屋お七』などがあった。明治の初めから浪花節の影響が強くなった。自作自演が原則で、郷土色豊かな語りが多くも創作された」という（岩国市教育委員会）。特に明治末期の浪曲ブームによって、「赤穂浪士物語」「紀伊国屋文左衛門」「肉弾三勇士」「忠僕直助物語」など浪曲に源をもつ岩国音頭が人気の演目となった。明治末期に多くの移民が渡航したので、ハワイにこのような岩国音頭が伝えられたのだと考えられる¹³。

岩国音頭は「チョンガリ」とも「チョンガレ」とも呼ばれていた。チョンガレの伝統から¹²、岩国地方やその他の地方で起きた新しい事件に題材を求めた語りが創作され、それに移民が引きつけられたとしても不思議ではない（岩国市教育委員会；柳井市史編纂委員会 818）。明治から昭和にかけて、時代を反映させる事件を読みこんだ演目が次々と創作され、語り継がれたようである。例えば「佐久間大尉物語」は、「[明治 42 年に] 岩国の新港の沖に第六潜水艦が沈んだことがある。四十何人か死んだことがある。それを音頭にとったのが最初にここに入ってきた」（戒谷：22）。この事故を起こした潜水艦を最後まで規律正しく指揮し、共に死にゆく部下の遺族のゆくすえを思い、国に忠誠をつくした佐久間大尉が、艦内で息絶えるまで書き綴った遺書は全国的なセンセーションを巻き起こした。この演目はハワイでも大変な人気となり、今も語り継がれている。また昭和 8 年に起きた事件で、山口県出身の小学校訓導吉岡藤子が、命をかけて教え子を嵐から守って殉死した事件があり、それを歌った「吉岡訓導物語」もハワイで人気の演目となった。その他、「岩国学生心中」は、大正 8 年に岩国で起きた心中事件を題材にしている。京都の医専学校の学生だった男女が病におかされ、京都から岩国に帰省したが将来を悲観し、錦川に身を投げたいきさつを語っている。この曲は今ではハワイには残っておらず、ハワイで歌われたことがあったかどうか不明であるが、明治以降の山口県に係わる事件を読みこんだ演目は、移民たちと故郷の社会事情とを結びつける役割も果たしていたのではなかろうか。

また、岩国とは限らない日本全国の事件を扱った語りも沢山生まれた。たとえば、「南山血染めの連帯旗」や、「血染めのトランク」、「肉弾三勇士」が挙げられる。「南山血染めの連帯旗」は日露戦争時に、山瀬幸太郎がまさに出征しようとしている八王子駅に、難産の妻がやっと男児を出産した知らせが届き、安心して満州の南山に出征したいきさつを読んだものである。「血染めのトランク」は、大正八年に東京の大崎で起きた事件で、農商務省技師の山田憲が借金返済が原因で殺人事件を起こし、バラバラ死体をトランクで運んで川に流したというセンセーショナルな事件を題材にした語りである。「肉弾三勇士」は 1932 年の第一次上海事変を題材に浪曲で謳われたテーマである。肉弾三勇士として讃えられたのは、江下武二、北川丞（すすむ）、作江伊之助の 3 名の一等兵で、点火した破壊筒を抱えて廟行鎮に突っ込み自爆し、日本軍の突撃路を開いた功績を讃える語りである。ここに挙げられた曲がすべて戦前のハワイで受け入れられたのかどうかは知るすべがない。しかし興味深いことに、日本ではすでに語られなくなっているのに、ハワイでは「肉弾三勇士」が現在でも、日本語を解さない四世、五世を対象に語り継がれている。一般的に「文化の化石化」と言われる現象—祖国日本では消えた文化が移住先では変化せずに昔のままに残る—が起きていると解することができる。このような全国的なテーマの語りでは、岩国という地域性は消滅しており、ハワイの

日本人移民全体が日本人の記憶を追体験するものであったと言えるだろう。

チョンガレの特性である創作性が、岩国音頭が今も残っている要因のひとつであるかもしれない。戦後のハワイで、ハワイをテーマとした新しい岩国音頭が生まれた¹³。第二次世界大戦をテーマにした語りが多くも創作されている。ハワイの歌人尾崎無音によって作詞された「ああ第 442 部隊」は、第二次世界大戦中に多大な犠牲を払って愛国心を証明した二世部隊の戦死者を称え、その死を悼む供養の語りである。二世が健在であった時代のボンダンスではこの曲が盛んに演奏された¹⁴。また作者不詳の「第二大戦戦争」や、「硫黄島の戦い」、「軍曹塚崎政幸氏」も作られた（Yano：358-359）。1960 年代にはマウイ島ラハイナ本願寺の僧侶飛騨専精によって作詞された「原爆の母」や「小谷親子への追善」、マウイ島ワイルク本願寺の為国正念による「追憶小谷親子」や「百年祭音頭」（1968）という語りもある（133, 359-360, 362）。さらに、山本キチソによる「ハワイ巡り」（359）や、最近では岩国ボンダンスクラブの踊りの師匠であった山田チエコ・メイベルを称える「山田チエコ追悼」も生れた（早稲田 2010: 115）。その他、多くの音頭取りが、自分自身で創作して語ったという証言もあり、チョンガレの伝統がハワイでも生きていたことが分かる（Yano: 133）。ある太鼓打ちは、山口某という音頭取りが自伝を語ったのがすばらしくて忘れられないと言う（135）。しかし 1970 年代以降、二世の時代になると、日本語で自分自身で創作することは困難になり、その代わりに英語の歌を岩国音頭にのせて語る例が見られた。“Oh! Susanna” や、“Red River Valley,” “You Are My Sunshine” が歌われた（137）。下記の「岩国踊り愛好会」の創設者であるジェイムズ・クニチカも、2002 年の時点で“Oh! Susanna” を岩国音頭の太鼓に合わせて口ずさみ、曲は日本語でなければならないということはない、と言ったという（Ohira）¹⁵。

3-4 岩国踊り愛好会とジェイムズ・クニチカ

比較的集中した狭い地域から移民が渡航したハワイの山口県人は早くから結束が強かった。明治の末から各町村単位の地方人会が誕生し、それを統合する山口県人同志会は 1926 年に創立をみた（土井：134）。「会員一同の親睦を計り年々隆盛になり、布哇同胞間、県人会として第一位を占めて居るは過言にあらず」と自認するほど、ハワイ随一の結束ぶりを誇った（布哇山口県大島郡人会：78）。県人の結束を高める行事として、ピクニック、映画会、音楽会、演芸大会などが催されたが、盆踊りもその一つであった。大島郡出身の橋本萬植は、「[大島郡では] 一郡十二村の中十ヶ村までが当地で村人会を組織している有様で、私の方が [日本の母村より] 村人が多く、一村人会の会員が百人に近く、ピクニックでも催すと家族が参加して四五百名の出席者を見ます。」とのべている（土井：140）。また中村初子は、明治 30 年、カウアイ島に移住し帰国した父親が「ハワイではの一、山口県人といったら皆兄弟の様に親しくしていた」と口癖のように話していたと証言している（山口県 2004:297）。山口県の各地方人会が主催した盆踊りでは岩国音頭を一晩中踊ったことは容易に推測される。

県人意識が強く、結束力が強い中、早い段階で、岩国音頭を愛する仲間が生れていったようだ。1920 年代までには多くの顔見知りの盆踊り演奏者たちは、同県人で非公式のグループを作ったので、盆踊りを計画するときには、このようなグループに前もって声をかけて出演を依頼するようになって



櫓上のジェイムズ・クニチカ
(娘のキャロライン・ミヤタ氏提供)

た。グループは太鼓や小道具を備え、練習をして準備した（Yano 20）。このようなグループの存在と成長が岩国音頭の存続に大きな役割を果たすことになった。

ここで、岩国音頭愛好者グループの動きを知るために、ホノルルの伝説的な音頭取りであったジェイムズ・T・クニチカを取り上げよう。クニチカは岩国音頭存続の要ともいえるべき重要な存在であった。クニチカの伝記によると、彼はカウアイ島のクーラウという町で、1915年1月1日に7人兄弟の長男として生まれた。彼の母は岩国出身で、彼は毎年お盆が近づくとカウアイ島各地のプランテーションで開催された盆踊りに連れられて行き、櫓の上からの歌声に耳を傾けた。やがて彼は自宅で手動式の蓄音機でレコードを繰り返し聞くことによって岩国音頭を覚えた。そして早くも18歳で音頭取りとしての活動を始めた。のど自慢の音頭取りは多数おり、順番に櫓に登り、人気を競った。クニチカの伝記によると、戦前から岩国音頭の愛好会が複数存在し、活発に活動していたことが分かる。彼の伝記を引用してみよう。

クニチカは1935年に18歳の若さでカウアイ島の様々の仏教寺院で開催される盆踊りで、多くの先輩音頭取りに交って櫓に登って演じるようになった。1937年にオアフ島に転居すると、ホノルルの丸山夫人が主催する岩国音頭グループに参加したが、その後、別の岩国音頭グループの中心的な音頭取りに教えてもらいたくて、そのグループに移った。その当時は、音頭取りは時として一晚演じるだけで10ドルの謝金がもらえたという。¹⁶ (Nagata 2002)

ホノルルに移ってからのクニチカの活躍について、「まつり インハワイ」¹⁷の運営に携わった沖葉子氏は、次のように述べている。

クニチカさんがホノルルに渡ったころ、岩国音頭の歌い手として、数多くのボンダンス・フェスティバルから引っぱりだこだったそうです。第二次世界大戦時、一度盆ダンスフェスティバルも中断されましたが、再開後は、ほとんど毎週金・土曜日には、櫓の上で熱唱するクニチカさんの姿を見ることができました。(沖 2006: 114-115)

クニチカは1951年に太鼓打ちの福永吾一らと共に現在の「岩国踊り愛好会」を組織した。これは当初オアフ島で唯一の正式な岩国音頭愛好者の団体で、そのメンバーは山口県出身の日系人だけであった（Van Zile: 20-21）。この団体は、1960年代中頃、会員間の衝突が原因で分裂し、出て行った人たちは太鼓打ちのアルバート西村を中心に「岩国ボンダンスクラブ」を立ち上げた。現在もホノルルにはこの2つの岩国音頭の愛好団体が存在する¹⁸。

クニチカの岩国踊り愛好会は、1982年の時点では会員が73名で、その内ミュージシャンが13名、踊り子や支援者が60名であった。会長、副会長、書記、会計、顧問が置かれ、評議員会が形成された。活動としては、夏に7つの寺院のボンダンスと数か所の商業会場や県人会のボンダンスに招かれて演奏し、年2回、春の新年会と秋の慰労会を開催した。運営は年3ドルの会費と寄付金で賄われ、会員名簿が配布された。普段の活動の場はホノルルの真宗寺院で、練習や慰労会はそこで開催された。演奏するときには、2～4人の音頭取りと、お囃子1人、1～4人の太鼓打ちがチームとなり、音頭取りは一人10～15分交替で櫓にのぼった。音頭取りや太鼓打ちになることを希望する者には、特別のレッスンが会員の自宅で与えられ、何時間もかけて後継者の養成がなされた（Yano 70-72）。

沖氏は、その後の岩国踊り愛好会の発展ぶりを次のように紹介している。愛好会はクニチカの活躍によって大きな集団に成長した。「1982年当時、30人¹⁹しかいなかった岩国踊り愛好会のメンバーも、いまや〔2002年〕200人を越える大所帯となりました。クニチカさんの歌声の入ったCDやテープも販売されており、カハラ通りのビショップ博物館やハワイ大学、ハワイ州文化芸術財団、また国会図書館やスミソニアン研究所などでも購入することができます」と（115）。

生演奏することで人気となり、各地のボンダンス会場に招かれて頼りにされるのが、生き残り

の大きな要因であるといえよう。毎年招待されるので、練習を積み重ね、技術を磨き、仲間を作ることが継続するのである。クニチカの岩国踊り愛好会は、ホノルルの本派本願寺、真宗、真言宗、天台宗、曹洞宗の各寺院や、パロロ本願寺、カネオヘ東本願寺など多くの寺院と、カピオラニ公園のオキナワン・フェスティバル、ワイパフのハワイ沖繩センター、ハワイ大学などのさまざまな盆踊りの会場で、主要メンバーとして出演した（Nagata）。

また10分から15分かかる長い日本語の演目を覚えることが容易ではない岩国音頭では、後継者育成が重要な鍵を握った。1990年代中頃には日本語を理解す世代は過去のものとなり、オアフ島ではクニチカがほとんど唯一の音頭取りとなっていた。そのためクニチカは後継者養成に乗り出し、希望する人には誰にでも自宅で惜しみなく教え始めた。2004年にはハワイ州文化芸術協会の「民族芸能後継者養成賞」(Folk Arts Apprenticeship Award)に応募して補助金を得、ラルストン・ナガタ氏を後継者として育てた(Nagata)。その他にも、現在活躍している四世のグレッグ・ナカヤマ氏(38歳)を始めとする数名の語り手を育てることに成功したのである²⁰。音頭取りの後継者がいなくなれば、生演奏による岩国音頭は絶えてしまうであろう。

クニチカは、1996年にはホノルル市議会から文化遺産の継承者として表彰され、2001年には「ハワイの音楽」のビデオに吹き込まれてスミソニアン博物館や議会図書館、ハワイ州ビショップ博物館等に収蔵され、2003年には近鉄観光のパン・パシフィック祭で第3回シルバースウォード賞を受賞し、2006年には本派本願寺の「ハワイの宝」(Living Treasures of Hawaii)に選ばれた²¹。

現在の状況は、会長のリンダ・マーテル氏によると、会員数約70名(歌い手6名、太鼓打ち5名)を抱え、毎年7つの寺院と、ホノルル・フェスティバル、オキナワン・フェスティバル、ワイパフ沖繩センターに招待されている(マーテル2014)。マーテル氏はニューヨーク生まれの白人女性弁護士である。伝統的な岩国踊り愛好会の会長が白人女性ということは驚きであるが、多文化化されたボンダンスの象徴的な存在と言えるかもしれない。マーテル氏は岩国音頭に魅せられて入会し、熱心に参加するうちに役職に就くようになり、前会長のデニス・カネモリ氏亡きあと、副会長から会長へと全員の後押しで昇任したという。他にも数名の非日系人会員がおり、違和感なく活動している(マーテル)。

最後に、日本とハワイの人的交流について言及しておこう。岩国市の竹中氏の話しでは、増富某という名人の音頭取りは、昭和40年から50年頃にかけて、毎年ハワイへ行っていた。三味線と太鼓の二人を連れて行き、ハワイでのボンダンスに参加した。増富に関する記録は、増富宅が火事で焼失したため残っていない。またジェイムズ・クニチカの娘のキャロライン・ミヤタ氏によると、逆にハワイのクニチカは日本を訪問していた。ボンダンスの季節を避けた1999年11月に招待され、原点である岩国で岩国音頭を披露したという。大変な歓迎を受け、岩国市長を始めとする岩国踊り関係者に驚きと感銘をあたえた(ミヤタ2014)。現在はこのような交流は絶えている。

おわりに

ハワイの日系人は、初期のプランテーション労働時代から100年後の今日まで、伝統的な盆踊り文化を守り伝えてきた。中でも岩国音頭は、その特異な歴史的要因によって、一世の時代から五、六世まで世代を超えて受け継がれ、日系人全体の文化的表象となってきた。

初期の岩国音頭は、岩国地方出身の日本人移民一世が中心となって、出身地の盆踊りの習慣をハワイに移植したものであった。それは、移住地でのプランテーション労働と不慣れた生活を強いられた移民たちの寂しさと辛さを和らげる慰安の役目を果たした。やがて寺院で開催されるようにな

ると、様々の出身県からの移民たちが日本人として盆踊りを共有するようになり、岩国音頭は移民のあいだで大人気の踊りの一つとなった。戦前の盆踊りは、日本人移民の民族意識と深く関係しており、自覚された日本文化として定着していた。

戦後のボンダンスは、日系人以外にも開かれた多文化化した行事となった。ボンダンスは日系文化であり続けたが、日系人社会が「ハワイの広いコミュニティと結びつきのを助ける」ものとなっていった（Weintraub 1995: 35）。本派本願寺別院のエリック・マツモト総長は次のように述べる。「現在のボンダンスは、宗教的行事であるとともに文化的社会的な行事でもあります。信徒でない人々も自由に参加する。日系人だけでなく他の人種の人々も沢山参加する。寺の庭という安全な環境で、コミュニティの様々な人々が交わり、互いを知りあう場を提供するという社会的貢献をしているといえるでしょう」（マツモト 2013）。最近では、コミュニティ活動の一環としてのボンダンスという試みも始まっている。モイリリ地区では、ボンダンスは2012年夏から、モイリリ地区の大地主であるカメハメハ・ビショップ地所が後援し、モイリリ本派本願寺、モイリリ・コミュニティセンター、そしてハワイ日本文化センター（JCCH）等が協力して共同開催されるようになった。初日はモイリリ本派本願寺主催の宗教色のあるボンダンスで、二日目はコミュニティセンターやJCCH等の主催で世俗的なボンダンスとなっている（イケダ 2013；イワタ 2013）。

多文化化した行事となってからも、伝統的な文語体の岩国音頭が歌い継がれていることは、文化継承のうえから興味深い事象である。今もボンダンスは日系の行事であることに変わりはなく、日系人のエスニック・ルーツを示す表象となっている。ボンダンス研究者たちが指摘するように、ハワイの日系人社会は、たとえ日本語の意味がわからなくても、伝統的な盆踊りを先祖からの遺産として継承すること自体に意義を見いだしている。早稲田は「重要なのは、一世から伝わる歌を歌い継ぐという行為」であり、「それを通じて祖先とのつながりの感覚を維持すること」に意義を見だしていると述べる（早稲田 2012: 221）。なかでも文語体の日本語で物語を展開する岩国音頭は、若い世代への継承が難しいと思われるが、それでも古いままの形で継承されてきた。岩国踊り愛好会の若手の音頭取りグレッグ・ナカヤマは、日系人の歴史と伝統の継承に関して次のように述べる。

私は熊本出身で岩国とどんな実際の関係もないですが、ハワイ史そして日系アメリカ人史のこの部分〔岩国踊り〕を生きたものに保つために貢献する機会を与えられたのです。これは特別の機会です。私が持っている音頭取りの技能で、この伝統を継承するために責任を果たすことを名誉だと思っています。岩国音頭の演目についてもっと調査、保存、発見したいですし、それを次世代に伝えるために磨きをかけ続けようと思っています。（ナカヤマ 2014）

元来ハワイにはアロハ・スピリットと呼ばれる伝統があり、多様な民族が異なる文化を寛容に受け入れ合う風土がある。そのような環境では、相互に受け入れ合うと同時に、逆説的に、自らの民族的アイデンティティを常に問われ、日系人であることを意識させられ、日系文化を守り継承することが重要になるのである。日本語を解さない世代の日系人が、それでも日本語の伝承曲に興味をもち、継承していくことに誇りと意義を感じるのはそのためでもあろう。

ボンダンスには多くの若い日系五世六世が参加する。ここには日系人のルーツを表わす文化活動への参加という意味がある。若い世代が日本文化に興味を持ち、文化継承に価値を見いだしているのである。エスニック文化が尊重される現代にあって、ボンダンスは楽しくエスニック文化を学べる貴重なイベントとなっている。今も昔も、ボンダンスほど大勢の日系人が集う社交場は他になく、日本の音楽、踊り、食べ物を集団で楽しむ場は他になく、これほど日本人の民族的アイデンティティを継承する機会を提供している文化イベントは他にないといえよう。日本語は理解できなくても、日本語の歌に合わせて、老いも若きも日系文化を楽しもうとボンダンス会場に足を運ぶのである。

註

- ¹ Katumi Onishi, 1938 “‘Bon’ and ‘Bon-odori’ in Hawaii,” *Social Process in Hawaii*, 4, 49-56; Kimie Kawahara and Yuriko Hatanaka, 1943 “The Impact of War on an Immigrant Culture,” *Social Process in Hawaii*, 8, 36-45; and Masako Tanaka, 1948 “Religion in Our Family,” *Social Process in Hawaii*, 12, 14-18.
- ² John DeFrancis, 1973 “Bon Festival,” *Things Japanese in Hawaii*. Honolulu: The University Press of Hawaii, 45-61; Judy Van Zile 1982 *The Japanese Bon Dance in Hawaii*. Honolulu: Press Pacifica; and Christine Reiko Yano, 1984 “Japanese Bon Dance Music in Hawaii: Continuity, Change, and Variability,” M. A. thesis, University of Hawaii at Manoa.
- ³ 中原ゆかり「ハワイ日系人のボン・ダンスの変遷」（2002a）、「歌われた太平洋戦争—ハワイ日系人の盆踊り歌と日本調歌謡曲—」（2002b）、「ハワイ日系人のボン・ダンスとネットワーク—モロカイ島の事例を中心に—」（2003）、『ハワイに響くニッポンの歌』（2014）；早稲田みな子「日系ディアスポラにおける盆踊りレパートリーの形成—ハワイと南カリフォルニアの比較—」（2010）、「ハワイの盆踊り歌—日系ディアスポラ文化としての民謡の形成」（2012）；秋山かおり「展示『祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展』にみる歴史観点からの独自文化表現」（2010）。
- ⁴ ハワイでは、これらの曲は「音頭」と総称された。新しい踊りは、寺院の盆踊りにも、世俗の盆踊りにも取り入れられた。
- ⁵ ホノルルとは違って、カウアイ島のハナベペでは1946年に1回開催されている（Yano 24）。
- ⁶ ハワイの寺院には檀家制度がなく、個人がメンバーになるので、ボンダンスというイベントでも寺院のメンバーが委員会を作って計画し、運営の中心となる。
- ⁷ 上田の1969年、1970年のホノルルにおける参加観測によると、八木節音頭が、民謡音頭の一つとしてレコード音源が使われるとともに、生演奏もされていた（上田：36, 39）。中原によれば、八木節は1930年代に民謡音頭としてハワイ移入されたもので、「福島ボンダンスクラブ」が八木節を生演奏のレパートリーとしていた（中原 2002b: 68）。
- ⁸ 入手可能な『ハワイ事情』を使って、その「趣味の団体」欄を頼りに、ボンダンスの愛好団体の動きを辿っておこう。1958年版には、「趣味、演芸」団体として、岩国踊り愛好会と福島ボンダンスクラブの名が掲載されている（183）。1964年版には「ホノルルおけさ倶楽部」の記載がある。新潟県の佐渡おけさ愛好会であろう。1968年版ではボンダンスクラブの記載は全くなくなるが、1973年版では、岩国踊り愛好会の他、岩国ボンダンス倶楽部、福島ボンダンスクラブ、ワヒアワ新潟ボンダンスクラブ、ホノルル新潟おけさクラブの名が挙がっている（133）。しかし1975年版では再びボンダンスの団体は全く記載されていない。
- ⁹ マイクが普及した現在では傘を手を持たない場合もある。早稲田（2012）を参照。
- ¹⁰ 竹中氏が挙げている30の演目は下記である。壺坂靈幻記、関取千両幟、五郎正宗、天野屋利兵衛、佐倉義民伝、神崎与五郎、平井権八、石童丸、忠臣蔵殿中刃傷、忠僕直助、狐葛の葉、岡野金衛門、桜総五郎、唐人お吉、八百屋お七、小栗判官正清、中山安兵衛、紀伊国屋文左衛門、櫓太鼓誉の仇討、更科武勇伝、いざり勝五郎、岩国浄土、景清物語、玉島幸子、女系図、原爆の思い出、佐久間艇長、吉岡訓導、南山血染めの連帯旗、岩国名所めぐり。竹中氏自身が今も演じる18番は、佐久間艇長、南山血染めの連帯旗、岩国名所めぐり、天野屋利兵衛である（竹中 2014）。
- ¹¹ 岩国音頭の日本とハワイの演目については、早稲田みな子の研究（2012）を参照。
- ¹² チョンガレは、江戸時代に始まった歌謡の形式で、時代を反映するような事件、特に恋愛や心中といったニュース性のある話題を面白く聞かせる口説節であった。岩国音頭の郷土色豊かな外題は、明治以降の出来事を題材に新しく創作された語りである。

- ¹³ 故郷岩国では、戦後「原爆の想いで」や「岩国名所めぐり」が創作され、ハワイにも伝えられた (Yano 357, 359, 360)。
- ¹⁴ 1951年7月7日の『日布時事』によると、ハワイの尾崎音吉による詩が日本に伝えられ、それを岩国市の歌手豊岡安子が私費を投じて岩国音頭曲としてテイチクレコードから発表したもの。豊岡安子ら一行が500枚のレコードを携えてハワイを訪問し、6月27日に披露会が開催された。「ああ第442部隊」については、上田喜三郎の論文と中原ゆかりの論文(2002b)を参照。
- ¹⁵ 今は英語の曲は歌われない。現在の岩国踊り愛好会の音頭取りで、クニチカの後継者である四世のラルストン・ナガタ氏は、“You Are My Sunshine” (この曲の一部に、“Oh! Susanna” と “You Are My Sunshine” が含まれている) を一度歌ったことがあるが、評判が良くなかったので今は歌わないという。この曲はカワイ島ハナベベのチョップ・ナガミネが作曲した (ナガタ 2014)。
- ¹⁶ Ralston Nagata を参照。当時の労働者にとって10ドルの謝金はかなり高額であった。
- ¹⁷ 「まつり イン ハワイ」は、近鉄日本ツーリストによって企画された観光業のための日系の祭りであり、1980年から現在まで35年続く。2001年に文化交流に尽くした人を称するシルバースワード賞を設けた。沖葉子 (2006) を参照。
- ¹⁸ 1982年の時点で、このクラブの会員はミュージシャン7名だけで、踊り子はメイベル・山田の山田ボンダンスクラブの教え子たちが出演し、オアフ島の4つの会場で演奏した (Yano 74-75)。山田については、Mary D. Scott (1966) pp. 14-16 を参照。このクラブは現在でもミュージシャンだけのクラブとして活動を続けている。
- ¹⁹ Yano の報告である73名とは異なる数字で、正確な会員数は把握が困難である。80年代以降急に会員が増えて、2000年の時点で200名を越えていたことは確かであり、当時のホノルル市長や副知事も会員に名を連ねた。Catherine Toth (2000) ; 沖葉子 (2006) p. 115 を参照。1986年には80名を越えたという記録もある。Rod Ohira (2002) を参照。
- ²⁰ 1995年にグラント・ムラタの訓練に後継者養成賞を得たが、クニチカが重傷を負う事故のため中止となった。2004年にはクニチカの伝記をまとめたラルストン・ナガタ氏を対象に同賞を得、クニチカは口伝で「佐久間隊長」「肉弾三勇士」「吉岡訓導」「442部隊」を教え込んだ (ナガタ 2014)。その他クニチカはロイ・ハマサキ氏、コレット・ゴウモト氏、グレッグ・ナカヤマ氏、ブライアン・シロタ氏を育成しており、最後の二人は30代の若手である (マーテル 2014; ナカヤマ 2014)。
- ²¹ Roy Miyamoto (2006) を参照。

引用文献リスト

1. 邦語文献リスト

- 秋山かおり 2010「展示『祝！ハワイにおける日本の“お祝い”の発展』にみる歴史観点からの独自文化表現」『博物館学雑誌』36(1)、123-140。
- 土井彌太郎 1983『山口県大島郡 ハワイ移民史』山口県：マツノ書店。
- ハワイ日本人移民史刊行委員会編 1964『ハワイ日本人移民史』ホノルル：布哇日系人連合協会。
- 布哇タイムス編集局 1957『ハワイ事情1958年版』ホノルル：布哇タイムス社。
- 布哇タイムス編集局 1964『ハワイ事情1964年版』ホノルル：布哇タイムス社。
- 布哇タイムス編集局 1968『ハワイ事情1968年版』ホノルル：布哇タイムス社。
- ハワイ・タイムス社編 1973『ハワイ事情』ホノルル：ハワイ・タイムス社。

- ハワイ・タイムス社編 1975『ハワイ事情』ホノルル：ハワイ・タイムス社。
- 布哇山口県大島郡人会編 1939『布哇山口県大島郡人会創立満拾五周年 記念誌』ホノルル：布哇山口県大島郡人会。
- 「岩国音頭」出版年不明 岩国市図書館編『岩国音頭についての資料』ファイルNo.17 岩国市図書館製本。
- 岩国音頭保存会 2013「岩国音頭の概要」岩国市民族芸能協会編『岩国市民族芸能協会25周年記念 岩国の民族芸能』岩国：岩国市民族芸能協会。
- 岩国市教育委員会編 出版年不明「岩国の歴史散歩」岩国市図書館編『岩国音頭についての資料』ファイルNo. 21 岩国市図書館製本。
- 岩国市図書館編 出版年不明『岩国音頭についての資料』（ファイルにコピーを綴じた物）岩国市図書館製本。
- 戒谷和修 2001『歌い継がれたふるさとの唄』岩国：錦町教育委員会。
- 「カバチ」1947年7月5日『ハワイ報知』。
- 小林孝子 2005「日本ハワイ移民資料館—海を渡った人々」『月刊消費者』6月号、49。（「移民の島 周防大島」日本ハワイ移民資料館資料による）。
- 中原ゆかり 2002a「ハワイ日系人のボン・ダンスの変遷」水野信男編『民族音楽の課題と方法—音楽研究の未来をさぐる』京都：世界思想社、181-203。
- 2002b「歌われた太平洋戦争—ハワイ日系人の盆踊り歌と日本調歌謡曲」『移民研究年報』8、61-179。
- 2003「ハワイ日系人のボン・ダンスとネットワーク—モロカイ島の事例を中心に—」『民族音楽研究』28、49-61。
- 2014『ハワイに響くニッポンの歌』京都：人文書院。
- 沖葉子 2006『夏だまつりだ—「まつり イン ハワイ」第1回からの記録』横浜：山手出版社。
- 「市内で最初の盆踊り—東本願寺別院豪華な夜景」1948年7月10日『ハワイ報知』。
- 外崎繁栄 出版年不明「岩国音頭」岩国市図書館編『岩国音頭についての資料』ファイルNo.18 岩国市図書館製本。
- 上田喜三郎 2002「ハワイ日系人社会点描・1970年(4)」『太平洋学会誌』91、33-47。
- 早稲田みな子 2010「日系ディアスポラにおける盆踊りレパートリーの形成—ハワイと南カリフォルニアの比較」『音楽学』56、110-124。
- 2012「ハワイの盆踊り歌—日系ディアスポラ文化としての民謡の形成」細川周平編『民謡からみた世界音楽』京都：ミネルヴァ書房、211-226。
- 山口県編 2004『山口県史 資料編 現代—県民の証言体験手記』山口県。
- 柳井市史編纂委員会編 1988『柳井市史 総論編』柳井市。

2. 英語文献

- “Aroused Opposition Sentiment Has Squelched an Attempt to Revive ‘Bon Dances’ Here.” July 10, 1946 *Honolulu Star Bulletin*.
- Bowman, Jesse Y. 1974 “Lucky Bon Dance Come Hawaii,” *Honolulu* 9(1): 42-45.
- DeFrancis, John. 1973 “Bon Festival,” *Things Japanese in Hawaii*. Honolulu: The University Press of Hawaii, 45-61.
- Hunter, Louise H. 1971 *Buddhism in Hawaii; Its Impact on a Yankee Community*. Honolulu: University of

- Hawaii Press.
- “Japanese Bon Festival Honors Spirits of Dead,” July 9, 1937 *Honolulu Star Bulletin*.
- “Japanese People to Observe ‘Bon’ Friday,” August 14, 1924 *Honolulu Star Bulletin*.
- Kawahara, Kimie and Yuriko Hatanaka. 1943 “The Impact of War on an Immigrant Culture,” *Social Process in Hawaii* 8, 36-45.
- Krauss, Bob. June 16, 1966 “Things Will Be Booming When Bon Dances Begin,” *Honolulu Advertiser*.
- Miyamoto, Roy. 2006 “Nomination Application for ‘Living Treasure of Hawaii’,” typewritten, 10 pages.
- Nagata, Ralston. 2002 “Biography of James T. Kunichika,” based on the interviews with Kunichika, typewritten, 5 pages.
- Ohira, Rod. June 28, 2002 “Bon Dance Beat Hasn’t Left ‘Best’ Singer, 87,” *Honolulu Advertiser*.
- Otani, Curtis. August 4, 1951 “25,000 See Brilliant Bon Festival Opening,” *Honolulu Advertiser*.
- Onishi, Katsumi. 1938 “‘Bon’ and ‘Bon-odori’ in Hawaii,” *Social Process in Hawaii* 4, 49-56.
- Scott, Mary D. 1966 “Japanese Bon Dancing in Hawaii,” *Viltis: A Folklore Magazine* 24(5), 14-16.
- Tanaka, Masako. 1948 “Religion in Our Family,” *Social Process in Hawaii* 12, 14-18.
- Toth, Catherine. September 10, 2000 “Singer Keeps History Alive,” *Honolulu Advertiser*.
- Uyehara, Yukiko. August, 1937 “Bon Festival,” *Paradise of the Pacific*, 19, +31.
- Van Zile, Judy. 1982 *The Japanese Bon Dance in Hawaii*. Honolulu: Press Pacifica.
- Weintraub, Andrew. 1990 “Japanese Traditions and *Bon* Dance in Hawaii,” *Folklife Hawaii*. Honolulu: State Foundation on Culture and the Arts, 34-35.
- Yano, Christine Reiko. 1984 “Japanese Bon Dance in Hawai’i: Continuity, Change, and Variability.” M. A. Thesis, University of Hawaii.

3. 著者によるインタビュー

- イケダ、アール 2013年8月21日 モイリリ本派本願寺にて。
- イワタ、デリック 2013年8月22日 ハワイ日本文化センターにて。
- コマガタ、シュウゲン 2013年8月16日 曹洞宗ハワイ別院にて。
- 竹中平一 2014年8月14日 岩国市の竹中氏宅にて。
- ナガタ、ラルストン 2014年10月29日 アラモアナ・ホテルにて。
- ナカヤマ・グレッグ 2014年11月3日 メールによるインタビュー。
- マーテル、リンダ 2014年11月1日 アラモアナ・ホテルにて。
- ミヤタ、キャロライン 2014年11月30日 アラモアナ・ホテルにて。
- マツモト、エリック 2013年8月20日 本派本願寺別院にて。

Cultural Continuity Seen in Hawaii’s Traditional Bon Dance: The Case Study of Iwakuni Ondo

Noriko Shimada (Japan Women’s University)

This paper traces the history of Hawaii’s Bon dances and investigates why some of the oldest Bon dances have been passed on from generation to generation, while others have not. It takes up the case of Iwakuni Ondo that originated in the Iwakuni district of Yamaguchi prefecture, and which is one of the three traditional Bon dances still performed in Hawaii. Iwakuni Ondo entails not just a single bon dance song, but includes many songs based on historical stories and events, as well as new songs composed to reflect people’s lives both in Japan and Hawaii. The paper examines why the Japanese in Hawaii love Iwakuni Ondo from the perspectives of the characteristics of Iwakuni Ondo songs, concentrated immigration from Yamaguchi prefecture, and the function of the supporting organization, Iwakuni Odori Aikoukai, and its founder and famous singer, James Kunichika.

Keywords : Hawaii’s Bon Dance, Cultural Continuity, Iwakuni Ondo, Iwakuni Odori Aikoukai, Japanese in Hawaii

〈研究ノート〉

サンパウロ市における
日本料理（店）の位置・イメージ・受容のかたち

森 幸一（サンパウロ大学・教授）

〈目次〉

はじめに

1. サンパウロ市における日本料理店の歴史
 2. 日本料理店の位置 —レストランガイドの分析を通じて—
 3. 日本料理のイメージ —他の料理範疇との関連において—
 4. 日本料理受容のかたち —外食行動と日本料理の背後にあるイメージ—
- おわりに

キーワード：サンパウロ市、日本料理（店）、イメージ、受容、レストランガイド、外食行動

はじめに

「今から40年も前のことだが、そのころ、ニッポン人街と呼ばれていたコンデ・デ・サルゼーダス街の坂の上あたりに、一軒のうどん屋があった。店は、少しいのいいポロン（半地下の部屋）で、大きなメーザ（テーブル）の両側に長い腰掛けが二つあっただけの、むさくるしいものだった。そのころのコンデ街には上地旅館や常盤旅館で、日本食が食べられたが、料亭はまだ出現せず、このうどん屋が一軒の食べ物やであった。わたしも、ときどき、そこへうどんを食べに行ったものだが、うどんを食べるといっただけでなく、うどん屋のフニイキが気分をくつろがせ、わずかな時間を楽しく過ごせたのであった。あるときそこで顔を合わせた奥地からきた農村の青年が『ぼくは、一年に一回サンパウロ市に出て、ここでうどんを食べたいばかりに、田舎でけんめいに働けるのだ』といったのをまだ忘れない。圧迫を感じるほどの異質文化といっても何もないうどん屋で、ニッポン人のつくったうどんを、ニッポン語を聞きながら食べていると、懐かしい祖国のあこがれが連想され胃袋が満たされるとともに、精神的な空腹もやわらげられるのだった」¹

この文章は戦前から戦後にかけての代表的移民知識人アンドウゼンパチが1926年に戦前の日本人街コンデ・デ・サルゼーダス街に開業した「魚よし」（後の料亭「あをやぎ」）でのエピソードを回想して記述したものである。すでにこの通りには上地旅館や常盤旅館といった日本人相手の宿泊業が開業し、「日本料理²」を提供していたものの、この「うどん屋」がサンパウロ市最初の日本料理外食店であった。このうどん屋に限らず、この当時の、そして戦後の1960年代頃までは日本料理店は移民たちが日本料理を味わいながら祖国日本への郷愁を癒すための空間としてあったといっても過言ではなかった。しかし、今や日本料理（店）は移民の郷愁を癒したり、日系人のアイデンティティを確認、醸成したりする文化装置という役割を超えて、少なくともサンパウロ市においては市民が楽しむ「我々の料理」ともいえる存在となっている。

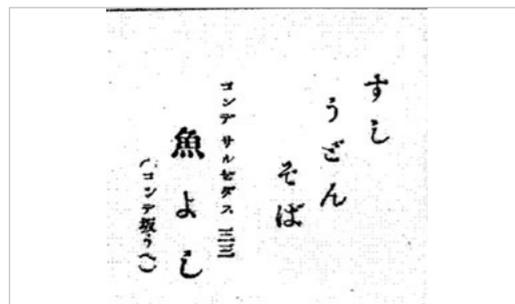
筆者はこれまで日本人移民の食生活の歴史や日本料理の変容、非日系人への受容などに関心をも

ち調査研究を行い、いくつかの論考を発表してきた³が、本稿ではこれまで断続的に行ってきた日本料理に関する調査から得られたデータの一部を用いて、サンパウロ市における、非日系ブラジル人市民の日本料理受容の問題をいくつかの側面から考察することにしたい。1980年代初頭頃からは、サンパウロ市では日本料理を食べることが一種の「ブーム」となってきたが、この日本料理ブームは具体的にはどのような「かたち」をとってきたのか、サンパウロ市民はどのように日本料理を受容してきたのか、こうした問題を①サンパウロ市における日本料理店の歴史的展開、②レストランガイドにおける日本料理の位置、③ブラジル料理や他のエスニック料理（範疇）との関連における日本料理のイメージとそこでの日本料理（範疇）の位置、④外食行動を通して見た日本料理受容の「かたち」という側面から考察していきたい。

ただし、本稿で用いる日本料理のイメージや外食行動に関する調査データは1996年に筆者が実施した調査に基づくもので、決して現在の状況を反映したものではなく、あくまで日本料理ブームが本格化し、中間層を中心とした市民の多くが日本料理を食べはじめていた時期の状況であることをお断りしておく。

1. サンパウロ市における日本料理店の歴史⁴

サンパウロ市に日本料理を提供する外食業が出現したのは1914年、コンデ・デ・サルゼーダス街を中心とする戦前の日本人街の中に上地旅館が開業した時であった⁵。この旅館では食堂で白ごはん、みそ汁、漬物に日伯混淆の副食をつけた、家庭料理と変わらないような料理を宿泊客などに提供していた。戦前期における日本料理を提供する外食業はこうした旅館・ペンソン（下宿屋）から、うどん・汁粉・丼もの・稲荷すし・定食など簡単な料理を提供した「簡易食堂」、そして座敷、女給の給仕など料理以外のサービスも提供し、料理自体も相対的に高級化する「料亭」へと累積的に展開していったが、それはあくまでサンパウロ市内の日本人集住地区（日本人街、日本人移民が農産物仲買・小売業として参入した中央市場付近、近郊農村の日本人農家が生産物を出荷するために参集したピンニェイロスやラッパ地区）内における開業であった。



資料1 サンパウロ市最初の簡易食堂「魚よし」新聞広告（1926年）



資料2 「料亭」の新聞広告（1929年）

第2次世界大戦直前の1940年の時点におけるサンパウロ市で日本料理を提供する料理店数は日本人集住地区で料亭6軒（そこで働く女給73名）、旅館・ペンソン22軒、簡易食堂兼バル（Bar）19軒の47軒であった⁶。

第2次世界大戦開戦とブラジルと日本の国交断絶（1942年1月）、そして日本人移民のコンデ・デ・サルゼーダス街を中心とする日本人街からの強制立退命令（第1回1942年2月2日、第2回1942年9月6日）、敵性国人の資産凍結命令や屋外での日本語禁止（42年2月）、コンデ・デ・サルゼー

ダス街での破壊略奪行為の発生などで、日本料理外食業は大きな痛手を受け、実質的には閉業に追い込まれることになった⁷。



写真1 戦前の事例ではないが、日伯混淆の料理を〈食堂〉で提供してきたホテル池田(Hotel Ikeda)(リベルダーデ地区)食堂の名物はカレーライスとフェイジョアアダだった。



写真2 1961年開店の「こけし食堂」戦後期の60年代から70年代にかけて最も流行った日本料理店。やはり日本料理ばかりではなく、「ブラジル」料理なども提供した。

第2次世界大戦終戦1945年には早くもコンデ・デ・サルゼーダス街や戦後の日本人街の中心となるリベルダーデ広場には「ひさご食堂」と「桜井食堂」という2軒の日本料理店が開業、その後コンデ街を中心とする旧日本人街、中央市場付近、ピンニェイロス地区などの第2次的日本人集住地区、ガルボン・ブエノ街を中心とする戦後の日本人街などに続々と日本料理外食業が開業、1954年のサンパウロ新聞社編『家庭年鑑』によると、表1のような外食業が営業をしていた⁸。

表1 1954年当時のサンパウロ市内の地区別種類別日本料理外食業数

地域	ホテル・ペンソン	食堂料亭
コンデ街中心地域	4	5
メルカード付近	10	9
ガルボン・ブエノ街中心地域	10	6
ピンニェイロス地域	4	1
その他（ジャバクワラ、サントアマール）	—	2
合計	28	23

1950年代から70年代にかけてはガルボン・ブエノ街を中心とする新日本人街が日系商店、料理店や日本映画館、日系ホテル、日系社会の中核的機関、県人会などの公共団体・機関の本部や事務所などが集中的に開設されるとともに、サンパウロ市観光局によるサンパウロ市中心地区再開発計画の一環としてのリベルダーデ地区（新日本人街）の「リトル・東京」化計画、さらにはそれと連動するかたちで進められた地下鉄南北線建設計画（リベルダーデ広場の地下に地下鉄駅。1975年開通）など関連して発展、全盛期を迎えた。1978年当時、リベルダーデ商工会に所属する会員数は約300にも達し、その「業種」の中には63軒のレストランがあり、日本料理レストランは新日本人街においてかなり増加するとともに、日本料理店のタイプもかなり多様化し（表2）、提供される料理やサービスもバラエティに富むものとなった⁹（表3）。

表2 1962年当時のサンパウロ市（日系）飲食店組合加盟店の地域別タイプ別日本料理店

タイプ	ガルボン・ブエノ付近	コンデ・デ・サルゼーダス付近	その他の地域
江戸前寿司	中根寿司、千鶴、蛇の目、千福	すみれ、翁寿司	—
料亭	日本、グロリア、東京、満と葉、お富さん、フジヤマ	—	赤坂 (Bela Vista) 青柳 (Jabaquara)
割烹	かあちゃん、えのもと	—	岡本 (Aclimação) 本丸(Consolação)須磨 (Bela Vista)
食堂・バル	旭、こけし、ガルボンブエノ、ピリアード3B、コスモス、桃苑、石橋	赤樽、ひさご、日本、益田食堂、隈下、新万平、羽瀬、万平	—
スタンドバー	白鳥、ニュー神戸	—	—
ランチ・カフェー	シネ・ニッポン	—	—
旅館・ホテル・ペンソン	都、小林、岡田、成松、九州屋、平和、菊池、東京、日本	大政、高木、藤田、青木	—
てんぶら	浜満蝶	—	—
ダンサンテ	—	—	椰子の実 (Bela Vista)
飲み屋	のん兵衛、喜撰	—	—
喫茶	ミモーザ	—	—

その一方、1950年代後半の第1次日本企業進出ブームを背景に、60年代初頭から日系企業がオフィスを構え、駐在員家族の居住地区となったベラ・ビスタ地区という街区に日本料理店が開業した。この流れは70年代の第2次日本企業進出ブームを背景に日本料理店の高級化を伴いながら加速化され、71年にはビジネス街パウリスタ大通りに近いジャルジンス地区に最高級レストラン「サントリー」が開業したことに象徴されるといえるだろう。60年代から従来の日本人集住地区に加えてビジネス街や駐在員家族居住地区（ベラ・ビスタ、パライツ、セルケイラ・セザール地区など）へ日本料理店は進出を遂げていった。

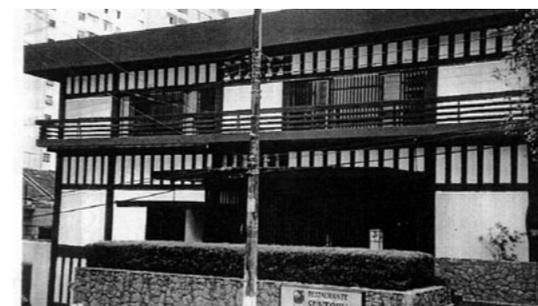


写真3 日本料理レストランの高級化（サントリー）



写真4 1990年代にショッピングセンター内に開店した日本人向け高級割烹

表3 日本料理店及び日系人経営料理店主要広告（パウリスタ新聞：1960~1970）

年・日付	料理店名	場所	特徴・サービスなど
1960 6.19 8.20 9.17 12.7	シャーフローラ プリンス コロバン 本丸	Galvão Bueno São Joaquim Galvão Bueno V.Ouro Preto	フェイジョアードを始める お狩場焼き（牛肉）専門店 東京風とんかつ、イタリア料理、定食 本格的な高級日本料理、座敷
1961 4.28 8.10 10.1	シャーフローラ パール 割烹はま蝶	Galvão Bueno Marques de Itú Lunde	カレーライス、ハヤシライス、チキンライス、お子様ランチ、午後2時から6時まで「音楽の時間」日本茶、和洋菓子、サンドイッチ、紅茶などの軽食 香港から呼んだ一流コックの中華料理 弁当仕出し
1962 7.04 7.30	桃苑 割烹セレージャ	Plaza da Liberdade Mercurio	名物餃子、支那そば、チャーシューメン、ラーメン、焼売、養殖、特製カレーライス、ハヤシライス、スパゲティ、自慢トンカツ、くしかつ、ハンバーグステーキ、各種サンドイッチ 昼食と夜食 勤め人に出す
1963 1.14 5.23	割烹赤坂 京寿司	Treze de Maio Lunde	うなぎのコース料理、小鉢ギンナン、かば焼き 季節料理、すぎ焼き、寄せ鍋、鯛ちり、水炊き、どて鍋、湯豆腐などと熱燗
1965 6.23 8.19	中根寿司 料亭・柳	São Joaquim 記載なし	岩風呂並びに夫婦風呂準備、故国日本の温泉気分を スタンドバー、大ホール、日本座敷
1966 3.30 4.19 12.1	割烹・ひばり 割烹・石 割烹・赤坂	Plaza da Liberdade Galvão Bueno Treze de Maio	牡蠣料理 てんぶら、季節料理 赤坂の忘年会
1967 2.18 6.6 9.2	味庵・たぬき マハラジャ・イン ディアノ ステーキハウス	Barão de Iguape Don.José de Barros Basilio da Gama	お好み焼き、琉球そば、信州そば、たぬきうどん、たぬきどんぶり 本場のインドカレー 赤坂の姉妹店、ステーキ、特殊加工された厚さ30ミリ、120キロの鉄板上で肉やカマロン（エビ）を客の好みに合わせて焼く
1968 1.30	料亭・初は奈	Gloria	勤め人用「折詰弁当」の出前
1970 2.5	料亭・いろは	Bueno de Andrade	カーニバル飲み放題食べ放題

1970年代初頭頃までは日本料理店は日本人や日系人集住地区（ビジネス街を含む）内での開業、増加といった傾向を見せていたものが70年代半ば頃から、日本料理店の動きはエスニシティとは必ずしも連関しない動き、換言すれば、サンパウロ市内の中間層以上の居住街区へと展開するようになり、この当時から日本料理はそれまでの日本人や日系人によって排他的に消費される料理であったものが、エスニシティの境界を超えて非日系人に受容される料理となっていくといえる。表4は1954年から1994年にかけての街區別日本料理店の分布の推移を示したものである。この表はそれぞれの年次において発行された『家庭年鑑』『聖市飲食店組合会員広告』『日系職業別住所録』『日系なんでも電話帳』『日系社会ガイド』など日本料理店記載のデータに基づいたもので、それぞれの年次における日本料理店数とは必ずしも言えないものであるが、ここではあくまで日本料理店の地理的分布の拡大傾向を示すために掲載する。（各年次における日本料理店数は必ずしも、その時点の日本料理店総数とは限らない。あくまでも地理的拡大の傾向性を示したものである。）

表4 サンパウロ市内日本料理店の年次別街區別分布の推移

街区／年次	1954	1962	1979	1984	1988	1994
Liberdade地区	7	11	28	38	47	47
Mercado付近	9	8	1	3	1	—
Bela Vista地区	—	2	6	9	10	11
Pinheiros地区	1	—	3	5	6	8
Jardins/ Cerquera César地区	—	—	2	5	7	18
Vila Leopordina地区	—	—	1	2	3	7
Morumbi地区	—	—	—	—	—	5
Itaim-Bibi地区	—	—	—	—	—	6
Moema/ Brooklin地区	—	—	—	—	1	5
その他	2	—	—	—	—	—

〔註〕1954年サンパウロ新聞社編『家庭年鑑』、1962年サンパウロ新聞「聖市飲食店組合」会員広告、1979年以降はショーエイ出版社編『日系職業別住所録』（1979）、「日系なんでも電話帳」（1984・1988）、1994年日伯文化連盟編『日系社会ガイド』。

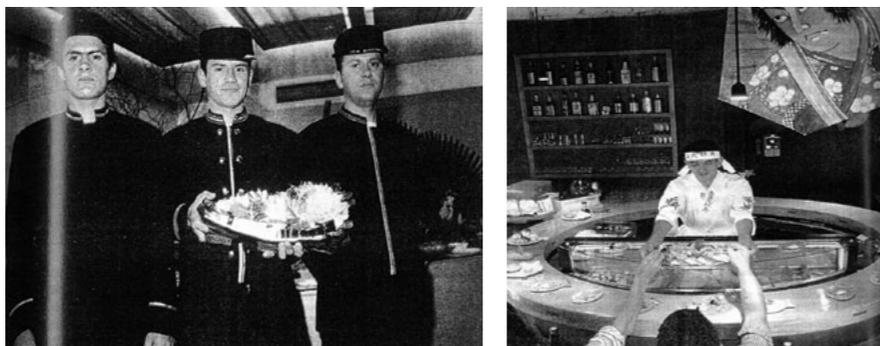


写真5 イタイン・ビビ地区に1980年代半ばに開業した非日系人経営のスシバー

1980年代からサンパウロ市では日本料理の第一次ブームが起これ、その後そのブームは拡大し大衆化していくことになるが、80年代には日本料理店が市内の高級ホテルに進出を遂げるとともに、日本料理店のチェーン店（弥生、ナナコ、マリコ・ライト、ナガヤマ、ヨド、シーハウス、現代など）が出現した。また80年代には、日系人の日本への就労（デカセギ）のために、サンパウロ市内の日本料理店の日系スシ職人や料理人が日本へデカセギに行ってしまったために、それまでスシ職人や料理人の助手として働いていた非日系人（特に東北伯出身者）が日系人の抜けた穴を埋めるようになり¹⁰、後に独立を遂げていったものも多く、これらの非日系スシ職人がスシのローカル化を促進する中心となった。

90年代には日本料理のファーストフード化が始まり、スシ・サシミを中心とする日本料理店がショッピングセンターのフードモールへの進出（1995年マリコ・ライト、スシダイ（ナガヤマ経営））するとともに、ジャルジンス、モルンビー、ピンニエイロス、イタイン・ビビなどの街区に日本料理のデリバリーサービスを標榜する店が開業した。また、90年代半ば以降、スシ・サシミを中心とした日本料理が日本料理店という空間を越境し、ブッフエ方式をとるシュラスカリア（Churrascaria 食べ放題ブラジル式焼肉店）やフェイジョアード専門店、カンチーナ（大衆的イタリア料理店）などへと進出を遂げていった。この場合、スシは主食ではなく、前菜、冷菜という位置で食される料理となっている。90年代には日本料理ブームの大衆化、換言すれば拡大が起こったが、それを促進したファクターに、新しいサービス法の導入が存在している。新しいサービス法にはスシ・フェスティバル（Sushi Festival）¹¹、スシ・ロジージオ（Sushi Rodizio）、コンビナード（Conbinado）¹²などがある。スシ・フェスティバルとスシ・ロジージオは比較的安く設定された単一料金での食べ放題システムであり、コンビナードとは大皿や舟形、太鼓橋型など「日本」を表象するような器に、スシとサシミを美しく盛り合わせたものである。前者は日本料理は高い・（その割に）量が少ないという不満に対応するために開発されたものであり、後者はブラジルにおける「発明」ではなく、米国マイアミから移入されたもので、日本料理のイメージである豪華さ、盛りつけの美しさ、エキゾチシズムなどに対応するものである。

90年代初頭には「コレラ騒動」（1993年）が発生し一時的に日本料理店から客足が遠のくという事態が起こったが、この当時に、主に非日系人経営の日本料理店あるいは非日系スシ職人らが客足を取り戻すための工夫、具体的にはフルーツを寿司ネタとする「トロピカル寿司」「玄米スシ」「菜食スシ」など日本の伝統に固執しない様々なブラジルのスシを創造し提供していった。これを契機としてサンパウロのスシは伝統的な江戸前寿司とブラジルの創造スシ¹³へと分岐し、さらに2000年代からはここに米国、特にロスアンジェルスからのスシ例えば Hot Filadelfia などに加わり現在に至っている。



写真6 スシ・ロジージオの例

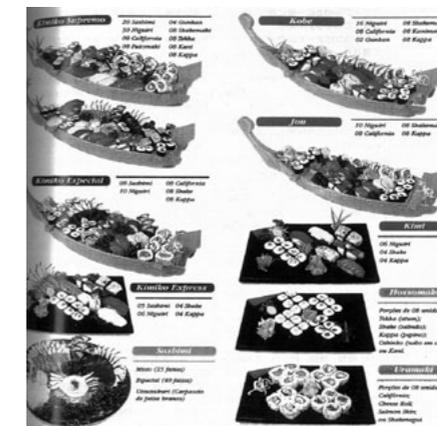


写真7 コンビナードの例

2000年代にはもう一つの日本料理ブームの大衆化ともいえる「焼きそば」ブームが起これ、ヤキソバテリア（Yakisobateria）と呼ばれる焼きそば専門店が出現するとともに、ポール・キロ（Por Quilo：量り売り店）の出現と増加（特に昼食）、テマケリア（Temaqueria）と呼ばれる手巻き専門店の出現といったようにスシ・サシミを中心とする日本料理の大衆化が加速化してきている。その一方で、日本料理店の高級化が有名シェフの登場とともに起こっている。その代表格は「お任せ（Omakasse）」寿司を中心とするジュンサカモト（Jun Sakamoto：レストラン名）（ジュン坂本はサンパウロ市内陸部プレジデンテ・ブルデンテ市生まれの二世）、「コース料理（Kappo Cuisine）」を中心とするキノシタ（Kinoshita）（キノシタのシェフ・ツヨシ村上は日本生まれ、リオ・デ・ジャネイロ育ちの日本人）であろう。これらの料理店は Quatro Rodas 社の2014年度全国レストラントップ50で、それぞれ23位、22位（サンパウロ市の22軒の中だけでは14、13位）にランクされている。



写真8 「お任せ」スシで人気の最高級店ジュンサカモト

JETRO 編『ブラジルにおける日本食品市場調査』（2009）によれば、2009年当時、サンパウロ市内の主要日本料理店は319軒（ブラジル全国では792軒）であるとされる。これはあくまで日本料理店を標榜するものであり、例えば量売り（ポール・キロ）といった大衆店、ブッフエ形式のシュラスカリアやフェイジョアード専門店、さらにはカンチーナなど日本料理店以外でスシ・サシミを提供する外食空間さらにはデリバリー専門店などは含まれておらず、これらを含めるとかなりの数になるのではないかと推測されるところである。JETRO 編（2009）に掲載された主要日本料理店

ストからサンパウロ市内で営業する日本料理店 319 軒を街区別に示したものである (表5)。これによれば、最も日本料理店が集中するのは「東洋人街 (日本人街)」があるリベルダーデ地区で 37 軒、以下、イタイン・ビビ地区 (30 軒)、モエマ地区 (29 軒)、ピンニェイロス地区 (16 軒) などと続き、日本料理店が営業する街区の総数は約 60 に達しており、市内の中間層以上の居住街区のほとんどに日本料理店が開業していることになろう。また、このほかに市内に 50 軒以上あるショッピングセンターの大多数にはファーストフードとしての日本料理店 46 軒が進出を遂げており、少なくとも現在において、日本料理はデリバリー専門店、量売り (ポール・キロ) 店、ファーストフード店といった大衆店からジュンサカモト、キノシタといった最高級店まであらゆるタイプの日本料理店が市内の中間層以上の居住街区やビジネス街などに存在しており、サンパウロ市民にとって身近にある料理であるとともに、あらゆるニーズに対応できるバリエーションを備えた料理店として存在しているといえるだろう¹⁴。

表5 2009年時点での地区別日本料理店 (レストラン) 数

街区	実数
Liberdade	37
Itaim-Bibi	30
Moema	29
Pinheiros	16
Jardim Paulista	13
Vila Olimpia	12
Jardins	11
Vila Madalena	10
Tatuapé, Santana, Perdizes, Saúde	各8
Vila Mariana, Brooklin, Paraíso	各7
Mooca, Cerquer César, Jd. Paulistano, Bela Vista	各4
Aclimação, Morumbi, Pompeia, Vila Nova Conceição, Campo Belo, Centro.	各3
Penha, República, Jd. America, Jabaquara, Vila Leopordina, Consolação, Vila Formosa, Vila Clementino, Ipiranga.	各2
Proença, Indianópolis, Chácara Santo Amaro, Jd. das Bandeiras, Ibirapuera, Vila Hamburguesa, Alto da Lapa, Jaguaré, Penha, Jd. Peri Peri, Granja Julieta, Alto da Lapa, Jd. da Saúde, Lapa, Vila Inah, Sumaré, Chácara Santo Antonio, Santa Cecília, Casa Verde, Alto d Pinheiros, Agua Branca, São Miguel, Berrini, hakkou Mirandópolis, Vila Carrão, Butantã.	各1
ショッピングセンター内	46
不明	1
合計	319

2. 日本料理の位置 — レストランガイドの分析を通じて —

サンパウロ市民は日本料理をどのように捉えているのでしょうか? この設問に対して本稿ではまずサンパウロ市で発行されている、いくつかのレストランガイドを手掛かりに、他の料理レストランとの関係の中で、日本料理 (店) の位置を考えていきたい。



写真9 Guia Quatro Rodas Brasil (2015) とVeja Comer & Beber : São Paulo (2014) の表紙

さて、この節では、サンパウロ市で発行されているレストランガイドを分析するが、ここで用いるのは① Ed.Abril 社が 1965 年から現在まで発行してきた Guia Quatro Rodas Brasil (2014 年現在 20 万 5 千部)、②同じく Ed.Abril 社が発行する週刊誌 Veja (サンパウロ市 29 万部) がその特別号として毎年 1 回発行する Veja Comer & Beber : São Paulo の二冊のガイドブックであり、補足的にブラジル日系社会のコジロー出版社が毎年刊行している『楽々サンパウロ』という、主に日本からの駐在員やその家族、日本人ニューカマーズ向けのサンパウロ市の生活ガイドを利用することにする。Guia Quatro Rodas Brasil はサンパウロ市をはじめとするブラジル国内主要都市におけるホテル、レストラン、レジャーの総合ガイドブックであり、ブラジル国内で最も古く権威をもったものである。ここでは 1978 年以降のものを利用する。一方 Veja Comer & Beber : São Paulo はブラジル国内で最大の発行部数を誇る週刊誌 Veja (ブラジル全国約 150 万部、サンパウロ 29 万部 (2014 年末現在) 毎週土曜日発刊) の主要都市ヴァージョン (読者は Veja 本体とこの各都市版を購読) —例えばサンパウロ市であれば、Veja São Paulo, リオデジャネイロ市であれば Veja Rio de Janeiro などの特別号であり、総合的なレストランガイドといえるものである。サンパウロ市の場合、週刊誌 Veja は中間層以上の市民のかなり多くが購読する最もポピュラーな週刊誌であり、そのサンパウロ版には最も充実した市内のレストラン、パルなどの飲食店情報が掲載され、市民の多くはこの情報誌をもとに外食を楽しんでいる。このサンパウロ版の特別号が毎年 1 回発行される Veja Comer & Beber : São Paulo であり、多くの市民はこの冊子を通じてレストラン情報を獲得するといっても決して過言ではないと考えられる¹⁵。

2-1. 1978 年～ 1994 年における日本料理店の位置 — Guia Quatro Rodas —

Guia Quatro Rodas に掲載されたレストランの中からサンパウロ市のレストランを料理範疇ごとに 1978 年以降 1996 年までの割合を示したのが表 6 である (1978 年以前は入手することができなかった)

1978年当時において、このガイドブックが用いた料理（レストラン）範疇は80年代以降に比べてかなり少なく、わずかに12範疇にすぎない。その12範疇とはブラジル料理（ブラジル料理はブラジル料理とシュラスコ（ブラジル南部地方のガウショ（カーボーイ）料理）という二つの範疇に分かれている）のほかに「国籍不明」の「インターナショナル（あるいはコンチネンタル）」料理店や出自が明確なフランス、イタリア、ピッツァ、ポルトガル、ドイツ、スペイン、中国、日本料理、そして食材という側面からの分類である「魚・海産物」料理店である。80年代に入ると、掲載された料理範疇は年次別に若干の差異を示しながらかなり多様な姿を見せる様になっている。

表6 Guia Quatro Rodas誌における各種レストランの比率（1978～1996）

料理/年次	1978	1981	1984	1987	1991	1996
インターナショナル	12.0	11.5	7.5	9.9	11.9	13.8
フランス	7.4	3.8	6.0	7.5	9.9	8.7
イタリア	26.5	20.6	18.2	20.6	18.6	22.5
ピッツァ	19.0	14.6	14.9	7.5	5.5	6.5
シュラスコ	9.9	11.3	11.0	8.9	10.7	11.8
ポルトガル	1.2	1.7	2.4	2.7	2.8	2.2
ブラジル	2.1	4.3	3.9	3.1	2.4	2.5
ドイツ	4.1	2.8	3.9	3.8	2.8	1.5
スペイン	0.8	2.1	2.7	2.7	4.0	4.0
中国	11.2	10.4	6.3	5.1	4.7	3.3
日本	3.7	3.8	5.1	6.2	7.9	6.9
魚・海産物	2.1	2.3	2.4	4.1	4.7	9.4
韓国	—	0.4	0.3	0.3	0.4	0.4
ロシア	—	0.4	0.6	0.3	0.4	—
スイス	—	0.6	1.5	1.4	1.6	0.4
ハンガリー	—	1.1	0.6	0.7	0.4	—
オーストリア	—	0.4	0.3	0.3	—	—
ギリシャ	—	0.2	0.3	0.3	0.4	0.4
スカンジナビア	—	0.4	0.3	0.3	0.8	0.7
ユダヤ	—	0.2	0.3	1.4	1.2	1.5
アラブ	—	2.1	3.3	0.7	2.0	3.3
中南米	—	1.1	0.3	0.3	—	—
インド	—	—	0.3	0.7	0.4	1.1
インドネシア	—	0.2	0.3	—	—	—
ローマ	—	—	0.3	—	—	—
チーズ・ワイン	—	0.8	0.6	0.3	0.4	0.4
パンケーキ	—	0.4	0.6	0.7	—	—
ベジタリアン	—	1.7	1.5	0.7	0.8	0.7
ナチュラル	—	0.2	1.2	1.4	0.4	0.4
マクロビオチック	—	0.4	0.6	0.7	0.4	—
タイ	—	—	—	—	—	0.4
ファーストフード	—	—	—	—	—	3.6
サラダ	—	—	0.9	—	0.4	0.4
サンドイッチ	—	—	1.8	5.1	4.4	—

この1978年から1996年までのGuia Quatro Rodas（レストラン）における日本料理レストラン数は1978年には全体の3.7%であり、料理範疇の中で8位を占めていた。それが徐々に順位を上げ、1987年、1991年には第5位に上昇している。この全レストラン範疇における日本料理レストラン数の比率は1980年代から上昇を遂げるようになるが、ほとんどのエスニック・レストラン数の比率があまり変動がないこととは対照的であることから推察して、サンパウロ市における日本料理が目ざされブーム化したことを物語っていると考えられる。

78年から96年にかけて、その比率が大きく変化するのは日本料理、魚・海産物、中華の三つであるが、その変化の方向は日本（3.7%⇒6.9%）、魚・海産物（2.1%⇒9.4%）が上昇を遂げているのに対して、中華は11.2%から3.3%へと大きく減少を遂げていることが看取される。このことは日本料理や魚・海産物レストランが80年代初頭から徐々に中華料理にとって代わってきたことを示している。

また80年代初頭からベジタリアン（Vegetariana）、ナチュラル（Natural）、マクロビオチック（Macrobiotica）といった「健康食」範疇が出現し、一定の比率を維持しながら推移していることがみてとれる。後述するように、サンパウロ市において中華料理は日本料理などとともに「健康的」な料理とイメージされており、このデータから見る限り、「健康食」としての中華料理は同じ健康食としての日本料理、魚・海産物料理、ベジタリアンなどの健康食にとって代わられてきたといえるだろう。

ナショナルな料理であるブラジル料理や国籍不明のインターナショナル料理を別にして日本料理を他のエスニック料理との関係でみれば、少なくとも日本料理は80年代後半以降、イタリア料理、フランス料理に続く第3のエスニック料理として位置付けられている。

次に日本料理（店）の位置づけを値段という面から1978年の時点で見たものが表である。これによると、日本料理（店）は1978年当時ではインターナショナルやフランス料理、ポルトガル料理ほどは降格ではなく、中華料理、ドイツ料理ほど安価でもなく、ちょうどイタリア料理と同じような位置にあったことが看取されるだろう。

表7 1978年時点の主要料理範疇の値段の比較

値段	1978		
	高	中	低
Internacional	48.3	51.7	—
Francesa	16.7	77.8	5.5
Italiana	4.7	21.9	73.4
Portuguesa	33.3	66.7	—
Churrasco	—	33.3	66.7
Japonesa	11.1	33.3	55.6
Chinesa	—	18.5	81.5
Alemã	—	10.0	90.0

表7は主要な料理範疇の値段の比較を行ったものであるが、日本料理はちょうどイタリア料理の価格帯とよく似ていることが看取されるだろう。日本料理はインターナショナル、フランス、ポルトガル料理ほどは高くはなく、中華やドイツ、シュラスコ（焼肉）料理ほどは安くもないちょうど中レベルに位置している。

2-2. 2014年時点での日本料理（店）の位置

ここでは2014年時点での日本料理レストランの位置を二つの主要なガイドブックを使ってみることにしよう。最初のガイドブックはGuia Quatro Rodas Brasilであり、もう一つはVeja Comer & Beber : São Pauloである。

1) Guia Quatro Rodas Brasil (2015)

表8はGuia Quatro Rodas Brasilに掲載されたサンパウロ市のレストラン258をレストラン範疇及び価格別に一覧表化したものである。これによれば、日本料理はエスニック料理としてはイタリア料理に次いで、第2位の位置が与えられ、90年代までの位置よりもその位置づけが上昇していることが看取されるだろう。また、値段との関連でみると、\$\$\$\$\$範疇（一人150R\$以上）という最高価格帯にある日本料理店数は日本料理店全数の22%程度で相対的に最も高い料理であると位置づけられていることがわかる（最高価格帯の日本料理レストランが実数的に最も多いわけではない）また、前項の表と比較するならば、2014年時点では総じて日本料理レストランの高級化（価格が高いという点で）が起きているとみることができるだろう。

表8 Guia Quatro Rodas Brasil(2015)における料理店数（実数・比率）とその値段別比率

料理	実数・%	値段				
		\$	\$\$	\$\$\$	\$\$\$\$	\$\$\$\$\$
Alemã	3(1.2)		33.3	66.7		
Arabe	12(4.9)		41.7	58.3		
Argentina	9(3.5)			42.9	57.1	
Brasileira	40(15.0)		17.5	40.0	42.5	
Carne	10(3.9)			20.0	70.0	10.0
Chinesa	3(1.2)		33.3	66.7		
Coreana	2(0.8)		50.0	50.0		
Contemporânea	6(2.3)			16.7	66.7	16.7
Espanhola	5(1.9)			50.0	50.0	
Francesa	18(7.0)			27.8	61.1	11.1
Grega	1(0.4)			100.0		
Indiana	1(0.4)			100.0		
Italiana	53(20.5)		15.8	38.1	41.3	4.8
Japonesa	23(8.9)		8.7	21.7	47.9	21.7
Norte-americana	2(0.8)			100.0		
Peruana	3(1.2)		66.7	33.3		
Portuguesa	7(2.7)			14.3	71.4	14.3
Suiça	1(0.4)			100.0		
Tailandesa	1(0.4)		100.0			
Uruguaia	1(0.4)			100.0		
Variadas	41(13.2)		7.3	61.0	22.0	9.7
Vegitariana	5(1.9)		40.0	60.0		

註) ブラジル料理に関してバイア、エスピリト・サント、ロジージョ焼肉、フェイジョアード、ミナス、東北伯、パラ、ペスカーダ、南マットグロッソ料理を一括したものをブラジル料理とした。イタリア料理に関してはイタリア、イタリア（カンチーナ）、ピッツを一括してイタリア料理とした。
 値段範疇： \$=30R\$未満、\$\$=31~60R\$, \$\$\$=61~100R\$, \$\$\$\$=101~150R\$, \$\$\$\$\$=150R\$以上（因みに円換算では1R\$=44~45円程度：2015年1月時点）

2) Veja Comer & Beber : São Paulo (2014 / 2015)

次にVeja Comer & Beber : São Pauloから各レストラン範疇のレストラン数や比率を示したのが表9である。これによるとピッツァリア、カンチーナ／トラトリーア、イタリアーナというイタリア料理店数が卓越し全体の31%を占めているが、日本料理レストランが51軒（10.2%）とイタリア料理店に続いて第2位となっていることがわかる。これはすでに記したような1980年代からの日本料理ブームがさらに広がりを見せていると捉えることができるであろう。

表9 Veja Comer & Beber : São Paulo (2014-2015)における料理店数とその広津

料理名	実数	%
Italianos	55	11.0
Pizzarias	54	10.8
Cantina / Trattoria	45	9.0
Italianos Sub-Total	154	30.8
Japonês	51	10.2
Carnes	35	7.0
Brasileiros	30	6.0
Franceses	30	6.0
Contemporâneos	19	3.8
Naturais	17	3.4
Portugueses	17	3.4
Arabes	15	3.0
Bufês	11	2.2
Rodízios	10	2.0
Peixes / Frutos do Mar	9	1.8
Asiática	8	1.6
Espanhois	7	1.4
Chinesas	6	1.2
Alemães	6	1.2
Latinos ¹⁶	5	1.0
Coreanos	4	0.8
Mediterrâneos	3	0.6
Judaicos · Gregos · Indianos	各2	0.4
Marroquino · Suiço · Alménio · Tailandês	各1	0.2
Variados	51	10.2

表10は主要な料理範疇の価格帯を示したものであるが、日本料理店の価格帯はちょうどイタリア料理、フランス料理と類似したものとなっている。またすべての価格帯の料理店が掲載されている

点でもイタリア、フランス料理と同様であり、このことはイタリア料理が最もポピュラーな料理であることから見れば、日本料理もイタリア料理に次ぐ料理店数が記載されていることを合わせて考えればイタリア料理に続くポピュラー性をもっているものと考えられることができるだろう。

表10 Veja Comer & Beber : São Paulo (2014–2015)
ブラジル料理及び主なエスニック料理の値段

料理名	\$	\$\$	\$\$\$	\$\$\$\$
Brasileiros	30.0	46.7	23.3	
Rodizios		20.0	80.0	
Italianos	3.6	43.6	40.0	12.7
Cantina/ Trattoria	26.7	71.1	2.2	
Pizzarias	77.8	22.2		
Japoneses	2.0	39.2	49.0	9.8
Franceses	3.3	46.7	40.0	10.0
Espanhois		42.9	42.9	14.3
Portugueses		23.5	58.8	17.6
Alemãos	33.3	66.7		
Arabes	86.7	13.3		
Chineses	50.0	50.0		

(註) \$=70R\$未満、\$\$=71~105R\$, \$\$\$=106~175R\$, \$\$\$\$=175R\$以上
(因みに円換算では1R\$=44~45円程度：2015年1月時点)

3) 日本人・日系人中心のレストランガイドと Vaja:Comer & Beber との差異

ここでは、2014年時点で、日系社会において日本語で出版された『楽々サンパウロ』と Veja Comer & Beber : São Paulo に掲載された日本料理店の差異に関してみることにしよう。前者では64、後者では51の日本料理店が掲載されているが、その料理店の街区分布を示したのが表11である。これによれば、前者に掲載された日本料理店の分布は9街区、後者では16街区となり、その読者の差異に従って、後者でより広範囲で営業している日本料理店が掲載されている。前者では日本人や日系人に馴染の深い「日本人街」があるリベルダーデ地区、日系人や駐在員家族が数多く居住するパライズ、ジャルジン・パウリスタ、サウーデ地区などの料理店が相対的に多く載せられているのに対して、後者ではサンパウロ市内の料理店集中地区であるイタイン・ビビ地区の日本料理店が多く掲載されている。ここで注目したいのは双方のガイドブックに掲載された日本料理店の異同である。表11では重複数として示したが、双方のガイドブックに掲載された日本料理店で重複するのはリベルダーデ地区で7、パライズ、ピンニエイロス地区でそれぞれ4、全体では18にすぎず、大半は重複していないという事実である。筆者がコジロー出版社の編集者に行ったインタビューでは日本人や日系人が利用する料理店を掲載し、「ガイジン」がよくいく店は割愛しているという。こうした点を考慮すると、サンパウロ市における日本料理(店)の利用では現時点においてエスニシティによるかなりの「棲み分け」が起こっている可能性があり、おそらくそこで食される日本料理の質やタイプ、日本料理店の店構え、サービスなどに大きな差異が存在しているのではないかと予想することができ、この点もサンパウロ市における日本料理の受容をめぐる重要な点なのではないかと考えられるところである。日本料理の革新はこれまでリベルダーデ地区外の日本料理店、非日系人スシ職人、料理人、非日系経営者の料理店などで起こってきたという事実をみれば、「伝統的日本料理」と「革新的日本料理」の棲み分けということも予想されるのである。

表11 レストランガイド別街区分別日本料理レストラン数(分布)

街区	楽々サンパウロ (2014)	Veja Comer & Beber : São Paulo(2014/15)	重複数
Liberdade	25	7	7
Paraiso	10	4	4
Jardim Paulista	8	3	1
Pinheiros	6	5	4
Moema	4	3	
Bela Vista	4	1	
Itaim Bibi	3	16	2
Saúde	3	—	
Vila Mariana	1	—	
Cequeira César	—	3	
Vila Nova Conceição	—	2	
Brooklin	—	1	
Vila Leopordina	—	1	
Perdizes	—	1	
Vila Madalena	—	1	
Higienópolis	—	1	
Tatuapé	—	1	
Morumbi	1	1	
合計	64	51	

3. 日本料理のイメージ—主要料理範疇との関連において

筆者は1996年4月から6月にかけて、日本料理を巡るイメージや外食行動を予備的に把握する目的で、各種エスニック料理に関するイメージ、外食行動を中心とするアンケート調査を、サンパウロ市役所公務員(38名)、サンパウロ市料理助手(49名)、サンパウロ大学日系学生(21名)合計108名を対象に実施した。ここでは、この調査結果の一部を用いて外食行動や日本料を巡るイメージの特徴の一端を提示することにしよう。

3-1. 被調査者の基本的属性

図表12.~14は被調査者の基本的属性を示したものであるが、被調査者では性別では女性(89%)が卓越したものとなっている。また、公務員、調理助手、日系学生という範疇では、公務員の学歴が高く、その9割以上が大学卒業以上の学歴を持つのに対して、調理助手では中学校までの義務教育卒業程度が8割近くを占め、大きな対照を示している。この学歴の差異は収入面に反映し、公務員では全員が最低給与額の6倍以上、特に11倍以上の高収入が70%以上を占めているのに対して、調理助手では最低給与額の1倍から5倍の収入層に9割近くが集中している。こうした被調査者の基本的属性の差は公務員を中間層、調理助手を経済的下層を代表するサンプルとしてみなすことができるだろう。一方、サンパウロ大学日系学生は中間層世帯出身者という位置づけを与えることができるだろう。なお、アンケート調査は留置き法によって実施された。

表12 被調査者の内訳

	公務員	調理助手	日系学生	合計
男	8	7	8	23 (21.3%)
女	30	42	13	85 (88.7%)
計	38	49	21	108

表13 被調査者の学籍

	公務員	調理助手	日系学生	合計
義務教育卒	—	37 (75.5)	—	37 (34.3)
高校卒業	1 (2.6)	8 (16.3)	—	9 (8.3)
大学在学中	—	—	21 (100)	21 (19.4)
大学卒業	27 (71.1)	2 (4.1)	—	29 (26.9)
大学院卒業	10 (26.3)	—	—	10 (9.3)
その他・不明	—	1 (2.0)	—	1 (0.9)
合計	38	49	21	108

表14 被調査者の収入（月収：最低給与）

	公務員	調理助手	日系学生	合計
収入なし	—	—	12 (57.1)	12 (11.1)
1～5倍	—	44 (89.8)	7 (33.3)	51 (47.2)
6～10倍	10 (26.3)	2 (4.1)	2 (9.6)	14 (13.0)
11～15倍	14 (36.8)	2 (4.1)	—	16 (14.8)
16～20倍	5 (13.2)	—	—	5 (4.6)
21倍以上	9 (23.7)	—	—	9 (8.3)
不明	—	1 (2.0)	—	1 (0.9)
合計	38	49	21	108

（注）当時の最低給与112リアル（約105ドル）

3-2. 各料理範疇に対するイメージ

アンケート調査ではサンパウロ市の代表的な料理範疇である、ブラジル料理、イタリア料理、フランス料理、中華料理、韓国料理、ポルトガル料理、アメリカ料理、アラブ料理、ドイツ料理、日本料理といった料理範疇¹⁷に対してどのようなイメージを持っているのかを複数回答で設問した。

表15～24はそれぞれの料理範疇に対するイメージを整理して示したものである。各料理範疇のイメージ（単語・語彙）は日本料理に関する調査であったこともあって、日本料理を巡る単語・語彙数が最も多く47であった。日本料理に続いてはブラジル料理（38）、イタリア料理（36）、フランス料理（31）、中華料理（28）、ドイツ料理（24）、アラブ料理（22）、アメリカ料理（19）、韓国料理（12）、ポルトガル料理（5）であった。90年代半ばの段階で、ニューカマーズとしての韓国移民のプレゼンスは縫製業領域においてかなり顕著に認められていたものの、その料理に関するサンパウロ市民の認知度は低いものであった。また旧宗主国であるポルトガルの料理イメージに関してはその語彙数が少なく、その大半は料理としてのバカリョアーダ（干し鱈料理：Bacalhoda）（実数23/40）とその食材であるバカリャウ（干し鱈：Bacalhau）（10/40）にほぼ集中していた。

各料理範疇のほとんどは例えば、ブラジル料理ではフェイジョアーダ、シュラスコ（Churrasco）、

イタリア料理ではピッツァ（Pizza）、マカロナーダ（Macaronada）、中華料理ではフランゴ・シャドレス（Frango Xadrez）といったように、代表的な料理名で認識される傾向が強く認められる。

料理名のほかに、各料理範疇は食材・食品、調味料、味付け、調理法、料理の評価（おいしい／まずい、手が込んでいる、人工的、健康的、重い・軽い、好き・嫌いなどなど）、料理を食する機会、料理の量、サンパウロ市内のエスニック集団集住地区名など多様な単語・語彙などを通じてイメージされているのが特徴である。

①ブラジル料理のイメージ

表15 ブラジル料理のイメージ（複数回答）

イメージ	実数	イメージ	実数	イメージ	実数
料理名		素材		見栄えがしない盛付	1
フェイジョアーダ	55	フェイジョン	2	毎日の食事	2
シュラスコ	10	干し肉	1	味がいい	3
アロス&フェイジョン	7	味付け		どこにでもある	1
コメルシアル（定食）	2	テンペロ	12	気取らない	1
クスクス・ア・ブラジレイラ	2	脂を多く使う	11	料理が多様	1
レイトン・ブルルッカ	1	濃厚	8	家庭	3
スペア・リブ	1	塩を効かせる	4	ダンス	1
ミナス料理	1	バリエーションなし	1	味わい深い	1
アラカジュール料理	1	強い	3	最高	3
ラバーダ	1	塩辛い	3	セルフサービス	1
ツツ・デ・フェイジョン	1	料理		太る	7
バタパー	1	重い	6	量が多い	10
カフェ	1	ボリュームがある	15	脂肪が多い	2

ブラジル料理は日本料理に次いで多くの単語・語彙からイメージされている。最も多いのは料理名によるイメージ化であり、中でも、1920年から30年代にかけてアフリカ系人のソウルフードからナショナルフード化を遂げたと言われるフェイジョアーダが最も多くなっている。それに次いで多かったのはブラジル南部の地方料理からナショナル化したシュラスコ料理であった。また、現在においてブラジルの日常的食事の主食となっているアロス&フェイジョン（Arroz & Feijão）からイメージする者も多く見られた。一方、食材ではフェイジョン豆（Faijão）や干し肉（Carne Seca）があげられ、味付けではブラジル特有のテンペロ（Tempero, 脂を多く使う、塩を多く効かせる（塩辛い）、また料理自体は毎日食べる、どこにでもある、家庭料理であるが、ボリュームがあり、重く、脂肪が多いために太るがおいしい、最高の料理といったイメージが持たれているようである。

②イタリア料理のイメージ

表16 イタリア料理のイメージ

イメージ	実数	イメージ	実数	イメージ	実数
ピッツァ	16	エルバ	2	安い	9
マカロナーダ	16	塩辛い	4	ボリューム	4
スパゲッティ	8	重い	7	フェスタ	1
ラザーニャ	8	おいしい	12	ピッシーガ	1
カネロニ	1	いい	9	プラス	1
ニョッキ	2	カンチーナ	4	手が込んでいる	4
リタッサ	1	満腹感	11	濃厚	3
ラビオリ	1	サンパウロ	4	栄養価高い	5
マカロン・マッサ	30	バラエティに富む	2	高カロリー	3
トマト	12	気取らない	4	太る	8
強い	4	最高	4		
テンペロ	2	陽気	6		
モーリョ（ソース）	3	家庭	5		

日本料理、ブラジル料理に次いで、多くの単語・語彙からイメージされているのがイタリア料理である。このことはサンパウロ市の形成・発展プロセスにおけるイタリア系移民の卓越（サンパウロ市人口のうち500万人程度がイタリア系であるという推計もある）、食文化を含む多様な文化領域におけるイタリア文化の影響の強さなどを反映しているとみられる。被調査者がイタリア料理に対してもイメージではその主要な食材の一つであるマカロン/マッサ（Macarrão/Massa）、トマトという語彙によるものが多く、それらを用いた料理（ピッツァ、マカロナーダ、ラザーニャなど）名によって結晶されている。また、イタリア料理は安く、気取らない、陽気なフェスタ（Festa）のような雰囲気の中で食べる、ボリュームがあり満腹感を味わえる家庭的な料理である一方で、塩辛く、重い、栄養価が高い太る料理であるというイメージが持たれているようである。

③フランス料理のイメージ

表17 フランス料理のイメージ（複数回答）

イメージ	実数	イメージ	実数	イメージ	実数
エスカルゴ	11	料理	6	味つけ良い	3
パン	6	量が少ない	13	食べ方	
キャビア	5	洗練	4	エチケットがうるさい	3
ソース	5	軽い	4	価格高い	8
クレープ	4	おいしい	2	高級	10
キッシュ	1	素晴らしい	1	気取っている	7
ムース	1	美しい	1		
ストロガノフ	1	健康的	2		
ビュレ	3	エキゾチック	1		
ワイン	1	芸術的	2		
パテー	1	コース料理	1		
フォンデュ	1	低カロリー	1		
マヨネーズ	1	揚げ目	1		
		デリケート	1		

他の料理範疇に比較すると、フランス料理を巡るイメージはその料理からイメージされるというよりは（料理名としてはストロガノフ（Stroganoff）、フォンデュ（Fondue）、ソースやビュレ、マヨネーズ、あるいはエスカルゴ、キャビアといった食材、さらには「クレープ」「キッシュ」などの菓子類などによってイメージが顕著に認められる。また、ブラジル料理やイタリア料理が気取らない、家庭的、日常的、安い、ボリューム、重いなどのイメージが強固であるのに対して、フランス料理では洗練、美しい、高級、デリケート、芸術的、量が少ない、コース料理、エチケットがうるさい、味付けがよい、気取っているなどの語彙でイメージされるという点や軽い、量が少ない、健康的、低カロリーなどの点で対照的なイメージが持たれていることが理解される。

④中華料理のイメージ

表18 中華料理のイメージ（複数回答）

イメージ	実数	イメージ	実数	イメージ	実数
フランゴ・シャドレス	23	アグリ・ドッセ	2	軽い	3
チョプスイ	5	鶏肉	2	おいしい	3
パステル	2	ピメントン	1	消化が良い	2
ヤキソバ	12	魚	5	汁が多い	1
春巻き	2	麺	2	バラエティに富む	1
スープ	2	米	3	奇妙な味	1
バナナ・カラメラーダ	1	豆腐	3	芸術的	1
大皿	2	脂肪分が多い	1	世界中どこでも	1
値段が安い	2	味が規格化	2		
炒める・揚げる	2	醤油	1		

中華料理のイメージではフランゴ・シャドレス、ヤキソバ、チョプスイといった料理名が卓越する一方、鶏肉、ピメントン、魚、麺、米、豆腐などの食材、揚げる・炒めるという調理法、軽い、消化に良いなどの健康イメージ、さらにはデリバリーサービスの浸透の結果、規格された味付けなどのイメージも認められた。また値段が安いといったイメージや調味料としては日本料理と重なる醤油が現れている。

⑤ドイツ料理のイメージ

表19 ドイツ料理のイメージ

イメージ	実数	イメージ	実数	イメージ	実数
シュルツェ	21	チョリッツ	1	肉	7
ソーセージ	7	バリエーションなし	3	強い	7
アイスバイン	6	おいしい	4	重い	9
シュトルデル	3	アルコール	2	脂肪多い	4
キャベツ	3	オクトーバーフェステ	2	量が多い	4
ポテト	8	パン	3	太る	3
カスラー	1	安い	4	保存食	3
不健康	3	Frios（ハム・チーズ）	4	音楽	2

ドイツ料理は「シュルツェ（Schulze）」「シュトルデル（Strudel）」「アイスバイン（Eiswein）」「カスラー（Kassler）」などの料理名、「ソーセージ」「チョリッツ」「キャベツ」「ポテト」「パン」「フリオス（ハムやチーズ）」などの食材（品）、「ビール」という飲料水などからイメージされる。また、ドイツ料理は「量が多く」「ヴァリエーションに乏しく」「強い」「重い」「脂肪が多い」料理であり、「不健康」で「太る」「時々食べる」料理であるという否定的評価がなされる一方で、「おいしい」「安い」「いい」などの肯定的評価も見られる。ドイツ料理から「音楽」や「オクトーバーフェステ」もイメージされている。

⑥アラブ料理のイメージ

表20 アラブ料理のイメージ

イメージ	実数	イメージ	実数
キビ	44	軽い	1
シャルット	6	おいしい	11
エスフィーハ	26	大好き	2
タブレ	8	最高	1
お菓子	2	脂肪多い	1
肉	1	太る	1
味わい深い	2	健康的	1
味つけきつい	1	バランスがいい	1
味つけが違う	2	暑い気候	1
重い	3	安い	13
洗練	2	手軽	9

アラブ料理は「キビ（Kibe）」「エスフィーハ（Esfiha）」「タブレ（Tabule）」「シャルット（Charuto）」といった料理名と値段の「安さ」食する「手軽さ」、料理の「おいしさ」「味わい深さ」「洗練さ」などを中核としてイメージされている。キビ、エスフィーハなどは街角の軽食店で売られる市民にはなじみの、小腹がすいたときなどに気軽に食される料理であり、アラブ移民が多いこともあって、広く浸透したものとなっている。アラブ料理の評価としては「脂肪が多く」「重く」「太る」という評価とともに「バランスがいい」「健康的」「軽い」「大好き」「最高」など肯定的な評価も見られる。

⑦アメリカ料理のイメージ

表21 アメリカ料理のイメージ

イメージ	実数	イメージ	実数
ハンバーガー	13	無秩序	1
ホットドッグ	5	流行	3
マクドナルド	4	きらい	2
ビッグマック	4	人工的	2
	6	太る	4
ランチ	3	不健康	5
工業化された料理	7	料理の割に高い	6
麻薬	1	規格化された味	6
高カロリー・高脂肪	8	卵	1
ベーコン	1		

アメリカ料理のイメージは「ハンバーガー」「ホットドッグ」「ビッグマック」「マクドナルド」などに象徴されるように「ファーストフード」として捉えられている。そこからその料理は「工業化された料理」であり、味は「規格化」され「人工的」なものである。料理は「高カロリー・高脂肪」であり「不健康」で「太る」もので「きらい」であるというような否定的な評価がなされている。マクドナルドのビッグマックの価格の世界的比較で上位に位置づけられるブラジルからか「料理の割に値段が高い」とも認識されている。

⑧韓国料理のイメージ

表22 韓国料理のイメージ

イメージ	実数	イメージ	実数
焼肉	1	キムチ	1
麺	1	スープ	1
魚	1	チャンボン	1
辛い	6	ニンニク	1
寿司	2	味つけが強い	1
脂肪多い	1	エキゾチック	1

韓国料理のイメージ（単語・語彙）は非常に少なく、しかも混乱も含まれている。韓国料理は「焼肉」「キムチ」「寿司」「麺」「スープ」「ちゃんぽん」といった料理からイメージされるが、ちゃんぽんは日本料理との混乱ではないかと思われる。また、調味料としての「ニンニク」、味付けとしての「辛さ」「味つけが強い」などのイメージもある。韓国料理のイメージを持つものは主に日系学生であり、公務員にしろ、調理助手にしろ、「知らない」「食べたことがない」という回答がほとんどを占めている。韓国料理店は現在、ボン・レチーロ地区、アクリマソン地区、リバルダーデ地区などに集中しているが、96年当時では韓国料理は決してポピュラーなものではなかった。

⑨ポルトガル料理のイメージ

表23 ポルトガル料理のイメージ

イメージ	実数	イメージ	実数
バカリョアーダ	23	伝統的	1
バカリャウ	10	高カロリー	1
いい	5		

旧宗主国であるポルトガルの料理に関してはイメージ（単語・語彙）は非常に少なく、代表的料理である「バカリョアーダ」、そしてその食材である「バカリャウ（干し鱈）」（料理名としても認識されている）に集中している。

⑩日本料理のイメージ

日本料理は他の料理範疇に比べて、より多くの単語・語彙によってイメージされている。日本料理のイメージはまず料理名によって醸成されており、それは「すき焼き（14）」「スシ（20）」「サシミ（19）」「ヤキソバ（11）」「味噌汁（14）」「うどん（4）」、鉄板焼き（2）、お好み焼き・ラーメン・そば（各1）などであり、「定食」も見られた。また、日本料理はその食材からもイメージされており、生魚（12）（生ものという単語をふくめれば20）、米、椎茸・シメジと言ったキノコ類、大根・もやしなどの野菜類などの単語・語彙がみられる。日本料理の調味料としては味噌・醤油（17）という単語によるイメージであった。日本料理自体のイメージとしては「洗練さ」「エキゾチック」「豪華さ」「栄養のバランスが良い」「健康的」「脂が少ない」「低カロリー」「軽い」「素材を活かす」「おいしい」など洗練性や健康的な肯定的なイメージが卓越する一方で、「量が少ない」「味が無い」「甘い」「奇妙な味」などの否定的なイメージも認められる。また日本料理の盛付では盛り合わせの美しさや色の取り合わせ（の美しさ）などの評価があり、「箸を使って食べる」といった食べ方によるイメージも見られる。値段に関しては「値段が高い」という評価が見られる¹⁸。

表24 日本料理のイメージ（複数回答）

イメージ	実数	イメージ	実数	イメージ	実数
料理名		生もの	8	洗練さ	20
すき焼き	6	野菜	4	エキゾチック	8
スシ	20	モヤシ	2	安心	1
サシミ	19	米	10	ブラジル食と対照的	1
定食	3	椎茸・シメジ	8	おいしい	8
鉄板焼き	2	大根	4	最高	1
ヤキソバ	11	あんこ	2	季節感	1
味噌汁	14			色の取り合わせ	2
うどん	4	調味料（醤油・味噌）	17	盛り付けの美しさ	14
お好み焼き	1			低カロリー	7
ラーメン	1	料理		素材を活かす	8
そば	1	栄養のバランス	9	奇妙な味	3
	1	健康的	8	豪華	5
素材		脂が少ない	9	軽い	4
生魚	12	量が少ない	7	淡泊	8
		味が無い	2	嫌い	4
		甘い	6		
		生臭い	3	料理店	
				落ち着いた雰囲気	1
				家庭的	1
				値段高い	9
				箸を使って食べる	5

3-3. 食の単語・語彙の集合論的分析

前項においては、ブラジル料理と主要なエスニック料理に関してブラジル人が持つイメージを簡単に概観してきた。本項では、それらのイメージ（単語・語彙）がどのように関連しながら、ブラジル人の料理に関する世界観を形作っているのかを予備的に考察し、その料理の世界観の中に日本料理はどのような位置を占めているのかを象徴論的に解釈する。

本調査で対象となった人々は多様なエスニック料理（ブラジル料理を含む）をその主要な料理名によって認識していた。この料理名による認識は日本料理と韓国料理双方に出現する「寿司」、日本料理と中国料理双方に出現する「焼きそば」、さらにはソースや食材での認識が卓越するフランス料理を除いては、それぞれのエスニック料理を独自性をもったものとしてその認知世界に固有の位置

を与えることになる。例えば、ブラジル料理では「フェイジョアード」、ポルトガル料理では「バカリョアード」、アラブ料理では「キビ」「エスフィーハ」などのように。しかし、今回取り上げたエスニック料理の中では韓国料理が日系学生を除いては固有の料理名や料理をめぐるイメージを明確に与えることができおらず、少なくとも1990年代半ばにおいて韓国料理はブラジル人の食の認識世界の中では明確で固有な位置を獲得するに至っていなかったといえるだろう。

ブラジル料理と「単語」や「語彙」を最も共有するのはイタリア料理である。勿論、両者間に料理名の重複はない。ブラジル料理は「フェイジョアード」に代表されるフェイジョン豆と肉(牛・豚)、米を中心とする料理(この点で最もポピュラーな料理はフェイジョン・アロース・コン・ビッフェ(Feijão e arroz com bifé)ということになる)であるのに対して、イタリア料理ではマッサ・マカロンを用いた「ピッツァ」や「マカロナーダ」といった料理である。しかし、両者の異質性はこのあたりまでであり、味付け、料理への評価などではかなり多くの「単語」「語彙」を共有することになる。例えば、味付けに関してみると、両者に共通する「単語」「語彙」は「テンペロ」「塩辛い」「濃厚」などであり、料理に関する評価では「重い」「ボリュームがある」「量が多い」「高脂肪・高カロリー」「太る」などの不健康イメージが共通のものとなっている。この不健康イメージはドイツ料理やポルトガル料理でも共有されたものであり、唯一ヨーロッパ料理で不健康イメージが出現しないのはフランス料理だけである。因みに、ブラジル文化は、接尾辞に——アード(ada)が付く料理は「重い」料理であるという認識が存在している。これらの料理にはフェイジョアード、ブッシャーダ(Buxada)(内臓の煮込み料理)、ラバーダ(Rabada)(オックステールの煮物)、マカロナーダ、バカリョアードであるが、最初の三つの料理はブラジル料理、マカロナーダはイタリア料理、バカリョアードはポルトガル料理であり、いずれも「不健康」イメージが共有される料理範疇の料理であることは偶然のことではあるまい。両者の「単語」「語彙」の共有はこのあたりに止まらず、「気取らない」「どこにでもある」「家庭的」「毎日の料理」「満腹感」「好き」などのイメージも共有されているのである。

一方、同じヨーロッパ起源のドイツ料理はブラジル料理やイタリア料理と不健康イメージは共有するものの、そこに日常性・家庭性などのイメージは共有されていない。

また、同じヨーロッパ起源の料理でありながら、ブラジル料理とイタリア料理との間に見られたような接近性はフランス料理には出現しない。逆にフランス料理では不健康イメージや家庭的庶民的日常的イメージとは対照的な「単語」「語彙」によってイメージされている。即ち、フランス料理は「量が少なく」「低カロリー」で「デリケート」に準備され、「ソース」とともに「芸術的」に盛り付けられた「エキゾチック」な「健康的」な「コース料理」で、「高級感」あふれる高級レストランで「エチケット」を気にしながら味わうものとして認識されているのである。

アメリカ料理に関しては不健康イメージや日常的イメージはブラジル料理やイタリア料理と「単語」「語彙」が共有されているものの、その味付けに関しては「規格化」され、その料理は「工業化された」料理であるという点、さらにはブラジル料理やイタリア料理の「おいしい」「いい」「最高」といった肯定的評価とは逆に「きらい」「麻薬(みたいな料理)」「拒絶」などの否定的評価が卓越するという点で対照的な位置を与えられているといえるだろう。

中近東起源のアラブ料理に関してみると、そのイメージは曖昧である。料理名を除けば、「単語」として多いのは「安い」「手軽」であり、これらはブラジル料理やイタリア料理に近いイメージのだが、健康－不健康をめぐる評価では「重い」「脂肪多い」「太る」という「不健康」イメージと同時に「軽い」「バランスがいい」「健康的」といった「健康」イメージが同時に出現し、この評価基準によって、アラブ料理と他の料理範疇の関係性を考えることはこのデータからは困難である。

次に日本料理、中国料理、韓国料理といった東洋系エスニック料理とブラジル料理やイタリア料

理などのヨーロッパ起源のエスニック料理との象徴的關係性を見てみよう。日本料理とブラジル料理との「単語」「語彙」の共有は食材としての「米」くらいでほとんど「単語」「語彙」の共有は見られない。一方、中国料理とブラジル料理とでも食材としての「米」と「安い」という評価において共有性があるにすぎない。また、日本料理や中華料理とヨーロッパ起源のエスニック料理との関係を見ると、日本料理とフランス料理との「単語」「語彙」の共有が卓越し、中華料理とイタリア料理との間に若干の語彙の共有が認められる。この点は後述しよう。

さて、日本料理と中華料理をめぐる「単語」「語彙」に関してみることにしよう。日本料理と中華料理との間にはブラジル料理やエスニック料理に認められなかった料理名の重複(共有)がある。それは「焼きそば」である。焼きそばはブラジルの日系社会において非常にポピュラーな食べ物であり、日本料理店のメニューに現れる料理であるばかりではなく当地の日系食品企業がインスタントラーメンとともに製造、市内のスーパーマーケットで広く販売される料理であるとともに、中華料理店においても提供される料理である。料理名以外の両者の「単語」「語彙」の共通性に関してみると、いずれにも「米」「魚」「野菜」「豆腐」という単語が共有されている。しかし、詳細に見てみると、同じ「野菜」とはいつても日本料理の場合には「大根」「シイタケ」「もやし」「しめじ」などであるのに対して、中華料理ではピメントン(Pimentão)、アグリ・ドッセ(Agri-doce)とその種類においてはかなりの違いも認められる。次にこうした食材を調理する際の調味料であるが、両者には「醤油」が共有されている。また、料理の評価に関してであるが、「軽い」「消化がよい」「低カロリー」「健康的」といった健康食としてのイメージが共有されており、そこには「重い」「太る」「高カロリー」「高蛋白・脂肪」といった不健康イメージは全く出現していない。また両者の料理とも「おいしい」「エキゾチック」「素晴らしい」「芸術的」などの肯定的な評価でも共通している。

しかし、両者の共通性はこのあたりまでで後は「単語」「語彙」の異質性が顕著になる。それはまず両者の料理の盛り付けに認められる。中華料理では「大皿」に盛り付け提供されるがそこではあまり盛り付けの美しさが強調されていない。それに対して日本料理では「盛り付けの美しさ」「色どり」「器との調和」などの単語・語彙、さらには料理の「季節感」なども出現している。このことは料理の値段という点や料理の量などに関連している。中華料理は「安い」のに対して、日本料理は「高い」「高級」とイメージされ、また日本料理は「量が少ない」のである。さらに調理方法では日本料理だけに現れるのは「素材を活かす」「生」という単語・語彙で、中華料理では「油で炒める」「揚げる」という語彙が出現している。

この二つの東洋系料理は料理名、健康イメージなどである程度共通したイメージを保有しながら、高級感(安さ)、盛り付け、料理の量などで距離をあけることになる。それを象徴的に示すのが、寿司・サシミであろう。そして、この料理がフランス料理との類似性をもたらすことになるのである。即ち、「盛り付けの美しさ」「ソフィスティケート」「洗練さ」「芸術性」「デリケート」などは日本料理とフランス料理が共有する「語彙」なのである。健康的で高級な料理として、日本料理とフランス料理は共通の範疇に入り、それはそのまま不健康で安いブラジル料理やイタリア料理と対立する位置を占めることになるのである。

表25 主要エスニック料理の象徴的關係性（ブラジル料理を起点にして）



以上、簡単に各料理範疇間の象徴的關係性をみてきたが、それを図示すれば表25のようになる。

4. サンパウロ市における日本料理受容のかたち¹⁹ — 外食行動と日本料理の背景にあるイメージ

ここではサンパウロ市において日本料理がどのように受容されているのかの一端を前述の三つのグループのうち市役所公務員、調理助手という二つのグループの外食行動や日本料理をめぐるイメージの差から予備的に考察することにしよう。筆者は日本料理の受容において、それぞれのもつ経済的条件は大きな条件であると考える一方で、受容の背景には日本料理のもつイメージ、さらには日本や日本人（ここでは日常的に接する日系人を含む）をめぐるイメージという文化的条件が作用しているのではないかと考えている。ここではこうした仮説のもとに、日本料理受容の問題を考察することにしよう。

4-1. 外食行動と日本料理

ここでは被調査者であるサンパウロ市役所公務員とサンパウロ市調理助手という二つのグループに対して、その外食行動とそこにおける日本料理に関して概観することにしよう。アンケート調査ではそれぞれのグループに対して、月にどの程度外食をするか、招待を受けた時に選択する料理は何か、友人・仲間と外食する場合に選択する料理は何か、昼食及び夕食の機会にどの程度、日本料理を食べるか、どのような機会に日本料理を誰と日本料理を食べるか、日本料理店を選択する際の基準は何か、といった一連の設問を行った。

①月平均の外食頻度と日本料理を外食で食べる頻度 — 昼食と夕食 —

次に二つのグループに対して、昼食時及び夕食時にどの程度の頻度で外食をするか、そして外食の際にどのくらいの頻度で日本料理を食べるかを設問したものである。

表26 公務員・調理助手別昼食・夕食別外食の頻度及びに日本料理外食の頻度

グループ 頻度	公務員				調理助手			
	昼食		夕食		昼食		夕食	
	外食	日本料理	外食	日本料理	外食	日本料理	外食	日本料理
毎日	5(13.2)	0	0	0	0	0	0	0
週数回	10(26.3)	1(2.6)	0	0	0	0	0	0
週1回	14(36.8)	5(13.2)	2(5.3)	0	1(2.0)	0	0	0
月数回	6(15.8)	10(26.3)	14(36.8)	5(13.2)	3(6.1)	0	2(4.1)	0
月1回	2(5.3)	20(52.6)	16(42.1)	13(34.2)	9(18.4)	2(4.1)	11(22.4)	1(2.0)
ほとんどしない	1(2.6)	2(5.3)	6(15.8)	14(36.8)	15(30.6)	22(44.9)	11(22.4)	24(49.0)
全くしない	0(-)	0	2(5.3)	6(15.8)	21(42.9)	25(51.0)	25(51.0)	25(51.0)
合計	38	38	38	38	49	49	49	49

これによれば、昼食にしろ、夕食にしろ、公務員はよく外食をするのに対して、経済的条件から調理助手では外食をしない者がほとんどである。公務員の場合、昼食時の外食はオフィス周辺に比較的安価で昼食を提供する料理店が数多く存在するという点とも関連して、週1回以上、外食をする者が7割を超えている。その一方、夕食の際の外食は月1回から数回が8割程度となっている。外食の際に日本料理店に行く頻度は公務員の場合、昼食が月1回程度が半数、月数回が26%、夕食では月1回程度日本料理を食べる者が34%程度となっている。夕食時に日本料理を食べる頻度は低くなるのは日本料理を選択するのが特別な機会であり、その際には高級感のある料理店を選択する可能性が高く、しかも家族や親族とともに行くことが多いために高くつくためであろう。

②特別な招待時に選択する料理

表27 特別な招待時に選択する料理

	公務員	調理助手
フランス料理	28.9%	2.0%
イタリア料理	5.3%	22.5%
日本料理	47.4%	6.1%
中華料理	7.9%	2.0%
ブラジル料理	7.9%	63.3%
ドイツ料理	2.6%	2.0%
その他	-	2.0%

次に、誰かから夕食の招待を受け、好きな料理をごちそうしたいと言われた時に、どのような料理を選ぶかに関して設問したものである。公務員の場合には最も好まれるのは日本料理で全体の約半数に当たる47%が日本料理を選択している。公務員の場合、日本料理に続いて多いのはフランス料理で29%となっている。一方、調理助手の場合には公務員や学生の傾向とはかなり異質で、ブラジル料理が最も多く63%、続いてはイタリア料理（23%）となっている。

表28は公務員を対象にして、年齢別に招待を受けた時に選択する料理を示したものである。これによれば、日本料理では30歳台から40歳台に於いて相対的に多く選好され、フランス料理の場合には若干年齢的に上昇し、40歳台から50歳台で選好される割合が相対的に高くなっている。一方、20歳台では日本料理を選好するものが多くなっているがイタリア料理を選好するものも29%みられる。

表28 年齢階層別料理の選択—招待・予算の心配なし（公務員のみ）

	20代	30代	40代	50代
フランス料理	23.8%	25%	30.4%	33.3%
イタリア料理	28.6%	8.3%	4.4%	—
日本料理	38.1%	41.7%	52.2%	33.3%
中華料理	—	8.3%	8.7%	—
ブラジル料理	—	16.7%	—	33.3%
ドイツ料理	4.8%	—	4.4%	—
その他	4.8%	—	—	—

③友人との会食の際の料理

次に、友人4、5名と割り勘で予算も一人当たり50~70リアル（ドル建てでは25~30ドル程度：レストランのランクでは中級）という条件を設定して、外食の料理の選択を設問した。公務員の場合には特別な招待時に比較するとフランス料理や日本料理を選択する割合が少なくなり。それに代わってイタリア料理と中華料理に比率が高くなる。これは料理のイメージとして「安さ」や「ボリューム」、「気安さ」などが関係しているだろうか。一方、調理助手でも公務員と同様の傾向があるが、ブラジル料理が極端に多くなる。これは食べ親しんでいる料理であることと関係していようか。フランス料理や日本料理は友人同士で気軽に楽しむ料理とは認知されていないようである。

表29 友人同士での会食の際に選択する料理

	公務員	調理助手
フランス料理	2.6%	—
イタリア料理	36.8%	22.4%
日本料理	21.1%	2.0%
中華料理	36.8%	—
ブラジル料理	—	73.5%
ドイツ料理	2.6%	—
その他	—	2.0%

④どのような機会に誰と日本料理を食べに行くか？

表30 どのような機会に？（実数）

	公務員	調理助手
普通の週日や昼に	9	—
特別な機会（祝い事・誕生日など）	14	1
招待を受けた時	3	3
週末に	3	1
友人との会合・会食	2	—
家計に余裕のある時	2	—
軽い食事を食べたい時	3	—
その他	1	—

どのような機会に日本料理を食べるかを設問したものであるが、公務員で多いのは祝い事や誕生日などの「特別な機会」に日本料理を食べに行くという回答で、続いては「普通の週日や昼に」が

続いている。これは公務員の場合にはオフィスのあるパウリスタ大通りには比較的安い価格で日本料理（定食、アラカルトなど）を食べさせる店が存在していたためであろう。勿論、特別な機会に食べに行く日本料理店はこれらとは別のタイプということになるであろうか。一方、調理助手の場合、公務員のように気軽に行ける場所ではないし、そもそも日本料理の敷居が高いので強いて言えば招待を受けた時くらいに日本料理を食するということである。

⑤どのような基準で日本料理店を選択するか？（公務員）（実数）

日本料理をよく食べる公務員グループにどのような基準で日本料理店を選択するかを複数回答で設問したものである。これによれば、最も多いのは料理のおいしさ（質や盛り付けの美しさなどを含む）で、以下、清潔さ・衛生、価格、レストランの場所、雰囲気となっている。

料理店の清潔さ・衛生面が選択基準の上位にくるのは、亜熱帯気候に属するサンパウロで生ものであるスシ・サシミを食べるうえで重要な基準なのかも知れない。またレストランの場所、駐車場の有無なども選択基準に顔を見せるのはサンパウロ市の治安の問題や車社会であるということと無関係ではないし、この点からすると公務員は特に夜間における治安の不安があり、駐車場を完備している日本料理店が少ないダウンタウンのリベルダーデ地区の料理店はあまり選択されないと言えるかもしれない。このことは日本料理店の雰囲気（高級感など）も選択の重要な基準の一つである点とも結びついているだろう。

表31 公務員の日本料理店選択の基準（複数回答）

	公務員
料理のおいしさ（質・盛り付け）	22
価格（安さ）	14
清潔さ・衛生	16
レストランの場所	11
レストランの雰囲気（高級感など）	8
サービスの質	6
紹介・サジェスチョン	6
レストランのオリジナリティー	2
駐車場の有無	2
日本的情緒	8
その他	3

⑦どのような日本料理を好むか²⁰

公務員グループに対して好みの日本料理を複数回答で設問した結果を示したのが表32であるが、最も好まれる料理はスシ、サシミ、その盛り合わせであるコンビナードとなっている。続いては煮る・揚げる・焼くなど彼等にとってなじみの調理法で調理されたすき焼き、天ぷら。鉄板焼き、しゃぶしゃぶ、焼き魚、焼き鳥などが続いている。餃子やしめじのバター焼きはスシ・フェスティバル、スシ・ロージーオなどではスシ、サシミを味わう前の「前菜」としてよく出される馴染の深い料理であり、ブラジル人が非常に好む料理である。日本人や日系人が好む定食も出現しているが、かなり下位に位置しているし、うどんなどの麺類は彼等の日本料理店に求める高級感などとはそぐわない料理であるし、麺をすするといふ行為はブラジル人にとっては得意ではないし、麺類は彼等にとって「熱すぎる」料理なのかもしれない。

表32 どのような日本料理を好むか？

料理名	回答(複数)	料理名	回答(複数)
寿司	37	焼き鳥(串焼き)	17
サシミ	36	とんかつ	17
コンビナード	34	特別定食	13
すき焼き	27	味噌汁	9
天ぷら	22	コース料理	8
鉄板焼き	21	しめじのバター焼き	7
しゃぶしゃぶ	18	お好み焼き	5
餃子	18	うどん	4
焼き魚	17		

4-2. 日本料理・日本・日本人をめぐるイメージの差—日本料理受容のかたち—

前節では外食行動と日本料理に関して簡単に見てきたが、その特徴は公務員はかなり日本料理を食べているのに対して、調理助手ではほとんど食さないということであった。既に述べたように、調理助手では日本料理を食べる経済的条件が不在であるというのが一つの説明である。しかし、この調査を実施した当時、すでに昼食時には比較的安価な日本料理を提供するレストランも存在していたのであり、食べようと思えば食べることはある程度可能であったと思われる。当時、高視聴率を誇るグローボTV局のテベ・ノベラ(TV Novela: 連続ドラマ)の中ではスシを食する場面があったし、子供番組の人気司会者シュシャ(Xuxa)は様々な機会にスシが最も好きな料理であり、スシ職人を雇い、自宅でスシを食する場面などがTVや雑誌で取り上げられ、話題になっており、少なくともスシやサシミを中心とする日本料理に対するイメージは持たれていたと考えられるし、日本料理ブームの大衆化の一つの方向として「焼きそば」の popularity が高まっていた時期であり、日本料理に接近するある程度の条件はあったと思われる。しかし、調理助手の間ではほとんど日本料理の受容が起こっていなかった。

表33は公務員、調理助手の日本料理のイメージを示したものである。まず指摘しなければならないのは、調理助手の多くにおいては日本料理に関して「知らない」「食べたことがない」という記入が目立ったことである。このことは調理助手と公務員の日本料理に対する単語・語彙数の差となって表れている。公務員では日本料理の単語・語彙数は119であったのに対し、調理助手ではわずかに56にすぎなかった。

この表から二つのグループの日本料理をめぐるイメージの差をみてみよう。

表33 公務員・調理助手の「日本料理」を巡るイメージ(単語・語彙)

日本料理のイメージ	公務員	調理助手	合計	日本料理のイメージ	公務員	調理助手	合計
すき焼き	4	—	4	軽い	2	—	2
寿司	12	9	21	洗練さ	15	—	15
サシミ	8	7	15	健康的	4	—	4
テンプラ	1	—	1	低カロリー	5	—	5
定食	2	—	2	栄養バランス	7	—	7
ヤキソバ	2	9	11	素材を活かす	5	—	5
味噌汁	2	—	2	味がない	—	2	2
醤油	7	2	9	甘い	3	1	4
モヤシ	—	2	2	生臭い	—	3	3
米	3	1	4	安心	7	—	7
奇妙な味	—	3	3	おいしい	6	—	6
野菜	2	1	3	嫌い	1	3	4
高い	3	4	7	美しい	7	—	7
豪華さ	1	2	3	エキゾチック	3	—	3
餃子	—	2	2	和菓子	—	1	1
生魚	3	4	7	合計	115	56	171

調理助手のもつ日本料理のイメージで最も多かったのは「焼きそば」(9)「スシ」(9)、続いては「サシミ」(7)「高い」(4)「生魚」(4)であった。こうしたイメージが調理助手によってもたれているのは前述したような状況と決して無関係ではないだろう。スシ・サシミという日本料理のイメージはその食材としての「生魚」「米」、調味料としての「醤油」、さらには日本料理の評価としての「豪華さ」「高さ」などの単語によるイメージと関連しているのであろう。しかし、調理助手の日本料理の評価に関してしてみると「高い」や「豪華さ」以外では、ほとんどすべてが「奇妙な味」(3)「味がない」(2)「生臭い」(3)「嫌い」(3)といった否定的評価となっているのが特徴といえるだろう。

一方、公務員の日本料理のイメージは料理名、調味料、食材(素材)、日本料理に対する評価といった側面からなっているが、そのイメージは「洗練さ」(15)、「スシ」(12)、「サシミ」(8)、「栄養バランス(がよい)」(各7)、「安心」「醤油」「美しい」(各7)、「おいしい」(6)「低カロリー」「素材を活かす」(各5)などの肯定的なイメージが卓越し、否定的な単語・語彙は「高い」「甘い」「嫌い」といった程度にすぎないのが特徴で、調理助手のもつイメージとは対照的と言っていいほどの差異が存在しているのである。

こうした日本料理をめぐるイメージの差が二つのグループの日本料理受容の背景には横たわっているのであるが、その差は日本料理に止まらず、その背後にある日本や日本人(ここでは日常的に接する日系人も含む)に対して両者ともイメージの差異とも関連している。表34は公務員、調理助手の二つのグループが日本や日本人に対して持っているイメージのうち、それぞれ上位10位を取り上げたものである。

表34 公務員・調理助手の日本・日本人(日系人を含む)に対するイメージ(上位10位)

	日本に対するイメージ		日本人(日系人)に対するイメージ	
	公務員	調理助手	公務員	調理助手
第1位	高い技術水準	高い技術水準	よく働く	洗濯屋
第2位	伝統	日本人	信用	フェイランテ
第3位	高度な経済成長	仕事・労働	正直	パステル屋
第4位	電化製品	知性	高い学歴	良く働く
第5位	仕事、高度情報化社会、組織	発展	知的	友人
第6位	第1世界、規律、高い教育	生魚、自然の美しさ	尊敬、時間に正確	正直
第7位	日本製自動車	第1世界	高い技術	キタンダ
第8位	効率、サムライ、ヒロシマ	ヒロシマ	プロフェッショナル	生魚
第9位	富士山	パステル	閉鎖的	シャーカラ、東洋人、柔道
10位	日出国、忠誠心	狭さ	意思、規律、繊細	知的

まず日本のイメージをみると、二つのグループともに、日本を「高い技術水準」をもつ国としてイメージして類似しているが、公務員ではさらに「高度な経済成長」「電化製品」「高い教育水準」「電化製品」「日本製自動車」「高度情報化社会」など第1世界、先進国としての日本やそれを支えてきた「組織」「規律」「効率」「伝統」などから、さらにそのイメージを紡ぎだしている。それに対して、調理助手ではそうしたイメージもある一方で、「生魚」「パステル」「狭さ」などのイメージも出現しており、公務員のような徹底的な先進国性、高度産業社会をめぐる徹底的なイメージはもっていないようだ。

いずれにしろ、日本に対するイメージに関しては両者の間に大きな差異はないと思われるが、両者の間に大きな差が出現するのは日本人をめぐるイメージである。公務員は「よく働く」「信用」「正直」「高い学歴」「知的」「時間に正確」「高い技術」「プロフェッショナル」「規律」など日本人に対してちょうど近代産業社会の理想的な人間像のようなイメージを持っているのに対して、調理助手では「ラバンデリヤ（洗濯屋：Lavanderia）」「フェイランテ（青空市商人：Feirante）」「パステル屋（Pastelaria/Pastereiro）」「キタング（青果商：Quitanda/Quitandeiro）」「シャーカラ（小規模農家：Chácara）」といったイメージが卓越している。シャーカラを除いて、これらの職業はサンパウロ市の日本人移民がブラジルへの永住という戦術を析出し、子弟の教育などのために戦後サンパウロ市に移動し、都市での経済的安定や上昇のために選択した代表的な仕事である。こうした自営業の職種は屋外で汗を流し、真っ黒になって働くというイメージであり、公務員がもつ専門・技術的、ホワイトカラー的日本人像とはかなり異質なものであり対照的ですからある²¹。おそらく、こうしたイメージからは公務員とは違ってブラジル文化の中での食材ではあってもそのまま食べるものではない「生臭い」「生魚」のイメージは「新鮮さ」や「洗練さ」、「健康的」「おいしい」などのイメージへと転換することは困難であり、それを主要な食材の一つとする日本料理へと接近することは経済的条件はさておき、象徴的に困難だったのではなかろうか²²。

おわりに

本稿ではサンパウロ市において非日系市民がどのように日本料理を受容しているのかをいくつかの側面から考察してきた。しかし、本稿の考察は利用したデータが現時点のものではないという限界をもっているし、何よりもサンプル数も少なく、しかも片寄のあるものである点であくまで今後の本格的な調査研究へ向かっての予備的考察のような位置づけになる。サンパウロ市民のもつ料理の世界観とその中での日本料理の位置などを考察した際のサンプルは百名を若干超える程度で、この調査から得られた主要料理範疇に対するイメージ数は少なかつたし、様々な角度からの分析に耐え得るだけ量がなく、あくまで料理の世界観の概観を示し得たにすぎないし、外食行動も同様の限界を抱えているといえるだろう。これは今後の課題であろう。また、この調査はアンケート調査であり、日本料理受容をめぐる質的なデータが収集されることがなかった。日本料理を食べる非日系市民に対して、日本料理をめぐる個人的な記憶といった質的データの収集は行なわれなければならないものだろう。一方、サンパウロ市のような経済的格差や人種・民族的校構成の多様な社会の中で、いったい誰が日本料理をどのようなイメージを紡ぎながら食しているのだろうか？さらに、顧客を魅了するための料理以外の『日本』をめぐるイメージは日本料理店という空間の中でどのように創造され、どのように変化してきたのか？

ところで、サンパウロ市において外食業はいつごろ成立したのであろうか、そして外食はいつごろから多くの市民にとってなじみの行動となったのだろうか？外食の背景にはどのような社会経済的な状況の変化があったのか？また、他の移民グループの場合、それぞれの料理の外食業はどのように成立し、どのように展開していったのだろうか？より大きなコンテキストと比較研究の視点をもった調査研究が必要であろう。

日本料理の受容という問題をめぐる考察は様々な角度から実施される必要があるが、それはブラジル文明や文化の研究に他ならないのだという認識をもつ必要があるといえるだろう。

註

- 1 アンドウゼンパチ（1964）「移民と郷愁－ガルボン・ブエノ街を礼賛する」サンパウロ日本文化協会編『コロニア』44号、13－14頁
- 2 この日本料理はアグーリャ米（インディカ米）とフェイジョンを中心としてそこに味噌や醤油で調理した日本的副食とテンペロというブラジルの調理法を用いて準備したブラジルの副食とからなる日伯混淆の料理である。これはすでに日本人移民が配耕されたコーヒー耕地で創造されたもので、現在に至るまで日系家庭料理の基本的なかたちであり続けている。テンペロというのは「塩、酢、ニンニク、あるいは玉ねぎ、胡椒、それに細かく刻んだパセリ等匂いものを入れて、しばらく（肉や野菜などを）漬けておき、それからこれを油で炒めてから煮る」といった調理法である。この日系家庭料理の詳細は拙稿（2009）496～498頁に比較的詳細な記述がある。この米・フェイジョンに二重の副食を伴う形式は日本の食材などが豊富になっても基本的に変わることはなかった。旅館やペンソンなどのごく初期の日本料理外食店で提供された「日本料理」とはこのようなものであった。
- 3 筆者がこれまで発表してきた主な論考には以下のようなものがあるので参照されたい。1995年「ブラジルにおける日本文化の影響－食文化を通してみた日伯交流史序論」『日本ブラジル交流史－日伯関係100年の回顧と展望』日本ブラジル中央協会 377－419頁
1998（a）「非日系ブラジル人の日本食受容に関する一考察」『イペロアメリカ研究』39、上智大学イペロアメリカ研究所、85－106頁
1998（b）「〈食〉をめぐる移民史（1）－戦前のコロノ・植民地時代」『人文研』No.2、サンパウロ人文科学研究所、48－70頁
1999（a）「〈食〉をめぐる移民史（2）－戦前・戦後の都市における食生活－」『人文研』No.3、64－102頁
1999（b）「サンパウロ市の日本料理店と日本料理」『人文研』No.4、2－42頁
2005「ブラジルに〈旅〉した日本の麺類たち」『食の文化誌 Vesta』No.59、味の素食の文化センター、30－35頁
2008「戦前期におけるブラジル日系人の食生活」『世界の食文化－中南米－』農山漁村協会
2009a「ブラジル日系人の正月とナタール」『食の文化誌 Vesta』No.59、味の素食の文化センター、18－23頁
2009b「ブラジル日本人移民・日系人の食生活と日系食文化の歴史－サンパウロ市（州）を中心として」『ブラジル日本移民百年史 生活と文化編（1）』（第3巻）486－611頁
2013「商工活動の黎明期」（16－22頁）「戦前の食品関連産業」（74－95頁）「戦後の食品関連産業」（139－161頁）『ブラジル日本移民百年史 産業編』（第2巻）
- 4 サンパウロ市の日本料理店と日本料理に関する詳細は拙稿（1999b）、拙稿（2009b）参照されたい。
- 5 サンパウロ市には第1回日本人移民が到着した1908年以前から日本人が居住していたが、1910年当時には日本人数は270名程度まで増加した。これらの日本人の多くは住み込みで働いていた家庭奉公などを除いてはサンパウロ市中心に近く、仕事のための交通の便もよく、しかも安価なポロン（半地下部屋）のあったコンデ・デ・サルゼーダス街を中心に居住していた。1934年当時においてサンパウロ市居住日本人は4563名に増加したが、この人口のうち23%はコンデ・デ・サルゼーダス街、エストウダントス街、コンセレイロ・フルタード街を中心に、タバチンゲーラ街、グローリア街、サンパウロ街といった街路に囲まれた小地域に集中的に居住していた。その他の日本人はこの当時サンパウロ市域ではあるが半農村地区に居住し、近郊型農業に従事していた。

その主な地域はフレゲジアー・ド・オー（48世帯）、サンターナ（32世帯）、ツクルビー（67世帯）、トレメンバー（39世帯）、モルンビー（61世帯）、ピンニェイロス（8世帯）などであった。戦後の1958年当時においてはサンパウロ市在住日系人口は約7万8千人（移民25990人、ブラジル生まれ51940人）ほどにまで増加した。この人口数は当時の全日系人口数の18.1%に相当する。この当時、日系人はサウーデ地区（7055人）、イピランガ地区（5093人）、タトゥアペー地区（4556人）、ブタンタン（ピンニェイロス）地区（4496人）、ビラ・プルデンテ地区（3437人）など当時のサンパウロ市郊外（市街地の外側）に居住し、多くは洗濯業、商人（市場・露天商・青果商など）など小資本で言語的障壁の低い家族労働力を投下して行える小自営業に従事していた。それから30年後の1988年にはサンパウロ市在住日系人は32万6人（全日系人口数の26.5%）に増加、これにサンパウロ市周辺都市に居住する大サンパウロ都市圏人口17万人を加えると日系人口の40%ほどが集中し、海外における最大の日系人口を誇っていた。Araujo,O.E.de.(1940)Latinos e Não – Latinos no Município de São Paulo, *Revista de Arquivo municipal de São Paulo*, No.LXV. ブラジル日系人実態調査委員会編（1964）『ブラジルの日本人移民 上下』東京、東京大学出版会、サンパウロ人文科学研究所編（1989）『ブラジル日系人口調査報告書 – 1988・1989 –』サンパウロ、Mimeo.

6 『在伯邦人住所録』（1940）サンパウロ、351頁

7 しかし、料亭などは場所を変えたりしながら戦時中も営業を続けていたという。

8 戦後の日本料理外食業を支えた条件としては以下のようなものの存在があった。

* 日本料理関連製造・加工業の隆盛 – 地場産業・進出企業 –

〔地場産業〕サクラ中矢アリメントス、アグロ・ニッポ食品、DAMM 食品、丸高食品、三丸食品加工、豆腐製造業、漬物など

〔進出企業〕東山農産加工、ヤクルト、キッコーマン、味の素インテルアメリカーナ等

* ジャポニカ米の供給…国産米に加えて1996年当時カリフォルニア米11種、メルコスル米数種（1910年代から日本人移民農家によって栽培）

* 大洋漁業、ニチレイなどによる魚介類の安定的供給（1960年代から）

* 「ミヤタ日本品製作工場 割りばし製造販売元」

「セキ日本品製作工場」（まな板・割りばし・角箸・飯しゃもじ・高級箸など）

* 「貸し衛生おしぼり」業（70年代初頭）

* 「染物工芸専門・京染本舗 美似香」（高級日本着・印はんでん・はっぴ・ミニ着物・のれん・座布団など）

* 食器類…日系精神薄弱児施設「こどもの園」、多治見陶器職人移民、日系陶芸家等

* 日本食品輸入業者（日系・中国系）…50年代以降。92年の輸入開放政策で加速化。

9 この当時、日本料理外食業には数多くの戦後移住者が参入しており、戦後の日本社会の料理やサービス法などを導入した。表3にみられる日本料理はちょうど日本のデパートの大衆食堂のメニューを彷彿させるものである。

10 筆者が1996年サンパウロ市内の52軒の日本料理店を対象にした民族的出自別スシ職人・料理人・給仕の割合を示したのが表5である。これによれば、スシ職人、料理人のそれぞれ36%、76.5%が非日系人であった。この非日系人スシ職人、料理人のほとんどは東北伯地方出身者であり、特にペルナブーコ州出身者が多く見られた。ちなみにブラジルではこの州は有名シェフを輩出する州として著名である。

表5 スシ職人・料理人・給仕の民族的出自別割合

範疇	日本人	2、3世	非日系
スシ職人	33 (26.4%)	47 (37.6%)	45 (36%)
料理人 (助手を含む)	22 (13.3%)	17 (10.2%)	127 (76.5%)
給仕	—	42 (19.1%)	173 (80.9%)

11 スシ・フェスティバルという単一料金による食べ放題システムは1990年代初頭、レボーサス大通りにある長期滞在型ホテルロレーナ・フラットに入店していた日本料理店の日系人オーナーが客の日本料理は量が少ないという不満に対処するために発明したサービス法である。このサービス法ではしめじのバター焼きや餃子といった料理を提供した後でスシ、サシミの食べ放題サービスを行うというもので、このサービス法は瞬く間に多くの日本料理店によって取り入れられた。

12 コンビナードというサービス法は米国マイアミから90年代初頭に移入されたもので、米国の日本料理店で通常のコンビナード（とんかつと野菜炒めといった副食の組み合わせ）とは異なっている。

13 こうした日本料理の革新は常にリベルダーデ地区の外側にある、非日系スシ職人や経営者の料理店で起こってきている。

14 JETRO 編『平成21年度ブラジルにおける日本食品市場調査』（2009）によると、ブラジル全国の日本料理店792軒の売り上げは月8千万ドルで、その9割がスシ・サシミを中心とするファーストフード日本料理店、僅かに1割が伝統的日本料理店の売上であるという。また、同調査によれば、日本料理店の顧客は夕食時には1人平均150~250リアルを消費しているという。

15 サンパウロ市では、これらのほかに、週刊誌エポカ（Epoca）などの娯楽情報冊子、サンパウロ州の有力紙であるオ・エスタード・デ・サンパウロ（O Estado de São Paulo）紙、フォーリャ・デ・サンパウロ（Folha de São Paulo）紙などが金曜日に娯楽情報冊子「エスタード紙の場合セウ・バイロ（Seu Bairro）、フォーリャ紙の場合イラストラド（Ilustrado）」を「付録」として付け、市民に対して一週間の娯楽情報を発信している。一方、サンパウロ市の日系社会では現時点においては前述した『楽々サンパウロ』が最も充実し、かつ総合的な情報誌となっているほか、同じ出版社が無料で配布している月刊冊子『ピンドラーマ』においてもレストランガイドを含む日系社会情報が盛り込まれている。当地で発行されているニッケイ新聞やサンパウロ新聞でも断片的なレストラン情報を含む娯楽情報が発信されている。これらはいずれも日本語によるもので、あくまでサンパウロ市在住の日本人（移民及び駐在員、ニューカマーズなど）を対象にしたもので2世や3世といった日系人がこれらから情報を獲得することはほとんどないといえるだろう。

16 ラテンアメリカレストランの中には日系ペルー料理店「ニッケイ料理コミーダ・ニッケイ（Comida Nikkei）」が1軒含まれている。この料理店はキリャ・ノボアンジーノ（Killa Novoandino）という名前であり、2009年にペルジーセス地区に開店した。当初は日系ペルー人ケンジ城間が料理人を務めていたが、ペルーに帰国したため、同じペルー人のミカエル・トロ・タイペ（Michael Toro Taype）が料理人を務めている。ここで提供される料理は日系ペルーフュージョン料理である。

17 サンパウロ市は周知のように様々な国や地域からの移民によって発展した都市である。戦前期において主要な移民グループはエスニシティによってある程度の棲み分けを行っていた。1934年当時、サンパウロ市の人口は103万3千人ほどで、そのうちの29万人ほどが移民であった。最も多かったのはイタリア移民で8万6千人（市人口の8.3%）、以下、ポルトガル移民7万8千、スペイン移民3万5千、ドイツ移民1万3千、シリア移民9千人、ロシア移民4千7百人などとなっている。

移民グループの地域的集中に関しては例えばポルトガル移民がカーザ・ベルデ、サンターナ、ベレンジーニョ、ツクルビーなど、イタリア移民がプラス、モッカ、ボン・レチーロ、ビシーガなどであり、ビシーガ地区は現在でもイタリア料理店が集中する地区となっている。ここでサンパウロ市の人口の推移についてみると、1872年には3万1千人ほどの小さな町であったものが1930年代に百万人を、2000年には1千万人を超え、2010年の段階で1千124万人の人口をもつ大都市となっている。Araujo, O.E,de(1940)Enquistamentos étnicos, *Revista de Arquivo Municipal de São Paulo*, No.LXV.

¹⁸ このような日本料理のイメージを他の調査の結果と比較してみよう。JETROは2014年にインターネットによる『日本食品に対する海外消費者アンケート調査』をサンパウロ市をはじめとする世界各国で実施し、その結果を公表しているが、それによると日本料理のイメージとしては肯定的なイメージの上位5位として健康に良い(64.6%)、美味しい(59.6) おしゃれ(32.4)、安全(18.2) 高級感がある(13.2) とし、その他の良いイメージとしておしゃれな料理、見た目が良い、魅力的なビジュアル、魅力的なプレゼンテーション、料理自体のプレゼンテーションに食欲がそそられる、綺麗でカラフル、香りや味がいい、色が鮮やか、興味深い独創性、健康に良い、健康的で新鮮な料理、友達と一緒に食べたい、精緻な料理、料理が繊細、心地よい雰囲気、太らない、手軽で簡単、珍しいイメージ、価格がちょうどいい、を挙げている。一方、否定的イメージとしては価格が高い(45.2) まずい(14.8) 安全ではない(13.6) おしゃれではない(6.6) 健康に悪い(4.6) を挙げ、そのほかとしてはここには食べられる場所が見つからない、どこでも手に入るものではない、入手可能かどうかわからない、手に入りにくい、不衛生、衛生基準に慣れていない人たちが扱っている事、不衛生な場所がある、魚は健康的ではないと言われている、傷んでいる、商品は簡単に痛む、バラエティが少ない、箸を使って食べられない、美的感覚が合わない、たまに場所が汚い、何を食べているのか分かりにくい、匂い、生、生の料理、説明が足りない、商品説明が足りないなどが挙げられている。このアンケート調査は良いイメージ、悪いイメージの上位5位に関しては選択肢回答であり、その他のイメージに関しては自由回答であったと思われるが、おそらく、日本食品と日本料理とが同時に設問されており、回答には料理に関するイメージと食品に関するイメージが出現しているように思われる。こうした点を勘案しつつ、結果をみると、日本料理に関しては「健康的」「おいしい」「おしゃれ」「高級感」「新鮮」「繊細さ」などの肯定的イメージと「高い」「まずい」「安全ではない」「不衛生」「箸を使って食べられない」「生、生の料理」などの否定的イメージが持たれていることが看取される。これらのイメージは単語や語彙の選択において違いはみられるものの、ここでの日本料理のイメージと大変似通ったものではないかと思われる。

また、JETRO調査では日本料理が好きな理由を選択肢回答と自由回答方式によって設問しているが、その結果は①健康に配慮(74.7)、味の良さ(69.6)、その国が好き(32.9)、洗練・高級感(32.69)、経済的にリーズナブル(22.2)、身近にある、美容に配慮、流行している、安全性が高いから、)

¹⁹ 筆者はサンパウロ市における日本料理受容に関する考察を拙稿(1998a)の中で行っているので参照いただきたい。この論考の中で筆者は日本料理受容の社会学的人類学的ファクターとして(1)健康への懸念・ライト感覚(2)「健康食としての日本料理」概念の米国よりの到来=健康食運動の流行(3)日本人・日系人との社会関係の緊密化=ビジネス・親族・同僚・友人関係など(4)食材の安定的供給=日本企業によるマグロなどの寿司ネタの水揚げ・チリ産サーモン・カニカマ等の安定的輸入、日系農家による水稻米・野菜などの生産、日系地場産業・進出企業による調味料等の製造・供給(味噌・醤油等)(5)寿司職人の創意工夫(6)「新しいモノ」好きの都市新中産階級の拡大(6)「スシ」という料理文化システム自体の特質を挙げ、それぞれに関して解釈を行っ

た。本稿はこの論考の続編ともいえるべき位置にある。

²⁰ JETRO調査(2009)によると、サンパウロ市民の好む日本料理はスシ(78%)、サシミ(65%)、ヤキソバ(62%)、手巻き(46%)、天ぷら(41%)、サーモンスキン(37%)、ホット・フィラデルフィア(29%)、カリフォルニア巻き(27%)、すき焼き(24%)、餃子(21%)、酢の物(14%)であったという。()内は選択肢にあった日本料理を選択した回答者の比率。

²¹ 前山隆は戦後、ブラジルに永住を決意し、都市での成功を目指した日系人の生活戦術に関して「黒い兄と白い弟」という有名な仮説を提示しているが、公務員と調理助手という二つのグループの日本人像は公務員が「白い弟」、調理助手の場合がちょうど「黒い兄」という日系二世という同世代内の二つの人間像をまさに捉えていて興味深い。「日系人の都市社会での社会経済的上昇戦術は二世という同一世代で、経済的成功と社会的威信を同時に獲得することを目指したもので、より年長の兄弟姉妹は親とともに洗濯屋やフェイランテやキタンダといった小資本でしかも言葉の障壁も低く家族労働力を投入してできる自営業に携わり汗水ながして経済的安定や成功をめざしながら、より年少の弟妹たちを社会的威信のある職業に就かせるために大学などへ通わせ高学歴を取得させるというものであった。この戦術はうまく機能し、弟妹達を専門・技術職やホワイトカラー職種に就かせ、社会的威信を獲得させたのである。

前山隆(2001)『異文化接触とアイデンティティー—ブラジル社会と日系人』お茶の水書房、

²² おそらく、調理助手が日本料理を食べ始めるとすれば、「焼きそば」やスシ・サシミではなく、より抵抗の少ない、彼等の料理イメージに類似した日本料理(例えば鉄板焼きやてんぷらなど)からであろうし、その条件は日本料理の大衆化の進行の中で出現してきており、彼等もまた彼等なりの日本料理受容を開始している可能性は高いのである。

引用文献リスト

アンドウゼンパチ(1964)「移民と郷愁—ガルボン・ブエノ街を礼賛する」サンパウロ日本文化協会編『コロニア』44号、13—14頁

石毛直道他編著(1985)『ロスアンジェルスのレストラン』ドメス出版

コジロー出版社編(2014)『楽々サンパウロ』サンパウロ、

サンパウロ人文科学研究所編(1989)『ブラジル日系人口調査報告書—1988・1989—』サンパウロ、Mimeo.

JETRO編(2009)『平成21年度ブラジルにおける日本食品市場調査』

JETRO編(2014)『日本食品に対する海外消費者アンケート調査』

ブラジル日系人実態調査委員会編(1964)『ブラジルの日本人移民 上下』東京、東京大学出版会、

前山隆(2001)『異文化接触とアイデンティティー—ブラジル社会と日系人』お茶の水書房、森幸一

1995年「ブラジルにおける日本文化の影響—食文化を通してみた日伯交流史序論」『日本ブラジル交流史—日伯関係100年の回顧と展望』日本ブラジル中央協会 377—419頁

1998(a)「非日系ブラジル人の日本食受容に関する一考察」『イベロアメリカ研究』39、上智大学イベロアメリカ研究所、85—106頁

1998(b)「〈食〉をめぐる移民史(1)—戦前のコロノ・植民地時代」『人文研』No.2.サンパウロ人文科学研究所、48—70頁

- 1999 (a) 「〈食〉をめぐる移民史(2) -戦前・戦後の都市における食生活-」『人文研』No.3. 64-102頁
- 1999 (b) 「サンパウロ市の日本料理店と日本料理」『人文研』No.4、2-42頁
- 2005 「ブラジルに〈旅〉した日本の麺類たち」『食の文化誌Vesta』No.59, 味の素食の文化センター、30-35頁
- 2008 「戦前期におけるブラジル日系人の食生活」『世界の食文化-中南米-』農山漁村協会
- 2009a 「ブラジル日系人の正月とナタール」『食の文化誌Vesta』No.59, 味の素食の文化センター、18-23頁
- 2009b 「ブラジル日本人移民・日系人の食生活と日系食文化の歴史-サンパウロ市(州)を中心として」『ブラジル日本移民百年史 生活と文化編(1)』(第3巻) 486-611頁
- 2013 「商工活動の黎明期」(16-22頁) 「戦前の食品関連産業」(74-95頁) 「戦後の食品関連産業」(139-161頁) 『ブラジル日本移民百年史 産業編』(第2巻)
- Araujo, O.E.de(1940)Enquistamentos étnicos ,*Revista de Arquivo Municipal de São Paulo, No.LXV.*
- Araujo,O.E.de.(1940)Latinos e Não -Latinos no Municipio de São Paulo,*Revista de Arquivo municipal de São Paulo, No.LXV.*
- Ed. Abril(2014) *Veja Comer & Beber*, São Paulo.
- Ed. Abril(2014) *Guia Qutro Rodas 2015 Edição Especial 50 Anos.* São Paulo
- Guia Qutro Rodasの1978、1981、1984、1987、1991、1996年版。

The position, image, and form of acceptance of Japanese dishes (restaurants) in São Paulo

Koichi Mori (University of São Paulo)

The author overviews how Japanese dishes are accepted by non-Japanese citizens in Sao Paulo. In order to address the theme, the author examined the start and growth of Japanese dishes (restaurants) in Sao Paulo, and used restaurant guides to confirm the position of Japanese dishes (restaurants) relative to other ethnic foods. Based on the survey, the author clarified the image of Japanese dishes, and examined the symbolic relationship between Japanese foods and Brazilian and other ethnic foods. Last of all, the dining out behavior of citizens mainly at Japanese restaurants reflects a certain characteristic acceptance of Japanese dishes.

Keywords : São Paulo, Japanese dish (restaurants), image, acceptance, restaurant guides, dining out behavior

〈研究ノート〉

ブラジルからの移住第2世代とバイリンガル絵本プロジェクト

— 浜松市における静岡文化芸術大学の試み —

池上重弘（静岡文化芸術大学・教授）

上田ナンシー直美（静岡文化芸術大学・准研究員）

〈目次〉

はじめに

1. 静岡文化芸術大学とブラジル人学生
2. ブラジル人家庭へのバイリンガル絵本配布
3. 家庭訪問ヒアリングの目的と方法
4. ヒアリング調査の結果

むすびにかえて

キーワード：浜松市のブラジル人住民、日本の教育システム、移住第2世代、教育達成、バイリンガル絵本

はじめに

2014年6月末現在の法務省統計によれば、在留外国人総数は208万人を超え、リーマン・ショックに端を発する深刻な経済危機等の影響で203万人台まで落ち込んだ2012年末以降、再び微増傾向に転じたことがうかがえる¹。その一方、ブラジル人については2008年末の約31万4千人をピークに急激な減少が続き、2014年6月末には約17万8千人（最盛期の6割弱）にまで落ち込んだ。しかし、在留資格についてみると、外国人全体では一般永住者31.9%と特別永住者17.4%を合計した永住者は49.3%とほぼ半数に迫り、原則として更新可能で就労について制限のない定住者7.6%と日本人の配偶者等7.1%、そして永住者の配偶者等1.2%をさらに加えると、65.3%に達している。これらは就労に制限のない安定的な在留資格を有する者であり、欧米であればその生活・就労実態から移民とみなされる人々である。ブラジル人については在留者の規模は急減しているが、日本に留まっている人々の中では一般永住資格取得者62.7%とほぼ3分の2に達し、家族滞在、滞在の長期化といった定住傾向がこれまで以上に顕著に認められる。

1990年6月の改正入管法施行から25年近い年月が経過したにもかかわらず、ブラジル人の子どもたちの教育をめぐる課題が依然として指摘される。たとえばブラジル人の集住する基礎自治体によって2001年に設立された外国人集住都市会議では、初回以降一貫して教育をめぐる課題が主要テーマに位置づけられている（池上2013a）。しかしその一方、ひと世代が入れ替わる25年ほどの時間の流れのなかで、高校進学を果たし、さらに大学にまで進学するブラジル人の子どもたちもその数はわずかながら確実に増加してきている²。

ここ数年、ブラジル人をはじめとするニューカマー外国人の第二世代の若者たちが地域活動の担い手として台頭し、外国人社会と日本社会をつなぐ役割を果たすようになってきている。最近では自治体の多文化共生に関するプランでも、こうした認識のもとに新しいビジョンが立てられるようになってきている。たとえば、「あいち多文化共生推進プラン」（2008年3月策定）を改定し2013

年3月に策定された愛知県の新プランでは、日本で育ち、日本の大学などで教育を受けた外国人青少年が増えており、今後の多文化共生の担い手として期待できること、企業にとっても外国人は特別な存在ではなくつつあること、そして東日本大震災を機に、地域づくりの担い手として外国人の重要性が認識されるようになってきたことが記されている（愛知県 2013）。外務省と国際移住機関（IOM）は2004年より毎年、外国人住民と社会統合をテーマとする国際シンポジウム（2010年からは自治体も共催に加わった国際ワークショップ）を開催しているが、2014年2月に目黒区で開催された国際ワークショップでは「若手外国人とともに歩む－次世代に向けた挑戦－」というサブテーマのもと、地域における外国人の役割がトピックのひとつに挙げられた（外務省 2014）。

本稿では、「移住第2世代³⁾」と呼ぶべきこうした若者たちのうち、浜松市にある公立大学、静岡文化芸術大学に在籍するブラジル人の移住第2世代の学生たちと共に2013年度に実施したバイリンガル絵本プロジェクト（以下、絵本プロジェクト）に焦点をあて、その経緯と意義を述べると共に、そのプロジェクトの一環として行った家庭訪問ヒアリングの調査結果を報告することを目的とする。

1 静岡文化芸術大学とブラジル人学生⁴⁾

2000年度開学の静岡文化芸術大学は浜松市の中心部に位置する静岡県立の大学である⁵⁾。文化政策学部（定員200名）とデザイン学部（定員100名）の2学部からなり、1学年の定員は両学部合わせて300名と小規模である。開学間もない頃から、文化政策学部の国際文化学科には、毎年1名程度、フィリピン籍やベトナム籍の学生が入学していた。しかし、日本で育ったブラジル人学生がコンスタントに入学してくるようになったのはここ数年のことである。ブラジル人の最初の入学者は2006年度に国際文化学科（定員100名）に入学した学生だった。1年において2008年度にはデザイン学部にも2名のブラジル人学生が入学した。2008年はブラジル移民100周年の年で、本学ではこの3名が中心となり「ブラジル人大学生と高校生との座談会」を開催した⁶⁾。続く2年はブラジル人の入学者はなかったが、2011年度以降は毎年、国際文化学科に複数のブラジル人学生が入学している。2011年度は2名、2012年度は4名、2013年度は4名、そして2014年度は3名（この他にコロンビア人学生が1名）である⁷⁾。

静岡文化芸術大学の立地する浜松市は、日本最多のブラジル人が生活し、行政や教育機関、さらに市民団体等による多文化共生の取り組みが盛んな都市として広く知られているが、外国人児童生徒の学習支援に携わる関係者が継続的に集う機会はほとんどなく、団体間の連携や学校と団体との間の連携が課題とされていた。そこで静岡文化芸術大学は、地元の公立大学としての地域貢献活動の一環として、外国人児童生徒の教育環境改善に資する研究を進めるため、主として浜松市内で支援活動を展開する市民団体の関係者、学校教諭、支援員（市教委に雇用される外国人スタッフ等）らが参集できる場として、多文化子ども教育フォーラムを立ち上げた⁸⁾。2012年6月の第1回には約100名の関係者が集まり、2012年度中は計4回のフォーラムが開催された。2012年度中のフォーラムでは市や市教委が教育をめぐる取り組みを紹介すると共に、市民団体も支援状況の分析に基づく望ましい支援体制のモデルを提示し、グループ討論を重ねた結果、2013年2月の第4回フォーラムでは「浜松市・浜松市教委への提言」を採択した。

2013年6月の第5回フォーラムは「教育支援策をめぐって当事者学生が物申す」と題して、本学に在籍する外国人学生たち（ブラジル人学生8名、中国人学生1名）が日本で義務教育を受けた経験を踏まえ、教育支援策のあり方について提言し、その内容をめぐって参加者と討論する機会となった。とくに自身の家庭を振り返り、親のサポートが決定的に重要なので親に教育の大切さを伝える

機会を設けてほしいとした提言項目は、説得力を持って参加者の胸に響いた⁹⁾。学生たちのこの思いを保護者に伝えるために考え出されたのが、ブラジル人学生たちとブラジル人小学生の保護者たちをつなぐ絵本プロジェクトである。これは浜松市内の小学校への絵本配布と、希望家庭への家庭訪問によるヒアリングの二段階からなるプロジェクトであった。以下にその詳細を述べてゆこう。

2 ブラジル人家庭へのバイリンガル絵本配布

絵本プロジェクトのツールとなったのは、本学デザイン学部を2012年3月に卒業したブラジル人が卒業研究で制作したブラジル人児童向けバイリンガル絵本（学校生活案内冊子『浜松における日本の学校』）である（写真1）。この絵本は、公立学校とブラジル人学校を行き来した自身の体験をベースにしつつ、市内の小学校や教育委員会での丹念な調査に基づいて作られた日本語とポルトガル語の対訳絵本で、ユニバーサル絵本という観点からも高い評価を得ており¹⁰⁾、実際にこの絵本を手にした浜松市教育長から「ぜひ現場で使ってほしい」とのコメントを得た。

ブラジル人児童の保護者の中には、日本で教育を受けた者も少しずつ増えてきているが、保護者の多くはブラジルで教育を受けており、日本の教育制度や学校生活について十分な知識を持ち合わせていない。たとえば、給食や遠足、家庭訪問について、ブラジル人保護者は自分自身の経験に基づいた具体的なイメージを有していないのである。学校の先生方との間には言葉の壁もあるため、教育委員会や学校では、翻訳資料や通訳付き面談等を通じてきめ細かい情報提供に務めているが、保護者向けの情報ばかりで、児童自身が日本の公立学校に前向きな気持ちを持つような資料はこれまで全く存在しなかった。

バイリンガル絵本『浜松における日本の学校』はこうした欠落を埋め合わせる資料として制作され、

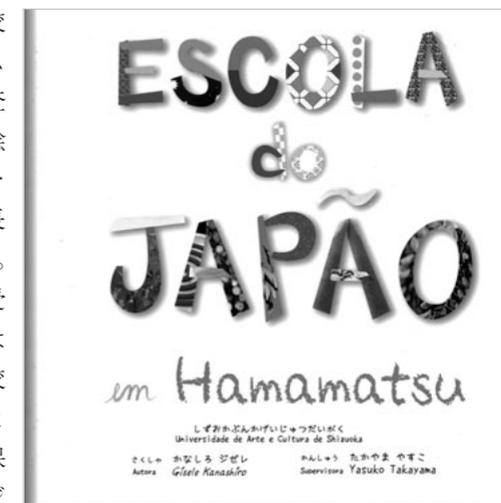


写真1 バイリンガル絵本の表紙

レオ、エリザ、マルコスという3名の登場人物が舞台回しとなって、浜松市の小学校での生活、持ち物、習慣等について説明している。23ページにわたって掲載されている項目は、①学校で使う物と学校の日、②学校で使う教材や持ち物、③登校、④学校に着いたら、⑤給食、⑥昼休みと掃除、⑦放課後、⑧お休みするとき、⑨学校行事、⑩面談や訪問、⑪最後に、となっている¹¹⁾。例えば給食の場面を取り上げると、やわらかいタッチの絵と淡い色使いで給食当番の仕様の様子が描かれ、ポルトガル語と日本語の対訳で短い説明文が加えられている（写真2）。また、白衣やマスクなどのイラストにはひらがなでの表記とその読みのアルファベット、そしてポルトガル語訳が付されている。保護者に学校に必要な持ち物を



写真2 バイリンガル絵本の一部

理解してもらおうと同時に、子どもたち自身にとっても日本の小学校で学ぶことが楽しみになるように、との配慮がなされている。

学内の特別研究¹²でこの絵本を1,000部印刷し、浜松市教育委員会の協力のもと、2013年9月に市内の小学校全校に1部ずつ送付すると共に、ブラジル人児童の多い19校ではブラジル人の実家庭に1部ずつ届けた。また、10月には、市教委が開催した入学ガイダンスでも配布され、学校経由の配布と合わせて約420部がブラジル人家庭に届けられた。

3 家庭訪問ヒアリングの目的と方法

(1) 目的

2008年末のピーク時以降、ブラジル人の在留数は13万人を超える減少となったが、日本に残ったブラジル人には定住傾向が強く認められ、家族滞在者の中には子どもが日本の高校や大学に進学することを望む家庭も増えてきている。しかし実際に大学にまで進学したブラジル人の若者たちの声を直接聞く機会はほとんどない。また、ブラジル人保護者はブラジルで教育を受けた人が多いため、日本の教育制度、とくに高校進学や大学進学について十分な情報や知識を持ち合わせていない。

絵本プロジェクトでは、単にバイリンガル絵本をブラジル人家庭に配布することを最終的な目的にせず、その絵本を媒介として、本学のブラジル人学生が2人1組になって家庭を訪問し、質問紙を用いたポルトガル語でのヒアリング調査を行い、子どもの教育に関する保護者の支援ニーズを探ることを研究上の目的とした。

しかしこの家庭訪問ヒアリングには、さらに3点、付随的ながら重要な実践上の目的が存在した。第一の目的は、本学のブラジル人学生が家庭を訪問することで、ブラジル人保護者は日本の学校に通ったブラジル人の子どもたちが実際にどのように教育達成できるかを直接理解できるという点である。第二の目的は、児童にとっても、自分の将来を思い描く上でのロールモデルとなる大学生との直接的な出会いが、学びの動機を高めることにつながる点である。そして第三の目的は、ブラジル人学生たちにとっても、自分の持つバックグラウンドが社会的に活用できることを実感する機会となり、エンパワーメントの契機となる点である。

(2) 方法

前述の通り、市内でブラジル人児童が多く在籍している小学校19校では、担任を通してブラジル人家庭に絵本を配布したが、その際ブラジル人保護者向けにヒアリング調査の趣旨を説明した調査協力依頼状を同封して、ブラジル人学生による家庭訪問ヒアリング受け入れの可否について尋ねた。受け入れの意向を持った保護者は自分の連絡先を返信用紙に記入して学校に届けた。学校側はそれらの返信用紙をとりまとめて大学に送付した。また、2013年10月には翌年度に小学校に上がる子どもたちを対象とした入学ガイダンスで、出席した保護者16名にバイリンガル絵本と調査協力依頼状を配布し、その場で5名から協力を得た。その結果、全部で43世帯のブラジル人家庭から協力できるとの意向を確認することができた。

しかし、実際に電話でアポイントメントを取る際に「仕事が忙しい」という理由で調査協力を断わった家庭やなかなか電話が繋がらない家庭もあった。また、2013年11月中旬から12月中旬の1ヶ月間という限られた期間で日程調整を図った結果、訪問する学生と訪問先のスケジュール調整が困難だった場合もあり、実際に学生たちが訪問できたのは協力者の約半数の22世帯だった。その中には両親が揃って質問に回答してくれた場合もあるため、回答者数は33名となっている。

家庭訪問では保護者に対して、家族形態、ブラジルでの生活、来日歴と日本での生活、仕事の状況、子どもとの関わり方、バイリンガル絵本の評価、子どもの進路についての考え等について質問した。とくに子どもの進路に関しては、子どもの進学への期待、進学をめぐる課題、日本の学校に関する不明点について質問した。また、保護者側からのブラジル人学生に対する質問には可能な限り回答した。

ヒアリング調査実施に際しては、訪問の約束の取れたブラジル人保護者宅を本学のブラジル人学生が2人1組となって訪問し、ポルトガル語でヒアリングを行った。1名は主としてポルトガル語で書かれた質問紙を保護者に提示しながら質問を発し、もう1名は回答を記録するように役割を分担した。ヒアリング結果及び訪問時の観察結果については、日本語での報告書提出を求めた。

4 ヒアリング調査の結果

今回の調査の回答者は、少なくとも日本の大学に通うブラジル人学生の訪問調査に関心を示した人たちであり、平均的なブラジル人家庭より教育に対して高い関心を抱いている層に偏っている可能性がある。しかし逆にみれば、この調査は子どもの進学、とくに大学進学に強い期待を寄せている保護者はどのような属性の人々であるかを明らかにしているとも言える。また、そうした保護者が何を課題と感じ、どのような支援を求めているかも浮き彫りにしている。以下では33名の回答者のデータを紹介する。ヒアリング時にはそれぞれの設問に対して、特定の選択肢は提示せずに自由に回答してもらった。ヒアリング後に調査者側で一元的に回答内容のコード化を図り、いくつかの選択肢に落とし込んでいった。とくに言及しない限り、選択肢の比率は回答総数33名を100%として四捨五入した数字である。

(1) 基本属性

回答者の性別は女性が64%、男性が36%で、女性がほぼ3分の2を占める。子どもの教育に関する調査だったため、母親が主に回答した結果を反映している。

最終学歴はいずれもブラジルでのもので、高校卒業が37%でもっとも多く、大学中退15%、高校中退15%、中学中退12%、中学卒業9%、大学卒業6%と続く。大学を卒業ないし中退した人（つまり大学に進学したことがある人）は21%で全体の5名に1名に留まっている。

(2) 来日前の状況

ブラジルでの出身地はサンパウロ州が61%、パラナ州が12%、リオデジャネイロ州が9%で、あとはアマゾン州、パイア州、パラ州、ミナスジェライス州、ペルー国、ボリビア国がそれぞれ3%ずつだった。

ブラジルでの仕事は事務系が48%、職歴なしが21%で目立っていた。営業職、車関係、手芸などがそれぞれ6%、工場、デザイン系、看護師、保育士、家政婦がそれぞれ3%だった。日本で就業しているような工場での労働に従事していた者はほとんどいないことがわかる。

来日前の日本語学習経験について尋ねたところ、経験なしが70%、経験ありが30%だった。また来日前の日本語能力については、まったくゼロが70%でもっとも多く、家庭内の日常会話のみ、簡単なあいさつのみがそれぞれ9%、日常会話とひらがなの読み書き程度という回答が12%だった。必ずしも日本語能力が高かったわけではないことがうかがえる。日系人社会との関係については、「まったくつきあいがなかった」が52%で過半を占め、「たまにつきあっていた」が27%、「あまり

つきあいがなかった」が12%、「よくつきあったいた」が9%となっている。今回の回答者には、教育熱心な日系人社会とは距離のある人が多かった。

(3) 日本での通算滞在年数と就業状況

日本での通算滞在年数は20年以上が21%、16年間から19年間が40%、12年間から15年間が33%となっており、12年以上の滞在者が94%を占める。日本で家族と共に長い期間にわたって生活してきたことがわかる。しかし、初来日年は1991年と1996年がそれぞれ15%、1998年が13%で3つの山があった。また、帰国経験については、「ずっと日本にいる」が15%で決して多数派ではない。帰国経験を持つ者は一度が27%、二度が31%、三度が12%、四度以上が12%で、一度ないし二度の帰国経験を持つ者がほぼ6割に達している。帰国時期までは確認しなかったため、子どもの学齢期にかかる国境移動かどうかは不明だが、子どもの教育に何らかの影響があった可能性が高い。

日本でしてきた仕事（必ずしも来日時の初職とは限定していない）としては、工場労働が97%で圧倒多数を占めるが、今回の回答者の中には学校の支援員や行政機関の仕事と回答した者がそれぞれ6%あった。また、内職、アルバイトとの回答もそれぞれ6%だった。飲食店、清掃業務、送迎業務、現場作業、派遣会社がそれぞれ3%ずつあった。

現在の職業も工場労働が圧倒的に多く73%だが、学校勤務、市役所勤務、総領事館勤務などホワイトカラーの職種で働く者がそれぞれ3%ずつ含まれている点に注目したい。仕事の時間帯では、昼間の勤務が64%でもっとも多く、二交代制が15%、夜勤、パート、決まっていないとの回答はそれぞれ6%だった。

(4) 日本人との接点

仕事以外の日本人の知り合いの有無について尋ねたところ、ありが55%で、なしが45%だった。滞在期間が長期化しているにもかかわらず、仕事以外の場面で日本人から情報を得るような機会は必ずしも多くないことがうかがえる。

日本の社会に関する情報源としては、自治会の回覧板が64%、ブラジル人の知人が59%、市の広報が46%、フェイスブックが38%、日本のテレビが32%となっており、以下は子どもの学校、日本人の知人、インターネットが27%で続く。自治会の回覧板から日々の生活に関する情報を得ている人が少なくないことがわかる。その一方、ブラジル人の知人やフェイスブックなどのように主としてポルトガル語で交わされる情報に頼ることも多い。教育に関する情報などは正確さを欠く形で流通している可能性も否定できないだろう。

(5) 子どもとの関係（回答総数22）

家族構成については、22世帯中で「父、母、子ども2名」が37%、「父、母、子ども3名」が23%、「父、母、子ども1名」が14%、「父、母、子ども4名」が5%となっており、両親と子どもという構成の家族が79%を占める。一方、母ないし父の一人親と子どもという構成の家族が合計で17%あり、さらに肉親ではない保護者と子どもという家族が4%あった。

次に子どもの日本語力とポルトガル語力について尋ねた。日本語力は「問題ない」が74%と多く、「会話は問題ない」が18%、「読み書きに問題ある」と「少しだけ理解できる」がそれぞれ4%だった。あくまでも保護者の主観的評価だが、日本語力に問題ないと思われる子どもが全体の4分の3を占めていた。一方、ポルトガル語力については「問題ない」が14%、「日本語の方が得意」が32%、「読み書きに問題がある」と「少しだけ理解できる」がそれぞれ27%だった。つまり、今回のヒアリン

グ対象の世帯においては子どもの日本語力よりポルトガル語力の方に保護者は大きな問題を感じていることがうかがえる。しかしながら、子どもと話す言語については、ポルトガル語のみが69%が多数を占め、日本語のみは19%、主にポルトガル語と両言語が4%だった。ペルー人家庭ではスペイン語で話すとの回答であった。ここから、子どもと保護者の間で言語の習熟度に差があり、親子間のコミュニケーションが十分に機能していないか、今後機能しにくい状況が生じる可能性が指摘される。

子どもと接する時間については、「平日の夜と週末」が59%で多く、「平日の朝と夜と週末」が23%、「主に週末」が14%となっていた。平日も時間を作って子どもと接するよう心がけている様子が見える。

また、学校行事への参加についても「全て欠かさずに行く」との回答が55%、「ほとんど行く」が37%、「配偶者と交替で行く」が4%で、ほとんど全ての家庭が学校行事への参加を重視していることがわかった。ブラジル人大学生の家庭訪問を受け入れた家庭は、学校に対して積極的な関わりを持つようとしている様子が伝わってくる。

さらに直接的な子どもとの関わりについて尋ねてみた。絵本の読み聞かせをするか（したか）どうかについては、はいが68%、いいえが32%となっている。子どもの宿題を見てあげるかどうかについては、「可能な範囲で見てあげる」が32%でもっとも多く、「全部見てあげる」と「算数や理科は教えられない」がそれぞれ18%で、これらを合わせると、68%が何らかの形で宿題を見てあげていることがわかる。

(6) バイリンガル絵本に対する評価（回答総数22、複数回答）

今回の家庭訪問ヒアリング実現の媒介となったバイリンガル絵本については良い点として、「内容が良い」が73%、「入学時に役立つ」が46%、「デザインがかわいい」が23%だった。一方、改善すべき点としては、「親への情報が不足」が38%、「教科書の説明」が18%だった。バイリンガル絵本は初めて小学校に入る子どもとその保護者を主たる対象としているため、「学年ごとの違いを説明してほしい」、「文化の違いを説明してほしい」といった声もあった。

(7) 子どもの進学への期待と課題（回答総数22、複数回答）

子どもの進学への期待としてもっとも多かったのは「国を問わず大学に進学」で46%を占めた。「日本の大学に進学」は28%だが、「ブラジルの大学に進学」は4%となっており、ブラジルの大学に限定して進学を期待している保護者は少ないことがわかる。また、「子どもがやりたいこと」という回答が14%あり、必ずしも大学進学だけを最重要視しているとは限らないことがうかがえる。

進学に関わる課題としては、「経済面」が55%で抜きんでて多く、「子どもの学力」が23%とそれに続く。さらに「情報がない」、「親が日本語がわからない」、「日本の教育制度がわからない」がそれぞれ18%となっていた。これら3点はいずれも教育情報の不足を意味している。また、「帰国時期が未定」との回答も14%あった。自分が将来生きてゆく国が日本なのか母国なのか定まらず心が揺れる子どもの姿が浮かぶ。

日本の学校に関する不明点については、学校生活・ルールとPTA活動がそれぞれ27%で多かった。次いでいじめの問題が18%だった。

(8) 主なポイント

今回のヒアリング調査結果から見えてきたこととして、進学に関する主なポイントをまとめたい。

自分自身が大学進学を果たした保護者は約2割だが、子どもの大学進学を希望している保護者は約8割となっている。つまり、子どもには親のように工場で働いてほしくないという強い願いが認められた。また、保護者の立場から見た進学に関する課題として次の諸点が挙げられた。

- ・宿題（特に算数、理科、国語）をあまり見てあげられないため、子どもの学力が心配。
- ・学校行事に参加しているが、PTA活動や親としてやるべきことがわからない。
- ・経済面が心配。通学支援や奨学金制度のことを学生たちからはじめて聞いた。
- ・日本語がわからないため、進学に必要な情報が不足している。
- ・ポルトガル語に翻訳された進学に関する情報も届いていない。

むすびにかえて

2014年1月に浜松市で開催された第6回多文化子ども教育フォーラム「ポルトガル語での討論Ⅳ～日本の大学に進学したブラジル人たちの経験から学ぼう～」は、家庭訪問ヒアリング調査の結果をポルトガル語で報告し、ブラジル人が大半を占める50名ほどの参加者とポルトガル語で討論する機会となった。家庭訪問で子どもの教育に関する悩みを聞き取ってきたブラジル人学生たちは、調査結果を紹介する中で、とくにいじめに関する問題と進学に関わる費用の問題を強調した（写真3）。両者ともヒアリング項目には設定されていなかったが、ヒアリングが進むうちに、ブラジル人大学生を前に保護者の側から話を切り出してくることが多かったという。なかでも、同じブラジル人からいじめを受けているという相談も少なからずあり、ブラジル人学生たちは「自分たちが小学生の頃はブラジル人どうしのいじめはなかった」と述べ、同胞で支え合うという意識の希薄化に対する強い危機意識を表明していた。また、学費確保の方法として奨学金の制度について詳細な質問を受ける場合が多く、保護者の関心のひとつが進学をめぐる経済面の課題であることを痛感したと強調していた。



写真3 ポルトガル語での討論会の様子

ブラジル人卒業生が制作したバイリンガル絵本は、弟・妹たちの世代に向けられたメッセージである。それを手に現役のブラジル人学生たちがブラジル人児童の家庭を訪問するこのプロジェクトは、学生による単なるヒアリング調査という枠組みを越え、ロールモデルのデリバリーとも表現できよう。ブラジル人集住都市・浜松の公立大学で学ぶ移住第2世代のブラジル人学生たちが、同じまちの小学校に通うブラジル人児童宅を家庭訪問する研究プロジェクトは全国でも類例のない取り組みであり、保護者の相談に乗り情報提供をするという以上に、ロールモデルと直接出会うことで子どもたちの学習意欲をかき立てるという意味でモチベーション支援としての大きな意義を持ったと言える。

註

¹ 法務省『在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表』各年版。以下、この段落の統計数値は同資料に拠る。

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html（2014年11月27日閲覧）

- ² 日本におけるブラジル人の教育達成水準の低さは他国籍の外国人と比較しても顕著であり、2000年の国勢調査では留学生ではないブラジル人大学生の存在はほぼ皆無だった（鍛冶 2011）。大学では必ずしも在留外国人の学生の在籍状況を組織的・体系的に把握していないが、静岡県西部地域の大学に対する調査結果からは在留外国人学生が微増している様子がうかがえる（池上 2013b）。
- ³ 移住第2世代とは、親に連れられて外国から来たり、この国で生まれた外国にルーツを持つ若者たちを指す。「移民第2世代」という表現が一般的だが、日本の場合、国家の政策として移民を正式に受け入れる態勢になっていないこと、また定住化が進む外国人当事者も当初はその多くが短期的な滞在を目的として来日したことを踏まえ、制度的・主観的な意味で移民と呼ぶには抵抗があるため、移住第2世代という用語を使っている。
- ⁴ ここでブラジル人学生としているのは、国籍がブラジルであるか日本であるか（あるいは二重国籍か）にかかわらず、ブラジルにルーツを持つ学生を指す。
- ⁵ 2000年4月の開学当初は公設民営の私立大学として学校法人が運営していたが、2010年4月に静岡県設立の公立大学法人に移行した。
- ⁶ 本学に在籍する3名のブラジル人大学生と浜松市内の公立高校に通う8名のブラジル人高校生が日本語でこの国での生活や将来について語り合った座談会の記録は以下のURLからタイトルをクリックして閲覧できる。<http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/report01.html>（2014年11月27日閲覧）なお、この座談会は『日本の中のブラジル、ブラジルの中の日本－写真で見ると100年、過去から未来へ－』と題して本学で開催された写真展の関連企画のひとつとして位置づけられ、座談会の様子をまとめたDVDが展示のひとつとして注目を集めた（鏡田・池上 2009）。
- ⁷ これらの学生たちは留学生ではなく、いずれも日本の高校を卒業した定住外国人学生であり、外国人特別枠ではなく日本人受験生と全く同じ入試に合格して入学している。なお、同様の定住外国人として中国人学生が2013年に1名、2014年度に2名入学している。
- ⁸ 多文化子ども教育フォーラムのサイトから、当日配布資料や関連する報道記事等を閲覧できる。<http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/fice00.html>（2014年11月27日閲覧）
- ⁹ 外国人学生たちがまとめた提言は以下のURLから該当部分をクリックして閲覧できる。<http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/fice05.html>
- ¹⁰ 絵本学会第16回大会のシンポジウム「共に生きる 絵本にできること」のパネリストとして、「日系ブラジル人移住第2世代が托す"パトン"としてのUD絵本」のタイトルで報告したところ、会場から大きな反響があった（池上 2013c）。なお、絵本の著者による制作の意図については金城（2013）を参照。
- ¹¹ 実際の絵本での日本語の表記はすべてひらがなあるいはカタカナであり、漢字は使用されていない。
- ¹² 2013年度 静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター長特別研究「多文化環境に生きる子どもの教育達成支援策をめぐる研究」（研究代表：池上重弘）。

引用文献リスト

愛知県 2013 『あいち多文化共生推進プラン2013-2017-ともに生き、ともに輝き、ともに創る-』名古屋：愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室。

池上重弘 2013a 「外国人集住都市会議」吉原和男編集代表『人の移動事典－日本からアジアへ・アジアから日本へ』東京：丸善出版、184－185。

池上重弘 2013b 「定住外国人学生の修学実態調査報告－静岡県西部地域の大学を中心に－」『静岡文化芸術大学研究紀要』14: 97－100。

池上重弘 2013c 「日系ブラジル人移住第2世代が托す"バトン"としてのUD絵本」絵本学会第16回大会シンポジウム「共に生きる 絵本にできること」（発表記録）

<http://www.u-gakugei.ac.jp/~ehon/cn10/016/pg900.html>（2014年11月27日閲覧）

外務省 2014 『平成25年度「外国人の受入れと社会統合のための国際ワークショップ」若手外国人とともに歩む～次世代に向けた挑戦～』東京：外務省領事局外国人課。

鏡田彩乃・池上重弘編 2009 『ブラジル人大学生と高校生との座談会－移民パネル写真展の関連イベントとして－』（2008年度静岡文化芸術大学学長特別研究「日本の中のブラジル、ブラジルの中の日本－写真で見る100年、過去から未来へ－」研究成果報告書）浜松：静岡文化芸術大学

<http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/report01.html>（2014年11月27日閲覧）

鍛冶致 2011 「外国人の子どもたちの進学問題－貧困の連鎖を断ち切るために－」移住連貧困プロジェクト編『日本で暮らす移住者の貧困』東京：移住労働者と連帯する全国ネットワーク、38－46。

金城ジゼレ 2013 「自らの経験を通して製作した導入教育絵本"ESCOLA do JAPAO em Hamamatsu"の可能性」移民政策学会2013年度冬季大会シンポジウム『日系ブラジル人移住第2世代の未来を考える』（報告レジュメ）

http://iminseisaku.org/top/conference/131214_kanashiro.pdf（2014年11月27日閲覧）

引用WEB情報（以下はすべて2014年11月27日閲覧）

多文化子ども教育フォーラム

<http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/fice00.html>

第5回多文化子ども教育フォーラム～当事者学生が物申す～

http://wwwt.suac.ac.jp/~ikegami/pdf/fice/130621_fice05_students.pdf

法務省『在留外国人統計（旧登録外国人統計）統計表』各年版。

http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html

Second-generation migrants of Brazilian origin and the bilingual illustrated book project : Report on an approach by the Shizuoka University of Art and Culture in Hamamatsu

Shigehiro Ikegami

Nancy Naomi Ueda

(Shizuoka University of Art and Culture)

More than ten Brazilian students who grew up in Japan are currently enrolled at the Shizuoka University of Art and Culture (SUAC) in Hamamatsu city. In 2013, SUAC conducted a project in which bilingual illustrated books written by a former Brazilian student were distributed to elementary schools in the city. This served as a means for current Brazilian students to visit the homes of Brazilian families and find out their educational needs. Feedback was given to the local community through the Forum on Intercultural Children's Education (FICE). This paper reports the details of the project and the results of the home visit survey.

Keywords : Brazilian residents in Hamamatsu, Japanese educational system, second-generation migrants, educational attainment, bilingual illustrated book

〈資料紹介〉

ブラジル東山農場所蔵「酒造工場沿革誌」から見る
ブラジル産〈日本酒〉事始め

赤木妙子（目白大学・教授）

〈目次〉

1. 史料の概要
2. 「酒造工場」略史
 - ① 「酒造工場」設立理由
 - ② 「酒造工場」の設立
 - ③ その後の「酒造工場」
3. 史料翻刻

キーワード：ブラジル、日本酒、東山農場、東麒麟

1. 史料の概要

現在、ブラジル東山農場（FAZENDA MONTE D'ESTE）が所蔵する史料群のなかに、「昭和拾六年三月 一九四一年三月 酒造工場沿革誌 カンピナス農産加工會社」という表紙が付けられた仮綴じの冊子がある。「Industria Agricola Campineira, Limitada.」（カンピーナス農産加工会社）の便箋に黒インクで手書きされた史料で、表紙用箋を含めた88葉からなり、最初の23葉には両面に書き込みがあるが、裏面は後日追加的に書き込まれたものと考えられる。

2葉めおよび3葉めの表面に記載された「目次」には、以下のようにある。

(2葉め)

「酒造工場沿革誌 No 1.
一九四一年三月

於カンピナス農産加工會社

第一 概説

1. 緒言
2. 現況
3. カンピナス農産加工會社ノ設立

第二 酒造工場ノ建設

1. 酒造工場設立場所ノ決定
2. 主工場建設
3. 諸設備
4. 倉庫
5. 機械器具類
6. 第一期増産計畫
7. 第二期増産計畫

8. 其後ニ於ケル設備
9. 酒造工場現在ニ於ケル設備

第三 酒造工場ノ運営

1. 工場配員關係
2. 諸事務販賣關係
3. 各年度ニ於ケル營業成績
4. 製造方法ノ變遷

第四 在伯邦人ノ清酒消費狀況

1. 年度別ニ見タル消費狀況
2. 各地方別ニ見タル消費狀況
3. 期節別ニ見タル消費狀況
4. 清酒ノ将来性

—以上—

(3葉め)

「 附 No.2.

1. 消費税問題ニ就テ
2. Vinho de arroz ナル名称問題ニ付テ

— o —

目次内に「於カンピナス農産加工會社」とあり、表紙や用箋にもあったように、本史料はブラジル連邦共和国サンパウロ州カンピーナス市に設立されていたカンピーナス農産加工会社が運営する「酒造工場」の、設立から現状、そして将来性について報告するレポートであり、太平洋戦争開戦前の1941年3月に日本の本社（東山農事株式会社）への事業報告用にまとめられ送付されたものの控えである。目次の最後にある「附」の1および2にあたる部分の本文最後には「1943年7月19日（西暦）」（88葉め）という後筆書き込みがあり、後日追加された部分もあることがわかる。さらに、仮綴じ後、表紙からはじまる各葉の裏面に、「附録」として「伯國官憲廳ニ呈出スル清酒釀造法」（1葉め裏面～4葉め裏面）や1937～40年の関係書翰（5葉め裏面～23葉め裏面）等、本文内の記載事項に関わる参考史料の写しが書き込まれている。史料の作成者は、「沿革誌」が作成された1941年に「釀造係 傭員」だった「黒岩重顯」と思われる¹⁾。

現在、この「酒造工場沿革誌」を所蔵しているブラジル東山農場は、三菱財閥（岩崎家）が1927年にブラジルで購入し東山農事株式会社の所有とした農場をルーツとし、戦中戦後の紆余曲折を経て現在に至るものである。主要生産品はコーヒーであったが、それだけにとどまらず、実験的かつ多角的な経営を行っていた（柳田 2008：73-74、2009：77-80、2012：4-7）。農場はサンパウロ州カンピーナス市の郊外に位置し、サンパウロ市から日帰り圏内にあることから、観光農場としての側面も持っており、場内の歴史的建造物（奴隷小屋やコロノ住宅）や伝統的コーヒー収穫用具などを展示したMuseu（博物館）を訪問客に公開している。長年放置されていた資史料の整理に2007年から着手し新たに「史料室」を設置しており、該史料は現在、そこに架蔵されている（柳田 2012：35）。

「酒造工場沿革誌」の主題である「酒造工場」は、東山農場敷地内で1934年8月に起工、翌35年3月に竣工したものである。酒精飲料に関するブラジル政府の規制や税法上の問題など、予想されるリスクの回避策として、表面上、東山農場とは別企業である「カンピナス農産加工會社」を設立し、「酒

造工場」の運営にあたるもとのした。しかし、実態としては「（カンピナス農産加工会社は）東山組織内ニ於テハ工業部ニ属シ」（4葉め）ていたし、農産加工会社設立時点の「出資社員」3名のうちの2名が東山農場の幹部であり、東山農場とは「恰モ其ノ關係ハ親子ノ如ク」（4葉め）であったと「沿革誌」にも記述されている。（該史料が東山農場に残されていたことから、経営実態が理解できるであろう。）

戦後は、日本の「東山組織」が解体されたのにもない、実態としても独立したブラジル企業となり、また、東山農場の所有面積の縮小に伴い、物理的にも場内でも隣接地でもなくなっている。1975年に麒麟麦酒が資本参加し、その後は、東山農産加工有限公司としてキリンホールディングスのグループ会社となり、現在に至っている。同社のホームページには、「ブラジルにおけるキリングループの事業基盤として、ブラジルキリン社（旧スキンカリオール社：2012.11に社名変更）及び東山農産社があります」²⁾とある。

その東山農産加工有限公司のホームページ³⁾を見ると、そのトップページに主力商品として載せられているのが、TOZANブランドのShoyu（醤油）、AZUMA KIRIN（東麒麟）という日本酒、KIRIN ICHIBANとして「キリン一番搾り」（ビール）の3銘柄である。「キリン一番搾り」のブラジル現地製造と販売は2014年にはじまったばかりの新規事業であり、東山醤油もその販売は戦後になってからであるが、日本酒の製造販売は戦前からのブラジル日系社会の歴史と密接にかかわるものである。東山農場の酒造工場から生まれた「東麒麟」は、ブラジル初の「商業的醸造」日本酒であり、サンパウロ市の「戦前の料亭文化隆盛の時代に登場、料亭文化を支える」酒であった（森 2010：567-568）。開戦直前にブラジルとアルゼンチンを「一廻り」してから帰朝したチリ移民の千田平一は、1942年に出版された旅行記に以下のように記載している。

[サンパウロで、東棉の] Tさんに招かれて料亭『青柳』の宴に出た。三十二人の女給が席に侍る。リオから来る肴は小味だ。特に牡蠣と蝦がよい。東山農場（三菱）で作る『あずまきりん』も相當に飲める。女給の中には三味を弾くのが四人、『春雨』『黒髪』『秋の夜』なんかを器用に踊る舞妓が一人ゐた。かうした天涯の異域には珍らしい事だ。（千田 1942：88）

千田はこのあと「ブラジル通のT農學士同道で奥地行脚の旅に出」るのだが、パウリスタ線の奥地リンスで、パウルー初代領事でその後リンスでコーヒー園を経営していたT氏⁴⁾の邸宅を訪問し、ここでも「『東麒麟』を傾けて談論風發、時の移るを知らない（千田：96-97）」という体験をしている。なお、千田はブラジルで一般的に飲まれているピング（pinga、サトウキビの蒸留酒）については「氷水と、臭いピングを飲みながら」「ピングなんてものをやたらに飲まされては堪らぬ」（千田：109,118）等、好意的とはいえない表現で記述し、いっぽう、上流日本人から御馳走される日本産の日本酒に対しては、「船長の持参した『天下の多聞』に舌鼓を打つ」等（千田：124,127）と賛辞を惜しまない。当時の日系社会における「東麒麟」の広がりや位置づけが読み取れるだろう。

戦後の1960年代には、「非日系消費者向けに販売すべく、当時の一流デパートマッピングで」着物姿の女性のお酌で「東麒麟」を試飲させる「パフォーマンス・売り込み」（森：567）を行なうなど、非日系社会への市場拡大という先見性を見せはじめる。2000年代に入ると、日本酒をつかったカクテル「サケピリーニャ」⁵⁾の普及がはじまった。現今の世界的和食ブームのなかで日本酒も注目を集めつつあるが、ブラジルではその先駆け的に、在留日本人社会・日系社会内にとどまらない「日本酒」需要への要としてAZUMA KIRINへの注目も高まっているのである。⁶⁾

ブラジルにおける日本酒製造草創期の歴史をまとめた「酒造工場沿革誌」は、編纂史料とはいえ、

その史料の価値と今日的関心にも答えうるトレンド性は高いといえる。ほかにも東山農場には、酒造関係の同時代史料が多数（酒造工場設立以前の、立案段階、試作段階のものから）残されており、また、東山農場史を語る基本史料として整理済みの「農場日誌」にも、当然、酒造工場関係の記述が掲載されている。将来的には、それらを総合的に利用することで、ブラジルにおける「日本酒」製造・普及史を多角的に検証できるものと思われる。

2. 「酒造工場」略史

ここでは、「酒造工場沿革誌」を主史料としながら、その他の東山農場所蔵史料を参照しつつ、「酒造工場」の歩みを簡単に概観してみよう。

①「酒造工場」設立理由

「酒造工場沿革史」では、「3. カンピナス農産加工會社ノ設立」の「イ. 酒造工場設立ノ動機」（5葉め～7葉め）の項で、「酒造工場」の設立理由を以下のように説明している。「数年前ニ於ケル邦人植民地ノ状態ハ真ニ殺風景タリシモノニシテ僅ニ飲酒ニヨリテ日々ノ労苦ヲ忘レツ、過激ノ労働ニ従事シ居タル有様」であり、日本人移住者が日常の憂さを酒で晴らそうとする場合、手にすることができたのは「ブラジル中何レニテモ安價ニ求メ得ラルル火酒即チピンガ」であった。なぜなら「他ノ高級飲料即チ葡萄酒、麦酒ノ如キハ到底経済的ニ其ノ常用ヲ許サ」ないものであり、かりに経済的に余裕があつてワインやビールが買えるとしても、そもそも「日本人一般ノ嗜好トシテ葡萄酒ヲ好マズ麦酒ハ弱キニ過ギ」るから、やはり常飲酒は（度数の高い）ピンガになってしまう。「経済ニ余裕アル人々ハ日本人ニ適シタル酒精飲料ガ求メ得ラル、モノナラバ」求めたいと思うのだが、「日本人ニ適スル酒精飲料」すなわち日本酒（清酒）は「当時全部輸入品ニシテ一本15\$000内外ノ價格」であり、なまかな経済力で手が出せるものではなかったのである。よって、日本人は「ピンガノ害毒ヲ知リツ、モ止ムナクピンガ常用ヲ繼續スルト云フガ如キ状態」になっており、日系社会の指導者たちはこの状況を憂慮していた——「成功ノ鍵ハ健康ニアリトノ観点ヨリ識者間ニハ已ニ斯ノ如キ邦人保健状態ガ憂慮セラル、ニ至リシハ眞ニ当然ナリト云フベシ」——ゆえに、日本人同胞の健全な生活のためにこそ、日本酒をつくるのだと説明されている⁷。

「酒造工場沿革誌」の作成された1941年段階では、カンピナス農産加工会社による日本酒の製造販売はすでに軌道に乗っており、その日本酒をつくるに至った動機、それも道義的部分が強調されて語られていると考えられる。「在伯二十万同胞ヲ脊景トスルニ於テハ酒造業ガ一ノ企業トシテ成立スル可能性アル事明ラカ」と、日系社会が日本人のみに向けた製品の生産販売事業を成立させようとする市場規模になった点にも触れているが、同時に「在伯邦人中ニテ日本ニ於テ清酒醸造ニ経験アル者ハ日本酒ノ醸造ヲ試ミタリシモ日本ト異リ気温高ク且ツ小規模不完全ナル設備ナリシガ故ニ何レモ日本酒トシテ飲ミ得ルモノ、醸造ニ成功セズ」と、気候上の問題からブラジル現地での日本酒製造は難しいと一般に考えられていたことも記載されている。「沿革誌」が、日本の本社（東山農事株式会社）に対する報告書であることは、すでに述べた。よって、この記述の意味は、日本酒製造が気候的、物理的に難しいブラジルの地で、自分たちだけが日本酒製造のノウハウを確立しており、ゆえに「二十万」規模の市場を独占しようとの（本社に対する自社事業の）売り込みである。

すでに柳田2012等で指摘されているように、ブラジル東山農場は、岩崎家の精神的・経済的バックアップを得て、多角かつ実験的な営農形態を実践してきており、日本酒製造に際しても、技術者や機材が日本から導入されている。しかし、「沿革誌」では触れられていないが、東山農場のさま

ざまな営農（実験）のなかで最初に試みられた「酒造」はブラジルの地酒・ピンガの製造であり、1930年10月30日付の「農場日誌」に「ピンガ酵母購入」とあるのが史料上の初見となる。「酒造工場」設立の4年前である。「農場日誌」に日本酒製造に関する記述があらわれるのは、1932年7月になってからで、2日に「実験具掃除日本酒ノ素試作中」、5日には「日本酒醸造準備中」とある。「沿革誌」には、この頃のこととして「東山カンピナス農場ニ於テモ其ノ頃ヨリ已ニ日本酒醸造ニ関シ調査研究ヲ進メ居リシガ偶々1932年山本農場長帰朝ニ際シ本社ニ於テモ本件ニ就キ検討行ハレ歸伯ニ際シ合成日本酒タル“新興國”数本ヲ持参セリ。帰伯後酒造ノ企業調査ヲ爲シ1933年3月30日附ヲ以テ本件ニ関シ御書ヲ提出スルニ至レリ」（7葉め）という記述がある。山本喜譽司の帰伯は、「農場日誌」によれば1932年6月4日であり、「農場日誌」への「日本酒」記事登場のタイミングと矛盾はない。また、日本酒に関する記述が「農場日誌」に散見されるようになるのと軌を一にして、ピンガ製造についての記述は消えていった。1933年3月に本社宛てに日本酒製造に関する伺書を提出する頃までには、ピンガ製造からは撤退し、酒造計画は日本酒に一本化したものと考えられる。

1933年3月30日付の本社宛伺、9月12日付の本社からの返信、12月14日付の本社宛再伺、翌1934年5月17日付の本社からの承認と、本社と東山農場の間の往復内容が「沿革誌」に掲載されている（7葉め）。日本の本社（東山農事株式会社）に送られた原本は、現在、所在不明となっており、その往復の一部なりとも復元することができる「沿革誌」の史的意義をここで再確認しておきたい。

1933年3月30日付伺書では、日本酒製造事業を「ピンダ農場甘蔗園利用ノ一策」（7葉め）とも位置づけている。1927年開設当初の東山農場は、ポンテ・アルタ農場、サン・ジョゼ農場、ボカ・ユーバ農場という3つの農場を一括して居抜きで買い取ったものであった。翌年、中央線でサンパウロからさらに奥地に入った旧藤崎農場（ピンダ農場）を追加購入したので、最初の3農場をルーツとした、本部の置かれた農場をカンピナス農場と呼び、ピンダ農場とあわせての総称が東山農場（モンテデステ農場：Monteは山、Esteは東で「東山」を意識したもの、「東山」は三菱財閥の創始者である岩崎弥太郎の雅号である）となった。カンピナス農場の主要産品はコーヒーだったが、ピンダ農場では日本米や甘蔗（サトウキビ）をつくっていた。当時、ブラジルの気候には日本の清酒醸造方法はなじまないと考えられており、「合成日本酒」の製造が計画されたわけだが、ピンダ農場の産品である米と甘蔗（合成酒には糖類が添加される）の有効利用策としての日本酒製造でもあったわけである。

②「酒造工場」の設立

上述したように1934年5月17日付でブラジルでの「酒造」事業を認可した本社は、大岩源吾を酒造技師としてブラジルに派遣してきた。大岩は「年産100-400石程度ノ生産能力ヲ有スル酒造工場ニ必要ナル一切ノ酒造機械器具ヲ購入シ1934年6月19日出帆ノリオ・デ・ジヤネイロ丸ニ積込ムト全時ニ自ラモ本船ニ依リブラジルニ出發」(8葉め)している。本社では、当時実用化されつつあった4種類の合成酒醸造法を検討した結果、「醸造試験所黒野式電化法」の採用を決定し、該方法での清酒製造をすでに実現していた「國興酒造株式會社大岩源吾氏」に白羽の矢を立てたのである。前々年、山本場長が見本として日本から持ち帰った合成酒「新興國」こそが、まさに電化法によってつくられた「興國酒造株式會社」⁸の酒であった。

大岩技師は8月2日の農場到着以降、場長の山本や次席の宮地勝彦らとともに精力的に酒造工場設立準備作業を行なっていることが、「農場日誌」から読み取れる。「沿革誌」には、その作業の具体的な内容（工場設置場所の決定過程、建設工事の進捗状況、設備内容等）が詳細に記載されている。そして、同年11月15日に「酒造工場」の運営主体となる「カンピナス農産加工會社」が設立され、「沿

革誌」には、その「定款」の訳文（9葉め～11葉め）が記載されている。

「酒造工場」で醸造された日本酒「東麒麟」は翌「1935年8月3日聖市ニ於テ發賣披露ノ宴ヲ催シ販賣ヲ開始」（32葉め、37葉め）した⁹。翌年3月1日には、価格を抑えた「一般向廉價ナル清酒東鳳」（37葉め）（あずまおおとり）も市場に投入されている。

③その後の「酒造工場」

「年産100-400石程度」の合成酒工場として計画がスタートしたため、当初の工場設備は（天然酒用の設備に比較して）小規模なものであった。その後、天然酒への転換と増産を志向して、冷蔵庫等の大型機器の設置を本社に具申し（15葉め）許可を得ている。ブラジルで購入した冷蔵設備は、「東麒麟」を一般にお披露目する直前の1935年7月には稼働をはじめている。

1936年には「第一期増産計画（壺千石）」（18葉め）を立て、本社の承認を得て、建物・設備の増築を実施した。さらに翌年には「第二期増産計画（貳千石）」（20葉め）として、新工場の設立を具申するが、これは本社から却下され、代案として、既工場はそのまま運用しながら別工場を建設する案が出された。結局、折衷案として、従来の工場を拡張することとなった。

1939年3月のブラジル大蔵省より各州税務官憲への通牒により、混成酒（合成酒）への消費税課税が厳密化された。農産加工会社では「当時当工場ニ於テハ酒精使用ヲ半減シ酒精使用量ハ僅カニ5%程度」（84葉め）だったため、混成酒に該当しないと考えていたのだが、10月になって、「例へ少量ニテモ酒精ヲ使用シタル以上上記通牒ニ該当スル」（同）という通告を受けたのである。この通告を受け入れると、1938年5月のブラジル新消費税施行以降、現在までの差額分を追徴されることとなり、「酒造工場ノ存続不可能」（同）の事態ともなる。そこで、農産加工会社はブラジル大蔵省に働きかけ、消費税法中に「清酒（Sake）ナル特殊酒精飲料ニ対スル項目」（85葉め）がないことを認めさせ、追徴金の支払いは回避された。その後、1940年7月17日付の大蔵大臣通牒に「Sakeト称スル飲料ハ國産ナル場合消費税法第四條第二款第十項ニ記載サレタル飲料中ニ包含サル、モノナリ」（同）と記載された。以降、「果実又ハ甘蔗の搾汁ヨリ製セル酒精発酵飲料」（同）の一種にSakeが該当することとなり、カンピナス農産加工会社では合成酒の製造を放棄し、最高1500石程度の天然酒生産能力を有する醸造工場へと転換した。（26葉め）その際、不用となった「旧電解室」は「清涼飲料試験室」として再利用される（同）など、あらたな商品開発も見据えた改革がその後も展開していくのである。

3. 史料翻刻

88葉からなる「酒造工場沿革誌」のうち、今回は、その本文部分の一部、目次でいえば「第一概説」と「第二 酒造工場ノ建設」の部分（4葉めから30葉めの途中まで）を以下に翻刻する。

№3.

第一 概説

1. 緒言

在伯邦人保健衛生ノ観点ヨリ酒造工場ヲ設立シテヨリ茲ニ六年、其ノ間二三ノ難関ニ逢着セルモ、ヨク之ヲ切抜ケ設立当初ノ規模ヲ數倍ニ擴張シ亦順調ナル營業経過ヲ辿リ來リシハ設立当事者ノ先見ノ明アリタルハ勿論ナリト雖モ数千年來米ト米ヨリノ酒ニテ育マレ來レル

邦人ニ對シテハ日本酒ガ最モ適當セル酒精飲料タル事ノ結果ニシテ火酒ノ害ヨリ避ケラレタル者、及ビ之ニヨリテ日々ノ生活ヲ潤ハシメ、永住ノ決心ヲ新ニナス者等吾社ノ日本酒提供ノ在伯邦人ニ及ボセシ効果又尠カラザルベシ。

茲ニ酒造工場トシテノ設備一應整ヒ酒造確立ヲ機トシ酒造工場沿革ノ梗概ヲ録シ以テ回顧ト展望トニ資セントスル次第ナリ。

2. 現況

本酒造工場ハ東山カンピナス農場内カーロス、ゴームス驛アチバイア河ニ沿フ地点ヲトシ1934年8月起工1935年3月主工場竣工、全年6月冷蔵設備完成後1937年第一期増産計畫、1938年第二期増産計畫ヲ完遂シテ遂ニ今日ノ如キ整備セル酒造工場トナリタルモノニシテ現在ノ消費狀況ヨリシテ考察スレバ、工場設備トシテハ一應完了ノ域ニ達シ今後ハ只修繕改良補充ノ程度ニテ充分ナリト思惟セラル。

酒造工場ヲ顧ル時常ニ腦裏ニ浮上ルハカンピナス農場ニシテ、恰モ其ノ關係ハ親子ノ如ク最初ハ農場ノ一員トシテノ取扱ヲ受ケツ、保育セラレ漸ク成長シテ現在一人歩キ可能ナル状態トナレルモノナリ。

酒造工場ノ経営者ハ伯國ノ法律ニ從ヒテ設立セラレタル有限責任特分會社カンピナス農産加工會社ナルモ東山組織内ニ於テハ工業部ニ属シ工業部長之ヲ統裁シ其ノ許ニ主任ヲ置キ之ヲ經營ス。

工場ニハ主任以下職員二名準員一名ヲ配シテ之ヲ運営シ別ニ聖市

№4.

事務所ニハ職員一名準員三名ヲ配シ、會計、販賣事務ヲ採リツ、アリ。

カンピナス農産加工會社ノ資本金ハ200コントスニシテ外ニ東山銀行ヨリ借越金199:541\$200 繰越利益金338:547\$700 其他37:112\$000 合計775:200\$000（1940年12月試算表）ノ投下資本ヲ以テ經營サレ其ノ生産ハ清酒壺千石余金額壺千コントス余ニ達ス。

現在ノ醸造方法ハ酒精使用ヲ全廢シタル爲全然天然酒醸造方法トナシ其ノ主要原料タル酒造米ハピンダ産日本米、リオグランデ州産カテ、米ヲ使用シ東麒麟ニ對シテハ特ニ再精白ヲ施シテ醸造シツ、アリ。

現在賣出中ノ清酒ハ東麒麟及東鳳ノ二種ナルモ前者ハ後者ノ15%程度ノ生産ニ過ギズ價格ノ点ヨリ大部分ハ東鳳消費セラル、現状ナリ。

販賣方法トシテハ代理店ニ依ル委託販賣制廢止後、直接販賣制トナシ外務員ヲ派遣シテ注文及集金ヲナシ外ニカーザ東山地方支店ヲデポジタリオ（保管所）トシテ販賣集金ヲ依頼シ居レリ。

本酒造工場ノ清酒新發賣ハ1935年8月ナリシモ其ノ後1937年7月勃發シタル日支事変及1939年9月歐洲戰爭開始セラル、等ノ事アリテ酒造作業開始後今日迄殆ンド其ノ影響下ニアリ之等戦乱ナカリセバ更ラニ發展ノ氣運ニ向ヒ居ルベキニ其ノ發展途上ニ於テ大打撃ヲ與エラレタルニモ不拘尚能ク最初ノ豫想ヲ越エ今日ノ設備ト基礎ヲ築クニ至リ第二段ノ進展ニ備フル現状ニ到達スルニ至レルナリ。

3. カンピナス農産加工會社ノ設立

イ 酒造工場設立ノ動機

在伯邦人ノ居住地ガ主トシテ文化施設ノ皆無ナル僻遠ノ地ニ点在シ其ノ日々ノ労働ガ肉体的ニ可成激シキ關係上人々ハ労働後第一ニ致醉飲料ヲ欲求シ致醉ニ依リテ一日ノ労苦ヲ忘レ疲労ヲ回復セント欲スル。之ノ欲求ハ心理的ニモ生理的ニモ自然的ノモノト云フベク、

ブラジル農業労働が 」（5葉め了）

№5.

肉体的ニ激シク之ト云フ見ルベキ娯楽設備、殊ニ家庭内ニ於ケル慰安トナルベキ設備ニ欠ケル状態ニ於テハ致酔ノミガ唯一ノ慰安供給者トナルニ至レルハ又止ムヲ得ザル所ナルベシ。最近ニ至リテコソ如何ナル奥地ニ行クモスポーツハ盛ントナリ、経済的余裕ヨリ蓄音機、ラジオ等ヲ備エ新聞雑誌等ヲ購読スル等其ノ生活程度ハ向上シ種々ナル娯楽慰安ノ設備ガ備ハリシモ数年前ニ於ケル邦人植民地ノ状態ハ真ニ殺風景タリシモノニシテ僅ニ飲酒ニヨリテ日々ノ労苦ヲ忘レツ、過激ノ労働ニ従事シ居タル有様ナリシナリ。

然ルニ其ノ飲用スル致酔飲料ハブラジル中何レニテモ安價ニ求メ得ラルル火酒即チピンガニシテ一般人ニトリテハ他ノ高級飲料即チ葡萄酒、麦酒ノ如キハ到底経済的ニ其ノ常用ヲ許サズ、日常ハ勿論、訪問、訪客、冠婚葬祭ノ場合ニハピンガ常用シ、斯ノ如クピンガノ常用ニ依リテ其ノ酒量ハ益々増加シ、遂ニ体ヲ害フルニ至ル、ハ当然ノ歸結ナリト云フベシ。

ピンガニヨリテ身体ヲ害ネシ人々ハ伯刺西爾ニ相当永ク居住シ已ニ産ヲ為シタル者ニ多ク之等比較的経済ニ余裕アル人々ハ日本人ニ適シタル酒精飲料ガ求メ得ラル、モノナラバ（日本人ニ適スル酒精飲料トシテノ清酒ハ当時全部輸入品ニシテ一本15\$000内外ノ價格ニテハ到底飲用スル事不可能ナリ）ピンガノ常用ヲ之ニ代エント希望シ居リシモ日本人一般ノ嗜好トシテ葡萄酒ヲ好マズ麦酒ハ弱キニ過ギピンガノ害毒ヲ知りツ、モ止ムナクピンガ常用ヲ繼續スルト云フガ如キ状態ニテ成功ノ鍵ハ健康ニアリトノ観点ヨリ識者間ニハ已ニ斯ノ如キ邦人保健状態ガ憂慮セラル、ニ至リシハ真ニ当然ナリト云フベシ。

茲ニ至リテ日本人ニ適スル致酔の飲料トシテノ日本酒製造ガ考慮サル、ニ至リ他面在伯二十万同胞ヲ背景トスルニ於テハ酒造業ガ一企業トシテ成立スル可能性アル事明ラカトナルニ及ビブラジルニ於ケル清酒醸造ヲ私ニ計劃スル者モ出現スルニ至レリ。

斯ノ如ク邦人社会ハ日本酒ノ出現ヲ待望シツ、アル時ナリシガ故ニ 」（6葉め了）

№6.

在伯邦人中ニテ日本ニ於テ清酒醸造ニ経験アル者ハ日本酒ノ醸造ヲ試ミタリシモ日本ト異リ気温高ク且ツ小規模不完全ナル設備ナリシガ故ニ何レモ日本酒トシテ飲ミ得ルモノ、醸造ニ成功セズ、ブラジルニ於テハ日本酒醸造ハ不可能ナリト一般ニ考エラル、ニ至レリ。

ロ 酒造工場設立認可

東山カンピナス農場ニ於テモ其ノ頃ヨリ已ニ日本酒醸造ニ関シ調査研究ヲ進メ居リシガ偶々1932年山本農場長帰朝ニ際シ本社ニ於テモ本件ニ就キ検討行ハレ歸伯ニ際シ合成日本酒タル“新興國”数本ヲ持参セリ。帰伯後酒造ノ企業調査ヲ爲シ1933年3月30日附ヲ以テ本件ニ関シ御伺書ヲ提出スルニ至レリ。

本計劃ニ依レバピンダ農場甘蔗園利用ノ一策トシテ之ヨリ酒精ヲ蒸餾シ“合成日本酒ノ素”ヲ日本ヨリ輸入シテ之ト配合シ合成日本酒ヲ製造セントスル案ニシテ製造石数一ヶ年50石内外ノ極メテ小規模ノモノナリシナリ。然ルニ之ノ案ヲ基礎トシテ本社ニ於テ取調べタル所ニ依レバ“合成日本酒ノ素”ニ酒及水ヲ配シテ簡單ニ清酒ヲ合成シ得ベキ完全ナル方法未ダ發明セラレ居ラズ、調査ノ結果理化学研究所及大藏省醸造試験所ノ研究ニナル方法ニ依ル合成酒製造ノ外無ク若シ之等ノ方法ヲ採用セントセバ結局専門技術者ヲ派遣スル必要アリ。醸造石数モ最少3ヶ月100石一ヶ年400石程度ノモノトナス必要アルニ就キ再調査ノ上報告アリタキ旨全年9月12日附ニテ返信アリ依ツテ本社ノ調査ニ基キ更ラニ研究

ノ結果1933年12月14日附ニテ合成酒製造計劃書ヲ作製シ、新メテ本社ヘ認可方御伺書ヲ提出セリ。本計劃ニ依レバ年産100,000石（2518,000,000本）ノ合成酒製造ヲナシ、工場設備ノ如キモ從ツテ極メテ小規模ノモノニシテ勿論冷蔵設備ノ装置等ヲ有セザルモノナリシナリ。

本信ニ對シテ翌1934年5月17日附ニテ承認ノ旨ニ接シ尚酒造技師 」（7葉め了）

№7.

一名ヲ派遣ノ事ニ決定ノ旨通知ニ接セリ。

ハ 清酒製造法ノ決定

當時本社ノ調査ニ依レバ合成日本酒製造ニ関スル特許実ニ22件ノ多キニ及ブト雖モ、現在實際化サレツ、アルモノハ、

1. 理研法
2. 醸造試験所黒野式電化法
3. 高橋貞三氏後熟酵母添加法
4. 味淋式混成酒法

ノ四方法ニシテ其ノ内ニテモ前二者最モ優秀ナル方法デアル事判明セルモ理研法ハ秘密ニサレ居ル爲ニ特許ニ記載サレ居ル事項以上ヲ窺知スル事能ハズ。醸造試験所黒野式電化法ハ全所勝目英氏ノ好意ニヨリテ相当詳シク承知スル事ヲ得タリ。

以上ノ二者ヲ比較ノ結果電化法ノ有利ナル事ヲ認メ幸ヒ本社河崎事務ガ勝目英氏ト全窓ナル関係上ブラジルニ於ケル酒造法ヲ黒野式電化法トナス事ニ決定シ技術者推薦方ヲ依頼シタル処黒野式電化法ニテ合成清酒製造ヲ營ミツ、アル國興酒造株式會社大岩源吾氏ヲ推薦シ來レルガ故ニ全氏ヲ採用シブラジルニ派遣スル事トナレリ。

大岩酒造技師ハ年産100-400石程度ノ生産能力ヲ有スル酒造工場ニ必要ナル一切ノ酒造機械器具ヲ購入シ1934年6月19日出帆ノリオ・デ・ジャネイロ丸ニ積込ムト全時ニ自ラモ本船ニ依リブラジルニ出發セリ。

ニ 會社ノ設立

酒造工場ハ酒精飲料ノ製造販賣ヲナスガ故ニ消費税ヲ支拂ヒ且ツ政府ノ監督モ嚴重ナルベキヲ豫想シカンピナス農場経営トスル時ハ將來何等カノ問題起リシ時種々面倒ナル事ガ農場自身ニ及ブコトヲ避ケンガ為ニ伯國法ニ依ル獨立シタル企業会社トナス事ニ決定セリ。

」（8葉め了）

№8.

會社名ヲ如何ニスベキヤニ就キテハ種々ノ案アリテ本社ヨリハ試案トシテCampinas Industria Chimica Limitada（カンピナス化学工業會社）ナル名稱ノ提案アリタルモ化学ナル字句ノ食品ニ及ボスベキ影響ヲ考慮シ次ノ如キ名稱トナサントセリ即チProductos Agricola Tozan Limitada（東山農産製造會社）然ルニ本社ノ意向トシテ可成“Tozan”ナル名稱ヲ避ケ度キ旨ナリシガ故ニ下記ノ名稱トスル事ニ決定セリ。即チ現在ノ名稱ナリ。Industria Agricola Campineira Ltda（カンピナス農産加工會社）斯クシテ上記名ノ伯國法ニヨル一商會社有限責任持分會社ヲ設立スル事トシ出資社員ヲ下記三名トセリ。

カンピナス農場	山本喜譽司	80	コントス
〃	宮地勝彦	60	〃
サントスカーザ東山	水上不二夫	60	〃

1934年11月15日資本金200コントスヲ以テ上記名ノ新會社設立サレ聖市Junta

Commercial ニハ 1934 年 12 月 4 日附 44,365 号ヲ以テ登録セラレタリ。

本會社ノ定款ハ下ノ如シ

カンピナス農産加工會社定款（譯文）

一九三四年十一月十五日日本人已婚者ニシテサンパウロ州カンピナス市在住農業家山本喜譽司、宮地勝彦、サンパウロ州サントス在住商業家水上不二夫ハ一般農産加工主トシテ日本酒及ビコレガ類似品ヲ製造スル一商事會社タル有限責任持分会社ヲ以下各條ノ規定ニ從ヒ同意セリ。

第一條 會社ノ名稱

何レカノ出資社員ノ署名ヲ末尾ニ伴フ Industria Agricola Campinera Ltda ナル特別名稱ノ下ニ經營セラレ本部ハサンパウロ州カンピナス市トス。

第二條 會社存續期間

」(9 葉め了)

№ 9.

本契約有効期間ハ貳拾個年トシ本日附ヲ以テ開始セラレー一九五四年ノ全日ニ終了スルモノトス。

第三條 資本金

資本金ハ貳百コントストシ三個ノ持分ニ分タレ山本喜譽司 80 コントス、宮地勝彦 60 コントス水上不二夫 60 コントストシ夫々本日附ヲ以テ伯國通貨ヲ以テ拂込マレタリ。

第四條 出資社員ノ責任

各出資社員ノ責任ハ一九一九年ノ法律 3,708 號ノ規定ニ從ヒ會社資本總額ニ限定セラレベシ。

第五條 會社ノ業務執行

會社ノ業務執行ハ山本喜譽司及宮地勝彦ニヨリ全時ニ或ハ別個ニ依リ執行セラレ兩者支障アル場合ハ水上不二夫ニヨリ執行セラル。是等ハ次ニ記載セラル、條項ノ外會社財産ノ処方並ニ管理ニ關スル總テノ權限ヲ賦與セラル。

1. 會社ノ商行為ニ對シ署名スル事。
1. 裁判所ニ於ケル被告、原告トシテ會社ヲ代表ス。
1. 給與ヲ決定シ委任者ノ任命。
1. 出資社員ノ不在或ハ故障ニヨリ臨時的ニ適當ナル委任者ヲ任命シ會社ノ業務ノ一部及全部ヲ代行セシメ得。

第六條 決算

會社ノ決算期ハ十二月卅一日トシ損益ハ各持分ニ應ジ分配ス。利益ハ一度明ラカニ算定セラレ而シテ拂込資本額ノ全額ノ影響ヲ及ボサル場合分配セラル。

1. 出資社員ノ金銭ノ引出ハ全部個人勘定トシテ差引クベシ。
1. 貸借對照表面ノ純利益ノ内 20% ハ積立金トシテ控除スベシ。

」(10 葉め了)

№ 10.

第七條 係争

本契約ニ關シ出資社員間ニ起ル疑義ハ双方ニ於テ任命セラレタル仲裁人ニ

ヨリ現行法規ニ從ヒ仲裁裁判ニ依リ決定セラルベク若シ尚解決セザル場合ハ本人司法區ノ裁判管ニ依リ決定セラレ如何ナル告訴モ無効トス。

第八條 持分ノ讓渡

持分ノ讓渡ハ常ニ總テ出資社員ノ明確ナル同意ヲ要シ如何ナル場合ニモ讓受優先權ヲ有ス。

第九條 出資社員ノ死亡

出資社員ノ死亡ニ依リテ會社ハ解散セラル、事ナカルベク現行法規及定款第八條ニ從ツテ法定相續人ニヨリ存續セラルベシ。

第十條 雜

本契約ニ脱遺アル場合ニハ法律第 3,708 號ノ規定ニ從フベク其ノ規定ニ關シテハ各出資社員ハ茲ニ記載セラレタルモノ、如ク之ニ通暁スルヲ要ス。

一以上一

(後筆) [其後出資社員ノ一人タル宮地勝彦歸國セルニ付キ、]

株式会社ニ改組スル前定トシテ出資社員ヲ 7 名ニ増加シ宮地勝彦ノ持株ヲ下記ノ如ク分配セリ。出資社員タル條件トシテハ面倒ナル手續ヲ必要トシ下記ノ諸氏ハ絹織工場ノ出資社員タル手續ヲ了シタルモノナルニ付キ便宜之ヲ分配シ後ニテ株式組成最少限度タル 7 名ニ充ツル為ナリ。

即チ当社現在出資社員ハ下記ノ如シ。

山本喜譽司	80 コントス	}	舊宮地勝彦ノ持株	」(11 葉め了)
水上不二夫	60 ヶ			
君塚 慎	40 ヶ			
長嶋完一	5 ヶ			
小林祐太	5 コントス			
田中福藏	5 ヶ	}		
後藤武夫	5 ヶ			
計 200 コントス。				

尚之ト全時ニ次ノ如ク定款ヲ変更ス。即チ

1. 本部所在地 從來カンピナス市ニアリタルモノヲ聖市ニ移ス。
1. 會計年度 十二月卅一日ヲ以テ決算期トシ居リタルモ今後ハ六月卅日ニ変更ス。

以上ヲ 1938 年 10 月 18 日附 51,955 號ヲ以テ聖市 Junta comercial ニ登録セリ。

カンピナス農産加工會社ハ其ノ名ノ示ス如ク農産加工ニアリ。最初着手セシ事業トシテ清酒醸造業（設立ノ動機ハ酒造業ナルモ）ヲ選ビ今日迄之ニ從事シ居ルモ酒造業一段落トナル今日更ラニ他ノ方面ニ進出スベキモノニシテ今後調査研究ノ上一歩々々前進セントスルモノナリ。

」(12 葉め了)

№ 12.

第二 酒造工場ノ建設

1. 酒造工場設置場所決定

酒造工場設置場所ニ就キテハ、
イ. 水質及水量ノ關係

ロ. 運搬関係

ハ. 位置関係

ノ三主要条件ニ依リテ決定セラルベキモノナルガ故ニ以上ノ諸関係ニ就キ取調べタルニ第一候補地トシテ新タニ購入シタルカーロス、ゴームス駅旧サンタビクトリヤ耕地ヲ指定セリ。即チ、

イ. 水質及水量ノ関係 駅附近ノ小高キ小林中ヨリ湧出スル水ヲ分析シタル結果何処ノ水ヨリモ硬度高キ事判明セリ。水量ニ於テモ酒造工場用水トシテ充分ナルコトヲ確メタリ。

ロ. 運搬関係 清酒消費地トシテノ聖市及奥地ヘ対シカーロス、ゴームス駅ヲ利用シテ鉄道便ニヨリ發送スルコトヲ得。

ハ. 位置関係 近クカンピナス市ヲ控エ且ツ農場内ナルガ故ニ物品購入及配員関係ニ於テモ有利ナリ。尚アチパイア河沿ニ建設スル事ニヨリテ下水ヲ河中ニ放流シ飲料工場トシテ常ニ清潔ニ保ツ事ヲ得。

以上ノ三主要条件ヲ考察スル時上記ノ如ク有利ナル条件ヲ具備セル地点ヲ發見スル能ハズ、酒造工場ヲ此處ニ設立スルコトニ決定シタル次第ナリ。

2. 主工場ノ建築

酒造工場ノ規模ハ造石高及ビ其他ノ事情ニヨリ決定スベキモノナルガ故ニ日本ヨリ持參セシ工場設計図ヲ参考トシテ当地専門家ニ新メテ設計セシメ、之ノ設計図ニ從ヒ 1934年8月23日主工場建設敷地ヲ決定シ直チニ基礎工事ニ着手セリ。

主工場建築ハ当方監督ノ許ニ工事ヲ進メタルモ途中雨天、人夫ノ病氣續出等ノ事故ノ爲其ノ完成稍遅レ 1935年3月中旬ニ至リ工場内部ノミ漸ク完成セリ。](13葉め了)

Nº 13.

外部漆喰及ペンキ塗ノ終了シタルハ二ヶ月後ナリ。

主工場概畧説明

煉瓦造鉄筋コンクリート鉢巻廻シ フランス瓦葺 セメント張り。

梁高 4.73m 四囲壁高 5.85m

總建坪 33.25m × 10.85m 360.76m (約 109坪)

内譯

事務所 3.90m × 5.60m 21.8㎡ 天井付床板張り。

実験室 3.90 × 4.07 15.8 〃 〃 〃

貯藏室 5.75 × 9.95 57.2 〃 床セメント張り。

作業場 78.3 〃 水槽備付。

麹室 3.92 × 5.70 22.3 〃 四圍一吋コルク板張二重扉。

麹室前室 3.92 × 5.85 22.9 〃

釜場 9.95 × 3.90 38.8 〃 釜二基。

尚 1940年末現在ニ於テハ事務室ハ實驗室ヘ麹室前室ハ麹室ヘ変更セラレタリ。

3. 諸設備

イ. 給水設備 酒造業ノ主体ハ用水ニアルガ為ニ給水設備ニハ最モ意ヲ注ギ其ノ完全ヲ期セリ。駅ニ近ク工場敷地ヨリ高く、位置スル小林中ヨリ湧出スル泉水ヲ調査シタルニ水質及水量共ニ申分ナク之ノ湧泉ニ設備ヲ施シテ用水ノ溷濁ヲ防グト共ニ、湧泉ヨリハ鉄管ニテ工場内ニ導水シ其ノ落差ヲ利用スルガ故ニ特別ナル水槽及ポンプヲ必要トセズ、只湧水源ニヶ所ニ完全ナル密閉井戸ヲ設ケ之ヨリ湧水ヲ水槽ニ集メ此處ヨリ鉄管ニテ工場ニ導ク事ト

シ尚補助湧水源壹ヶ所ヲ設ケ場員住宅用トシテ使用スルコトトセリ。

水源ハ工場ヲ距ルコト約 200 米、柵ヲ以テ圍ミ其ノ面積 2,150 平方米ニシテ湧水量主井一日約 30,000 立、數ヶ年ノ経験ニヨレバ其ノ湧水量ハ雨期乾燥期共ニ大ナル変化ナク良好ナル湧水源ナリ。水質ノ分析結果ニヨレバ](14葉め了)

Nº 14.

獨逸硬度 1.53 度ニシテ日本ニ比較スル時ハ軟水ナルモ当地方ニ於テハ硬度最モ高キモノナリ。現在ノ湧水量ニテ醸造用トシテハ充分ナルモ醸造石數増加ニ依リテ、洗壇、壇詰、洗滌、殺菌、ボイラー用水等ニ使用スル場合ニハ不足ヲ來スヲ以テ現在ニ於テハ工場内ニ井戸ヲ設ケ、動力ポンプニヨリ揚水ヲナシ前記用水トナシテ使用シツ、アルモ、井水ハ有機物ヲ含有スル事多ク醸造用水トシテハ不適當ナリ。

ロ. 冷蔵設備 合成酒製造ニ於テハ冷蔵設備ヲ必要トセザル建前ニ於テ計劃ヲナシ來リシモ大岩技師着任以來当地事情調査ノ結果次ノ理由ニ依リ冷蔵庫設備ノ必要ヲ認ムルニ至レリ。

A. 四季醸造ヲナス本酒造工場ニ於テハ冬季ハ兎モ角夏季高温時ニハ腐造ノ危険ヲ多大ニ存シ万一腐造等ノ事起ランカ、折角先鞭ヲツケタル吾社酒造業ノ声價ヲ失墜スルニ至ルベキ事。

B. 合成清酒ニ天然酒ヲ配スル時ハ更ラニ優良ナル清酒ヲ得ベキモ天然酒醸造ニハ絶対的ニ冷蔵装置ノ必要ナル事。

C. 他ノ競争者ハ總テ天然酒ナルヲ以テ之ニ對抗スル上ヨリ天然酒ヲ醸造スル必要アルコト。

D. 黒野式電化法ノ特許面ニ現ハレタル製造方法ハ純然タル合成法ナルモ實際ニハ天然酒全様ノ醱酵行程ヲ多分ニ有シ半合成酒トモ稱スベキ製造方法ナルニ就キ、夏季高温時ニハ腐造ノ危険アル事

E. 税関係ニ於テ天然酒ヲ醸造シ居レバ總テノ清酒モ天然酒全様低廉ナル消費税トナス事ヲ得ベキ事。

等ノ諸事情ヨリ冷蔵庫ノ不可缺ナル事ヲ具陳シ本社ノ認許ヲ得主工場ニ接シテ之ヲ設置スル事トセリ。](15葉め了)

Nº 15.

冷蔵設備用機械機具類ハ將來部分品ノ取換ヘ、修繕等ノ事ヲ考慮シ当地ニ於テ購入スルコトトシ之ヲ聖市 Byington & Cia へ注文セリ。

斯クシテ主工場ニ接シ冷蔵庫ノ基礎工事ヲ開始セルハ、一九三四末ニシテ冷蔵庫設計ハ総テ機械供給者タル Byington & Cia ニ依頼セリ。

冷蔵庫ハ普通ノ建築物ト異リ四圍及地上ハ総テ熱絶縁装置ヲナシ天上ハコンクリートトナス為ニ以外ノ日子ヲ費シ建物ハ翌一九三五年五月ニ終了セルモ、以後ハ冷却管ノ取付ケ冷蔵機械ノ据付ケニ日子ヲ費シテ六月末ニ終了シ漸ク試運轉ヲ開始スル運ビトナレリ。試運轉ノ結果大体順調ニ運轉シタルニ依リ之ヲ Byington & Cia ヨリ受取レルハ一九三五年七月下旬ナリ。

冷蔵設備概畧説明

建物

煉瓦造り 鉄筋コンクリート鉢巻廻シ フランス瓦葺 梁高 4.10m

総建坪 19.35m × 7.90m 152.8 平方米 約 46坪

冷蔵室 7.20 × 11.00 79.2 〃

高サ 3.50m 容積 277.2m³
 床及天井コンクリート張り 四圍壁二吋モノ二枚 コルク張り。
 冷却管 太サ一吋 1/4 長サ 377 米 自動調節氣化辨付
 換氣電氣扇取付

冷蔵前室 7.20 × 3.50 = 25.2 平方米 天井、床コンクリート張り
 機械室 7.20 × 3.50 25.2 ㎡ 床コンクリート張り。天上付

冷却機械類

A アンモニヤ瓦斯圧縮機 Corrir Brunsusick Type 13-B 」（16 葉め了）
 No 16.

直立氣笛 11.300kg cal/H 1 基
 B 凝縮管 二重管式 5.8 米物 6 本
 C アンモニヤ槽 10 吋× 48 吋 1 ケ
 D 油分離笛 4 吋× 24 吋 1 ケ
 E 電氣モーター ウエスチングハウス製三相交流 7.5HP 220/60 1.750RPM
 1 台

4. 倉庫

ポツソ区ニ既存シ偶々工場敷地内ニ取囲マレタル旧厩舎ヲ改造シテ倉庫トナシ、原料製品置場、荷造場等ニ使用ス。建坪 15 × 8 120m²

5. 機械器具類

元來当酒造工場ハ合成清酒ヲ目的トシテ出發シタル爲メニ酒造工場トシテ具備スベキ機械器具類ハ普通酒造工場ニ比シ極メテ尠ク只實驗室用具ノミハ充分ニ備ヘ付ケタリ。

第一回日本ヨリ輸入セル酒造用機械器具類ノ主ナルモノヲ列挙スレバ下ノ如シ。

瑠璃タンク	2 ケ	12 石 1 ケ	8 石 1 ケ	輪締器	1 台	桶組立用
貯藏桶	5 ケ	20 石入		冷温機	1 ケ	
仕込桶	5 ケ	15 石入		洗米機	1 台	1 斗掛
壺台	10 ケ	5 石、3 石、2 石入		濾過機	1 台	永田式
甌桶	1 ケ	1 石 5 斗入		ゴムホース	120 尺	1 吋半ノモノ
麴蓋	200 枚			火入機	1 台	錫引製
酒槽	2 ケ	5 石掛		釜	3 ケ	三州釜
酒袋	500 枚			アクメ充電機	1 台	電解液用
試桶	5 ケ	1 斗入		炭素板	14 枚	〃
半切	5 ケ			其他雜用具		
櫛	10 本			實驗室用各種器具類		

全用試薬類 」（17 葉め了）

No 17.

以上ノ如ク酒造工場トシテハ主工場、冷蔵庫、倉庫及ビ酒造用諸器械器具類等ヲ備エ以上ノ設備ニ於テハ年間 250 石仕込ノ場合充分ナルモ 400 石トモナラバ相当困難ヲ感ジ夫レ以上ノ造石数ニ於テハ設備ノ拡張ヲ必要トスル程度ノモノタリシナリ。

6. 第一期増産計劃（壹千石）

上記ノ如ク工場建物、倉庫、冷蔵庫及日本ヨリ輸入セル酒造用機械器具類ニ依ル本酒造工場ノ生産能力ハ前述セル如ク 250 ~ 400 石ニシテ、若シ消費ガ夫レ以上ニ達スル時ハ本設備

ニ於テハ作業ニ無理ヲ生ジ酒質ノ劣下ヲ來ス處ナシトセズ。更ニ需要増加ノ場合ニハ到底本設備ニ依リテハ其ノ需要ニ應ズル事不可能ナリ。

1936 年東鳳新發賣後ノ清酒需要ヲ見ルニ 1936 年度ニ於テ已ニ 165,000 本（約 600 石）ノ賣行ヲ示シ現在ノ設備ニテハ到底自信アル清酒ノ提供不可能トナル為茲ニ第一期増産計劃トシテ壹千石増産計劃ヲ建テ以テ激増セントスル需要ニ應ゼントセリ。即チ本増産計劃ニ對スル本社ノ承認ヲ得ルヤ直チニ之ニ着手シ輸込スベキ酒造用機械器具類ハ至急此ノ發送方ヲ依頼シ当方ニテ着手スベキ建増、新築等ハ必要ノモノヨリ順次完成セシムル事トセリ。

今其ノ計劃案ヲ見ルニ

建物

洗塲所	10m × 6.0m	60m ²	
電解室	5m × 3.5m	17.5m ²	
殺菌場	7.6m × 5.0m	38.0m ²	ボイラー一基据付。
倉庫	17.0m × 7.2m	122.4m ²	

設備

酒精タンク 8,000 立入鉄製タンク

機械器具類

」（18 葉め了）

No 18.

貯藏桶	3 ケ	20 石入
甌 桶	3 ケ	
甌 桶	1 ケ	3 石入
瑠璃タンク	4 ケ	12 石入
冷温器	1 ケ	
ゴムホース	60 尺	1 吋半ノモノ
麴 蓋	200 枚	
酒 袋	300 枚	
カーボン	13 枚	電解用
木香板	20 貫	
浸漬桶	1 ケ	
塲詰機	1 台	当地ニテ購入獨逸製

以下本計劃遂行ヲ見ルニ“洗塲所”

洗塲所ナキ為メニ雨天ニ於ケル作業不可能ナリシガ故ニ第一ニ之ノ建築ニ着手シ之ヲ完成ス。洗塲所内ニハ塩酸タンクヲ設ケタリ。

“殺菌場” 塲詰品ノ殺菌ハ釜ニ於テピンガ蒸溜器ヲ利用シテ為シ居リタルモ醸造石数ノ増加ト共ニ釜場ニ殺菌箱ノアル時ハ不便ナルノミナラズ蒸溜蒸溜器ニテ蒸餾ト殺菌トヲ全時ニ為ス事不可能ノ状態ナリシガ故ニ洗塲所終了ト全時ニ之ノ建築ニ着手ス。熱源トシテハボイラーヲ使用スル事トシ中古 4 馬力ノボイラーヲ購入シ据付ケタリ。1936 年竣工。“電解室” 電解液調製用ノ電解槽ハ貯藏室ノ一隅ニアリタルモ本室ハ工場參觀人ノ目ニ付キ易キ場所ナルガ故ニ冷蔵庫裏側ニ電解室ヲ設ケ工場ト隔離シテ一般參觀人ニハ秘密トセリ。

“倉庫” 雜品物置及包装荷造所無キ為ニ不便狹溢ヲ感ジ居リシガ故ニ洗塲所、殺菌場ト平行シ主工場左側ニ之ガ建築ニ着手シ 1937 年 」（19 葉め了）

No 19.

之ヲ完成セリ。

“酒精タンク” 電解室ノ上方ニ位置シテ 8,000lts 入レ酒精タンクヲ地中ニ埋設シ此ノタンクヨリ電解室ニ鉄管ヲ通ジテ酒精ヲ導キスケテ酒精使用及電解装置ハ秘密トナシ置ケリ。

“機械器具類” 堰詰機ノミハ当地ニ於テ獨逸製ノモノヲ購入シ日本ニ注文シタル器械器具類ハ 1936 年 6 月出帆ノサントス丸ニ積込ミ全年 9 月無事入手セリ。

以上ノ設備増設ニヨリテ大体壱千石迄ノ生産能力ヲ有スル酒造工場トナレリ。

7. 第二期増産計画（貳千石）

壱千石生産能力ヲ有スル酒造工場トハ最盛需要期ニ於テ壱千石生産ノ能力ヲ有スル謂ナルガ故ニ最盛期ニ於ケル能力ヲ壱年間繼續セバ其ノ生産ハ壱千石ヲ突破スル事勿論ナリ。然レ共ブラジルノ如キ氣温高キ地ニ於テ需要尠キ時期ニ多量生産シテ之ヲ貯蔵スル時ハ品質ノ劣下ヲ免レズ、勢ヒ生産ハ消費ノ波ニ順應シテ為サル、事トナルナリ。元來合成清酒製造ノ特徴トスル處ハ其ノ貯蔵期間短クシテ販賣シ得ルト工場設備ヲ出来ル限り廻轉利用スル事ニヨリテ生産原價ヲ低下スルニアルヲ以テ之ノ方針ノ許ニ設備セラレタル当酒造工場ハ酒造工場トシテハ極メテ小規模ナル設備ナリシニ不拘其ノ生産能力ヲ極度ニ發揮セシナリ。例ヘバ 1937 年 7 月中ニ於ケル釀造高ニ就イテ之ヲ見ルニ釀造石數實ニ 156 石ニ達シ之ノ能力ヲ以テ年間生産スルモノトセバ 1,800 石ノ釀造高ニ相当ス。而シテ斯ノ如キ生産能力ハ或特定ノ時期ニ一時的ニ發揮セラレ得ルモノニシテ一定ノ設備ノ許ニ於テハ年間ヲ通ジ全様ノ生産ヲ挙ゲ得ルモノニ非ラズ。前記 7 月中ニ於ケル生産ガ設備ニ比シ驚クベキ數字ヲ示シタル反面其ノ酒質タル品質ノ悪評ナキヲ寧ロ不思議トサエ思ハル、程度ノモノタリシナリ。（當時綿作景氣ハ奥地ニ於テハ絶頂ニ達シスル酒質ノモノニテモ不足勝ニテ争ツテ購入スルガ

No 20.

如キ状態ナリシナリ。）然レ共能力以上ニ生産シテ品質ノ劣下ヲ来スハ臆テ當酒造工場清酒ノ聲價ヲ失墜スル所以ナルヲ以テ壱千石増産計劃ノ畧完成シタル直後第二期増産計劃トシテ貳千石増産計劃ヲ建テタル次第ナリ。

即チ在伯邦人ノ清酒最高消費量ヲ 2,000 石ト見做シ当工場産清酒 1,500 石他酒 500 石供給ト推定シ消費 1,500 石ニ対スル設備ハ最盛需要期ニ於テモ充分ナル餘裕ヲ保留シテ釀造スルモノトシテ尠クトモ貳千石ノ生産能力ヲ有スル工場設備ヲ必要トス。以上ノ如キ事情ニ依リ貳千石増産計劃ヲ建テ本社ニ御伺ヒシタルニ本社ヨリハ右増産計劃ヲ承認スルモ從來ノ酒造工場ハ其ノ儘トナシ運賃節約其ノ他ノ事情ヨリ奥地ニ分工場ヲ設立シテハ如何トノ提案アリタレド上記提案ハ下記理由ニ依リ中止ノ事トセリ。

1. 現在ノ工場ヲ拡張スル事ガ最モ経済的ニシテ別ニ壱千石ノ工場ヲ設立スルトセバ遙カニ多額ノ資金ヲ固定シ生産費ノ増嵩ヲ来スベキ事。
2. 奥地ニ建設スル事トスレバ新酒發賣ハ相当遅レル事。
3. 奥地トシテハバウルー、マリ、アナルモ、バウルーハ已ニ水質悪シキ為不適當、マリ、アハ水質不明ナルモ相当慎重ナル事前研究ヲ必要トシ且ツ兩地共夏季ノ暑熱ハカンピナスノ比ニ非ラザルガ故ニ酒造技術上多大ノ不安ヲ有スル事。
4. マリ、アハ其ノ供給範圍限定セラル、ガ故ニ運賃節約上得ル所尠キ事。
5. 配員關係ノ困難ナル事。
6. 來訪者及官憲問題。

以上ノ諸理由ニ依リテ從來ノ酒造工場ヲ拡張スル事トナレルモノナリ。

以下貳千石増産計劃案ヲ見ルニ、

建物

事務所 一棟 9.0 × 5.0 45㎡ 煉瓦造り、天井床板張。

倉庫 一棟 20.0 × 8.0 160㎡

」(21 葉め了)

No 21.

倉庫(改造) 16.4 × 11 180.4㎡

電解室 一室 5.0 × 3.5 17.5㎡

麹室 一室 4.0 × 4.2 16.8㎡ 麹室前室ヲ改造

貯蔵室 一室 3.6 × 11.0 39.6㎡

枯シ場 殺菌所、荷造所間ノ空間ヲ利用。

設備

冷蔵設備 増設及旧冷蔵機械取替エ

水道設備 給水設備

配電設備 各設備建物ニ対スル配電

塩酸タンク 拡張

機械器具類

醪輸送ポンプ 1 台

堰滌機 1 台

火入機 1 台

貯蔵桶 10 個

仕込桶 5 ヶ

珙瑯タンク 5 ヶ

酒槽 1 台 10,000 石掛

カーボン電極 12 枚

麹蓋 300 枚

ゴムホース 120 尺

殺菌箱 1 ヶ

其他雑用具 -

今其ノ経過概要ヲ記セバ下ノ如シ。

“建物”

」(22 葉め了)

No 22.

“枯シ場” 殺菌所、洗場所、荷造所、及主工場間ヲ総ベテ屋根ヲ以テ覆ヒ雨天ニ於テモ作業ニ支障ヲ来サザル様ニナセリ。1937 年 10 月下旬着手 12 月上旬ニ終了ス。

“事務所” 從來ノ事務所ハ手狭ニテ一人ノ増員スラ入レル余地ナキ所生産拡充ニヨリテ増員モ豫想セラル、ニ付キ事務所一棟ヲ建築スル事トシ 1937 年 12 月着手翌年 4 月完了ス。

“倉庫” 現在ノ倉庫ニテハストックノ貯蔵ニ狭キヲ以テ倉庫一棟ヲ建ツル事トシ 1938 年 1 月着手 5 月完了ス。

“貯蔵室” 主工場冷蔵庫間ノ空間ヲ屋根ニテ覆ヒ貯蔵室ヲ設ク。1937 年 11 月着手 12 月完了、貯蔵桶 5 ヶヲ収容ス。

“麹室” 現在ノ麹室前室ヲ改造シテ麹室一室ヲ増設ス。麹室ノ四圍及ビ天井ハ一吋コルク板張りトセリ。1938 年 11 月完了ス。

“倉庫” 買取当時ヨリ存シタル河沿ヒノ旧倉庫ヲ改造シ製函材料置場並ニ製箱所トナス。1939年3月完了ス。

“電解室” 従来ノ電解室ニ接シテ一室ヲ増設ス。1938年6月完了ス。

設備

“冷蔵設備” 已ニ記述セル如ク当地ノ如キ気温高キ地ニ於ケル酒造業ニハ冷蔵設備ハ絶対的ニ必要ニシテ四季ヲ通ジテ醸造ヲナスモ一回ノ腐造変敗ノ起ラザル事ハ之レ冷蔵設備アリシ爲ナリ。今回日本ヨリ輸入セントスル貯蔵桶仕込桶乃至ホーロータンク類ヲ収容スル場所トシテ更ラニ冷蔵庫ヲ増設スル事ノ必要ヲ認メ前回冷蔵庫ノ機械供給者タル Byington & Cia ニ其ノ設計ヲ依頼シ尚新機械購入契約ヲ取結ビ1937年12月ニハ基礎工事ニ着手セリ。其ノ後隔離材料タルコルク板ストツク無キ由ニテ入手遅レ六月ニ至リ漸ク隔離材料其他ノ必要品到着シタル爲ニ工事ヲ開始シ九月下旬ニ冷蔵庫工事終了ト

」(23葉め了)

№23.

全時ニ機械据付ニ着手セリ。従来ノ旧機械ハ全部全部之ヲ新冷蔵機械ト取替エ十一月中旬機械据付終了シタルニ付試運轉ヲ開始ス。約二週間ノ試運轉ノ結果運轉順調ニ進行セシガ故ニ之ヲ Byington & Cia ヨリ受取り茲ニ冷蔵設備ハ完了ヲ告ゲタル次第ナリ。今回増設シタル冷蔵設備ノ概畧ヲ示セバ下ノ如シ

“冷蔵室”	11.20 × 7.20	83.44㎡
	梁高 4.0m	333.76㎡
	床及天井	コンクリート四囲ノ壁 4吋コルク板一枚張り。
	冷却管	天井ヨリ二列ニ懸吊シ下部ニ水滴受ケヲ設ク。
冷蔵前室	7.20 × 3.50m	25.2㎡
冷蔵機械	“York” アンモニヤ式圧縮機	modelo №4. ~ 34W
	直立気筒	2.4 × 4

York Ice Machinery Cooperation York Pensy. U.S.A.

多管式 凝縮機

センチユリーモーター 10HP 220/50/3

高圧安全弁 (Mercoide Switch)

自動調節器 (各冷蔵室ニ備付)

Startar

尚今回新機械ヲ据付ケタル結果旧機械ハ全部取ハヅシ之ノ分トシテ Byigtão & Compania ニ於テ 15 コントスニテ引取レリ。即チ旧冷蔵室ニ於テハ中央ニ一列天井ヨリ懸吊シ兩側壁ニ一列宛冷却管ヲ備付ケタリ。自動調節器ノ爲冷蔵室温度ヲ常ニ 4.0℃ -7.0℃ニ保チ此ノ範囲外ノ室温トナル時ハ自動的ニ運轉開始又ハ中止サル、理ナリ。

“配電設備” 配電設備ハ新冷蔵室及今回増新築シタル諸建物内配電及ビ電解装置用配電ニシテ殊ニ電解装置ハ従来ノアクメ充電気ニテハーケノ電解槽以上ノ能力ナキ為直流電動機ヲ備付ケ電解槽

」(24葉め了)

№24.

ニケヲ全時ニ電解スル如ク設備セリ。

“給水設備” 洗壘、壘詰用水トシテノ設備ヲナス。

“塩酸タンク” 従来壘ノアルカリ中和トシテ使用シ居リシモ試験ノ結果其ノ必要ナキ

事明ラカトナルニ付設備セズ。

“機械器具類” 日本へ注文中ナリシ前記機械器具類ハ1938年2月到着。

以上ノ諸建物、設備及機械器具類ニ依リテ貳千石増産設備ハ完成ヲ告ゲ茲ニ在伯邦人清酒最高消費量ニ対スル設備トナレリ。

8. 其後ニ於ケル諸設備

“精米機” 従来酒質ノ向上ヲ図ランガ為ニ化学精白等ヲ試ミシモ結果面白カラズ、酒質向上ノ為ニハ精米機ニ依ル高度精白ガ最良ナル事ノ結論ニ到達シタルニ依リ、日本ヨリ佐竹式堅型精米機ヲ輸入シ東麒麟ニ對シテハ全使用米ヲ東鳳ニ對シテハ麴米ノミヲ本機ニヨリ再精白ヲナシツ、アリ。

“ボイラー” 従来釜ニ基ニテ蒸餾作業ヲ為シ居リシモニ基全時ニ使用スル時ハ燃焼不良ニシテ蒸餾意ノ如クナラズ殊ニ醸造石數増加ニ依リテ蒸餾火入ヲ並行スル事常ナルガ故ニ八馬力ボイラー一基ヲ釜場ニ沿ヒテ据付ケ、蒸餾及ビ火入ハ総テボイラーヨリノ蒸氣ニ依ル事トセル為ニ蒸餾ト火入ヲ全時ニナシ時間ト燃料ヲ節約スル結果ヲ示セリ。

“職員住宅” 酒造工場職員住宅トシテハ従来ノ旧家屋ヲ使用シ居リタルモ最初ニ工場主任用住宅一棟ヲ新築セリ。

尚現在職員住宅一棟ノ建築中。

“乗用自動車” 工場用務ノ増加ト従業員不時災害等ニ備フル為ニ中古乗用自動車ヲ一台購入。

“労働者住宅” 工場労働者住宅一棟 (二軒長屋) ヲ新築ス。

」(25葉め了)

№25.

“自動車庫” 乗用及貨物自動車庫一棟新築ス。

“給水設備” 水源内水槽ハ煉瓦造リナリシ爲腐朽漏水セル故今般之レヲ石造リトシ永及的

ノモノトセリ。

貳千石増産設備完成後上記諸設備ノ補足ニヨリテ益々内容充実セルモ1939年10月ニ起リシ消費税問題ハ当酒造工場最初ノ方針タル合成清酒タル製造ヲ放棄スルノ已ムナキニ至リ天然酒醸造工場トシテ最高1,500石程度ノ生産能力ヲ有スルニ至レリ。

9. 酒造工場現在ノ設備

酒造工場現在ノ設備ヲ総合列挙スレバ下ノ如シ。

建物

“主工場” 33.25 × 10.85m 360.75㎡

内訳

實驗室 3.90 × 4.07 15.8㎡

〃 3.90 × 5.60 21.8㎡ 旧事務所ヲ変更ス。

貯蔵室 5.75 × 9.95 57.2㎡

〃 11.00 × 3.60 39.6㎡ 主工場冷蔵庫間。

麴室 3.92 × 5.70 22.3㎡

〃 4.20 × 4.00 16.8㎡ 麴室前室ヲ改造。

作業場 78.3㎡ 水槽設備、10石酒槽設備。

釜場 9.95 × 3.90 38.8㎡ 釜ニ基コンクリート製浸漬槽。

“ボイラー室” 釜場ニ接シ工場外ニ設ク。8HP 一基

“枯シ場” 7.00 × 10.00 70.00㎡

“旧電解室” 7.00 × 5.00 35.00㎡ 現在ハ清涼飲料試験室ニ使用。

“洗場所”	10.00 × 6.00	60.00㎡	
“細菌場”	7.60 × 5.00	38.00㎡	4HP ボイラー—基殺菌箱薪切機」(26 葉め了) No 26
“包装荷造所”	17.00 × 7.2	122.40㎡	物置包装、荷造所兼用
“倉庫”	11.5 × 8.0	92.㎡	既設厩舎ヲ改造、米倉庫、製品倉庫兼用。
“倉庫”	20.0 × 8.0	160.㎡	製品倉庫兼用、精米所兼用。
“倉庫”	16.4 × 11.0	180.40㎡	製箱材料置場、製箱所、旧倉庫改造。
“事務所”	9.0 × 5.0	45.00㎡	
“職員住宅”	16. × 9.0	144.00㎡	工場主任住宅。
“労働者住宅”	15 × 7.0	05.00㎡	二軒長屋。
“自動車庫”	8 × 7.0	56.00㎡	乗用及貨物自動車庫。
“職員住宅”	10.5 × 7.5	78.75㎡	現在建築中。
設備			
“冷蔵設備”			
内訳 “冷蔵室”	7.20 × 11.00	77.00㎡	旧冷蔵室。
	7.20 × 11.00	77.00㎡	新冷蔵室。
“冷蔵前室”	7.20 × 3.50	25.20㎡	旧 5 石掛酒槽ヲ設ク。
	7.20 × 3.50	25.20㎡	新 5 石掛酒槽ヲ設ク。
“機械室”	7.20 × 3.50	25.20㎡	冷蔵機械類。
“給水設備”			
内訳 “水源地”	2.15㎡		主井二ケ、補助井一ケ、石造水槽一ケ。
“導水管”			水源地工場間、工場建物内、洗場用水道管。
“井戸”			一ケ、動力ポンプ付、洗場用。
“水槽”			鐵製 8,000 立入、旧酒精タンクヲ使用。
“冷却用水設備”			冷蔵設備（冷却用水ヲ仕込ニ使用スル為）又ハ冷蔵機械用。 （動力ポンプ付）
“配電設備”			主工場、冷蔵庫其他建物内配電設備。 変圧機ヨリ工場迄ノ配電設備。
“電話”			カンピナスヨリ直通ニテ工場内ニ交換所ヲ設ケ骨粉」 (27 葉め了) No 27.
“塙置場”			柑橘兩工場其他へ中継ス。 工場ヲ圍ム煉瓦塙ニ沿ヒテ設ク。
主ナル機械器具類			
“桶類”			
内訳 “貯蔵桶”	18 ケ		20 石入、内穿孔中ノ為漏洩甚シク使用ニ堪エザルモノ 4 ケ アリ。
“仕込桶”	10 ケ		15 石入
“珫瑯タンク”	10 ケ		12 石入 灘珫瑯タンク。
“珫瑯タンク”	2 ケ		8 石入 灘珫瑯タンク。
“珫瑯タンク”	5 ケ		3 石 6 斗入 灘珫瑯タンク。
“珫瑯タンク”	3 ケ		1 石 5 斗入（半切） 灘珫瑯タンク。

“甑桶”	10 ケ		3 石入 底ノ破損シタルモノ 7 個アリ。
“甑桶”	1 ケ		現在ハ甑桶ノ底ヲ取替エテ甑桶ニ使用ス。 其他試桶、半切、等ハ破損シテ無シ。
“其他ノ器具類”			
内訳 “酒槽”	3 ケ		10 石掛 1 ケ 5 石掛 2 ケ
“麴蓋”	460 枚		未製品 200 枚
“酒袋”	400 枚		内当地ニテ作製シタルモノ 150 枚ヲ含ム。
“釜”	3 ケ		内二ケ使用中
“殺菌箱”	1 ケ		
“ゴムホース”	50m		一吋半モノ及壹吋ノモノ。 其他米アゲ箆、杓子類、蒸取台、塙運搬台等。
“機械類”			
内訳 “洗米機”	1 台		一斗用
“洗場機”	2 台		二本立 」(28 葉め了) No 28.
“塙漉機”	1 台		6 本立
“洗綿機”	1 台		動力掛
“濾過機”	2 台		
“醪輸送ポンプ”	1 台		
“打栓機”	1 台		
“ボイラー”	2 基		4 馬力及 8 馬力。
“モーター”	4 個		用水、綿洗、洗場、冷却用水ポンプ用。
“精米機”	1 式		佐竹式堅型、5 俵掛、モーター付。
“火入器”	2 個		内 1 ケハ使用セズ。
“冷温器”	1 個		
“輪締機”	1 個		
“塙詰機”	1 台		獨逸製、6 本差シ手動。
“電解装置”	一式		現在ハ使用セズ。
“扇風機付電熱器”	2 台		麴室用
“瓦斯充填機”	1 台		清涼飲料用。
“圧搾器”	1 台		濾過綿用。
“実験室用具類”			
内訳 “実験用机戸棚”			
“各種実験用器具類、計器類及試薬類”			
“無菌箱、顕微鏡、化学天秤”			
“備品什器類”			
内訳 “事務所机類”	5 ケ		
“金庫”	1 ケ		
“ロネオ ケース”	1 ケ		
“戸棚”	1 ケ		」(29 葉め了) No 29.
“ラジオ”	1 ケ		

	“撞球台”	1台
	“タイプライター”	2台
	“本棚、タイプライター置台、書類入、其他。 “雑”	
内訳	“一頭引小車”	1台
	“乗用自動車”	1台
	“手押車”	1台
	“衝器”	3ケ
	“薪切機”	1ケ
	“電気計量器”	2ケ
	“驢馬”	一頭。

(以下略) (30葉め途中迄)

註

- 「酒造工場沿革誌」の「第三 酒造工場ノ運営」の項に、「工場ノ配員」の変遷が記述されている。その記述中、固有名詞が呼び捨てになっている唯一の人物が「黒岩重顯」であり、「沿革誌」作成当時、「酒造工場」の「醸造係 備員」(36葉め)という立場であったことと矛盾しない。
- キリンホールディングス公式HP内(トップページ>企業情報>事業内容>海外酒類・飲料) [http://www.kirinholdings.co.jp/company/business/overseas.html] 「東麒麟(あずまきりん)」は現地ブランドの日本酒としてブラジル南部の主要都市サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロを中心にお客様にご支持をいただいています。」
- INDUSTRIA AGRICOLA TOZAN LTDA. のHP内(トップページ) [http://www.azumakirin.com.br/]
- 引用史料中に登場する「Tさん」「T農學士」「T氏」はすべて別人である。
- ブラジルの地酒ピンガにライムと砂糖、クラッシュアイスを加えた定番カクテルを「カイピリーニャ」といい、ベースのピンガを日本酒に置き換えたレシピでつくるカクテルを「サケピリーニャ」と名付けた。注3で掲げた「INDUSTRIA AGRICOLA TOZAN LTDA.」HPのトップページにあるAZUMA KIRINの商材写真は「サケピリーニャ」である。
- 無署名記事「日系移民大國で広がるブラジル産の“日本”酒」『pen』368号、2014年10月発行、阪急コミュニケーションズ、42ページ記事。
- 前掲千田平一は、「東山農場の見學」にも訪れている。千田の旅行記『中南米をゆく』に農場訪問日時の記載はないが東山農場所蔵の『芳名録』に1940年10月27日付けの署名を残しており、「農場日誌」「本部日誌」の同日記事からも確認できる。千田は著書のなかに、「農場には酒造工場もあり、在伯同胞が有害なピンガ酒を常用とするところから、日本酒醸造を計畫し、昭和九年『インドストリア・アグリコラ・カンピネーラ・リミターダ』なる伯國法による農産加工會社を興して、清酒醸造販賣を開始した。此所で醸造する日本酒は『東麒麟』と『東鳳』の二種である」(千田：88-91)と記述しており、在伯同胞をピンガの害から救うためという言説が同時代的に人口に膾炙していたことがうかがえる。また、その背景としての「ピンガ飲酒の害」という認識の広がりにも、「原始林を開拓して進む勇敢なる日本人は、ピシヨとピンガの爲に自滅するであらう」という「伯國保健省の高官が、奥地に於ける日本人を視察」(千田：105)としての發言を引用するかたちで言及している。なお、ここでいう「ピシヨ」(jogo do bicho)とは当時大流行していた賭博の一種で

ある。

- 「アルコールを原料に合成酒を製出す 安くて美味・優良酒そのけ…清酒醸造界の大衝動 黒野博士が電気分解によって成功」記事、『國民新聞』1931年7月29日号。「黒野博士の電化式清酒合成法による合成酒の製造販賣のために昨年六月本所區向島請地町八〇に興國酒造株式會社が創立されて、京橋區四日市町二鹿島屋及同區北新川中井商店を元賣所として盛んに製造販賣を行ひ、現在では製造が間に合はない位の賣行を示してゐる(中略)現在興國酒造會社から賣出されてゐる「新興國」は一升壺詰定價一圓である」
- 『ブラジル日本移民・日系社会史年表』の1935年8月3日の條に以下の記述がある。「東麒麟の盛大な披露會がサンパウロ市リベルダーデ街の日本クラブでひらかれる。東麒麟はカンピーンサスの東山酒造会社の日本酒。」(サンパウロ人文科学研究所：81)

引用文献リスト

- サンパウロ人文科学研究所編 1996『ブラジル日本移民・日系社会史年表—半田知雄編著改訂増補版—』サンパウロ：サンパウロ人文科学研究所。
- 千田平一 1942『中南米をゆく』東京：第一書房。
- 森幸一 2010「ブラジル日本人移民・日系人の食生活と日系食文化の歴史—サンパウロ市(州)を中心として—」、ブラジル日本移民百周年記念協會／日本語版ブラジル日本移民百年史編纂・刊行委員会編『ブラジル日本移民百年史 第3巻 生活と文化編(1)』東京：風響社。
- 柳田利夫 2008「山本喜譽司の「ブラジル人觀」—「農場デ見ター九三二年護憲運動記」を通じて—」『海外移住資料館 研究紀要』2。
- 柳田利夫 2009「「農場日誌」を通じて見たサンパウロ州護憲革命運動—カンピーンサス東山農場所蔵「農場日誌」の紹介—」『海外移住資料館 研究紀要』3。
- 柳田利夫 2012「岩崎久彌とブラジル東山農場の創設—カンピーンサス東山農場の成立過程を中心に—」、渋谷栄一記念財団研究部編『実業家とブラジル移住』東京：不二出版。

The first Japanese sake produced in Brazil, as recorded in *Shuzo-kojo Enkaku-shi* (“history of a sake brewery”) owned by *Fazenda Monte d’Este do Brasil*

Taeko Akagi (Mejiro University)

This is a translation of the first half of *Shuzo-kojo Enkaku-shi* (“history of a sake brewery”) currently owned by *Fazenda Monte d’Este do Brasil*. This brewery was completed in 1935 in *Fazenda Monte d’Este*, a suburb of Campinas, Brazil. The brewery’s production of “Azuma Kirin” sake marked the beginning of commercial sake breweries in Brazil, and was closely linked with the footsteps of pre-war Japanese communities in Brazil. This is an introduction to the background behind the production of “Azuma Kirin.”

Keywords : Brazil, pinga, sake, Azuma Kirin, washoku

〈資料紹介〉

アメリカ合衆国戦時強制収容所内俳句集覚書¹

衆井輝子（白百合女子大学・教授）

〈目次〉

はじめに

1. ツールレーキ吟社『記念俳句集』
2. 比良吟社『俳句集靈風』
3. ポパイ之会『ポパイ句集』
4. 鶴嶺湖鮑ヶ丘俳句会『句集鮑山』
5. 満砂那吟社『句集 雪嶺』
6. 小池晩人編『草堤』ミニドカ吟社
7. 鶴嶺湖吟社『うつせ貝』
8. 右左木韋城編『慰霊句集』
9. 安井亜狂『逆縁』

おわりに

キーワード：第二次世界大戦、強制収容所、一世、俳句

はじめに

アメリカ合衆国戦時転住局（War Relocation Authority、通称 WRA）管轄の戦時強制収容所²内では、時間的余裕があり、多様な同好会活動が盛んであった。俳句もその一つである。収容所のすべてで俳句活動が行われたであろう。収容所の面積の広大さ、収容人員の多さを考えると、複数の俳句会が存在したとしても不思議ではない。そして、収容所が閉鎖されるにあたって、会の活動記録として句集が編纂された可能性が高い。しかし現在、図書館や博物館などで所蔵されている句集の発行場所を10カ所のWRA管轄の収容所別に分類すると、句集の確認されない収容所が多い。句集編纂発行までに至らなかった場合もあろうが、公的機関に寄贈されていない可能性もある。本稿では、極めて限定的であるが、これまで筆者が実際に閲覧した俳句集のみを扱う。句会によって編纂された句集、次に二世兵士を慰霊する句集を、発行年順に紹介する³。最初に句集の概要を述べ、作品のいくつかを紹介する。

俳句集の多くがそうであるように、作句年月日はほぼ、記述されていない。開戦、強制立ち退き、仮収容所収容、収容所移送、忠誠登録、隔離収容所⁴への移送、志願兵、徴兵、収容所からの転住、収容所閉鎖と、1941年末から46年春まで、日系人を取り巻く環境は、刻々と、しかも大きく変化した。いつ作られたのか明確でないことは、作者の心情を読み解くうえでは、障害となる。それでも、日系人史の予備知識があれば、作品の背景を推察できる。予備知識がなくても、句集からは収容所の生活感が滲み出ているのではないかと思う。

1. ツールレーキ吟社『記念俳句集』1943年9月10日発行

本句集は、ツールレーキ収容所 (Tule Lake Relocation Center)⁵ で発行された。活字印刷されている。表紙には、中央に「記念俳句集」、左隅に「ツールレーキ吟社」と記載され、中表紙は「記念俳句集」とのみ、中央に印刷されている。編者による「緒言」(1943年8月15日付)、「目次」、ツールレーキ吟社同人一覧、そして俳句と続き、奥付となる。「加州ツールレーキ戦時転住所内」、「ツールレーキ吟社発行」とある。挿絵はない。俳句は、新年、春季、夏季、五十会例会兼亜狂⁶全快記念句会、パインデール同人歓迎句会、右答吟、秋季、亜狂の病床へ寄書、岩山吟行句、冬季、入院の亜狂に菊を贈る、右に答へて、の順に配列され、87頁である。選句編集者は安井亜狂と林秋夕である。

「緒言」によれば、1942年6月強制立ち退き収容で、ツールレーキ収容所に集まった同好者が吟社を結成、1年2ヶ月のあいだ、小池晩人に指導を仰ぎつつ、句会60数回を重ねた。作家36名を数え、作品1万余となった。ツールレーキ収容所が隔離収容所になり、同人が出所ないし他の収容所に移送されることとなり、会の解散を余儀なくされ、ここに「我等の記念」として、2000句余りを選句し、句集を編纂することとなった。

同人は、福井春陽、藤野草湖、林秋夕、速水吟月、石井隆々、岩瀬祝夫、川島初音、近藤梅香、小川さかゑ(日本⁷)、貝原秋峰、森本糸女、森本弥山、丸山貞子、毛利白龍、松嶋魚眼、西田隆平、大家雪香、大家一素、関谷赤江女(亡)、重野流水、佐々木民泉、斉藤夏女、高木北女、田中白星、田楨二葉、多田尚女、高木吐月、植川転、安井亜狂、安井秀女、八谷九峰、弓部不老(亡)、米岡日章、安田梅撰(後蕪村)、矢野紫音女、矢成緑風が列記されている。

新年

わび住みに馴れて歌留多に打ち興じ	春陽
屠蘇もなき仮家なれど平和郷	流水
配られし餅二つ三つお元日	九峯

春

道普請シヤベルに重き春の泥	初音
行く春や平仮名綴る子の手紙 ⁸	赤江女
主婦長閑うちを外なる稽古ごと	秋夕

夏

窓若葉追はれ行く身の荷拵へ ⁹	赤江女
汗に堪へ埃に耐へて住むキャンブ	秀女
短夜を何時まで妻の貝細工 ¹⁰	秋夕

秋

長き夜や聞くにあらねど壁一重	赤江女
雁行くやアバロニ山をすれすれに ¹¹	日章
天の川四囲は山なる収容所	秋夕
笑はれて英語の夜学続け居り ¹²	初音

冬

マーブルの子にバラックは小春なる	秀女
帰り来て凍てにし髪をくしけづる	赤江女
出掛けゆくユタアイダホの大根引 ¹³	亜狂

だぶだぶの服着て霜の登校児	亜狂
手細工の神棚にして鏡餅	秋峯
わび住みて恙なき身の感謝祭	赤江女(最終句)

総じて、写生吟が多い。収容所の生活の苦しさや不満を声高に訴える句はない。それでも、収容生活が始まったころの途惑いが、やがて落ち着き、「シカタガナイ」環境のなかで、俳句を詠み、生活に潤いを持つとうとする心が伝わってくる。

2. 比良吟社『俳句集霾風』1945年1月

本句集はヒラリバー収容所 (Gila River Relocation Center) で1945年1月ころに比良吟社から出版されたと思われる。アメリカ合衆国連邦公文書館の戦時転住局所蔵の写真資料には、詩社の写真がある¹⁴。男女14名が本を手に行っている。背景の壁には寄せ書きが映っており、比良吟社の文字がうっすらと読み取れる。右上部には、「霾風記念」と白抜き文字が掲げられている。彼等が手にするのが、本書であろう。手書き謄写版刷り、リーガルサイズ半折、リボン綴じ、本文130頁、それに「はしがき」(山中俚汀 1944年クリスマス前夜)と「跋」(桜井銀鳥)、「編集後記」(俚汀 1945年1月3日)が加わる。書名は、ヒラリバー収容所の悪名高い砂嵐に困っているのであろう。命名者は、桜井銀鳥であるという¹⁵。同書はワシントン大学特別資料室に保管されているが、筆者が手にしたものは、ロサンゼルス市の通称ケイロウと呼ばれる Japanese Retirement Home のゴミ箱に捨てられていたものである。

表紙には、中央やや右に「俳句集」、その左に中抜き文字で「霾風」、その左下に「比良吟社」と書かれている。つむじ風を思わせる楕円の重なりの中に、バラックが2棟、その前面に走るかのような逞しい男女一組と、子ども一人が描かれている。男は拳を握っている。おそらくは強風に抗う被収容者のたくましさ象徴しているであろう。

収録されているのは、桜井銀鳥、吉良比呂武、佐藤一棒、山中利子、川本みさほ、黒味晴榮、山中すみゑ、山田嵐川、池田佐保子、板橋光子、田名ともゑ、石原規代、山中耿城、宇都宮義、筋師與十郎、隅田久美子、田中てる子、福山英春、佐々木一風、奥野吼雲主、江崎アラタ、藤井丸應、石原清光、庵原静子、高井勇蔵、星野百合子、金親化石、杉田玄水、津村木洋、河合志外、貞尾舍人、森脇志一、宮崎踏水、青木夫人[ママ]、雑賀花枝、斉藤とし子、田内清甫、大坪正己、田中盤山、鈴木黒光、門司春枝、前正夫、近藤弥作、井出さだ、大友夫人[ママ]、山中俚汀である。

「はしがき」によれば「この句集は比良吟社同人が、立退きより現在に至るキャンブ生活を祈念するために編まれたもの」であるという。しかし、「昨年[1943年]春」以前の例会の句抄は散逸したため、採られた句はほとんどが1943年春以降となっている。句抄には、約2000句あるが、本書はさらに選を行い、1000句程に絞った。同人のほとんどは、ヒラリバー収容所に入所してから俳句を始めた「初心者」だった。

初心者達とはいえ、「少くとも第一世の生活は、さぼてんと鉄木いちりに終始した」¹⁶ほど、時間的には余裕があり、俳材に恵まれたためか、生活感の溢れた句が多い。

本句集は、作家別、年度別に並べられているが、本稿では、便宜上、時系列に内容で並べ変えた。

立ち退き

薔薇に水たっぷり濯ぎ遠のきぬ	佐藤一棒	1942年
----------------	------	-------

新緑や匿すよしなきいきどほり 仮収容所	佐藤一棒	1942年
水打つや馬小舎暮しやや慣れて ¹⁷	佐藤一棒	1942年
空を掃くビーコン燈や天の川	佐藤一棒	1942年
チラと見し羅府の市庁舎夜の秋	佐藤一棒	1942年
勤労の奉仕を説くや夕涼み	山田嵐川	1942年
霾風のすさぶる場に吾荷扱る	山中俚汀	1942年6月27日
収容所の労働		
比良沙漠墾きて白き大根引く ¹⁸	山田嵐川	1942年
学校も鎖して行けり棉摘に	吉良比呂武	1943年10月16日
芋堀りの小春の沙漠いづくまで	黒味晴栄	1943年11月27日
乾きゆく干瓢すだれなお青く	櫻井銀鳥	1944年7月5日
茄子畑へ乏しき水をみちびきし	筋師興十郎	1944年7月14日
大いなる色眼鏡かけ菜種踏む	筋師興十郎	1944年8月2日
余暇		
鉄の木を刻む翁と日南ぼこ	山田嵐川	1942年
銀漢 [天の川] や石ころに座し歌舞伎見る	田中てる子	1943年10月16日
持ち寄りの椅子を輪づくり毛糸編む	川本みさほ	1943年12月11日
二世		
子行けり外寝 ¹⁹ のベッド置きざりに	山中俚汀	1943年8月9日
別れゆく兵士の宴スキートピー	板橋光子	1944年4月1日
短夜や兵士となりて明日発つ子	川本みさほ	1944年6月3日
征きしより絶へて沙汰なし秋の暮れ	黒味晴栄	1944年6月3日
インディアン ²⁰		
インデヤの見学団や晩稲刈	佐藤一棒	1943年
朝東風や耕馬励ましインデアン	山田嵐川	1943年
霾風		
向日葵や日もすがらなる砂埃り	山中耿城	1943年6月14日
霾風に昼を灯してメスホール	池田佐保子	1943年10月4日
クーラー ²¹		
法の座に大クーラーの据へられし	森脇志一	1943年
クーラーの水に打たす西瓜かな	櫻井銀鳥	1943年6月28日
外寝		
ざごと漏るタンクの下に外寝かな	櫻井銀鳥	1943年8月9日
外寝するビーコン燈の明滅に	山中俚汀	1943年8月10日
行事		
囚れの友の賀状や無事とのみ	山中すみゑ	1943年
雪洞を吊し繞らす踊かな	隅田久美子	1943年8月9日
別れゆく今宵一と夜の踊かな	藤井丸應	1943年8月23日
霸王樹に朝の月あり餅を搗く	石原規代	1944年1月15日
うつしゑの夫に供へし雑煮かな	田名ともゑ ²²	1944年1月15日

ヒラリバー収容所は、鉄条網も外され一般に問題が少なく「模範的」な収容所だったともいわれるが、俳句を読む限り、耐える気持ちに変わりないように思われる。

3. ポパイ之会²³『ポパイ句集』1945年1月(?)

本句集は、トパーズ収容所 (Topaz War Relocation Center) の自由律俳句会の句集である。手書き謄写版刷り、表紙は左側に「ポパイ句集」と書かれ、右側に遠景に山並み、近景に立ち木2本が描かれている。続いて目次、カット、寄せ書、巻頭言、自選句、後記と続く。日比松三郎によるカットには、見張り塔とバラックの家並みと遠山が描かれている。

本句集は、一人について、見開き2頁分が割り当てられ、後述のように、それぞれ題がつけられている。奥付に1945年1月とあるが、実際に発行されたのは4月頃かとも思われる。4月の句会記録に、「祝句集発刊」と毛筆で書かれている。

3周年を記念する句集であろうか、松野宝樹は、「巻頭言」で、タンフォーラン仮収容所 (Tanforan Assembly Center) からトパーズ収容所へ移されてから3年と記している。宝樹は、さらに、「砂漠であろうが貧土であろうが住めば住めるし人の生活のある所に芸術が生れる」と断言し、「[生命の]根強さには頭の下がる尊厳なものがある。その尊厳を代表すると言ふのではないが、この砂漠の中から生れた我々のささやかな句集、この中にも生活のオアシスと熱沙をわたる涼風位は感じて貰へるであろうと思ふ」と期待を表明し、「向上といふことを運命づけられた人間が高きものに、美なるものに向つて道を求めて行く、これも亦人間生命のたくましさであろう。その表れの一つがこの句集であるといふことにはまちがいひはない」と句集を誇りとしている。一方、後記では、「激しい此の世相の中に収容所に安閑たる生活既に三年になんなんとして居る。誠に長閑さうに見えて内省頻穩ならず言ふに言はれぬ憔悴が供ふて居る」と、激動する世界から取り残されている収容生活への焦りを吐露している。この句集は、「此の且てないアブノーマルな生活を歌つた個々の作句を寄せて見たい念頭から本集は自選輯とした事である」とポパイ之会の方針を纏めている。

同人は、府川真砂夫 (動乱日記)、古屋翠溪 (在サンタフェ、流転)、林百尺樹 (南瓜の花)、広瀬米草 (葱坊主)、細梅さよ (冬がのしかかて)、川口幹逸 (立退の日)、片井溪巖子 (松の芯)、片井京香 (雀と雀)、松野南龍 (頭とあたま)、松野宝樹 (トパズ春秋)、森本弥山 (トパズの花)、森田餘子丈 (月の顔)、森田美奈子 (我が児)、中川志満子 (椿一輪)、中村夕佳里 (朧夜の柳)、大月喜三郎 (八ツ手の花)、大月郁夜子 (赤ん坊ねかして)、塩沢轍四郎 (タンホランに追はれて)、田原紅人 (兵隊顔寄せて)、高木好文 (とんぼの目玉)、武井古流星 (闇の機音)、津村木洋 (砂漠の雨呼ぶ)、米倉久枝 (かくれん坊の顔)、米倉林泉 (遠い稲妻) である。() 内は、それぞれの題である。

以下は、句集からの抜粋であるが、時系列に並べ変えた。

連邦調査局 (FBI) 検挙、抑留所収監

月が昇るらしい闇の監視室の鉄窓	古屋翠溪 ²⁴	1941年12月
憧れの加州に来たが囚れの身である	古屋翠溪	天使島 ²⁵
大きな力にうちのめされ石を拾つてゐる	古屋翠溪	ウイスコンシン ²⁶
夏雲またも行先のわからない旅立ち	古屋翠溪	テネシイ ²⁷

開戦と混乱

身内の軍服姿をやく敵の国にゐて春	府川真砂夫	1942年1月5日
焼けるものはみんな焼いてしまつた空には春の雲	片井京香	

すべてを夢とあきらめよう木の芽ぐんぐんのびます	大月郁夜子	
強制立ち退き		
たちのくに土地に別るる人々そして我が犬	森本弥山	
市民の権利はあるものの生れた土地を追れてゆく	大月喜三郎	
べつたりと貼つた春さむい電柱が日本人立退け	大月喜三郎	
仮収容所		
湿りあるところ大根花咲き馬小舎の同胞	府川真砂夫	タンフォラン仮収容所
大ききびしさにぶつつかたとても砂塵はひるを暗くしてゐる	大月郁夜子	
住みてうまやにギダ弾きて子供の如く勇めり	大月喜三郎	
夜更を楽隊に迎えられて赤い灯に息つく	森本弥山	
バスが私達をおいたところ炎天草一としてもない	大月喜三郎	
知りたいニュースの知る由もないメスの列に皿とホーク	塩沢徹四郎	
トパーズ収容所		
どこまでも耐へよう砂漠の空を雲がぐんぐんはなれる	府川真砂夫	トパーズ収容所ハワイから収容
松葉牡丹に日覆い建て増し住みついてゐる	林百天樹	
焚火おおらかにせよとヒラ拓く我等に	津村木洋 ²⁸	
カラコロ下駄の音がシヤワーへ行く親子	松野宝樹	
男鮪を買ふてずつと暑い広場をよぎり	広瀬米草	
鷗群をなして若人鋤かへしてゐる	松野南龍	
かつたと打つたホームランのたまがひとつかみの浮雲	松野南龍	
月見てゐる一人は兵に召されてゆく	林百天樹	
はるばる逢いに帰休兵とお母さん	森田余子丈	
地平へ一本の煙と汽車の郷愁	森田余子丈	
配給服だぶだぶと行き交ふ大地凍てゐる	塩沢徹四郎	
貝殻層をなし広島訛りで喜ぶことの	田原紅人	
堰き切って畑浸す水や昼霞	津村木洋	
行進曲歌ひ感激の涙ためて顔	府川真砂夫	交換船慰問品 ²⁹ を受けて
戦況しれず夜毎の銀河を仰ぎ	津村木洋	
小供等は召され月が照る収容所の鉄柵	米倉林泉	
悲報手に割り切れぬ心を持ち雨のポストへ	米倉久枝	娘婿重傷の報

自由律俳句は、季語を入れず、五－七－五の制約もないためか、率直な感情表現が読み取れる。トパーズ収容所は、「砂漠の宝石」という触れ込みではあったが、実際には、輝かしさとは無縁の収容所であった³⁰。

4. 鶴嶺湖鮑ヶ丘俳句会『句集鮑山』1945年2月

手書き謄写版刷りである。表紙には「句集」と、改行して「鮑山」、左下に「鶴嶺湖」、改行して、「鮑ヶ丘俳句会」と楷書で書かれ、ツールレーキ収容所の風景を特徴づける鮑型の山と雲が描かれている。中表紙には、同じく「句集鮑山」、「鶴嶺湖鮑ヶ丘俳句会」が草書で記され、小鳥の巣が描かれている。

続いて、鮑ヶ丘俳句会同人名一覧（岩下蘇村、岩下睦子、森山一空、大館無涯、矢野紫音、藤井丸應、田中素風、中谷松畔、保田山晴風、鈴木黒光、今村桃村、山本潤川、山田如骨、成田栖村、池永肥州、佐々真光）がある。「はしがき」（1945年2月付、1～4頁）の後に、「鮑ヶ岡 [マ] 俳句会同人句集」が昭和十九年の部と、二十年の部に分かれ、俳句は春夏秋冬の順に並べられている。最後に「編輯を終えて」（1945年2月付、92～95頁）で終わる。

蘇村の「はしがき」によれば、日米戦時交換船で日本に帰国したはずの一空が、交換船に乗れずニューヨークから戻り、ツールレーキ収容所に送られてきた。その一空の発起で、マンザナ収容所から移送された俳句同好者が昼の句会を開き、鮑ヶ丘俳句会を始めた。すでに鶴嶺湖吟社が存在していたが、場所が遠いので行けなかったのが理由であった。やがて、再び日米戦時交換船の噂が広がると、一空はいよいよ帰国できると期待して、同人句集を発案し、句集発行となった。選句は一空である。蘇村は、「樹木一本もない殺風景な高原地帯で句種を拾ふこともなかなかのことであった」状況で、決して質的にすぐれているとは言いがたいが、「発表された句がどんなにまづかろうと斯うした高原の収容生活の中に自然を友とし乍ら暮し得る自分達を多少なりとも誇らしく感ずる」と記している。鶴嶺湖七十八食堂で記された。

一空の「編輯を終えて」によれば、第一回句会は1944年4月2日、保田山晴風居で行われ、そこで鮑ヶ丘俳句会と命名された。当初は、6～7名だった。俳句作りは、「無味乾燥なこの戦時隔離所内の生活」を潤すものであり、毎週行われた。しかし、第二次交換船以後、「殆んど絶望に近き状態に置かれ其の成行を憂慮されて居たのであるが今度思ひがけなく第三交換船の交渉成立して愈々（いよいよ）之が実現を見るに至り」、「斯くして一度この地を去れば郷里を異にする私共は或は再会を期し難き永別とならざるを保し難い」仲間の活動の記念として、1945年2月17日の句会まで同人作品数2500から670を選び、句集を編纂した。選句にあたっては、蘇村、紫音女の協力があった。原稿清書は中谷村畔、鉄筆山本茂、表紙題名は岩下蘇村だったという。

春の野に摘草ならで探る貝	紫音	1944年
立樹なき隔離キャンプや春日傘	山晴風	1944年
灌仏や異教の国の隔離寺	一空	1944年
隣よりギターの流れや春眠し	蘇村	1944年
シヤスターは澄みて遙けし種を蒔く	素風	1944年
交換船出るあてもなし種を蒔く	一空	1944年
慰問茶を頂き申す天長節	蘇村	1944年
食堂に天長節の旗たるる	山晴風	1944年
巡羅兵仰ぐ幟や車上より	肥州	1944年
水色の貝のコサージ夏めける	紫音	1944年
岩山の白十架や雲の峰	一空	1944年
囚はれの愚痴にも飽きて昼寝かな	無涯	1944年
哨兵の見下す月の踊かな	蘇村	1944年
牛蒡引く畑一坪や窓の下	如骨	1944年
体操の号令響き秋日和 ³¹	肥州	1944年
大根の干しあるメスや秋日和	松畔	1944年
駈け足の子等勇ましく霧の中	松畔	1944年
はなやかに大食堂のお餅掲	紫音	1944年

元日の床や小貝の松竹梅	紫音	1945年
校庭に出揃ふ人や四方拝 ³²	桃村	1945年
聴聞を待つ長き間の寒さかな ³³	松畔	1945年
検束の子に縫ひ急ぐ余寒かな ³⁴	素風	1945年
交換船出る噂ある二月かな	如骨	1945年

日本を選んだ隔離収容所で暮らす身であることが、17文字に託されている。

5. 満砂那³⁵ 吟社『句集 雪嶺』1945年4月

本手書き謄写版刷りである。マンザナ収容所（Manzanar War Relocation Center）で発行された。表紙には、中央に「句集」改行して「雪嶺」、左下に「満砂那吟社」と毛筆のタッチで書かれ、さらに山並みが墨絵のように描かれている。次ページには池を前に、石組みのほとりに立つ同人12名の写真がある。続いて「はしがき」、「マンザナ吟社同人」一覧、安田北湖、木村白嶺、岩下蘇村、村上聖山、土屋天眠、森山一空、山口牧村、山崎璃瑠女、小坂静子、石井千鳥、富田露光、田中素風、山田耕人、望月奇風、正親町芳喜、山田天民、池永肥州、岩下睦子、上村若舟、和泉如安、福原梅女、田中柊林、中城雲台、永井翠畝がある。句は、新年、春、夏、秋、冬で大別され、それぞれの項目が年度順に並べてある。収容は1942年からなので、夏からは1942年度がある。

白嶺による「はしがき」によれば、1945年春までに出所者が「続出」し、ついには吟社の中心的存在だった北湖も出所することになったので、「一生を通じて忘れ得ない転住所生活の記念句集」を作ることになった。収容所という「無味乾燥な幽居生活に於て、俳句により自然に親しみながら過し得た事は、吾等の欣びとするところであり、又歳月の経るに従って、之が回顧の資ともなるであらう」と述べている。

翠畝による「編集後記」（1945年4月付）によれば、1942年8月の第一句会から1945年2月第100回句会までに作成された、総句5740余句から北湖、白嶺、翠畝の三名で662句を選んだ。配列は新年、春夏秋冬。鉄筆は橋本京詩、表紙絵は、高村蘇石だという。

1942年

夏

蝙蝠や野球に暮れし収容所 白嶺

秋

追はれ来て月の枯野の仮の宿 蘇村

冬

古根株³⁶漁る群あり枯野原 天眠

この村に朽ちたくもなし暖炉燃ゆ 柊林

教会の鐘も聞えず感謝祭 白嶺

窓を射る哨戒燈や隙間風 蘇村

誰れ彼れの検拳話や焚火もゆ³⁷ 牧村

1943年

新年

元旦や老いも交りてバレーボール 牧村
箸持つも久し振りなる雑煮かな 瑠璃女

春

惜しみ焼く蔵書百卷寒き春 北湖（立退に際し）

春寒の日を背にうけて杖磨き 肥州

風の陣見あげて通る歩哨兵 蘇村

暖かや区民こぞって畑作り 北湖

軒下の短冊畑や種を蒔く 白嶺

行春や母ひとりなる志願兵 一空

夏

雲表にセラ³⁸の雪嶺や鯉幟 翠畝

薫風や釣果携え裾野路を 白嶺

水打つや別れに来たる志願兵 北湖

菜を間引く農婦一列炎天下 北湖

翳しゆく造花の菊や墓参り 翠畝

秋

盆の月ここにしづまる慰霊塔 蘇村

審問の順を待つ身や秋暑し 白嶺

拓かれしセージの原や蜻蛉飛ぶ 北湖

蟲の灯に夜々縫ふ隔離支度かな 蘇村

荷造りの鋤音淋し秋の風 千鳥

マンザナや家毎の庭の茄子の秋 奇風

爽嶺やはるばるきつる郷里便り³⁹ 瑠璃女

冬

小鬼来て菓子をねだりぬハローウイン 千鳥

1944年

新年

出征す兵もいただく雑煮かな 天眠

年玉や三月かかりし株細工⁴⁰ 翠畝

春

春めくや思ひ思ひの旅支度 瑠璃女

夏

コツコツとマンザナ大工新樹風 静子

秋

マンザナも淋しくなりぬ月仰ぐ 翠畝

朝寒や召集令状遂に来し 瑠璃女

冬

寒燈下兵の子に書く仮名文字 瑠璃女

寒月や野末に白き慰霊塔 牧村

ウイニ ⁴¹ 焼く人や冬木の幹隠れ	奇風
1945年 新年	
羅府へ行く行かぬ話や村の春	翠畝
元旦や心決めたる中西部	牧村
春	
蛇穴を出づや出所のそこかしこ	耕人
秋 ⁴²	
冬	
道しるべあれどはてなき枯野かな	若舟
鳥々の話は哀れ炉火燃ゆる	翠畝

6. 小池晩人編『草堤』 ミニドカ吟社⁴³ 1945年7月

活字印刷である。ミニドカ収容所 (Minidoka War Relocation Center) で発行された。表紙は、山並みを遠景に、川が流れ、両岸に草が茂っているペン画が描かれ、中央に草書体で「草堤」と書かれている。晩人による「選句を終えて」(1945年7月4日付)の説明によれば、山並みは「南アイダホを代表する大陸風景」で、草堤は、「ミニドカ風景の生命線」であり、「我等が俳諧道場なるが故」に句集の題としたのである。中表紙には、「川尻杏雨の霊前に捧ぐ」改行で「ミニドカの冬日静かに沈み落ち 小池晩人」と活字印刷されている。さらに、「くさづつみ ミニドカ吟社」と書かれた頁がある。その後は、1月、2月と月ごとに俳句が並ぶ。句は3頁から138頁まで。晩人による「選句を終りて」によると、1942年10月から1945年4月まで、作家158名、万を超える句の中から、133名、1139句を選び、200部作成した。句の配列は月順となっている。

晩人はこの句集について、「我等の俳句は写生を主眼としこの句抄の内容はそれぞれ我等がキャンプ生活の所産を中心とするので環境の然らしむところ、その色彩極めて濃厚なることが特徴の一つである」と評し、「私たちは全く母国俳壇との連絡を断たれ、仰ぐに師なき荒野の迷洋なるが故に、どこまでホトトギス俳句の大道を踏み誤らなかつたかに確乎たる自信はない、が、他日云ふところの米国俳句を母国のそれと比較研究するに当つてこの句抄は逸してならない資料の一つである」とその価値を述べている。

月ごとに俳句は並べられているが、1942年から1945年、キャンプの生活、政府の収容所政策、戦局はこの3年間で大きく変わった。年にはかかわりない季節の風情もあれば、時事を色濃く反映した句もある。俳句の特質と考え、あえて年代順には配列しなかった。

1月	
不断着の母に暮れたるお元日	森本糸女
凍て土や五人の娘みな木靴	関谷赤江女
雪に明け雪に暮れゆくハント ⁴⁴ の灯	深野春雨
2月	
ゆき解野を拓くと子等の泥まみれ	村岡鬼堂 ⁴⁵

3月	
息こめてひく雛の眉一すじに	炭谷半途
ツラクターの微けき音や揚雲雀	牧野苗桜
春耕や昼げの結飯手づかみに	橋田東洋子
耕や召集令の来るを待ち	矢澤一陽
4月	
弄ぶ子の手より手にそめ卵	櫻井ちどり
宵春の曲はかつぼれ酒欲しく	村岡鬼堂
キャンプの灯まばらとなりて仔猫鳴く	和泉如安
葱坊主四坪の畠の板囲ひ	関谷赤江女
5月	
トラツクの通るがほどの麦の道	山根一舟
家まわり埃しづめの裸麦	丸山貞子
6月	
短夜のニュースはげしく皆黙す	安井亞狂
ひき水の流れ豊かになすの花	矢澤一陽
セージ根に怒れる蛇の鈴高音	小池晩人
7月	
日を覆ふ砂塵のやがてしゅう雨かな	美濱八郎
夕焼や若ものたちのギターの輪	米岡日章
征く吾子につましき馳走鮭鮓	丸山貞子
8月	
薯の秋学童どれも出稼げる	改発桑女
綿吹いて大根育ちヒラは秋	吉良比呂武
9月	
薯拾ひ終れば既にのぼる月	林秋夕
大根汁煮えこぼれつつ夜なべ妻	秦歌女
10月	
渡り鳥しみじみ見あげ移動令	米岡日章 ⁴⁶
出稼ぎや手慣れぬ指に豆を摘む	香川青柳 ⁴⁷
11月	
初時雨古里捨てし身なれども	植川うたた
12月	
人の子の霊を抱きて山眠る	矢野紫音女
湯豆腐にキャンプの奢り極まりぬ	伊奈いたる
貝細工日もすがらなるろ邊の妻	林秋夕
霜の扉に更けし飛電や吾子戦死	藤岡細江

安定してきた収容所生活、その一方で、二世の出征、戦死の衝撃、明暗の対比が大きい。

7. 鶴嶺湖吟社『うつせ貝』1945年9月

手書き謄写版刷。表紙は、大小の貝二枚が描かれ、左側に「うつせ貝」と書かれている。中表紙には、中央上左側に「うつせ貝」と横書きされ、鶴嶺湖吟社と右下に書かれている。続いて、小池晩人による「句集の端に」（1945年9月1日付）があり、「ツールレーキ吟社同人」一覧、伊奈いたる、本田香雨、大家一素、小野百合子、直原信雄、上田理恵子、松下翠香、佐々木民泉、白泉城山、毛利白龍、西幸子、大家雪香、小山さかゑ、米岡日章、植川うたた、矢成緑風、近藤梅香、水戸川光雄、森本糸女がある。一覧表の次に、目次があり、新年、春夏秋冬の各部があり、挿絵が付く。さらにそれぞれに時候、天文、地理、人事、動物、植物の細目があり、「編輯後記」（1945年9月16日付）で終わる。全108頁である。

晩人の「句集の端に」の解説では、ツールレーキ吟社は1942年6月に始まり、安井亜狂と林秋夕を中心に活動し、1943年8月で活動を停止する。「忠誠組」が転出し、ツールレーキ収容所が「不忠誠組」の隔離収容所となり、メンバーが入れ替わったからである。晩人は、ここまでを前期と呼んでいる。前期の活動記録が『記念句集』である。その後9月から1945年9月までの活動の記録が本句集である。晩人は、前期の句集と本句集を比較し、総体的に、前者はやや保守的、後者は進歩的だと評しているが、この点に関しては、俳句専門家の研究を待ちたい。

植川うたたによる「編集後記」によれば、毎週の句会は158回を数え、総計6190句から、晩人の選で615句が収められた。会のメンバーは、多いときには30名を超え、少ないときは数名であったという。主なメンバーである光雄はサンタフェ、緑風はダコタに、城山はサンタフェに、いたるはダコタの抑留所に移送され、さらに翠香はシカゴへ再定住した。さらに8月14日に日本が敗戦し、収容所の閉鎖も決まった。

題名のうつせ貝とは昔海底だった関係でツールレーキ収容所の到る処にある貝殻に因んで名付けられたという。ことばの響きからも、空虚な、淋しさが感じられ、日本の敗戦に茫然自失したであろう同人らの心境が感じられる。表紙絵は日本画の俳人本田香雨の手になる。

新年の部

鄙ぶりや娘の初髪 <small>の</small> 巻きたるる	森本糸女
春の部 時候	
春寒の帰る日知らぬ旅支度	伊奈いたる
行春の砂をふくめるうつせ貝	伊奈いたる
行く春やキャンプ閉鎖の事にふれ	道原信雄
春の部 天文	
バンダナに稽古帰りの春の雪	植川うたた
春の部 地理	
春土手の昼の一刻砂つぶて	矢成緑風
春の部 人事	
我が画きし目鼻あはれに紙雛	伊奈いたる
かぶりものしかと粧ひ畑打女	森本糸女
苗床の覆に溜りし砂ほこり	森本糸女
穢土の木に彫り奉り甘茶仏	伊奈いたる

春の部 動物	
帰る雁夕べとなれば列低く	森本糸女
春の部 植物	
春の草濡れてかこめる無縁塚	白泉城山
夏の部 時候	
高原の五月の朝や暖炉焚く	毛利白龍
夏の部 天文	
五月雨や貝殻道をふみしめて	白泉城山
五月闇の山の裾なる見張の灯	森本糸女
激雷や我も怖じつつ児を抱き	伊奈いたる
夏の部 人事	
草笛や故郷忘れぬ性さびし	植川うたた
夏の部 動物	
哨塔のくると廻り夏蛙	水戸川光雄
夏の部 植物	
洋食になじまぬ妻の西瓜好き	大家雪香
秋の部 時候	
行く秋や早起夕餉の薩摩汁	佐々木民泉
秋の部 天文	
我が眉にせまる岩山天高し	森本糸女
秋風や踏みて崩れしうつせ貝	森本糸女
秋の部 地理	
秋水に映る空家と坊主山	大家雪香
秋の部 人事	
形ばかりの精霊柵や旅に居る	佐々木民泉
秋の部 動物	
遊び事とぼしき子等のばつた取	佐々木民泉
秋の部 植物	
鶏頭や兵火に離れ侘び住めり	松下翠香
冬の部 時候	
石蹴りに我を忘れて小春の子	大家雪香
冬の部 天文	
木枯のひねもす低き軒長屋	松下翠香
冬の部 地理	
冬ざるる黄色な柵と監視塔	水戸川光雄
冬の部 人事	
移り来て荷に腰かけて暖炉たく	伊奈いたる
やうやくに隙間風にも馴れて住む	矢成緑風
冬の部 動物	
廂よりこぼれて薪の寒雀	森本糸女

冬の部 植物

濡るる葉に手の荒れがまし大根引く 森本糸女
冬枯るる木もなく人等住み古りぬ 伊奈いたる

『句集鮑山』と比較すると、生活と自然を淡々と詠む、写生吟が多い。

8. 右左木韋城編『慰霊句集』1945年(?)

活字印刷である。戦死した二世兵士の慰霊のための句集で、表紙には中央に「慰霊句集 韋城編」とある。次頁には、「桀豪の朽ちぬ石碑や苔の花 韋城」と揮毫がある。

息子が戦死した俳人の藤岡細江が「序」（1945年2月末日付）を寄せている。日米戦争という、父母の祖国と自分の国との戦争に直面した二世の心境を、「げに孝ならんと欲すれば忠ならず、進退茲に谷まつたであらふ」、と細江は同情する。そして「彼等は堂々たる市民でありながら、兎もすればその生国より継子扱ひされ、父母が永年苦辛の末に築き上げた基礎さえも、今は跡かたなく覆へされて仕舞ったのである」と、二世に対するアメリカの理不尽さ、二世の苦境を認め、それにもかかわらず二世が、「教へもせぬ武士道をわきまへ、大和魂を發揮して、唯だ一念大義に殉ずるの覚悟を固め、勇往邁進、一つは以て国恩に報ひ、一つは以て民族の将来に備へんといいたしました」、と二世を称える。帰化不能外国人である親として、「私共はどうかこの尊い犠牲を空しうせず、其の遺志を体して実行にうつし、英霊に応へ毅魄に捧ぐべきではありませんるか」と述べ、さらに「熱涙の綴り」で、戦没二世に対するささやかな献句集編纂の労をとった韋城に謝意の言葉で結んでいる。

「芳魂」では、アマチ収容所以下10収容所、さらにハワイ他出身戦没兵士209名、戦没日一覧が掲載されている。そして、『句集逆縁』から抜粋された藤岡無隠の「父の言葉」が続く。

「なだめ」で各収容所および他地域からからの俳句が23～70頁まで掲載されている。奥付はない。

アマチ収容所

冬ともし見入る写真の無邪気顔 藤野草湖
春浅く造花持ち寄り慰霊祭 伊奈省英
凍傷もいとはざりしに今は在らじ 湯木三丘

ハート山収容所

冬なぎや柩にかけし星條旗 菱木無香
高杖の半旗に集ふ余寒かな 堀内和歌子
慰霊祭老の仰げる時雨雲 壱岐ダ城
民族の誉れは悠久に菊薫る 金井哲洲
凍道を人のつづけり慰霊祭 村上石友

ミニドカ収容所

炳話のよき子なりける憶ひ出で 小池晩人
暴風雨つぎつぎ若葉ちぎれ飛ぶ 中曽根愛山

マンザナ収容所

星條旗染めて雪野に逝きし子よ 安田北湖
諦めつ諦めかねつ落椿 山崎玻璃女
征し子の悲報受たり寒燈下 山口牧村

ポストン収容所

星條旗掲げて静かや東風の宿 小島静居
リバース収容所⁴⁸
二世子に国はありけり菊薫る 櫻井銀鳥
フランスの雪だよりして散華にしか 佐藤一棒

ローア収容所

祭壇のバラに埋まる写真かな 本田了水
冬日置く椅子おごそかに慰霊祭 保田白帆子

鶴嶺湖収容所

菊提げておとなしき子や慰霊祭 織田生月
花セーザ砂丘に佇ちて黙祷す 保田山晴風

トバズ収容所

果しなき散華かなしく年暮るる 香川青柳
慰霊祭天も応へて雷鳴す 紫無絃

ビクトリア 加奈陀

梅の花かほる異国にこぼれても 甲山小百合

他地域

極楽に兵の魂初日の出 プロバン一羽（ポストン）
吹雪野に戦いぬいて友等逝きぬ 岡崎枕流（キャンプシュルビー）
兵の子の写真に菊や昼灯 アイ良春海（ヒルクレスト療養所 加州）
木枯の身にしむ夜を語りけり 堀内孤舟（レイトン、ユタ）
フランスの野の静かなれ花ポピー 登張風鯉（ソルトレーキ市）
吾子植えし向日葵盛り慰霊祭 岡田季雄（スポーケン市）

9. 安井亜狂『逆縁』1945年

表紙に「逆縁」とあり、中表紙には色紙に毛筆で「逆縁」と書かれている。さらに次頁には、活字体の「英夫追善」、英夫の兵士姿の遺影、英夫の書簡（1944年10月2日付）と続く。その後、一頁2句ずつ、各地から寄せられた英夫追善句が、36頁まであり、37頁は父亜狂の、38頁は母秀女の句が掲載され、句は終わっている。さらに、「父の言葉 安井政太」、「母の言葉 安井秀野」が付されている。本句集は活字印刷されている。奥付はない。

「父の言葉」によれば、英夫の誕生日に戦死の電報を受け取ったという。「パープルハートとその覚書は言はばお前の二十五年の生涯のデプロマとなつた」と気丈に記しているが、英夫に送った書簡や小包が送り返され、戦死の報を受けた衝撃はいまだに消えない。亜狂夫妻の元には各地から甲句が寄せられてきた。それを小冊子にまとめ、保存することで、英夫の存在を永遠のものにしたかったのであろう。

「母の言葉」では、まず英夫の略歴が記される。1919年11月9日、ワシントン州レニア山麓のサムナーで生まれた。まもなくオリンピック半島に移り、すぐにシアトルに転居する。その後も転居は続くが、英夫はワシントン大学に入学、あと一学期で徴兵される。やがてヨーロッパ戦線へ赴き、イタリアで負傷、3週間後復隊してフランス戦線へ、1944年10月22日戦死。兵士になってからも、病父を見舞って、ツールレーキ、ミニドカの収容所を訪問した。淡々と略歴を綴ってはいるが、「人

目も恥ぢず、おん前に泣き崩れて神よ、いつまでも英夫の上に加護あらせ給へとひたすら英夫の冥福を祈るのであります」と結んでいる。

潔く消え果てにけり霜の花	藤岡無隠
輝けるおん面ざしや冬の星	藤岡細江
母の手にかへる日もなく秋更くる	原野菊
十字架のみもと安けく菊真白	秦歌女
紅葉焚く煙にむせび老二人	香川青柳
つつ音を冬野に聞いて偲ぶ君	梶田福女
菊散るや幾世に尽きぬ香の誉	近藤梅香
フランスの枯野の血汐苔むすや	小池晩人
木枯や子の訃にこもる畏友のいかに	毛利白龍
霜寒し膝にしみ込む涙かな	左右木韋城
冬灯やただならぬ世のさかさごと	関谷赤江女
軍服のうつし絵悲し菊の壇	白田葉子
人の子の霊を抱きて山眠る	矢野紫音女
寒燈を点じて老ひの忌籠	安井亜狂
菊の塵掃いて逆縁忌籠	安井秀女

韋城編『慰霊句集』と比較すると、『逆縁』の句の方が個人的な情感がこもっていると思われる。前者は二世兵士全体に対する慰霊句である。後者は、友人の子息という明確な対象の死を悼む句であるからであろう。英夫を個人的に知っていた場合もあろうし、息子を失った友人の心境を容易に察することもできた。そのために、一人の兵士の死を共感をもって詠めたのであろう。

おわりに

本稿は、収容所で発行された俳句集全てを網羅するものではない。資料的には、強制収容所内の俳句吟社の動向と内容を俯瞰するには限界がある。個人句集は除かれている。また、個々の句集の個々の作品や作家について詳しく紹介したものでもない。しかし、WRA 管轄の収容所の俳句集の発行の有無の確認、活動記録の追跡、さらに俳人の本名と経歴を特定する作業は今日では極めて困難であり、その解明を待っている間に、現在個人等に保存されているかもしれない句集が廃棄されることを恐れ、本稿をまとめた。強制収容所で発行された俳句集、そして短歌集、川柳句集への関心が高まり、句集が図書館等に寄贈され、保存されることを期待する。

註

¹ 本稿は、拙稿「アメリカ合衆国敵性外国人抑留所内の短詩型文学覚書」、白百合女子大学 言語・文学研究センター『言語・文学研究論集』11号、2011年3月、55-69頁を補完する。本稿の資料閲覧に関しては、2010年度～2012年度日本学術振興会科学研究費基盤研究（C）22510276「南北アメリカ移民地短詩型文学の発掘保存と社会史的活用に関する基礎研究」、2010年度～2012年度JICA 横浜海外移住資料館学術研究費「海外移住資料館所蔵文献資料の拡充と学術的活用の探究」、

2013年度～2014年度白百合女子大学学内研究奨励費「アメリカ合衆国強制収容所における日本語文学作品の発掘・保存・分析」の助成を受けた。

- ² 公的には relocation center と呼ばれた。転住所とも訳される。その訳の方が強制収容所よりも適訳である。relocate とは再配置する、引越するなどの意味を持つからである。しかし、実際は、立ち退き収容はアメリカ軍による強制執行であり、収容所は鉄条網に囲まれ、銃剣をもった兵士が監視塔から見張る施設だった。
- ³ 個人句集に関しては稿を改めたい。
- ⁴ ツールレーキ収容所が隔離収容所とされた。対象は、日本への「帰国」を申請した者、「忠誠登録」と呼ばれる質問用紙の質問 27、28 にイエスと答えなかった者、アメリカ政府が日本に忠誠だと判断した者だと言われる。
- ⁵ 鶴嶺湖とも標記される。
- ⁶ 本稿では、句集に記載されている表記を用いた。過半は雅号である。
- ⁷ 第一次日米戦時交換船で日本へ帰ったのであろう。日米戦時交換船については糸井輝子・村川庸子『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究』（トヨタ財団助成研究報告書 1992年）参照。
- ⁸ 二世は、日本語学校（放課後、あるいは土曜日の補習学校）で日本語を学ぶ場合もあったが、日本語能力は低かった。
- ⁹ 「追はれ行く」という言葉から、強制立ち退きであろうか。
- ¹⁰ 収容所地帯はかつては海底で、貝殻まじりの土壌で、日系人は貝殻を拾い、洗って、造花やブローチなどさまざまな工芸品を作った。
- ¹¹ 鮑山とも呼ばれる。ツールレーキ収容所を特徴づける低い岡である。
- ¹² 教師役は年若い二世であろう。一世の日本式英語が笑われるのであった。
- ¹³ 収容した日系人を、労働力不足を補うために、低廉な季節労働者として所外で働かせた。
- ¹⁴ この写真は、現在、“Gila River Relocation Center literary club”で検索し、<http://jpg1.lapl.org/pics09/00004273.jpg> で閲覧できる。2014年7月15日アクセス。ヒラリバー収容所は、比良収容所とも記される。
- ¹⁵ 「編集後記」
- ¹⁶ 「跋」鉄の木とは iron wood で、非常に堅い。この木を加工するのがブームとなった。収容所内の工芸品については、Delphine Hirasuna, *Art of Gaman: Arts and Crafts from the Japanese American Internment Camps, 1942-1946*, Ten Speed Press, 2005 参照のこと。
- ¹⁷ 被収容者の大半はロサンゼルス出身、それにフレズノ、サンタバーバラなどから立ち退いた日系人が収容された。最大 13,348 人を数えた。ロサンゼルスから立ち退いた日系人は、まずサンタアナ競馬場を転用した仮収容所に収容され、後にヒラリバー収容所に移された。
- ¹⁸ ヒラリバー収容所の植生はメスキート (mesquite)、メキシコハマジシ (creosote bush)、サボテンなど砂漠地帯特有の風景を見せていた。この砂漠を日系人は灌漑し、農業地へと土壌改良し、ピーツ、にんじん、セロリ、大根などの野菜や綿花やアマを生産した。収穫期には 1000 名の労働者を雇い、他の収容所にも出荷したという。養豚、養鶏、牧畜も行った。
- ¹⁹ 室内では暑すぎるので、外にベットを出して寝た。
- ²⁰ ヒラリバー収容所はアリゾナ州フェニックス市の東南、夏には平均気温 40 度以上になる。砂漠のヒラリバー・インディアン居留地にあった。
- ²¹ ヒラリバー収容所の建物は、壁面は白い板で、屋根は赤い石綿板で覆われた。砂漠の熱射対策だ

と言うが、遠目には見栄えがしたという。さらに、近接するポストン収容所と同様、「クーラー」の設備があった。ポストン収容所のクーラーの説明をきくと、「ポストンでは、コロンビア川から水をひき、収容所の各棟に水槽をつくり、収容所の周りには溝が掘られて、その溝に夜、水槽からの水を流して土を湿らせ、建物のまわりに花や木を植えたそうです。又、窓に枠を作り、外側には針金より太く、薄いメタルで網を作り、その枠の中には枯れ草を詰めて、水槽からの水を浸み込ませ、屋内ではシアーズのカatalogから買った扇風機を回すと、部屋に涼しく、湿り気のある空気が入ってきて気持ちよかったです」とのことである。Toshiko McCallum 氏からのメール回答。2012年10月5日。ロサンゼルス全米日系博物館ボランティアのベープ・カラサワ氏からの聞き取り。

- ²² 夫、田名大正は、開戦後、司法省管轄の抑留所に収監された。田名大正著、田名ともゑ編『サンタフェー、ローズバーグ抑留所日記』山喜房沸書店、1976年参照。
- ²³ ポピイの会は、『層雲』の記事によれば、1936年7月号に、オークランドの自由律の俳句会として登場する。
- ²⁴ 開戦直後にFBIに検挙され、ハワイで収監され、本土の司法省管轄の抑留所に収監された。「サンタフェ日本人収容所人名録」(1945年10月1日)によれば、ホノルル市の家具商であった。戦後布哇タイムズから『配所転々』(1954年)を出版している。その著者略歴によれば、ホノルル日本人商工会議所会頭など諸団体の役員を務め、指導的立場にあった。開戦直後の12月7日午後4時に拘引された。
- ²⁵ サンフランシスコ沖合にある Angle Island のこと。移民局が置かれ、移民の入国管理を行っていた。
- ²⁶ 陸軍省の管轄する Camp McCoy に収監された。形の良い石を拾い磨き上げるのである。
- ²⁷ 陸軍省管轄の Camp Forrest に収監された。
- ²⁸ ポピイの会のメンバーであるが、ヒラリバー収容所に収容されている。
- ²⁹ 第二次日米戦時交換船によって日本から、茶、味噌、医薬品、図書、楽器などの慰問品が届けられ、戦時収容所や抑留所の「在米同胞」に配付された。『慰問品うれしく受けて』—戦時交換船救恤品からララ物資へつなく感謝の連鎖—『JICA 横浜 海外移住資料館研究紀要』2号(2008年1月)11-24頁参照。
- ³⁰ Yoshiko Uchida, *Desert Exile*, University of Washington, 1982, p.105.
- ³¹ ツールレーキ収容所は、日本への帰国希望者らも収容しており、「祖国」に帰還したときに備えて、若者たちを中心に早朝鍛錬としての体操やランニングが行われていた。「ワッショイ」と掛け声をかけながらランニングをしたので、「ワッショイ組」とも呼ばれた。
- ³² アメリカに「不忠誠」の隔離収容所として、他の収容所よりも「日本」色が強かった。
- ³³ 日本への帰国希望確認、アメリカ市民権放棄の意思確認、騒動の調査など、審問は何度も繰り返された。
- ³⁴ 「即時帰国」や待遇改善を求め、過激な運動を展開したとして、「報国青年団」のリーダーや、市民権放棄者らが多数逮捕され、司法省管轄の抑留所に移送された。
- ³⁵ 満座那とも標記される。
- ³⁶ 磨き上げ、飾り物にしたてた。
- ³⁷ 1942年12月5日に発生した、「マンザナ暴動」と呼ばれる事件を詠んでいる。
- ³⁸ Sierra 山脈のことである。
- ³⁹ 交換船で運ばれた日本からの赤十字通信であろう。
- ⁴⁰ 木の根や古株を利用して、さまざまなものが作られた。

⁴¹ wienie, weenie などと書かれる。ソーセージのこと。

⁴² 秋はない。

⁴³ 峯(峰)土香とも標記される。

⁴⁴ ミニドカ収容所はアイダホ州ハントにあり、ミニドカ収容所の別名としても使われた。

⁴⁵ 1943年8月に、本多華芳とともに一周年合同追悼記念句会が設けられている。

⁴⁶ 収容所への移動、忠誠登録によるツールレーキ収容所への移動、出所を促す移動とも考えられる。

⁴⁷ 一時出所であろうが、仮収容所でも一時出所はあった。

⁴⁸ ヒラリバー収容所の別名。

引用文献リスト

論文

糸井輝子・村川庸子『日米戦時交換船・戦後送還船「帰国」者に関する基礎的研究』（トヨタ財団助成研究報告書 1992年）。

糸井輝子「『慰問品うれしく受けて』—戦時交換船救恤品からララ物資へつなく感謝の連鎖—」『JICA横浜 海外移住資料館研究紀要』2号(2008年1月)11-24頁。

糸井輝子「アメリカ合衆国敵性外国人抑留所内の短詩型文学覚書」、白百合女子大学 言語・文学研究センター『言語・文学研究論集』11号、2011年3月、55-69頁。

著書

Hirasuna, Delphine, *Art of Gaman: Arts and Crafts from the Japanese American Internment Camps, 1942-1946*, Ten Speed Press, 2005.

Uchida, Yoshiko, *Desert Exile*, University of Washington, 1982.

田名大正著、田名ともゑ編『サンタフェー、ローズバーグ抑留所日記』山喜房沸書店、1976年。

古屋翠芳『配所転々』布哇タイムズ社、1964年。

雑誌

層雲社『層雲』

A Study on Japanese Immigrant Haiku Collections in WRA Camps in the US

Teruko Kumei (Shirayuri College)

This study is an interim report on haiku poems written by Japanese immigrants while staying in WRA camps. It is highly likely that each camp had at least one active haiku coterie group which would have compiled a collection or anthology of haiku poems as a memento of their camp life, only six collections have been found. This report surveys eight collections, including two that were dedicated to the Nisei soldiers killed in action. After a brief description of each collection, some representative haiku poems are presented.

Keywords: World War II, WRA Camps, Issei, Haiku

〈資料紹介〉

菅野武雄「最後の手記」(三)

—日本で「日本人」になった日系二世の生活と思想—

柳田利夫（慶應義塾大学・教授）

〈目次〉

解説

本文

キーワード…日本学生協会、日系二世、学徒出陣、日記

〈解説〉

本稿では、菅野武雄が湿性肋膜炎のため武蔵野療園で療養生活を続けていた一九四一（昭和一六）年一〇月、日本学生協会全国代表者会議で発表され、後に大きな問題となる『思想戦闘綱要』についての言及から、翌一九四二（昭和一七）年六月の日本学生協会の解散を経て、同年末に学生運動の拠点の一つであり、菅野たち現役学生にとっては生活の場でもあった正大寮が解散となる迄の一年強にかかわる手記を翻刻する¹⁾。

日米開戦を挟むこの時期に、日本学生協会の運動は最後の高揚期を迎えるが、運動の当初の目的であった学生による教育改革、学術思想改革から、精神科学研究所の指揮下に、総動員体制、軍主導による長期戦論などに対する現体制批判を主軸にした政治的発言へと「開展」してゆく。協会創設時の支援・理解者の顔ぶれや、時代状況に鑑み、当初は日本学生協会の活動に一定の理解を示していた文部省当局も²⁾、「言論、出版、集会、結社等臨時取締法」³⁾の施行を一つの契

機として彼等の運動に圧力を加えてゆくようになり、結果的に日本学生協会の解散、ついには現役学生の毎日の生活の場であり全国学生運動の象徴でもあった正大寮の解散へと、事態は急速に動いていった。生活の拠点を失い、各地の「前進基地」へと分散していった現役学生たちの苦悩の時代が始まることになる。

この間、アメリカ国籍を放棄し「日本人」になっていた菅野も、日米開戦にともなう日系人の強制収容等が伝えられるなか、家族の身上を危惧するだけでなく、アメリカからの送金という唯一の収入の道を閉ざされた彼自身の経済的・物質的な基盤についての危機感を募らせていった。手記の中では余り言及されてはいないが、菅野が面倒を見ていた義理の姉妹たちの成長と将来、彼自身の恋愛、結婚問題なども重なり、病を克服して間もない菅野は学生運動に身を投じながらも、日米開戦を契機に物質的にも精神的にも時とともにかなり追い込まれた状況に置かれていった。

三ヶ月近くに及んだ療養生活をおえ、一月二六日に正大寮に戻った菅野は、三〇日、大林、額賀らに上野駅まで送られ、病後の静養のため叔父夫婦の住む本宮へと帰省した。彼の病気を心配したアメリカの両親からの送金により、翌春までひとまず穏やかな静養生活に入る。ほどなくその本宮の地で、日米開戦の報に接することになる。日本人になった菅野の感激と「解放感」、高揚した様子は、当時の多くの日本の大衆と何等選ぶところはない。一九四一年を振り返り、菅野は次のような述懐を認めている。

「本年度は、四月入学以来、七月学生協会に入り、次いで八月肋膜炎を発し、三ヶ月の病院生活を経て、故郷本宮にて静養する身とはなれり。実に思想的、学術的、又肉体的、且家庭的に変化を来せし時代なり。なれど、よくこの困難に打ち勝てり。唯強く祖国の生命に生きむのみ。其が余の使命なり。唯一人思ふは、両親、兄弟の事のみ。思

へば夜も寝ねられず。一人苦るしさに絶えざる時あり。其の時静かに御集に依りて、主が身の苦るしみも、心展かる、の思ひす。我は強く生きむ。大東亜戦争の真只中に、祖国生命に随順しつ、」(日記抄)

本宮では、知己の多くが既に故郷を離れ、就中、少なからざる同級生が出征している現実を改めて直面し、自らの置かれた状況に忸怩たる思いを抱きながらも、何人かの友人との再会を果たし、旧交を温め、穏やかな生活を重ねていたようである。体力の回復と共に、菅野は一方でアメリカからの送金が期待できない状況下での経済基盤を模索しつつ、他方、前年一〇月一六日に公布即日施行された「陸軍・文部省令第二号」⁴により、二月に二三才を迎え徴集猶予期間が切れることになったため、復学の準備と同時に、徴兵検査を受けるための手続きを進めていった。前者については、福島で親類縁者と様々な交渉を重ねるが何等解決策を見いだすことができず、策に窮した菅野は、アメリカの両親と連絡が取れないまま母親名義の郵便貯金に手をつけざるを得ない状況に追い込まれてゆく。後者については、一月末に一度上京して中野区役所に寄留届を提出、四月に静養を終え再び東京に戻り、復学して正大寮での生活を再開して間もない四月一三日、中野区役所で徴収猶予期限の切れた学生を対象とした臨時徴兵検査を受けている。その結果、「昨年以来の胸部疾患に加ふるに、近視乱視」のため、「第三乙種合格・第二補充兵」となり、現役徴用を免れた菅野は、「数日は失望の為、悶々と日を送らねばならなかった」と記しながらも、「一兵たる事を恐れる意識もあつた」と安堵の思いも同時に認めている。

改めて正大寮での生活を再開した菅野は、新入寮生からなる第四班に振り分けられる。前年八月、病を得て最後迄参加できなかった日本世界観大学(第三回)にも参加し、また、早稲田大学精神科学研究会の活動にも積極的に関与してゆくようになる。しかし、表面的な学生運動の高揚と活発な活動とは裏腹に、個人的な問題を抱えた菅野は、次第に運動に対する違和感と、内面的な空虚さとに襲われてゆく。

運動を志望する新たな学生が各地から参集して来た当時の熱い想いは望むべくもなかった。「(合宿に参加した「同志」も)相会つた日のよるこびの色よりも寧ろ戦の疲れの色が濃いのだ。之では駄目だと痛感した高木君や田中君は意見を言つてゐたが一般に口をとござしてひらかぬのは何故であらう。『われわれは同志ではないか』といふ意識が再び強烈に胸をうつつて来た。何故思ふことを言はないのか!」⁵といった合宿初日の参加者自身の苛立ちに、学生協会解散後の合宿の雰囲気如実に表現されていた。

合宿五班の責任者を委ねられた菅野であったが、自己の個人的な煩悶と同時に、それまで感じてきた運動のあり方や正大寮の生活における違和感が伏線となり、同じ五班の正大寮生二名とともに合宿中に飲酒、門限破り事件を引き起こす。学生運動の象徴的存在であった正大寮の寮生三名の逸脱行為を契機に、学生の中に蓄積されていた様々な運動そのものへの不安とそれと背中合わせの「確信」の薄弱さに対する自己嫌悪、全体的な雰囲気飲まれていた同信集団のあり方への素朴で本質的な疑いや躊躇が表面に浮かび上がってくることになる。

菅野は学生運動の掲げる理念そのものに挑むことは一度たりともなかったが、帝大出身者を中心とする優越感、エリート主義、自己満足、それに対して、日々現実的な生活の問題に煩悶している自分を引き比べ、運動の中心となっている幹部や若い学生達の現実生活についての経験の浅薄さに起因する空虚な議論にいたたまれない気持ちを抑えきれなくなっていた。原理主義的日本主義に依拠する学生運動は、遠い目標や理念においては予定調和的で直感的な「同信」の世界であり、それを議論することはとりもおさず、運動からの離脱を意味した。菅野は結局、運動の理念そのものを議論の俎上にのせる方向に向かうことはなく、運動の進め方や、指導者層のあり方に、自分が共有できないものがあると認識し、それを、ヒットラーの『マイン・キャンプ』

日米開戦とともに思想統制が強められるなかで、確信的に政治的な発言を繰り返していった日本学生協会では、一九四二年二月の時点で、既に当局の圧力による解散の可能性についての憂慮が内部で表明されていた。六月になり、それは現実のものとなり、詳細な議論や決定のプロセスを確認する史料を見いだすことはできないが、日本学生協会は都下代表者会議を開き、自主的な解散を決定する。正大寮を拠点とした学生達は、精神科学研究所の「指導」の下、協会解散後も、都下同志三〇名を単位とする政治・経済・文化の三つの分科会(学習会)、合宿、地方巡廻と、公にあるいは秘密裡に、様々な形で活動を続けていった。

菅野はその後も早稲田と正大寮双方の活動にかかわり続け、七月一日、第一早高の鶴沼合宿、一七〜一九日には全国合宿のための準備会議、二六〜二九日には第一早高の逗子合宿、さらに八月には、全国学生同志を集めての西教寺合宿が実施される予定となっていた。焦燥感に駆られたかのような活動の連続の中で、寮内で三班に「進級」していた菅野自身の個人的な煩悶もまた時とともに深まっていた。

西教寺合宿五班の責任者に任じられ、その準備に邁進していた菅野ではあったが、早稲田大学精神科学研究会内部での個人的な路線対立も加わり、遂に二六〜二九日に実施された同研究会主催による第一早高逗子合宿に、急用と称して参加せず、本宮に一時帰省してしまふ。常磐湯元に一泊湯治に出かけ自分なりに気持ちの整理を付けようと努力した菅野ではあるが、結局何等結論を引き出せないまま、ざりざりの夜行列車で坂本の西教寺合宿へと駆けつけてゆく。

西教寺合宿は、かつて菅野が参加し、学生協会を知る切っ掛けとなつた御嶽合宿とは全く異なつた雰囲気の中で開催されていた。なによりも学生協会そのものが既に自ら解散しており、全国合宿と銘を打つても、その実、「ひとたび死んだ」会員達による同志の結束を「確信」する、という後ろ向き目的を持った集会とならざるを得なかつた。

に言及されている「政綱立案者」と「政治家」というカテゴリー分けにより納得し、受け入れてゆこうとした。自らを現実生活の中で、個々の具体的な問題をその時の状況に応じ解決し前進してゆく現場の「政治家」と位置づけ、「政綱立案者」が独自の存在意義を持つ事を認めながらも、自らの生き方としては峻拒してゆく。

同年の学生よりは年長であり、かつ北米での苦渋の生活経験を重ね、さらには頼るべき家族のいない日本で毎日の生活に対する大きな不安と問題を抱えた菅野は、「学生気分を抜けない」、観念的な運動の進め方に強い違和感を覚えてゆくようになっていった。帝大出身者によって占められている運動の幹部達に見られる、私学に対する官学の優越意識、階級組織に近い正大寮内の班編制などもまた、彼の中で運動への距離感を深めてゆく切っ掛けとなつた。菅野は、次第に自身自身の運動の軸を早稲田大学精神研究会へと移してゆくが、それでも既に述べたように、また別の種類の疎外感を感じてゆくことになる。

八月一〇日、合宿から正大寮に戻つた菅野は、翌日からは野外訓練の為、軽井沢に向かった。野外訓練において担当教官から小隊長としての行動を褒められた菅野は、そこに別の種類の充実感と喜びを見いだしたかのように見える。後に、早稲田大学の政治学科学生委員に任命され、戸塚グラウンドで二万人の学生に号令を掛けたことを、「みじめな」学生時代の数少ない「楽しい話」として晩年まで心に温めている⁷。

九月九日からは学年末試験に、早稲田大学精神科学研究会の主催する合宿での下級生の指導に、更には、種々の会合への参加と、全く休む間もなく活動に熱中した後、九月二五日から翌月三日まで、岡山の兄嫁の実家を訪れ、家庭的な雰囲気の中でようやく休息の一時を過ごす。一〇月三日、豪沢駅を出発し、西教寺合宿の際の田所の演技過剰とも言える楠木正成の桜井の別れの朗読にちなみ、その時の同志との

別れを想い起しつつ、途中湊川神社を参拝し、四日には帰京した。ほどなく、菅野は正大寮で第二班に「昇格」した。

一方、早稲田大学精神科学研究会では、独自の学生寮である雄建寮建設計画をめぐり、菅野もまたその実現に奔走するが、程なくその計画も挫折する。一〇月一二日には、地方との表だった連絡の道が閉ざされるなか、正大寮の学生による地方巡廻が計画され、残された数少ない「同志」を手がかりに、新しい運動の担い手を求めて、全国高専巡廻合宿の出発式が持たれた。菅野自身は、健康上の問題もあったとは思われるが、これらの巡廻に最後迄一度も同行することはなかった。一〇月一九日～三〇日には第四回日本世界観大学が開催され、それに参加しつつも、かつてのような熱い姿勢を菅野に見る事は難しい。しかしながら、十一月一三日には早稲田大学精神科学研究会出発式を松陰神社に催し、早稲田の学生運動の「前進」活性化に奔走するなど、早稲田、正大寮双方の運動に関わる活動を続けてゆく。

そのようななか、一二月七日、突如正大寮解散の申し渡しがあり、それを予期したかのように、菅野は一〇日には淀橋区柏木に新しい下宿を決め、一三日には早々に転居を終え以後の生活の拠点を確保した上で、二四日に予定されていた正大寮の解散式を待つことなく、二二日には年末を本宮で過ごすべく帰省の途についてたのであった。

今回紹介する手記では、これまで同様、写経を思わせるような学生協会出版物などからの執拗とも思われる長文の引用が繰り返されているが、それと同時に、彼自身の言葉による饒舌な議論も随処で展開されるようになってきている。また、療養生活を契機に、盛んに和歌を讀みはじめ、百首をこえる彼の和歌（シキシマの道）や長歌を通じて、彼の感情や意識が積極的に表明されるようになってきている点も見逃せない。多分に三井甲之に影響を受けたとおぼしき菅野の多数の和歌は、語彙、形式を含め、かなり型にはまった獨創性を欠くものが多く、

共ニ七世報告ヲ誓ヒ、靈魂ノ永遠ニ現実日本国土ニ留メラレムコトヲ祈願ス、ソハ三世ヲ分タザル祖国生命ヲ防護セム為ナリ

第三、歴代詔勅御製ヲ拜誦シ、しきしまの道ヲ実修ス、ソハ新シキ国民宗教儀礼ニシテ、マタ国民芸術ノ大道ナリ、責務果遂ノ為ノ不断ノ苦闘ハ日本固有ノ道徳もの、ふのみヲ復興セム、我等ハカクシテ生ノ全意義ヲ認識ス

第四、最高価値ハ人類精神ノ交流世界ニ於イテ証セラルベシ、故ニコ、ニ世界皇化ノ経緯アリ、世界的動乱ハソノ契機ニシテ祖国防護戦ハソノ方途ナルヲ明ラカニスルニ於イテ政治ノ真意義ヲ示サザルベカラズ

第五、支那事変ノ急速根本的解決ハ聖勅ノ嚴命シ給シ世界情勢ノ要請スルトコロニシテ、断ジテ曠日弥久ヲ許サズ、我等ハ【p143】之ヲ妨グル内外一切ノ障害ニ対シテ同志ヲ糾合シ死闘セムコトヲ宣言ス

第六、明治以来国家国民生活ノ万般ニ関シ、正シキ指導育成能力ヲ欠ケル現代教育ノ根源的改革ヲ期ス、教育改革ノ枢軸ハ學術改革ニシテ、殊ニ帝国大学々風ノ徹底的刷新、積極的建設ノ為、我等ハ全學術能力ヲ傾ケ激戦精進セムトス

第七、家庭、学校、軍隊、職業ヲ一貫連結シ、新聞、雑誌、劇、映画ソノ他ノ公共文化機関ノ活動ヲ羽翼トスル教育国家体制ノ生成ヲ期ス

第八、我等ハ日本国体ニ反逆シ人類ノ死敵タルマルキシズムノ徹底的剿滅ヲ期ス、一連ノ素質的マルキシズムニ対シテモ些カモ仮借スルモノニ非ズ

第九、所謂現状維持対革新ノ概念的区画。ヲ一刀両断シ、共通スル無原理ト下精神的弱力トヲ照破令活シテ、全国民協力ノ唯一道ニ邁進セムトス

第十、現下経済論ノ紛糾ハ畢竟国体觀念ノ不明徴ニ淵源ス、我【p144】

等ハ所謂資本主義、社会主義、或ハ皇道経済等ノ名義ヲ以テスル凡ユル恣意ノ空論ヲ斥ケ、古今ノ史実ニ鑑ミ、現前情勢態ニ即シ、中正ナル認識ヲ定立シテ、国論ノ趨向、施策ノ進路ヲ批判決定セムトス、我

彼の心の葛藤や揺らぎを映し出しているものはごく僅かであると言わざるを得ない。これに対し、西教寺合宿を契機に、菅野自身の生き方や、学生運動やその「指導者」に対する考えの表明は、文章は稚拙ながらも、自らの言葉で真摯に綴られた個性あるものとなっており、その対照は彼の意識形成を考える上で大きな手がかりを与えてくれるように思われる。

この時期の菅野が、直接的には学生協会の解散とその後に持たれた西教寺合宿での「事件」、正大寮の一方的な解散などを切っ掛けに、自分なりのアイデンティティ生成にむかうことになったことは繰り返すまでもないが、その際に彼が最後に依拠しようとしたものは、他者との開かれた対話を拒む絶対的で直感的な「信」や、たとえそれが同信の友からであったとしても、外から与えられた「真実」ではなく、二つの国の間で彼自身が毎日積み重ねてきた移民としての生活体験であった点を見逃してはならないだろう。

〈本文〉

【p141】

第二節 『思想戦闘綱要』

これこそ後に昭和十八年二月以来、精神科学研究所並に学生協会に対する検挙、訊問の時最も問題とされた小冊子なのである。日本青年行動綱領⁸に於いての全文を掲げて見たいと思ふのである。

《第一、永遠ノ宇宙変易ノ人生ニ最高価値ヲ照示スル日本国体ノ確信ヲ我等ノ生ニ客証セシメヨ、生ケル精神ノ内奥ニ於ケル最高価値ノ信証ノミ無窮国体防護戦ノ力源ナリ、国体ノ無窮ナル限り我等ノ戦ハ始終ナシ、戦死コソハ生ノ極致、同信【p142】協力ハ戦死ヲ悠久ニ確保スルノ途ナリ

第二、我等ハ祖国守護神靈ヲ祀リ、戦士⁹者ノ靈ヲ祭ル、我等ハ古人ト

等ハ新奇ノ理論ニ依ラス、「忠実業ニ服シ勤儉産ヲ治メ、進デ公益ヲ広メ世務ヲ開キ」以テ国運発展ニ資セシムベキ平坦簡易ノ道ニ立タムノミ

第十一、現代日本国民生活ニ憂憤ヲ禁ゼザルモノノ悲痛ナル共感ノ上ニ、本行動綱領ハ掲ケラル、再ビ同信協力ノ重大意義ハ絶叫セラレザルベカラズ、我等ハ断ジテ私意ヲ以テ党同スルモノニ非ズ、然レドモ反国体思想意志トノ決闘ニ於イテ初メテ我等ノ信ハ客観化セラル、思想戦ノ勝利ハ言葉ノ勝利ナリ、我等ノ戦ガ日本語ノ勝利タラムヤウ努力セシメヨ、我等ノ戦ガ日本語歴史ノ勝利タラムヤウ死闘セシメヨ、神靈ノ加護ハ我等ノ上ニ在リ¹⁰》

更に田所廣泰大兄の次の言葉を見るならば、更に運動の性格は明白になると思ふのである。

【p145】

《序 昭和十二年六月東大精神科学研究会が学内に起つて全国的学生運動の契機が与へられ、同年十月、雑誌「学生生活」が発行され、十一月小田村寅次二郎兄無期停学となつて、いよ／＼同志学生の蹶起が促され、その年暮、第一回の全国巡遊が行はれてから既に満三年の時間が経過した。十四年七月の相州当麻村に於ける第一回全国合同合宿、十五年五月日本学生協会設立、同六月共立講堂第一回大講演会、七月信州菅平合同合宿、十二月精神科学研究所設立、新潟、水戸、佐賀等の諸事件、その他の無数の段界を経て、今や学生運動は文字通り全国的運動の形態と実力とを備へるに至つた。しかし、こゝまで来るのに、三ヶ年の時日を要したこと、更に、我等の思想運動の当初から見るならば、十四年の長年月を費したことをおもふと、現状は到底満足し得べきものではない。刻々に迫るものは国家の危急である。我等は責務の重大なるを知り、我等のいま進みつゝある途以外に国家の窮迫を【p146】打開する方途の一つたになきことを知つてを。而も、我等の運動の現在の進展状況は切迫する国家の危急に対して応じ得る

と思へぬのである。我等の焦慮は今や従来の如何なる時機よりも大である。友等よ、新しい戦闘方式を考へよう。能率を最高度に發揮しよう。我等は青年であるけれども、経験は決して寡少ではない。むしろ、それが累積されずに流されて居る。無数の経験を整理しよう。さうして、それを新しい友等の手引とし激励しよう。さうして、運動の前進行程を激化しよう。我等の生の実現を急がう。

目標を確立しよう。日程を定めよう。激情から発した単なる思想運動といふのみではなく、冷静な理性の計画に従つて、計画の確実な実現を図つて行かう。思想運改革の効果を確保し、加乗する政治運動に全員邁進しよう。何年何月にはどれだけのことが行はれてをらねばならぬと言ふことが、全員に明瞭になつて、はじめて戦線を統一することが出来る。こゝに思想戦闘綱領要を編纂しようとするのである。完成される迄に幾度か書き直される必要があるであらう。否おそろく【p147】完成されることはあるまい。まづこゝに一つの試みを呈出しよう。運動の将来をおもふ人々は之に対して積極的意見を送るべきである。かうして思想戦闘綱領要が全員の苛烈なる戦ひの体験を益々豊富に織込んで、凡ての志ある人々を鼓舞し、指導し、全国に全世界に分れ戦ひつゝ、ある同信の友らの心を常に大きく一つに呼吸せしめる、高き内容を把持するやうになるべきを期待する。

最早昨日の単なる学生運動、思想運動ではない。我等は国家の全局に対して関心をほらひ、否責任を感じる運動の性格を帯びて来てゐる。發展すべきところに發展して来たのである。単なる学生運動は言ふ迄もなく、セクシヨナリズムである。単なる思想運動も亦それのみでは遂に個人的解脱の追友及の範囲を出でない。聖徳太子の文化創業が政治そのものであったこと、山鹿素行実学の理想が治国平天下にあったことは、今更言ふ迄もないのである。我等はいまこそ、確実な道を勇猛進撃しよう。【(十六、十月)】

然らば思想戦闘綱領要とは如何？

以上の如く、第四章百八条依りなる全文五五頁依りなる小冊子である。其の内容を細述すれば長文となるので省略するが、概ね余の同意し所であるが、考慮すべき点も数多ある事は現在振れず、後に於いて憲兵取調べの際に及んでふれて見たいと思ふのである。¹³⁾

次に、少しく長文に渡るが、『単闘綱領を編して僕は何を思ふか』と題しての田所廣泰大兄の所感を聞いて見たいと思ふのである。

『十月十八日開かれた全国代表者会議¹⁴⁾は、たしかに運動の一段界闘綱領が発表されたことは、この意味を一層はつきりするものである。思想戦闘綱領が発表されたことは、この意味を一層はつきりするものである。思想戦闘綱領要は過去の戦の経験を整理したものであった。それは今後の凡ゆる運動に役立てられねばならぬ。』

諸兄は必ずその中に複雑の具体的事実を規定する内容を発見しつゝ、それが凡ゆる場合に役立つことを見らるであらう。それは諸兄の創意を発見しつゝそれ憑憑してゐる。綱領を活さるるならば、諸兄は無数の創意が自分の中に湧いて来ることを知らるであらう。【p150】諸兄の真の自発的意志と企図とによつて、各地の同心団体が強靱の弾撥力をもつて生長してゆくことにならう。僕は全国に群雄雲の如く起ることを期待してゐる。運動の過程に於て、詩人が豊饒の人生と勇ましき戦とを歌へば、論理学の達人が学問の覇者として自己を宣言するであらう。凡ゆる総合的人格の魅力が時代を自己の周囲に惹きつけるのを見よう。無敗の精神の英雄が交感する人生を展開しよう。かうして僕等は諸兄の力ある生長を祈念して居る。

僕等の個人的思慮の範囲を起えて、諸兄の精神が直接而も不断に神意に支配されつゝ、無限に展開する健康な意志の世界を作り出してゆくのを見ようと祈つてゐる。つまり学生運動は全く諸兄の手に全国の諸兄の手に委ねられたのである。諸兄、猛烈にやり給へ。さうして自然に醸し出す統一世界を実現したまへ。

しかし僕等は直ちに新しい戦に向はうとしてゐる。そのまへに暫時の

【p148】

綱目を略述すれば

第一章運動の性格
第一ヨリ第四迄
第二章指導者としての訓練
第一項一般的心得
第五ヨリ第二十七迄

第二項研究

第二十八ヨリ第三十四迄

第三項活動

第三十五ヨリ第四十迄

第三章運動

第一項概括的注意

第四十一ヨリ第四十七迄

第二項組織

第四十八ヨリ第五十一迄

第三項宣伝

第五十二ヨリ第六十一迄

第四項学生生活

第六十二項ヨリ第七十六迄

第五項国民運動

第七十七ヨリ第八十四迄

第四章意志実現の方法と段階

第一項政治とは何か

第八十五ヨリ第九十迄

第二項方法及段階

第九十一ヨリ第百八迄

【p149】

心の休養をする。ほんの二三日、すべてを忘れ心の中を空しくしよう。こゝで僕等は五年十年の後を想像しようと思ふ。それは確実に約束されてゐるものだが、想像するだけで晴れやかとなる。たしかに心を躍らし、遠いところに心を引張つてゆく。諸兄の全部が確【p151】固たる日本の指導者になる。言つてゐる言葉の一つ一つに無数の人生の経験がこめられてゐる。行動は全く端倪をゆるさない。

諸兄は僕等と共に全国を往来し飛び歩いて原始的創造的精神を撒きちらし、意意を結合し、人間生活の宇宙的生成を実現すべく活動する。日本の中には確実にして生氣ある言葉が氾濫する。日本の意志のルートが海上と地上と空中とに無数に放射する。

諸兄は僕等がいま新しい開展をしてゐることを考へられ、ばよろしい。僕等は諸兄が僕等に殺到して来ることを待機してゐる。その時諸兄は如何なる僕等を発見するであらうか。諸兄にも僕等にも否日本の将来のためにこそ、それは興味あることではあるまいか。如何。¹⁵⁾ (十六年十月二十一日)

斯くして、日本青年綱行動綱領、並びに思想戦闘綱領要は宣言されたのであった。余は病床に之を聞き、第一二八号¹⁶⁾を受け取つたのであった。だが、病気の為熟読する事も出来ず、【p152】戦ふ同志を偲んで身体の快復に専念する以外道はなかつたのである。寮生、瀧本大兄、葛西大兄、大林大兄、寺尾兄、国大兄石川兄を始め、クラスの友、筒井、小坂兄の他多数見えられ、猶太研究会を一任すると共に、しばしの話しをする事に依つて外部との連絡は続けられて居た。半島の友、金川武三兄、崔君も屢々見えられた事は一汐余に勇氣づけたのであった。特に崔君の態々持参して来呉れた『療病求道録』¹⁷⁾は如何に余を慰めて呉れたかは、今に於いて記憶も新たな事である。

東京生活僅八ヶ月余りにして、桑野寮の熊田大兄、津野、エビラ、阿部兄等、日々多数見舞に来てくれた事は、余にとつて生涯忘れ得ざる感謝に満ちた生活であつた。余の療養生活こそ友に依つて救はれた

と言ふても過言ではなからう。友ありて始めて余は人たる事を得たと言ふも過言ではなからう。額賀兄の献身的友情に報ゆる事こそ余の義務たると思ふのである。兄の療園に足運ぶ事十数回を下らず。【p.153】皆余の所用の爲たるを思へば胸せる思ひにかられるのである。持つべきは眞の知己なり。

横須賀依り余の従妹たる人の来たれる余に取つて

十月十三日、郷里福島依り叔父、叔母なる人の来たれるは嬉しき限りであった。食不足の療園生活に於いて、始めて野御持参されたる野菜に恵まれ、生気が満ち溢る、思ひをなしたのである。入園当時余の体重は八匁木十キロト十六貫依り十六貫に迄減少して居つたのであるが、次第に快復に向ひつゝ、あつたり、十六貫五百(六二キロ)に漸く到達して居つたのである。安静丁度一ヶ月間の安静状態依り少々散歩し得る様に迄なり、齒の治療の爲、程近き市療養所¹⁸に通ふ爲外土を歩むのが唯一の楽しみであったのである。

突然十一月五日、アメリカの□□の下依り余の病気の最後の書簡を見て驚きの余りか至急電報あり。病状を尋ねて来たのであった。

第一回目 十一月五日 『病氣・・・』

第二回目 〃 九日 『病氣ドウカ返事呉レ』

【p.154】

其れに対し病気の身を野方郵便局に運び返電を打つ

返電 『退園近シ安心迄フ』

第三回目 十一月十三日 『病氣ノ全快ヲ祈ル』本田叔父依り

第四回目 〃 二十二日 『金何処ニ送ルカ返電』

返電 『本宮ニ送レ』

返電 〃 二十九日 『金来夕、全快ス、本宮ニ行ク、帰ルナ』

斯くして電報を受くる事四度、応答する事三度にして余の療園生活は終りを遂げたのであった。

三ヶ月の療園生活決して長期間ではなかつたにしろ、余にとつては

に帰り戻つて来たのであった。病氣病床につきし九月初旬出せし書簡が、余の両親、兄弟に送つた最後の書簡、且遺書となつたのである。果して父は、母は、将来兄弟は余の健在たるを知るや否や。只神のみ知つて居るのであらうか、今は問はむ術なし。運命の俤に！強く、そして強く。余は両親、兄弟を始め、多数の敵国在留同胞を偲びつゝ、生きて行くのである。それが余にとつて唯一の道である。

【p.157】

十二月十日第三節本宮に於ける静養生活四ヶ月

十二月一日、余の帰里本宮に於ける快復した身体の徹底的静養と共に、鍛錬すべき生活は始まつたのである。過激なる運動に斃れて今病身を故山に横たへ、静かなる阿武隈河の清流の前に、秀嶺安達太良山の高峰を背に、人口一万足らずの此の東北の一小部落に於ける生活は、余にとつては決して幸福ではなかつたのである。

両親の下依り療養費は電報為替にて送られ、生活費には事欠かぬ様になつた事は、余に対ししばしの安慰慰感を与へて呉れたのであった。だが、再度郷里に帰り憩ふ暇もなく、再び精神的苦闘に入らねばならなかつた。

【p.159】²⁰

一週間は過ぎた。偲ばれるのは友の上である。懐かしいのは友依りの便りである。都で闘ふ友の様が一汐^{ウツ}偲ばれて来るのである。

友へかへし(額賀兄に)(十六、十二、七、)

とく起きてひなる町を川ぞへに巡り来りぬ思ひ出の地を

巡り来て文机見ればなつかしき君のみ便り来りてありき

くりかへしくみ歌し読みて吾も又同じ思ひに時を過しつ

紅葉の園を歩みて交々に語りし思ひも楽しかりける

紅葉の色濃く咲ける公園に帰り行かなむ初陽春の頃

【p.160】(白紙)

【p.157 こゝへへへ】

一つの大きな思想上、人生観に対する転換期を与へた事は事実である。斯くして、余は病に依つて斃れ又、病に依つて余自ら救はれて行つたのである。だが余の療養生活は終つたのではなかつた。退園と同時に正大寮に国分氏の小母様と帰り、寮生にしばしの別別れを告げ額賀兄、大林大兄等に上野駅に送られ、故郷に於いて療養生活をすべく、淋しく帰らねばならなかつたのである¹⁹。

【p.161】

故山に病身を帰省の車中にて(十六、十二、六)

なつかしき友の御声を耳にして我は立ち出でぬプラットホームをさわがしきフォームの中の別れなれど友の御声の忘れざらめやは友の声のみ姿偲びては一人去り行く心わびしも

うちつゞく田畑を見ては都路を友と語りし青葉の頃をぞ思ふ

故郷に一駅ごとに近づけど喜びわかぬ我が心わも

語らはむ友の居ませぬ故郷に帰りて何の喜びぞある

とく癒えて再び会ひて友どちと語り会はなむ陽春の頃

十一月二十八日、アメリカ両親依り書簡絶えて依り四ヶ月、余の手に到着始めて書簡が入つたのである。余の病気の報らせが着いたのであつた。読めば読む程、只涙、温き父母の拙き乍ら深情溢る、親の子に對する思ひ。余は泣けて泣けて来て仕方がなかつた。余の看病に帰ると言ふ切なる気持ち。だが、既に日米間の□□風雲急を告げ、当時既に帰るに船なく、孤り淋しく病床に病む余を思ひ偲びては、今は如何【p.162】んともする術だに泣く、文字を書く母の手は震へ、涙の中に書き続ると云ふ、十句一言一句、余は最早読むだに絶えなかつた。だが今は最早余の快復を報ずる術もなく、最後の『全快ス、本宮ニ帰省行ク、帰ルナ』の電報も父母の手元に入りたるやも知れず、又茲に神に祈る思ひでこれこそ果して両親の手に入るやも計り知れぬ思ひにて、余の快復の事認めた書簡をポストに入れたのであった。

だが天は余に幸せず、大東一週後の大東亜戦争勃発後、再び余の手

十二月八日

第一項大東亜戦争勃発

十二月八日の朝、師走の日は幾分寒気は加はつて来たが、未だ氷も張り積めず、朝のチヂヤ静かに明けて行つた。静かな朝であつた。この何事もなき静かな朝こそ、我々の一生、否、日本の永久に存在する以上【p.158】忘る、事の出来ない、悪雲晴れた、悪気の飛んだ、実に壮快なる、実に希望に満ちた朝であつたのだ。

遂に米英に對し戦宣戦の大詔換発²⁰あらせられたのだ。今こそ一億国民総蹶起すべき秋なのだ。何の躊躇がいらう。

國際的に政治上は勿論、國際連盟脱退以来、次第に外交上に、經濟上に、文化上に、武力的に、思想的に、日本に對する圧迫の度は急速に加はり、A B C D包圍陣は今当に經濟断行を以つて我が國を封鎖せんとした、アメリカ猶太的資本家、盜賊、英國の海賊精神を露骨に發揮し来たつた宿敵米英に對し、断固、宣戦の大詔は換発²⁰あらせられたのであつた。

チヂヤは静かに心快いこの朝の静寂を破つて、軍戦厳かに米英に對する宣戦の御詔勅が奉読せられたのであつた。聞く者身を整然として首をたれ、一言一句大御言葉を今こそ体し、眞に起ち上らねばならぬ秋は来たつたのである。

東条首相の『大詔を排し奉りて』の聲は、一日ラヂヤを通じて【p.161】²¹全国民に事の重大性を訴へ続けたのであつた。

今こそ神州不滅の信は確証されねばならぬのである。

余は心靜かに躍る胸を圧へて、決意の程歌を友(額賀兄)に書き送つたのである。

大東亜戦争勃発

宣戦の大詔換発せらるゝに當りて(十六、十二、八十)

大君のまけのまにく霧島の大和島根を守り行かなむ

一億のみ民の心一にして老耄米英打ちてし止まむ

敵主力全滅せりとニュースに心をどりて涙こぼる、

御国今危き時にはぐくまれ命捧ぐるは益良夫の道

大君の醜の御楯と矛とりて賤が身たつ日のとく来りませ

大君の大御稜威あまなくひろごりて世界平和の時ほ近きか

大君の御楯となりて征で立てる友の上偲び歌ふ神州不滅

マレー沖、ハワイ沖の海戦に世界無敵をほこりし荒鷲等に雄々し
も

大君の勅をろがみかしこさに胸ちせまりて涙こぼる、

[p.162]

たゞ偲ばれるのは両親、兄弟の身の上である。たゞ健在たる様神仏に朝夕祈るのであった。精神的動揺も次第に薄れて行った。だが静養中の孤独の生活は精神生活にとって沈滞し勝事には痛切に考へさせられるのであった。

十二月十七日の夜、ラジオのスイッチを入れるや、偶然と言はうか、懐しき正大寮の友の声が聞えて来たではないか。『出征学生留留大会』とある。主催者は日本学生協会、若々しい、元気に満ちた葛西大兄の声が流れてきた。

《留留文》

恭しく宣戦の大詔を拝し奉る。

まことに米英両国は、百有年来祖国日本の自立を脅威し来れる不倶戴天の宿敵、又その世界観たるデモクラシー及びそれを温床とするマルキシズムこそは、現世界全人類を破滅の淵にみちびきつつあるもの、今や之が撃攘は畏くも勅令あらせられたまふ所なり。全国民全滅の覚悟を以て大御言葉に従ひまつり、とこしへに聖慮 [p.163] を安んじ奉らむ。

日清日露両戦役当時の、また記紀万葉時代の素朴雄渾なる国民的感激は、正に全同胞の胸奥に怒濤の勢をなして蘇りつ、あり。祖先も亦、掃妖の密策を提げて我等と共に戦ひつ、あるなり。恐る、ものあらむ

幾度か防人の歌くりかえへし友の決意を偲びぬ吾は

御嶽にて我を悟に導きしみ友は行くか剣をとりて

出でませるみ友のあとをひたすらに進み行かなむ學術維新思想改

革に

斯くして寮の先輩は、友は、雄々しく蹶然と立つて行ったのである。

[p.165]

変化多かりし十六年の冬も暮れんとして来たのである。中学校時生時代通ひ馳れし道には、今知る人通はず、後輩の桜花に白練二本の帽章の僅かに当時の思出を偲びつ、戦地に、又教員に、歯科医に、軍隊に、業に励みつ、ある同窓に通信を送り受ける事が繰り返されて来たのである。年に幾度か休暇に懐しい故郷の町に帰り来る知人に友人に会ふ事、余の渡米以後現在に至る五年半の間、全く会する事はなされる人々に今漸く会ひ得る事は一つの慰めとなつて来たのである。

だが、中学の親友は、今は戦地に。只便りを送る事に依つて、六年に亘る友情の世界は開展されて居つたのである。

二五

本宮にて戦地に活躍せる親友遠藤立身君に送るの歌(十六、十二、

大君の醜の御楯と征でませる君の上偲びぬ故郷の町で

いたつきて四月を床に過せどもいとまぐに君を偲びぬ

焼太刀をとりて醜草うち払ふ君のうつしえ見るも雄々しも

十六年の晦日を故郷に迎へ、次第に健康体に向ひつ、あつた余は、十七年の元旦、県社安達太良神社に新親友鈴木安泰 [p.166] 君、妹と共に参拝、皇国の大戦勝、皇軍の武運長久と共に、両親、兄弟、同胞の御健在の程深く社前に祈願し奉つたのである。

忠魂碑を仰ぎ見れば小学校時代、隣の席に座せる友、上級生、下級生の余多、今は護国の英霊として祀られ、この小丘に静かに懐しい故郷の町にいだかれて眠つて居るのである。噫々、尊きかなその勇姿。我今こゝに立ちて友の冥福を祈る身とは！友の死屍を越えて我も又その

や。

茲に我等学生は、勅命のまにまに筆を投じ、征衣を纏ひて蹶然征戦に赴かむとす。もとより生還を期せず。斃るとも、護国の鬼となりて神州不滅の信を世界史上に客証せむ。(十六、十二、十七)

君の為世の為何か惜しからむ捨て、かひある命なりせば

親王

大神に告げたてまつるわがこゝろ御国の為に命さ、げむ

川宮永久王殿下

今日よりはかへり見なして大君の醜の御楯と出で立つ吾は²²

大君のまけのまに／＼ひとすぢに仕へまつらむ命しぬまで

三条

実美

忘れむと野行き山行きわれ来れどわが父母は忘れせぬかも

いざやいざ朝日のみ旗おしたて、ふみにじらなむ露の醜草

只介²³

猿田

[p.164]

ますらをのかなしきいのちつみ重ねつみ重ねまもる大和島根を

三井甲之

身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留置まし大和魂

松陰

山はさけ海はあせん世なりとも君にふた心我あらめやも

朝

源実

霰ふり鹿島の神を祈りつ、皇御軍に吾は来にしを²⁴

と絶叫しつ、入営召して征つたのである。病の為見送る事も出来

ず、一汝都を偲んで友どちの武運長久の程祈るのであった。

学生協会留留大会のニュースを聞きて

大君の御楯となりて益良夫は英米撃滅に立たんとするか

剣とり御国に仇なす国々を打ちてしまむ時は来にけり

この時に剣を帯びて立たんとて集ひし益良夫の決意雄々しく



図1 「旧交を温む 昭和十七年一月三日 福島県本宮にて 右ヨリ 遠藤博少尉、川名良榮訓導、小生早大政治科生」 (菅野家資料) JICA 横浜海外移住資料館蔵

後に続かん。友よ安らかに眠れ。我も又ゆかん！

父の友人の家に仮寓し、静養に努めつ、心安らかに居る事は出来なかつた。健康の快復と共に再度上京すべく、病気の為学資金は費ひ果さんとして居る現在、叔父叔母に依頼する外道なかつたのである。病ひ上りの身体を、山河を越えて通ふ事数回に亘るも、何らの効を創しなかつた。『近き親戚より遠き他人とか』余は、覚悟せざるを得なかつたのである。退学を希した事も幾 [p.167] 度かあつた。だが、余は遂に意を決し、両親の動産に手を付けざるを得なかつたのである。其れに依つて余は救はれる事は出来た。だが、其れに依つて益々不屈不撓たらざるを得なかつたのである。独立独歩こそ唯一の余の生きる道たらざるを得なかつたのである。

義弟岡山の平田秀雄君の死亡せるもこの時であつた。(一月十六日電) 一人の姉を余の長兄に嫁がれて、現在抑兄と共に抑留の身、今また一人の子息を中途にして失ふ。御両親の御心痛察しつ、も、病ひの身たる余には、葬式にも参列する事が出来なかつた。義理と意気地の此の余世の中に生きて行くのは苦しい事である。だが、余は座折す

る事は許されないのである。闘ひつゝ、生きる。これが余の信念なのだ。御冥福を西南に座し祈つて止まなかつたのである。

大東亜戦争直前の郵便局の納印の母の書簡が、香港経由にて入手したのは一月二十七日の日である²⁵。余の病体を問ふ親の心情をにうたれ、哀痛の思ひに苦しめられるのみであった。余の健在たる事、今は何如なる手段を尽しても知らず事も出来ないものである。最善を尽す以外道はないのである。意志の交流は神学的なるものである。だがその実現すべき時あるを予感するのである。その時迄最善を尽さう。

【p.168】それが子が親に対する道と確信するのである。
 上月満二十三歳を迎へた余は、在学徴集延期期間満了²⁶と共に、徴兵検査受験の為寄留すべく上京、中野区に寄留、帰省したのであった²⁷。

春を迎へると共に、体重は以前の如く二十貫となり、何等少々の無理も応へぬ程度に鍛練し来たつたので、意を決して上京すべく準備をなしたのである。本宮に於ける生活四ヶ月近く、国分氏宅に仮寓し厄介になり、身体の不自由なる余に生活世話して下されむたる事は、全く余の多く謝する所である。自宅はあれど帰るに両親なく、兄弟なき余にとつて、この家は最も安住の地と言へたであらう。此の好意に報ゆる事のあるを信んずるのである。

三月某日、御嶽の友額賀兄、胸部疾患の為斃倒ると聞き、上京の途中、日立に向け立つたのは三月二十六の午後一時五十一分であった。茲に十二月以来四ヶ月にわたる余の本宮に於ける静養は生活を終へ、再度学生運動、思想運動の為、意を決して上京したのであった。

【p.169】 第四節正大寮寮生活

三月二十六日、額賀兄宅に一泊。四月振りの会談の後、健康の快復を祈りつゝ、翌二十七日午後、日立駅を立ち東京井之頭公園内学生運動の本部正大寮へと向つたのである。

之は尊い事実である。我々は今魂の再生の過程にあるのだ。

【p.171】

長い学校教育に於ける統一なき概念的の講義により、分裂涸渴せしめられた我々の生命に、今再び統一が与へられ、春草が長い冬を忍んだ後に柔かき地をわけて萌え出る如く、我々の血に、我々の心に、若々しい正気が漲り来るのを感じずには居られないのである。

併し之の力は、之の歓喜は、偶然に生れて来たものであらうか。云ふ迄もなく、之の力と歓喜がこの世に出で、我々に伝へられる迄には、はかり知れない苦難の生が積み重ねられてゐるのである。

精神科学研究所々員は、デモクラマルキシズムの為、学園の内外が全く踏み荒された当時学生生活を送つて来られたのである。

歴史的伝統を無視し、統一の中心を失つた断片的知識の集積に得意になつて居つた所謂秀才学生、試験の点数、卒業証書に自己の将来の全運命を任せきつて小賢しく世を渡つて行かうとする学生のみ濫乱する時代に、統一と情熱を希求し、一生を貫く不動の人生観、世界観確立をひた願ひつゝ、数人の同志と骨身を削る様な研究をつゞけられて来られたのである。之の研究は自ら日本文化の史的生命につながり、それは直ちにデモクラマルキシズムに対する戦となつて展開したのであるが、過度の研究の為数少い同志の中数人は斃れ、数人は傷き、今尚病床【p.172】に臥す同志もあるのである。然し地に落ちて朽ちたる麦は多くの実を結び、長い隠忍の日の後の勝利は近づいたのである。

今や研究所所員の言葉は全国の青年の心に伝はり、一人一人の胸に情勢の焰を点もしつゝ、ある。北海道より台湾の果てまで、大学高等専門学校の殆んど全てに学術研究の団体が生れ、研究所の指導を仰ぎつゝ、協力研究生活を進めつゝ、あるのである。而し帝都と大阪に於ては世界観大学が開かれ、最早日本思想界に於て完全に指導的地位立場に立つに至つたのである。やがて世界の青年と云ふ青年の心をゆすぶりつゞける日の決して遠いことではないだらう。

寮生は東伏見に於ける都下合宿²⁸に全員出陣、今まさに出陣せんとして居た早大滝本兄に会い、都下の状況を聞く。

二月初旬、余の寄留届呈出の為上京の際は、鶴沼に於いて合宿は開催されてつたのである。今又合宿の期に会ふ。如何に寮生中心の全学的合同合宿に依り学生運動が激化し行く事がうかゞはれるのである。

《鶴沼行の歌（十七、二月）》

九、ともに戦ひ幾年を

十、松風さやけき鶴沼に

血路開きて進み来し

都の友と集ひ来て

友どち数多大君の

いくさの塵をはらはんと

醜の御楯といまそゆく

日本の観歓喜歌ひつゝ、

生きてかへらぬ ますらをの

躍り狂ひぬとことには

悲しき願 継ぎゆかむ

消えぬ思ひに結ばれぬ》

【p.170】

斯くして三月三十一日、東伏見依り帰京せる同志と再会、決戦の程誓つたのであった。

然らば正大寮とは如何なる所か？之を正大寮紹介を通じて見たいと思ふのである。

《『日本世界観大学も今日を以て第二回講座を終了するわけであるが、我々聴講生は之の八回にわたる講義より一体何を握り得たであらうか。今日と云ふ時代の性格の解明だらうか。それもあらう。大東亜経綸の根本方途だらうか。確かにそれもある。然しそれにも増して我々の胸に消えぬ感銘を与へたものは、精神科学研究所員が青年の熱情を傾けて語つた、一切の妥協を許さない生命にあふれた言葉のひゞきではなかつたらうか。我々はそのひゞきの中に、久しく願ひつゞけて来た清新なる息吹を感じる事が出来た。日本青年の将来を約束する逞しき力がその中に生まれつゝ、あり、その力こそ安んじて我々が精神生活を託してゆけるものであることを実感することが出来たのである。》

茲に紹介せんとする「正大寮」は、研究所所員が帝都の学生の思想訓練、学術研究の寮として昭和十三年本郷区曙町に設けたものであるが、一昨年九月、入寮希望者の激増により只今の井ノ頭公園ノ側に移転したものである。寮の生活は、明治天皇御製拜誦の宗教的儀式が中心となり、宗教的雰囲気の中に高き芸術の香りと勢烈なる学術研究の空気が満ち溢れて居る。

武さし野に夕が訪れる時、寮の窓に二つ三つと灯がつく。寮生の語り【p.173】合ふにぎやかな声が高らかな爆笑と共にきこえて来る。

研究所理事加納先輩を寮長に仰ぎ、家庭的雰囲気の中に研究生活はつゞけられてゆくのである。特殊教団の教会でもなく、小乗的自己完成の修道院でもなく、宗教芸術学術の総合的把持者としての次代の指導者が寮生活の全体験を通して生れて来るのである。

我等は現在学校生活の詩と哲学を失ひしが故に、極度に分裂された荒涼たる沙漠の如き生活にうるほひを与え、その部分的知識をも生かしゆく魂のオアシス、総合的体験修得者として次代指導者の養成所たる正大寮を紹介せんとするのである。

其の生活は正大寮の生活

学術が宗教に連り、宗教儀式礼拝は学術の基礎となる現二十世紀の学術を、吾等の生活の中に具現して、国民生活の規律を樹立する詩と哲学の運動の力源としての生活である。

毎月一日は都下同志百名を越ゆる明治神宮参拝。四日は北由川宮永久王殿の御戦死遊ばされた日を記せし靖国神社参拝十五日は大君居ます竹の園生の宮所に友等打連れて参拝し、又尊き御身もて蒙疆の地に戦死し給ひし、しきしまの道の先達にあらせ給ひし北由川宮永久殿下の御命日を選び、毎月四日には靖国神社参拝【p.174】を行つてゐる。明治神宮参拝が学校当局より申し出されし事、東京帝国大学に於ては未だ且てあらざることは衆知の事実であるが、最近唯一度宮城参拝の後始めて行はれたのである。これ等の事実は帝国大学の名と合せ考へ

る時、その歴史的罪過の出自根源もうなづかれる思ひがする。

吾等の一日の行事は厳正なる宗教儀礼に規律され、学術研究は之に連りつ、寮生活の中心となり、又体育は充分の考慮の下に置かれて居るのである。寮といへば、彼の高校生活の徒らに空転する「感激」といふ言葉を思ひ出すであらう。然し時代は何を求むるか。諸兄自身は何を求めらるゝか。下宿生活のジメ／＼した個人沈黙的生活、個人主義の浸透につれて生活感情をも破壊せる下宿学校生活と、吾等の意志的日常生活を次の簡単な表を基として対照して戴き度い。

寮の構成

寮長 一名（精神科学研究所員）
副寮長一名（同、但シ正大寮生ノ場合モアリ）
寮生 帝大、早大、明大、國學院、商大、中大、日大、慶大、拓大、法大、大正大、其他

【p176】

予科専門学校学生六十名乃至七十名

日課

午前五時半 起床、神前礼拝、直ちに井ノ頭の森に出て、皇居遙拝、明治天皇御製拝誦、体操（ラヂオ体操、建国体操）
午前六時半 食事
同 七時 登校
午後五時 帰寮
同 六時 夕食
同 七時 各自の勉強或は協同研究、三班乃至四班に別れ、各班別の研究会

一週間の行事

一、政治経済等時事問題研究 十数名宛三班に分れ、班単位の協同研究を行ふ。日割、研究題目等各班各単位にて決定す。尚寮務、綜合研究の箇所参照。古典研究も之に準ず。

界観の基礎の上にして始めて可能となるが故に、三つの項目は第三項に統一され、此処に世界政策と東亜経綸を吾等の内心に確立し、之を実現せしめねばならない。

寮特別行事

先輩（精神科学研究所員）の研究発表は随時行はれる。正しく時代の先鋒として国難打開に挺身さるゝ諸先輩の博大なる学術研究に不断に導かるゝのである。又知名士の講演を集会所室に月一回位の割にて開き、時勢を速かに探知する、前回までの諸講師を列記せば、原理日本社松田福松先生、国大教授大串兎代夫氏、文部省社会教育官小山隆氏、国民精神文化研究所中山幸氏等であつた。

又吾等の直接経験の学としてのしきしまの道を実修する。心情の直接の表現は詩作に最も具体的に表現され、苦難の人生に於て友の情意の波動に感ずる時、一切を忘れ不可知の人生に生きる唯一の道【p177】²⁹が開かれて行く。シンパシイ共感の世界こそ吾等の生きる地盤であり、開かれし深広世界である。詩の創作と鑑賞を、一世を風靡せる合理主義の人生観は全く捨て、省なかつた。叩けよ然らば開かれん。といふイエスの言葉は、正しく閉ざせる人の心に浸透して行く詩の世界、人が生きる世界をこそ云ふのである。

開かれた同信生活は、又自然にも開かれて居る。或は山野を跋涉する剛健旅行に、或は酒をくむ月見の宴に、友等の心に抱かれつゝ、離合集散の世を嘆き合ふのも唯若き青年の全てをかけし求道生活の中にこそ見出されるであらう。

豊饒の生活

強靱なる生命力と柔軟なる詩的直観力とを持つ青年は、其の精神生活が崇高にして強烈であればある程、大自然の限りなく開かれた姿を恋ひ求めて行くのである。一昨年、正大寮がまた本郷に在った時、十数名の寮生が春より夏にかけて東京及び其の近在に正大寮移転候補地を探し廻り、最良の地として求めたのが現在の「井の頭」の地

一、古典研究 聖徳太子の三経義疏、古事記、書紀、万葉、親鸞、道元、素行、其の他。外国古典研、論語、聖書等。凡ゆる研究活動は此の古典研究の地盤の上に於てなされて、始めて【p176】日本世界観に基く学術を建設し得、各国をして所を得しむる日本の自存自立の外交、政治、経済、又世界政策の樹立を可能ならしむるのである。

一、新入寮生読合せ 昨今行つて居明治天皇御集研究、聖徳太子の日本文化の創業、吉田松陰書簡集で寮幹部の適切なる指導は此の時に限らず、生活、研究の細かな点に於ても絶えず配慮されて居る。

一、レコードコンサート。音楽は大自然のかなで出づる言葉であらうか。

寮綜合研究

古典研究を中心とする吾等の研究は、時事問題研究の成果をも合せ、一定の目標に結集され、寮綜合研究として実現する。四月よりの研究は大東亜戦完遂の為の研究を行はんとするものである。以下箇条書を示さう。

一、西洋各国世界観

ドイツ、イタリア、英国、米国、ソヴィエトロシア

二、東亜諸民族の研究

満州、支那、南方諸国（泰、フィリッピン、仏印、蘭印、ビルマ、印度）

【p177】 回教圏（西藏、アフガニスタン、トルコ）

三、東西洋文化の総撰把持者としての日本文化、即ち日本世界観の研究

大東亜戦争完遂の為に、諸々の誤謬、学術思想の根本的是正が行はねばならないが、各国世界観を研究する事も又、日本世

辺であつた。巷の騒音を彼方に一掃して、限りなく続く丘波、林と田畑のいのちみちみつる昔ながらの武蔵野の雄大なる姿は、此の「井の頭」【p178】の杜依り始まり武州御嶽に連なる。

「恩賜井の頭公園」は人為を絶した水と林の大自然公園である。中央の瓢箪型の大池、此の池の西端より湧き出づる泉は、周辺を包む銚杉の森と共に、千古の香を湛へて如何なるものにも穢されざる森巖なる美しさを保持して居る。池の直ぐ西南面に小高い「御殿山」の雑木林の郡に、松、楓、梅梅等も入り混つた実に静かな自然の木立であるが、此等の木立に包まれた公園の一角に二階建の白壁と緑色の葺が見える。これがわれらの正大寮である。東天ほのかに白らむ時、起床の大鼓がなる。寮窓を明くれば木立は窓近く言問はむばかりに迫り、梢より梢へとわたる小鳥の声々が聞えて暁の目覚めよりして一日のいとなみを豊にするのである。次の数首の和歌は寮生が感極まって詠んだ連作短歌である。

浅草

風強み人気なき小みち朝ゆけば辛夷の花成りに逢へり

杜の上ゆいまだ日もせず池水はさゝ濁りつゝ、空をうつせる

朝寒き池の中橋渡りゆけば杜をとよもし水鳥啼きつ

はらからと語りつゝ、くる杜みちはゆや下萌えて土柔らかき

【p179】

語りつゝ、通ふ心のまゝ、にくるこの朝木立しづけかりけり

肌さむき杉の下道友とゆく思ひすがしも語とだゆれど

武蔵野

天をさす櫂の木めれりちじろく匂へる芽らに朝日かゝよふ

見さけつゝ、かへりみしつゝ、武蔵野の川べの桜ひたみつゝ、ゆく

友らへの土産にせむと川のへのほけのさ枝を折りもちてゆく

進む同進協力の感激かくの如く豊かなる自然にはぐくまれつゝ、自然と人生を渾融統一してひたぶるに進む同信協力の感激の中より、和



図2 「日本学生協会都下同志一同 於明治神宮御鳥居前 昭和十七年三月三十一日」
本宮から正大寮に戻った菅野（右端）は、東伏見稲荷講社での合宿を終えた「同志」とともに明治神宮を参拝した。（「菅野家資料」JICA 横浜海外移住資料館架蔵）

歌が生れ、詩が生れ、更に又、万里の波濤を開拓して行く世界皇化の大経綸も樹立されて行くのである。同じ憂ひに、同じ喜びに、相結ぶ若き魂の培はれてゆく武蔵野の此処に、詩と哲学の運動の源泉がある。雪は消え、春の光があまねくさしはじめた。池辺の梅、雑木林の辛夷が間もなく開き、正大寮の桜も一斉に咲きそめて新しき友等を待つ

導者としての実力を養成す。
ワ、思想的訓練を軍隊式規律の下に執行することによって、武士的人格を形成す。

カ、全国的連絡交流の感激生活、大組織内の相互訓練
ヨ、同信協力生活を実習する寮生活。³⁰⁾
余の正大寮に入寮と同時に、斯く協同研究に、又新日本学生思想【p182】運動の意図を以つて、青年に、学校に、社会に叫びかけて行ったのである。

入寮と同時に正大四班の研究会の責任を受持つと同時に、早大精神科学研究会に全力を集中、学園内に猛運動を開始したのである。当時の（昭和十七年四月）『た、かひ』四月十三日発行を見れば、当時の模様が少しく見られるのである。

『本年こそは学内の決定的勢力たらしむべく、我々は今一斉に進軍を開始してゐる。四日―早大合宿、都合宿に新たなる決意を胸にいだいて帰省した同志が、もゆる如き希望に顔をかゞやかして出発式に馳せ参じて来た³¹⁾。同志と顔を見合わせたとき、我々の間にはすでに前進の決意と必勝の信念とがあった。』

そして今、同志の獲得に、教授との論争に、我々は決河の勢を以て進撃を開始しつゝある。

読せに「聖徳太子の信仰思想と日本文化創業」が使用されることになつてゐるが、読合せをする暇もない程に、基地（同信寮、淀橋区戸塚町一ノ三二九中島方）には新しい人々が連日訪ねてくる現状だ。日を背負ひて戦ふ【p183】もの、のよるこびが我々にはある。我等の痛感と歓喜の生活は、学内の学生の憧憬的になるであらう。

一、学報発行―シンガポール陥落の時、学園内に撒布した学報と同型の学報を十五日頃約五千枚発行する。それは全学一斉に撒歩する。³²⁾
二、公開研究発表―之は早大で始めて行はれ、その実効は相当にあるものである。第一回は「和歌と日本精神」で瀧本、第二回は「ベルグ

日が秋春は近づいた。
尚ほ寮の所在は吉祥寺迄徒歩にて十分、お茶の水まで急行にて三十分、渋谷には帝都線にて二十五分かれば充分行ける便利がある。

以上は大体正大寮に於ける寮生活を略述したものであるが、【p180】然らば我々の意図する日本学生思想運動、学術改革とは如何。其の具体的方途に關しては『思想戦闘綱要』全文百八条に亘つて省略振れて居るが、長文にわたる故略述せざるを得ないのである。

茲に現代高等教育を補足完成する学生思想運動、特に各大学に於いて行はれて居る教育改革、学術改革に対する案を述べ、我々の意図する所を個条書に述べて見よう。

一、授業内容
イ、情意的訓練によつて生かされる有用なる知識、批判的精神及能力の涵養

ロ、統一的世界観の把握、学問的確信又は研究の喜びの獲得

ハ、国家の運命を感覚し国内国際情勢を研究し結合す。

ニ、歴史を重んじ国体に随順し、国民としての平等同胞感激に基く協力の実行。

ホ、御製詔勅拝誦、承諾必誦の国民宗教生活

ヘ、和歌を中心とする創作（しきしまのみち）

【p181】

ト、忠義臣道の同信協力より必然的に結果する強烈なる全人格的影響

二、学生生活

チ、以上の如き研究を実現する柔軟にして強靱なる意志の鍛錬

リ、永遠の友情、持続的強力的人間結合

ヌ、青年の使命を自覚するもの、積極的肉体的健康の増進

三、教育制度

ル、祖先礼拝を根幹とする国家的家庭的修養

ヲ、アルバイト、デインスト実習等を職業生産に密接相関せしめ指

ソソ「ソソ哲学」森口で五月中旬迄にやる。

三、講演会―総選挙後すぐ学校付近の鶴巻小学校で第三回学術講演会をやる。

四、御製拝誦会―第三項までは全学の運動であるが、之と同時に第一早稲田高等学院と第二高等学院では御製拝誦会をやつてゐる。之れ公認運動の最中である。

五、大和会、日本主義学会等の右翼団体には、森口兄が併合に努力してゐる。

四月中には大体この様に宣伝に終始するであらうが、五月には新入生の訓練合宿を行ふ予定である。³²⁾（瀧本記）

【p182】あつた。北は北海道小樽高商依、南は台湾、朝鮮、又は満州依りの通信は、正大寮に活躍状況を報じて殺到して来るのであつた。

各大学の前進基地も活発に躍進を始めたのである。

早大は政経学三年瀧本木兄を中心に、同志約三十名同信寮に集決、³³⁾正大寮入寮の中早大生七名を運動の幹部、連絡に努め、学内運動に猛進を続けたのであつた。

再度公認運動を起して、政治学博士五来新造³⁴⁾氏を会長となし、早大精神科学研究会の名の下に学生課に呈出したのであつたが、例年の如く、商学部長北澤新次郎³⁴⁾商学博士一派の真向からの反対に会ひ、遂に却下されてしまったのである。先輩葛西大兄の研究会を昭和十四年十月起して依り此方、各教授に対し批判、論破の眼を加へて以来、急激に学園の矛は我等に向けられ、最初依り敵対行為を示すが常であつたのである。我等同志三十名は、一步も退りぞかず、前進に前進を続ける一方であつたのである。公認不裁³⁵⁾下となるや、一方的に五来新造教授中心のマルクス主義批判研究会を起さんとす【p185】るや、

又もや教室使用不許可となり、一時放棄せざるを得なかつたのである。斯くして我等の眼は各教授に向けられ、政治学部教授吉村氏の正³⁵⁾氏

の議会主義政治の無視、憲法発布を以って伊藤公個人の設定せるものとなす。且つ又憲法改正必要論に対し、余は真向依り其の不忠意義志、横暴、傲慢なる言語態度に対し二時間に亘る論戦を加へ、遂に講義中止の止むなきに致らしめたのであるが、其の意志たるや、全く欧米亜流の学であり、無神論、機構的官僚政府主義者、無確信、無内容なる講義こそ最も我々の批判の対称となるべきものなのである。

当時余の学術批判力無力の為、真に反省すべきに致しむるに到らなかつたのであるが、今尚其の傲慢なる時局便乗的、無信念的機構主義者に対しては、飽く迄も鉄槌を下さざれば止まないものである。

同時に同じく政治学教授内田繁隆氏の東亜協同体論、観念論は、日本政治理論、日本の世界的と題する氏の意志こそ許されざる存在にて、氏と論争せる事数回に亘るも、面接の機会なく、以前として現在同様の講義を継続して居るを見て、右吉村

【p186-1】

全国巡廻に旅立つ友等を送りて(十七、五)

をちこちに別れ戦ふみ友等を訪れ行きぬ益良夫の友は討死と固き決意をみ友等のことは草にうかゞはるゝなりあ、御国今危き時ゆ旅立てたるみ友の思ひおほらかにすな弱き身も振り起して友どちと守り行かなむ大和島根を

全国巡廻からの便りを読みて(十七、五)

つぎ／＼にいこふ間もなく戦ふてふ友の上偲びて涙こぼるゝ、絶叫す友のみ便りをろがみて苦るしきさ忘れ心湧きたつ大御歌をろがみ奉りもろともに進み行かなむ外国に迄

上田□□今泉兄の御心を偲びて

御国憂へ醜草打たむと剣太刀取りしてふ君の心にも

【p187-1】〈白紙〉

に上り、世界観大学の意義、価値、参加希望の意見を述べたのは、此の闘の当に白熱化せんとして居た直前であった。学生は我々の研究会を以って右翼と見、共感を以って見、又は反発恐怖或は又一部のよりに、【p190】³⁷とつて反感を以って迎へたのである。共感せるも多きに従ひ、又敵対意志を以って抗する人々も多かつたのである。此の世界観大学とは如何なるものか？

《日本世界観大学は時代の要求する新しい教育機関である。澁淵強力にして、真に生命の溢れる、一大国民的文化の殿堂である。日本の主要都市は云ふに及ばず(従来に於いては既に大阪、仙台、京都、呉等に各都市に於いて)大東亜諸民族の主要都市にも本大学は設立される。こゝに於て大東亜の民族が一つ心になりて、陛下に仕へまつる具体的方途が提示され、日本国体原理の下、精神交流の共鳴世界が現出する。やがて帝都に於て、大東亜諸民族の青年指導者が、真の日本人に育成される特別講座も催されるであらう。或は一萬噸乃至二萬噸の特別仕立の商船を以て、移動式世界観大学講座を行はんと計画しつゝ、ある。東京を出航し、大東亜諸民族の聴講生を満載したこの「大学丸」は、青海原を越へつゝ、各国の都市に碇を下す。同じ食物を摂り、同じ船内に生活し乍ら、現実世界の各地を見聞しつゝ、最勝唯一なる日本世界観の威厳を体得する。世界皇化の具体的内容が幾月かの生活によつて若い世代の心の裡に確立する。之は【p191】本大学は実現する³⁸》(日本世界観大学聴講のための案内書に依る。)

第三回目は、有楽町産業組合会館大講堂にて行はれたのである。聴講生八百名を起越えてゐた。余が昨年八月下旬病に倒れて以来、始めての聴講である。菅平の³⁹合同合宿の記録映画『文化の戦士』を上映、一般聴講生に対し多大なる感銘を与へたのであった³⁹。世界観大学終了と同時に、早大生の聴講生を中心に、早大生ホールに於いて座談会を催したのである⁴⁰。学外と学内の運動を連関して行くのは多くの時間を費し、実に多忙な日が続くのであった。

【p196】教授と同格の存在にして断固として許されざるものである。弁々たる講義内容を持って、得々とせる教授多きこの学園に、最後迄孤軍奮闘せざるを得なきも又止むを得ないのである。若し我々同志、この学園を放棄して決然として去るなれば、誰か再び此の無気力なる教学校教育に対し、新生氣を与へんか。今にして改革せずして、何時の日か良き指導者を得られ様。大学の脱落を説へられる今、我々こそ真に学園を救ふ者なのである。我等起たざるして誰か再び起つ。

我々同志の苦闘は重ねられて行つたのである。同志の血結束は確固たるものである。御嶽以来の同志、山川、高木、大庭、上村、並びに余、加ふるに新同志宮下、松浦、河内、山野、石原兄等の日々の精神的交流が行はれて行つたのである。激烈なる闘は続く。朝五時半の起床と共に、登校する者、事務所に行き印刷文を刷るもの(赤坂区青山北町一丁目一番地依り麹町区麹町三丁目六番地ノ二精神科学研究所内三階に移す)寸暇もなき都下進撃の姿であった。就床するのが一時二時になる事は普通であった。睡眠僅か三、四時間の生活、【p197】漸く健康を快復したばかりの余にとつては少々過労の生活であった。だが然し、再度病氣する事もなく続けられて行つたのも、神仏の加護であらたと信じて居るものである。異郷両親の陰乍らの御守り作の為であったと信じて居るのである。

(四月十八日(土曜日)正午アメリカ飛行機の東京初空襲。焼夷弾落下。余の直前五十米に体験したのもこの時である。学生の総出動に依つて、極めて短時間に消されて行つたのは実に幸であった)

四月下旬全国巡廻の幕は切つて落されたのであった³⁶。今回は余も又地方巡廻に行くべきであったが、健康未だ充分に快復せざりし為、行を共にする事が出来ず、伊津兄を以って代行させた事は、余にとつて残念な事であった。地方巡廻に行く友を送ると同時に、第三回世界観大学を開催すべく準備、宣伝に没頭されねばならなかった。

四月四月下旬、余の復校せる日の後、余は教室に入ると同時に壇上

だが又くだらない時間授業時間は聴講する事は余にとつて苦痛であり、時間の浪費の為、極めてかゝる時間の出席をさけて居つたのである。然し新同志を得る事は仲々困難であり、又無痛感の学生多き事も又事実である。四月、五月、我々は同志獲得に余念がなかった。あらゆる手段、時間、訪問を重ねたのであった。そして又、全国的連絡も、都下各大学、高専との連絡も怠らず続けて居つた。寮に於いては、松田先生を招き「明治維新以後に於ける日本主義」について御講義がしば／＼続けられた⁴¹。

【p192】

又寮に於ける各班会議の協同研究会は、時間の許す限り続けられ、我々四班に於いては、「明治天皇御集研究」「聖徳太子の信仰思想と日本文化の創業」を隔日如に続けられ、寸暇もなき生活であったのである。週一回の「シキシマノミチ」も又間段なく続けられて居た。

第一項 敵国在留の両親、兄弟、同胞を偲びて

人間意志に於ける総合的統一程困難な事ではないのである。一方に於いて、学生運動の激化し行くと共に、余は益々多忙になるに従ひ、兎角空虚な空転する事も屢々あったのである。矛盾せる内的生活に打ち勝つには容易ではなかつた。苦しい幾日か又続くのであった。空虚な生活とは家庭的な淋しさであった。肉親に別れて一年有余年、戦争勃発と共に再び相会する事を得なくなつた事を思へば、又一汐遣瀨ない気持ちに厭思はれるのであった。

両親を思ふ情切にして(十七、四月)

仇国に捕はれ居ますたらちねの身の上偲べは涙こぼるゝ、老いの身を白刃の下に打ちしけれ無念の胸内如何で慰さめむ

【p193】

慰さめむすべだに絶えてか、なべて六月あまりは過ぎにけるかな

兄弟に与へる歌

兄弟よ今は只精神交流の世界にのみ強く雄々しく生きて行かなむ同胞よ敵国に屍さらすとも夢な忘れそ大和国民と

家郷からの便り絶えて(十六、十七)

我潜水父のトハンガ収容所に抑留されて居ることを知ったのは、五月七日付東京朝日日新聞を通じてであった。

我が潜水艦北米沿岸を砲撃せりとの新聞を読み親を偲ぶ(十七、六、二十五)

常のごと今日の戦況如何にかと朝の新聞の見出をば見る

米本土砲撃せりとの見出しに胸内をどらし走り読する

其の時ゆ思ひ出深きオレゴンの名をば見出し身体のり出す

思ひ出の土地の名なれば一汝に心をどらしニュース読み行く

八潮路の荒波かけて醜国に迫りし潜水艦の砲弾とゞろきしとふ

心待ちに待ちたる砲音聞きまして同胞偲べば涙流るゝ

たらちねのみ便り絶えてかゝなべて十月余りを過しぬかな

仇国に捕はれの身のたらちねの父母思へば心苦るしも

もろとも命捧げて国守る外に道なし今の我が身に

【194】

便りするすべだに絶えし今なれば如何で伝へむ胸の思ひを

斯くて、日々の新聞の報ずる見出しを見ては憤慨せざるを得なかった

のである。

『独伊人より苛酷な圧迫 収容所では軍役を強制』昭和十七年五月

二十三日、朝日夕刊

『日本人街跡形なし 西部より追放 強制労働』(十七年六月二十一日

朝日夕刊

『全引揚げ邦人を裸に 深夜の点検 子供の葬式に列席させぬ、非道

極る米国の虐待』読売

『本多博士事件と米官憲 比人をして逆殺 平然死体で引渡す』都

『敵寒中にテント生活 忘れぬぞ米国の非道』東日

『言語に絶す敵国の暴虐 人道主義いづこにありや』十七年十一月七、読売

『歴然たり 米加暴虐の実相 悶死、射殺十余名 沙漠、山間へ強制移住』十七年十一月七日、朝日

全く彼等米英人の行為は言語に絶するものがあるのである。

北米に於ける邦人虐待の悲報に接して(十七、九、二六)

非人道極まる奴輩いづこまで責めさいなむか罪なき人を

【195】

虐待の数々読みて口惜しさに胸内燃えたち力湧き来る

我が知れる博士の最後読み知りて悲憤の涙とゞめかねる

(注 博士とは本多博士の事なり)

常日頃親しく語りし夫人も遂に狂ひしてふ悲しきあまりに

斯の如悲憤の涙流しつゝ、斃れし人の如何に多きか

斃るとも残れる邦人守らむと戦ふ人の雄々しくあるかな

敵国に命果つとも永久に絶えて消えまじ大和魂

寄兄弟述懐

家追はれ身は捕はれの身となれど汝に忘るな大和男子と

再びは此の世に会へなく思へども我は生き行く臣の正道

第二項 日本学生協会解散徴兵検査

昭和十七年四月十三日、中野区役所にて余の徴兵検査は施行されたのである。昨年八月下旬以来の胸部臨時検査による学生のみであった。番号は三七番。【196】だが昨年以来の胸部疾患に加ふるに、近視乱視を以てしては如何にしても合格は考へられなかった。遂に第三乙種、第二補充兵の宣告は下されたのであった。従来病□は一部の欠陥とて無かりし此の身も、只僅かなる病魔に侵され、この不面目を見る。熱涙とめどなく流れ来るのであった。三百有余名を数へる中に、三七番の検査番号たりし余は、外部の表面上、筋骨隆々たる五尺七寸二十貫

の巨体は精密検査以外には欠陥を感じられなかったのである。四度に及ぶ眼の検査、嚴重なる胸部の検査を経た時には最後の一人となって居たのである。如何に徴兵検査官自身余を以て甲種合格にせんと欲し努力せるも、遂に最後の判決に於いては第三乙種合格と宣告し得ざる状態であったのである。噫々此の不面目、余は広き検査場に唯一人座して動く事が出来なかつた。漸くして幹候志願願書を呈出なして場外を出でしものであったが、残念乍ら如何んとも仕難くも【p.197】

数日は失望の為、悶々と日を送らねばならなかつた。友は多く現役に、幹部候補生に、晴れの姿で入営し行くを見る時、皇軍の幹部となり得ざる我が身を思ふ時、淋しさを覚えて来るのを如何んとも仕難かつたのである。

軍人こそ祖国防護に赴く直接の任とは云へ、今肉体力の許さざるは余にとつて、現在とるべき道は如何?この事について余は絶えず心苦しめられて居つた。幾度か志願海に陸に空に志願を思ひたつた事か。なれど以前の如き頑健たる肉体も、一時の病ひの為に銃を取る事が許されなくなつたのである。困惑の日もあつた。一兵たる事を恐れる意識もあつたのである。

みたみわれ生ける験あり天地の栄ゆる時にはえらく思へば、生の感激を歡喜を武に生かすべきか、文に生かすべきか。

今日依りはかへり見なくて大君の醜の御楯と征でたつわれは【p.198】国の為に命を捧げるのに階級の上下のない事も知つて居る。だが余自身の氣持意識の本能と、如何んとも仕難き精神的苦悶から脱却すべき日がつゝ、いたのである。

だが余は救はれていった。『自己の職分に忠実たれ』この言葉の中に余の精神的開展の意義があるのである。天依り、神依り、大君のまけのまに自己の職分をみつめて行くことを勇往邁進する以外、我々の行くべき道はないのである。

学生道の本分も又、現在我々に任んぜられた一大使命なのである。

眞の学生道に倒るゝこそ国家危急に直面せる最中に生きて行く、益良夫道なのである。大君に召されて行く日、そこにたとへ国家も幹部たり得ぬ共、一兵卒の尽す誠こそ余のとるべき道たる事を確進せしめられたのである。過度の運動に依り健康をそこね、栄えある道を失ひし事も、誰をも憾む事は出来ないである。人生の諦観の底【p.199】ひ依り又新たなる生命力は湧き出で、来るのである。秀吉の草履取りの心境に無限の人生の喜びもあるのである。何の躊躇がいらう。国に尽くす道は一つである。たゞ恐るゝは道を失ふ事なのである。破れた心の中から再び余は起ち上る事が出来たのである。新しい力に燃えて!

第三項 日本学生協会解散

如何なる運動も、目的に達する迄の経路は決して容易なるものではないのである。建武の中興然り、明治維新然り、ナチス運動然り、フアッシュヨ運動も又然りである。我等の運動も此の悲運に会ふ事も又当然と言はなければならぬ。明治維新の犠牲は大であった。然して我等の運動の犠牲も又少しとしないのである。

時代の苦悶の果に戦死せる、放校、退学したもの、その数は決して少くはなかつたのである。だが運動は依然として継続し続けて居つたのである。

【p.200】

新潟高校、水戸高校、佐賀高校等々に於ける学校教育の強圧なる庄弾圧は、我々に何らの精神的苦悶を影響も与へなかつた。否、反つて益々強烈の度が加はつて行つた事と言へるであらう。

我々の運動は決して党を組む者にはあらず。純粹なる孤忠、愛国の至誠に燃ゆるみ民の悲願以外の何ものでもないのである。母校愛、子弟愛、師恩に対する感情は、依り以上深いと言へるのであ

る。然し乍ら、其の過激なる、合法的なる、正当たる意志完遂に對しては、何人と雖も我々の前には屈服せざるを得なかつたのである。小田村問題に於ける東大政治学教授矢部貞次氏然り、河合榮次郎、田中貢太郎氏又然りである。

松陰の孤忠も徳川幕府に入れられざるところとなり、僅か三十年の弱年を以つて小塚ヶ原に幣斃れたのである。楠公父子の七世報国の至誠も、遂に足利幕府時の流れに抗するあたはず、無念【p201】悲壮なる最後を遂げたのであつた。

歴史的価値は果して何人が決するや否や。昭和に於ける歴史的事実の確証は何人に。吾人は神州不滅の信念を信んずる以外道なきを思ふのである。

昭和十七年六月、再び文武部省依りの断圧は加はつて来たのである。学校相互間の連絡は遮断され、正大寮依り地方への連絡は嚴重に監視され、全く史上未曾有の当局の処置には哑然たらざるを得なかつたのである。

茲に六月十四日、都下同志代表集合の下に学生協会の解散につき討議した事は、止むを得ない処置であつたのである⁴⁴。

再び当局の断圧加はり居るとの報に切して 十七、六
み民等の悲しき願ひ絶たんとて加へし断圧何か恐れじ

諸共に偲び交はして雄々しくも生きて行かなむしきしまの道

【p202】

七月十日発行の『た、かひ』巻頭言に掲げた田所廣泰大兄の「我等は死せり。死の中より蘇らんとす」を通して、当時の心境を見たいと思ふのである。

《我等は死せり。死の中より蘇らんむとす 田所廣泰

「支那事変五週年を迎へて、世の中はその再認識といふことを云ひ、支那事変と大東亜戦争との關係について色々と苦心して説明しようとしてをります、それは悉く失敗に帰したと言つて差支へありません。

全国の同信諸兄、同志諸君、僕は一切わかりきつた事を云ふ気持ちもちません。忠義の道といふのは默契でありませう。諸兄の御努力を私はつねに偲んでをります。学生協会がなくなつた。さうして表面の連絡はたうとう僅かの一つも出来なくなつた。皆、各自を死んだものと思ふ。その死線に立つて、戦ふ友らの力は今迄に幾千百倍して燃え上り、燃えひろがり、熱風空をこむる【p205】火炎と化して、もろくくの反国体意志を焼きつくすべきを信じます。友らよ、もろとも！我等は死せり。死の中よりふるひ立たむとす。生ける靈魂とはなりて！生きる靈魂、うつゝ、にもみ国を守りゆかむとす！友らよ、かくは思へ、かくは友らを憶念せよ。》

第四項 分科会、政治、経済、文化

斯くして、我等の運動は表面依りその姿を立ち消えの様に^{なむど}を得なかつたのである。消したのであつた。だがそれは、消して我々の運動の消滅を意味したのではない。内省的時間を与へたものであつた。吾々の真剣なる内部的探究と審議、政治、経済、文科化の三分科会に別たれるところの同志間内に於ける研究が進められて行つたのである。

政治分科会は小田村寅二郎大兄を、経済分科会は中山幸大兄を、分化分科会は桑原曉一大兄を中心に、各々分担、責任を以つて研究は同志のみに依つて継続せられたのであつた。

果して全国同志間に於ける表面的連絡をた、れた今、各団体に於ける、各自に依つてつくられるマイン・カンブこそ現在我々には要求され【p206】て居つたのである。大体都下同志代表二十名を単位とする分科会こそ、我々に最も学術的新生命力を与へて来れる機関となつたのである。

次に『猛氣廿一回』と題する、正大寮寮長代理東大文学部二年生野澤浩大兄の政治分科会の報告に代へてを記して、その内容、意義を見たと思ふのである。（「た、かひ」七月十日発行に依る）

それに対する批判は既に我々としては一通り終つてゐるので、に述べませんが、再び事変当時の曖昧で、はてしない混乱が思想的にはたしかに世を覆はうとしてゐます。もう一度、長期戦論を蒸しかへし、戦争の意義を没却し無意味の強権を重圧せしめようとしてゐると思はれます。

しかし、我々はもう大東亜戦争に入る前に、支那事変の時代相と【p203】政策と思想的謀略とを批判してしまつてをり、この大東亜戦争を通して何の迷ふことなく、来るべき戦に備へて次の努力を續けてをるのであります。⁴⁵我々の用意は深大の基底に立つてをります。

ヒットラーの戦が、そのマイン・カンブが戦争の終わったところから具体的には出発した意義を、我々はこの身にひきくらべて味ふべきであり、国民も大東亜戦争のもたらした精神の高揚が、この事変的思想や国家状態に對してどういふ角度をとるものであるかを、無意識のうちに、分析しえない気もちながらに悟りかけてゐることは、我々の道の開かるべき前兆であります。大御稜威は現実であります。

学生協会の解散、学生運動の無礙の展開、それはかういふ状態と照合して考へるべきであり、いよく具体化する各自にとってのマイン・カンブは大東亜戦争の始点として信知すべきものと考へます。そして、このマイン・カンブは大東亜戦争によつて開かれた忠義の道の闡明であります。

【p204】

戦争の鉄火のみそぎは、我々もまた経験したのであります。否、我々はその経験を実験にこの身のものとして来たのであります。私が戦争を真剣にこの身のものとして来たのであります。

私が戦争が終わつたところと云ふのは、日本の武力に敵対すべきものが無くなつたところを意味して居ります。われくくの默契はこゝに在ります。精神の秘奥に於ける、外間の現規和現知を許さざる諜令はこゝに在ります。死を要求する嚴肅な合意がその中に在ります。

《我らの学生運動は、時代に對する根元的批判から出立した。そして生の苦悶といふ生の源泉を襖被せむと叫びつゞけて来た。その間に、幾度激甚なた、かひが開始されたことだらうか。それらを回想すると、今なほ硝煙の香に打たれるやうな気がする。又幾度、戦死者を出し、悲劇を生んだらうか。一瞬に回想して肅然たらざるを得ない。それらは皆極く最近の事柄であつた。時代の底流に先頭切つて当るものは、我々であり、又我々であらねばならぬことは、同志諸兄深く心に誓ひ合つたことである。亡き先輩、友を、我等は戦死者として祀つた。そのことは、我々の運動の永遠の将来を明示するのである。運動の目標はつねに明確である。同志諸兄、さうではないだらうか。思想戦の最前線東京に在りつく【p207】く、負担の重きを思ふのであるが、しかし我等は如何なる艱苦といへども少しもいとふ者ではない。同志諸兄も全く同じ気持であらう。時々連絡は絶えても、この気持に於いて我々は常に一体である。

「如何なる困苦襲ふとも」を歌はふでないか。

松陰先生は猛氣を廿一回振起せむと志を立て、た、かひ斃られた。我々の運動は全一体ではあるが、徒らに同信の名を呼ぶのではなく、一人々々の立志が結ばれて一体なのである。我々は⁴⁷学生と政治の問題がジャーナリズムに採り上げられたが、勿論それは学生協会の運動に刺戟されてあつた。而して賛否両論続出した。賛成論といへども、学生といふ存在に對する単なる同情に過ぎなかつた為、我々は見向きもしなかつた。我々の意志はもつと根本的である。一方、文部省、学校当局は消極的弾圧に乗り出して、今も死物の如く残つてゐる報國団といふ組織を作つた。政治に關与するなといふ。しかし、立てた志は盤石の如く、時代と共に決定的である。そこで当局は陰謀を用いた。改革でも何でもない陰謀であることは、報國団の現状を見れば明かであらう。又今の政治は陰謀である。一つのイデオロギーを實行せむがための奸詐陰謀である。【p208】政府、翼賛会、翼政会三位一体「挙

国的政治力」「国民組織」というが何と「報國隊」と似てゐることだらう。先般、畏くも侍従御差遣の御詔を拝したが、それは丁度翼賛政治会問題で騒々しい時で、挙国的政治力が結集されたと言言されてゐる時であつた。しかし、天皇陛下の御軫念の程を拝して、我々は恐ろくに堪へない次第である。

今の政治は大御心とは、又国民の苦悩とも全く無縁の如く行はれてゐる。敵とは猛烈にたゝかはう。国民同胞には疾を現じて菩薩行を踏まう。而して、我々には精神の郷土がある。黒上正一郎先生は聖徳太子の文化創業の大業を深く憶念された。吉田松陰先生は「身皇国に生れて、皇国の皇国たるを知らんとすんば、何を以て天地に立たん、と痛嘆された。厳然たる歴史事実を明にし、精神を無限のいのちにつなぎ、たゝかひゆかねばならない昏迷の時代に与ふる宗教は、日本歴史の確信である。この学生運動の本来の使命に向つて、撓まず [p.209] 進み行かう。この研究は政体の歴史的研究であつて、在来の経済史的研究或は文化史的歴史的研究に新分野を開き、歴史研究方法にも原理を与ふるものであつて、同時にマルキストによりて専ら為こひ來つた歴史研究をと積極的にな、かふものである。北畠親房は神皇正統記を、山鹿素行は中朝事實を、徳川光圀は大日本史を記して何物によりても動かすべからざる歴史研究によりて時事批判を成した。我らも時事批判と同様の真剣さを以て之に向ふ。運動の学術的分野にも貢献する所大であらう。この研究は冊子として世に問ふことになつた。

政治分科会経過報告

第一回五廿八日夜於研究所

小田村寅二郎大兄の研究発表を中心にして、神武天皇創業より仲哀天皇までの政体の変遷と研究

第二回六月二十六日

一、大化改新以前

【p.210】

一言にして言ふならば、当時既に二十四才を迎へて居つた余によつて、次第に寮生活自身の学生生活気分から脱しつゝ、あつた事は不定し得ぬ事実なのである。班別に依る階級的意識が次第に見形式化されつゝ、あつた事は、当時三班に在つた余にとつて痛感されつゝ、あつたのである。順境に在る学生生活にとつて最高の生活たる正大寮生活も、逆境に立つ余にとつては統一し得ぬ様々の問題かりが次々と起つて來るにつれて、一汐憂慮せられて行くのである。

運動の進展に共なひ、内心の空虚さの起つて來る事は、余にとつてどうしても解決し得ぬ問題であつた。酒煙草を嗜まぬ余にとつては自暴自棄になる事は出来なかつた。

病氣快復後に於ける身体の調子も、過激なる運動に依る日々に疲れを覚ゆる事は度々であるが、再発の憂もなく過す事が出來た事は余にとつて最も幸福な事であつたのであるが、又もやせまる家庭的孤独の生活、経済的問題、本宮に於ける責任に対しては常に余の胸を離れる事は出来なかつたのである。

【p.213】

忠義とは孤忠、益良夫の道は悲しき道である。家をも捨て、妻子を省り見ず行く道であると、日々 御製拝誦、志士の歌をくりかへし味ふ事に依つて、一時的には心の晴れ渡る思ひがあるのであつたが、この些細な個人現実的問題、個人的煩悶はむしかへしてくる事は、余にとつて真に苦痛とならざるを得なかつたのである。当時のしきしまの道は全くこの氣胸持から離れる事は出来なかつた様に思はれるのである。

述懐

十七、六七月

大君に捧げ奉りし賤が身の如何で迷ふべき益良夫の道

祖國に随順し奉る賤が身は苦難逆境切り抜き行かむ

かくばかり大御心を悩ませる仇なす国を打ちてし止まむ

二、大化改新
三、奈良平安時代
四、源平院政時代を学生全部で分担し研究発表
第三回は七月十日夜更も前回の分担通りに行はれる。⁴⁸
斯くの如く各分科会に於ける成果は次第に上り、自主的研究が研究発表の形をとつて行はれて行つたのである。

第五項 早大に於ける学生運動

七月六日、早大前進基地を中島氏宅依り、牛込区早稲田町三一野沢氏宅に移し、学部、専門部、第一、第二早高を一轄する連絡をとると共に、夏期休暇をひかへての合宿を行ふ事に決したのである。

七月十一日、第一早高合宿を鎌倉鶴沼海岸、二十五日逗子海岸に行ふ事となつたのである。

【p.211】

滝本兄を中心とする早大精神科学研究会も、早大学園に主体性を置く、自主的進路を見出すべく苦闘して居つたのであるが、全国との連絡の遮断されつゝ、ある現在、其れ以外道を見出す事は出来なかつたのである。学内に於ける同志も、日々基地に集ふもの十名を下らず、読合せには怠らなかつたのである。「聖徳太子の信仰思想と日本文化の創業」「明治天皇御集研究」をテキストとする輪読会、合宿が行はれて行つたのである。

当時滝本兄も卒業期をひかへ多忙な為、余が早大に於ける運動の責任者となつて來たのであるが、此の運動自身の苦闘から脱するには、當時に於ける余の心境は余りにも複雑であつたのである。

友情、同信協力の世界に没入しても、個人的煩悶に対する解脱感を得るには、余にとつては人知れず苦闘苦闘せねばならなかつたのである。自己の責任感から発した、当時の自分自身の行動は余りに空虚なものであつたと言へるのである。

息は絶え身は朽ちぬとも大君に捧げまつらむ賤がこの身を
苦しみに堪えて行くこそ益良夫の道とは今の我にも知られけるかな
かく歌ひ又次の如く歌つて居るのである。

家郷の便り絶えて 十七、六月

【p.214】

苦しみに堪える事こそ益良夫と知りつゝ、悩む己が心はも
捕はれて御國の為に倒れにし祖先の教ひたに惚ばゆ
祖先の教うけつぎて我も又命の限り戦ひ行かむ
戦ひて戦ひ尽きて倒るとも尚守らむ大和島根
自余の歌自身は拙ないものであるが、悲壮な決心をいだいて居た事は事実である。かく苦しむ、斯く戦つたのである。そして又

全国の友を偲びつゝ、第二早高の友に送るの歌

(第二早高御製拝誦を終へて後読める。)

大御歌をろがみ奉り学ひ舎に正しき道を開き行くべし
己が身もかへり身づして学び舎に戦ふ友のひたに惚ばゆ
友偲び友を恋ふれば生死の苦しき事も忘らるゝかな
思ひわづらふ事の多くして日々を過すは臣の道ならめやも
先哲の教かしこみ身を捨て、戦ひ行かむまけのまに／＼
学び舎に共に語りて現世の凶逆思想を打ちてし止まむ
又

夢 十七、六、三十日

【p.215】

会ひたしと心こがれし父母と会ひ得し喜び永久に忘れじ
嬉しさに言葉も出でずみつみつ、落つる涙とゞめかねつも
喜びも東の間にして眼ざめて夢と気づきし時のわびしさ
眼がさめてあたりを見れどたゞ一人いねし我見し時の悲しさ
淋しさにたえぬ思をそへども我は生きなむ悲しき道に
そして又

本宮に住む本田姉妹に送る葉書の端に 十七、七、五
 国の為捨てし命と思へども心にかゝるは親なき子等を
 たらちねを恋ひつゝ、散りし益良夫の道とし行かむ大君の辺に
 斯く悶え苦しむ中に、比叡山西教寺全国同志合宿が切迫し来つゝ、あ
 り、我々も又その準備に日夜没頭すべく一意専心努力し続けたのであ
 る。

第十章 比叡山西教寺全国合同同志合宿

【p216】 第一項 第二行進曲 田所廣泰 十七、七月、十日

《野にふしぬわれら

山ゆきぬ、きぞ、もろともに

あ、 人生の戦！

同情は苦しむ

共感は悲哀

全人類の思想と感情の嵐の中

身をさらしてぞ進みしをー

見よ、われらが

観観喜の振舞

苦痛のさ中にあふる、を

かくてわれらはわれらの性格を形成す

吹くよ朝風

きらめくよ日は押山立つ旗に

吹きならせ、いま、第二行進曲を！⁴⁹》

（第二行進曲、正大寮報、炎となりて創刊号依り）

【p217】

《全国の友らに 江頭俊一

全国同志諸君、久しく待ってゐた全国合宿が近づいて来た。戦死死

機を打開するのは僕等一人一人の胸中の確信に存するのである。それ
 こそ、危機の根源を衝くすべではないか。思へば久しい年月、僕達
 は重圧と試練に堪へて来た。又将来も堪へてゆかねばならぬであらう。

然し今、僕等の胸中に生る、確信と進軍の意志は、如何なる障害も弾
 圧も抑圧することは不可能である。詩がある。歌がある。芸術と宗教
 と一切の精神の自由が、僕等には許されてゐるではないか。

再び協会の紺青の旗が仰がれぬにしても、僕等一人一人の旗を空高く
 掲げてゆかう。僕等の前には無限の世界が展開してゐる。亡き師の君、
 先輩同志を偲びつゝ、「死の中より」今こそ「炎となりて」燃えさから
 う。而して、第二行進曲は靈戦の譜である。「友よと呼べば、友は来
 りぬ」と繰り返しつゝ、【p220】先輩同志諸兄と相見む日を熱様しつゝ、
 待つのである。

友よ「吹きならせ第二行進曲を」⁵⁰（「炎となりて」七月十三日）

斯くして一瞬の暇もあらず、我々の気持は西教寺合宿に集中せら
 れて行つたのである。考ふる暇もなき余の生活にとつて、此の瞬間は
 又無我の境地と言へるであらう。

《全国同志合宿名簿作製終りて帰寮の途にて読める歌

西教寺合宿五班 十七、七、十九

小夜ふけし都大路を友どちと名簿刷り終へ帰る楽しさ

車中にて名簿取り出し坂本に相見む友をひたに偲びぬ

未だ見ぬ五班の友を偲びつゝ、友の御名をばくり返へし呼ぶ

をちこちに闘ふ友に我が胸思ひ早く通へと文書き送る

古ゆ聖王の御子の建てまし、み寺に集ふ時のまたる、⁵¹》

（うたごえ合宿近しに依る）

【p221】

合宿を六班に別け、各各大学、学部、専門学校を中心とする五班に
 属する余我々は、深更迄徹文を送る事に余念がなかった。比叡山全国
 合同合宿『進軍』『五班の友らへ』等次から次へと地方同志に送られ

を以て守り続けた学生運動の途上に於て、全国合宿こそ永遠に忘る、
 ことなき歓喜と前進の記録である。思へば先輩同志が魂を留めた当麻、
 菅平、比叡、御獄、又今夏再び集合する琵琶湖の畔、時空を越えた回顧
 と想像の混沌する胸底に感ずるのは脈動する前進の高鳴りである。
 そして又別れつゝ、同じ思に胸ふるはず友を、堪らない思に憶ふのであ
 る。

又過去一歳の戦跡の記憶が強烈な印象を呼び起し、意識する暇、比
 叡、御獄に別れてより一歳、その一歳の間に分析と整理に堪へざる程
 の様々の事象は、すべて僕等の精神の経験を終へて来た。僕達は鍛へ
 られて来た。

そして忘れえざる十二月八日の全国民無上の感激の瞬間が、崩れ消え
 か、る記憶の集積の中に、僕等の唯一の歓喜と希望として貫かれてあ
 るのである。

【p218】

「天祐ヲ保有シ万世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝国天皇ハ昭ニ忠誠勇
 武ナル汝有衆ニ示ス。朕茲ニ米国及英国ニ対シテ戦ヲ宣ス」と。あ、
 僕らの依るべきすべては上御一人である。此の天皇に直接する思ひこ
 そ学生運動の不滅の信ではないか。「神州不滅」再び別れて居る友よ。
 歌ひ給へ。

価値判断なき実行、生命なき機構主義が強権を以て国民生活の全面
 に互つて行はる、時、幕府はかゝる現実にかゝる否定しえない実在であ
 る。高き人間性、自由と最高の文化価値を有する日本国体が破壊せら
 る、のは、強権による実行と機構の強制せらる、眼に見えざる所に萌
 芽する事を僕等は幾度か絶叫して来た。僕等の生命に押しかゝるのは、
 斯かる幕府の意志であったが、然し内よりの勝利はそれを打破して、今
 合宿に向つて行進曲を奏してゐるのだ。

【p219】

天皇に直接する僕等の随順の生、畏怖なき前進、現実国家生活の危

て行つた⁵²。そして又、地方同志依りの便りも、合宿前に力強く我々
 の胸を打つのであった。

《合同合宿の五班の友等へ 十七、七月二十日

五班の友等の上に思ひを馳せつゝ、教室内で筆をとつて居ります。
 無確信、無内容な、そして反国体意志の充滿して居る講義の最中に学
 術思想改革の重大さを痛感しつゝ、不逞意志を有する醜輩と戦つて居
 ります。

我々は今苦悩と歓喜の真只中に、前進の光明を見出すべく一人一人が
 努力しつゝ、あるのではあるまいか。

【p222】

「我等は死せり。死の中より蘇らんとす」と田所大兄が巻頭の言で言
 はれたみ言葉が、今更の如く胸中深く実感せられて居るのであります。
 我等の苦悩の時代は去つたのである。名目上の協会の解散後、我々は
 無形の繋りの中に同信協力の生活が始つたのである。其れは光明の一
 路を辿つてではなからうか。我等は只光明の一路に忠義の一貫道を「み
 民我等もろとも」にまめやかに我が大君に仕へまつらんと誓ひまつら
 む」と、大君のまけのまにまに、比叡山麓なる太子御創建あらせられ
 た坂本西教寺の合宿に直進すべきであります。

其の合宿も後一週と僅かの日に迫まつた。五班の友等よ。我等都下同
 志は進撃の雄叫びに胸振はせつゝ、前進の計画を進めて居る。準備は
 着々と、のつて来た。軍政論、統制経済の欠陥、不逞逆思想を我等
 五班の手に【p223】依つて徹底的に批判し、検討し、学術改革の炎
 をあげたいと思ふのである。

早大の学内運動も進展の一路を辿りつゝ、も、其反面苦悩にとかく巻き
 込まれつゝ、あった。其して一度は死んだかも知れない。其の死の中よ
 り蘇らんとして、早大の運動も我々一人々々が生ける靈魂となつて戦
 ふ事に依つて救はれるのである。

五班の友等の学内運動を憶念しつゝ、共に坂本合宿目指して戦はん。

斯く友に懇自分の思ひを直情し、又吾々の手に依つて五班の講義内容を検討し合ったのである。

班長所員に桑原暁一大兄、水野正次大兄、助手に小山和雄、加部隆三大兄と決定。茲に相班員約二十五名、茲に相互間の連絡もつれ【p.224】七月十七、十八、十九日都下五班会議を経て、左の如く決定したのである。

一、桑原大兄講義^(註)

維摩経義疏(文殊問疾品)

黒上先生著「聖徳太子の信仰思想と日本文化の創業」

三井甲之先生著「明治天皇御集研究」

二、留魂録、留魂文鈔、講孟余話

三、時事批判、例軍政論、統制経済、綜合雑誌、新聞等に依る検討批判

四、国防哲学、詩歌集

五班の友らよ。都下の友等も、地方の友等も共に進軍の歌を歌いつ、坂本の合宿地目指して邁進しようではありませんか。

合同合宿五班の友等へ！！

全国合宿も愈々後十日に迫つて来たのである。其合宿の成【p.225】果も、我々一人々々の双肩にある事をしみるゝ実感せしめられるのである。諸兄のもとには合宿についての通知が次々と届けられ、又班別名簿もすでにとゞいた事と思ふ。

其して一人々々五班の友の名を繰返し思ひ、思ひを比叡山麓坂本の合宿地に馳せられて居る事と思ふ。然し諸兄、我五班は定まったのである。何の躊躇が要らう。たゞ前進あるのみ。我々都下同志の思ひを、今思ひのまゝに諸兄のもとに送りたいと思ひ此の刷文を書き送ります。

其して諸兄の便り待ちつ、炎と燃えて坂本指して進撃しつ、あるのである。「第二行進曲」を奏でつ、「……」^(註)(進軍五班の友らへ

自身決する外に道なきを知つたのである。余の心は苦るしかつた。そして考へに考へる以外道は【p.228】なかつたのである。三日間は過ぎた。静かな温泉の一夜を送つたのもこの時であつた^(註)。

だが、余の気持ちは解け得ぬ俛に、西教寺合宿に期日の接迫と共に参加せざるを得なく、二十九日意を決して上京、三十日、明治神宮参拝の途路折柄、余の学校の保証人、岩島氏逝去の入電に驚き、御悔み行き、直ちに其の足にて東京駅に向ひ、漸く午後八時の汽車に乗り合せる事を得、翌日午後四時、西教寺に於ける全国同志合宿の出発式に参列する事を得たのであつた^(註)。

第三項 西教寺合宿

西教寺合宿は、従来に於ける当麻、菅平、比叡、御嶽とは異なつた性格を有する合宿である。従来は同志獲得にその主眼点を於いて居たのである。今回は同志のみに依る合宿であり、真の【p.229】統一ある同志間の強力なる団結力と、更に又、学生協会解散後に於ける新しき運動の方向に新生命力を与へるべき各自の自立的威力の發揮を切望されて居る点に大いに相異を異にして居るのである。

文部省依りの強圧なる弾圧に依つて、表面的運動を折整^(註)されて居る現在、我々の最も必要とするのは、一人々々の決意の具体的表現以外にはなかつたのである。

此の合宿に於いて、余自身決定的力を要求した事は、あながち無理ではなかつたのである。

第一日、第二日、各班共通じて共感同志的共感歓喜の世界に没入するには余りにも縁遠かつたのである。個人的反省、苦闘が深刻になればなる程、感情的意志が露骨となり、果ては困惑の状態に立ち入る事も屢々あつたのである。二日目の五班日誌に見る『気分的よろこびに浸つて行く』とか、また四班日【p.230】誌に見る『また語りつくせぬ』とかは、全く此の状態をあらはして行くのである^(註)。五班の責任者と

に依る)

第二項 第二早高逗子合宿

【p.226】

七月二十五日、西教寺合宿先発隊として五名の者が正大寮を立つて京都に向つた後、二十六日依り二十九日迄四日間、第二早高合宿が逗子海岸で行はれる事となつて居た。

だが、既に合宿準備に疲労を覚えて居た余にとつては、又準備完了後の一瞬間に再度煩悶に襲はれ急に起つ力もなく、悶々の情に絶えぬ思ひに駆られてしまつた事は実に悲壮なる思であつた。そして又、西教寺合宿に全力を集中した余にとつて、学園の合宿には、滝本兄に反対の立場をとらざるを得なかつた。余は遂に、逗子に於ける第二早高合宿不参加を決意、悲憤の涙にくれつ、後四日後の西教寺合宿をひかへての二十六日朝上野を立つて一人静かに本宮に帰つたのである。逗子にある滝本兄及び第二早高同志一同宛に決意の思ひをのべ、歌を書き送り上野を去る心境は忘れ得ぬ思ひなのである。

【p.227】

幾分個人的感情の行き違ひもあつたであらう。だが、余の自主的立場をくつがへす事は、当底出来なかつたのである。

自己の家庭的、経済的、そして又種々の寮生活に於ける感情を真に清算する事なくしては、余自身永遠に救はれざる事を悟つたのである。真に余の気持の開け行く迄は、合宿に参加せざる事を決意したのであつた。

温い友の言葉に依つても、この現実的、社会的煩悶は解け得なかつたのである。否、余自身訴へる事を欲せず、自分自身、身を引いたと言ふて言からう。故郷の故郷の山河に三日間沈黙、静思したのであつた。寮の友には、たゞ急用とのみ言ひ告げたのみであつた。

社会的、青年の孤独なる悲哀、家庭的煩悶は人に告ぐべきもなく、余



図3 西教寺合宿第五班の琵琶湖畔での遊泳。「真に一体感の喜びを感じ得」た一時。
(「菅野家資料」JICA 横浜海外移住資料館蔵)

しての余が、真に決定的な力を得べく努力せんとしても、かく斯く同志間に真の共感を得る事なくして如何にして得られ様。全く困乱した。何故の合宿か。全く予期せざる結果に落ち入つて行くのであつた。日中に於ける琵琶湖畔に於いて遊泳する時には真に一体感の喜びを感じ得ても、シキシマの道に読合せに見る時、それは単に観念的言葉

以外の何ものでもないのである。

合宿新聞第二日に、左のヒットラーのマイン・キャンプを延用した言葉がのせ記採⁵⁴されてあった。

《その日その日の生活に得た体験は、種々の問題を更にまた新たに勉強しようとする気持ちに拍車をかけた。その結果、現実を理論的に基礎づけ、理論を現実において検討することが出来るやうになったので、余は理論倒れになったり、現実に捕はれて皮 [p.231] 相的になったりせずに済んだのである」⁵⁷》

此の言葉を再参思考する事に依って、我々運動の欠陥も依り見え明白となつて来るのである。

第六班森田兄の関兄の記した日誌を見るに《我々はこのことばから、現実に即して思想を進展させて行つた思考法を汲みとるのであります。この思考法を訓練することが、今後我々に最もシレッツに要求されます。運動を顧みて「沈滞してをった」とか「イデオロギッシュであった」とかいふだけではダメであります。》⁵⁸（合宿新聞2、八月一日関兄記）

現実的訓練なくしては思想運動、政治運動は進展しないのである。学生運動依り一歩進んで、社会的、政治的部面に於ける具体的事実を把握なくして思想運動を説く事は、盲人が銃鳥を打つと同様の危険が供ふのである。我々の体験、特に現実問題に処しては、甚だ浅 [p.232] 薄と言へるのである。茲に於いて、我々の客観的に我々の眼にとまる諸現象に対し、果して的確なる断定を下し得る優れたる人格がかゝる中依り生れ出づるには余りにも遠いのであった。

最高のイデオロギッシュな言葉は、屢々我々の言葉同志間に於いて繰り返へされて居つた。しかしそれだけでは、我々の目的は完遂されないのである。

茲に於いて始めて、余は余自身の過去に於ける雑多の体験、海特に海外生活、労働生活、移民生活の豊富なる体験を生かすべき道を知つて来たのである。さもなければ、もろくの宗教の開祖を世界の最大偉人の中に数へてはならぬといふこと、なる。蓋し、彼等の倫理的意図の実現は、決して完全に近いものになら得ないからである。愛の宗教ですらその効果に於ては、崇高なる創始者の望んだところを仄かに反影してゐるに過ぎない。しかし、其の宗教の意義は、それが一般に人間の文化、徳義、道徳を發展せしめんとした方向にあるのだ。』⁵⁹》

【p.235】 かく政綱立案者（経綸家）と政治家の使命は異なるにしても、何れにしても、現実を離れては修身齐家治国平天下の理念は行はれ難いのである。経綸家として、又政治家として全うする事は容易なる業ではないのである。松陰先生の如き人にして始めてなし得ると云へ様。茲に、現実に即応した理念こそ、我々にとつて最も重大なる意義となつて来たのである。

合宿半ばにしても、依然として合宿全体の零困気は冷たきものであった。決意の程も見ることが出来なかつた。全体の顔依り苦闘の陰は消え去つて行なかつた。

厳肅なる 御製拝誦、宗教的行事は続けられつゝも、依然として読みとられる各班の日誌は個人的反省、主観的記事依り外見ることが出来なかつたのである。

余も又、必死の努力にも係らず、五班全体も形式的な合宿を行ふ事に余儀なくされて居つたのである。

【p.236】 四日目（。）京都名所旧各工場見物を終へ、西教寺に向ふ我々の顔も、四日間の閉ざされた気持ち依り開かれた思ひにあつたのであるが、散漫なる明大松本、法大折内と夜食を共にすべく、自由行動をとつた事も、余自身の意志に反して酒飲をなして、夜十時近く、夕食を既に終へた合宿地に酔のま、帰山した事も、決して単なる学生生活の惰性からで

たのである。生活、環境、境偶⁶⁰の相異と共に、我々の取るべき道は必然定異なつた現象に於いて現はれねばならぬのである。一定に規定せる学生運動、思想運動とは如何なる運動であるか。余は自由活潑⁶¹なる運動を望んだ。だが此の合宿にはそれすら望み得ないのであらうか。

【p.237】 相変らず観念的自己満足、優越感から脱する事が出来ないのであらうか。余は再度此の問題に悩んだのである。

此の運動、特に学生運動の理論は正しい。然しそれを確証すべき迫力にかけて居る事は事実である。

我々余は茲に二つの道ある事を始めて見知る事が出来たのである。一つは、政綱立案者、即ち経綸家と、一つは政治家である。ヒットラー⁶²は云ふ。《ある運動の政綱立案者は目標を確定すべきであり、其の現実⁶³に努力するのは政治家でなければならぬ。従つて、一方の考へは永遠の真理に依つて規定せられ、他方の行動はむしろその時々⁶⁴の実際上の現実に依つて定められる。一方の偉大さはその理念の絶対的抽象的⁶⁵正しさにあり、他方の偉大さは与へられた事実に対する正しい態度と、その事実の利用にあるのだ。そして其の場合に、政綱立案者の樹てた目標が「導きの星」として役立つのである。政治家としての意義は、其の企画と行為の結果を誌⁶⁶試金石と見 [p.234] てよい。即ち企画と行為との「実現化」で判断してよいが、政綱立案者の終局の意図実現は決して行はれるものではない。人間は思想の上では真理を把握し、明確な大目標を立てることが出来るかも知れないが、その徹底的履行は、一般に本人間が不完全、且十分なるが故に失敗⁶⁷する。理念が抽象的に正しく、従つて巨巨大であればある程、その完全な実現は、それが人間に依存するものである限り、不可可能である。

故に、政綱立案者の意義は、その目標の現実⁶⁸に依つて計らるべきではなく、其の目標の正否、及びそれが人類の發展に及ぼした影響如何にはないと思ふのである。当時飲酒を嗜⁶⁹しぬまぬ余にとつて、直ちに帰山する事を欲したのは勿論であつた。だが、友等の行動に対して無責任なる行動をとる事は、五班の責任者としての余には出来得なかつたのである。今にして、當時に於ける我等五班の深更二時頃依り跳ね起された理由を知らぬ友多きを思ふばふのであるが、茲に一言振られて居きたいのである。

松本にしる、折内にしる、合宿の陰鬱たる気持依り飲酒 [p.237] したき気持になつた事は余にとつて解される事であるが、飽く迄五班の責任者として、余は其の責をとるべきであつたのである。

合宿地全体が苦闘の中依り解脱すべく全力を集中して居る時、吾々三名の行動は何を意味して居るか？

茲に余は、合同志全体の眼が吾々に集中され来たつた事を知つたのである。

深更依り夜明迄、吾々は、特に余自身は、責任をとつて問責された。だが、飽く迄も余は真理に振⁷⁰れる事が出来なかつたのである。家松本、折内に一言も語る事をさせず、余は只余自身の家庭的煩悶、経済的苦闘を訴へるのみに依つて、最後に絶え切れぬ思ひの俣に下山を心指したのであつた。五班の都下同志、特に合宿に於ける中枢たるべき正大寮三名の行動こそ、地方同志の難との意志の疏通を意味するものとして解されて行つたのも、強ち理由なき事ではなかつた [p.238] 。

松本、折内の個人的行動に対する批判の点は、十分にあつた事を余自身も率直に認め得るのである。

だが、人間個人に対する深刻な苦悶、苦闘に対し、余自身には真に内心に実感出来なかつた事は、余にとつて全く西教寺を去る以外になつたのである。

人間は不完全なるものである。如何なる人間と云へども欠点を免れる事を得ないであらう。或る種の感情から、思想的対立から、個人的煩悶から、將又特殊なる異性との関係から、との同志依り一人淋しく

立て！わがかげよ
来れ！瞬間の方便よ⁶¹⁾

合宿の成果は十分であった。楠公父子の孤忠に我々の生を没入する事以外、この生の打開には道がないのである。同信協力、友の世界もこゝに開かれて行くのである。観念的、形式論理に依つては決して開かれないのである。具体的なる友の世界とは

友 西教寺合宿五班 十七、八

【p27】

友偲び友を恋ひつゝ、生くる外生くる道なし今の我が身に共に泣き共に悩みし友なればいかで忘れじ永久の誓ひを胸はれて交々語る友の顔ものも言はで通ひ来りぬ
国体の信につながる同信の友こそ真の力なりけり
祖先等の道をしをりにひたすらに歩み行かなむ一すじ道を誠もて貫き行けば硬しとてたゆみし道も開かるゝかな

楠公父子を憶 十七、八

桜井の別れ偲びて堪え難き思ひに涙とゞめかねつも
堪え難き思ひに生くる益良夫の道こそまこと国守るらむ
国守り来りし人を己が身の道のしほりとあがめ進まむ

最後の夜、雨しとく降る中に、師友を奉る慰霊祭を厳肅に行なひ、翌朝決意も新に「桜井の訣別」【p248】小楠公を歌ふ「四條畷」を声高らかに坂本駅迄歌ひ、北南は九州依り北は北海道に帰り行く友達を送りつゝ、京都、三條、高山彦九郎の銅像に参詣で、金閣寺、嵐山、丸山公園、清水寺等々の名所旧跡を日大村井兄と見物、途中会した明大伊津兄を故郷へ送り、八月十日依り八月十日帰京、正大寮に帰ったのである。



図4 「東京正大寮開寮二週年記念 昭和十七年九月一日」(菅野家資料) JICA 横浜海外移住資料館架蔵

幾度か君が御歌しをろがめば君恋ふ思ひに胸せまり来る
此の胸の思ひ通へと天がける君の御霊にひたに祈るも

あ、我も又命の限り師の君のみあとしたひて歌ひ行かなむ

【p251】

九月十五日、靖国の御社に『留魂文』を捧げ奉り、決意新に友先輩友

第四項 試験

十日、帰寮と同時に待ち受けて居るのは、十一日依りの十五日に亘る軽井沢に於ける野外教練である。既に兵籍にある身として、熱心に教練をなすした事は当然である。小隊長として配属将校酒井中佐殿依り称せられたのも決して偶然ではないと信ずるのである。帰路辻兄と草津温泉に一泊、戦塵を洗ひ十六日帰寮した。

【p269】

帰寮と同時に、再度出征学生を送るべく、出征学生を囲む座談会に出席⁶²⁾。送別会に寧日なく数日を過ぎたのである。

留魂文の十端を記して学生の決意の程を伺ふ事が出来るのであむ。

留魂文

故北白河永久王殿下のみ霊を始め奉り靖園

九月一日、学年末記試験を迎ふるに幾何もなく、僅か一週間前より試験勉強を開始したのも止むを得なく、実力を以て確信を直情を記述する事に留め、其の間、正大寮移転記念二週年を迎へ又 北白川宮永久王殿下御戦死遊ばされて二週年にあたらせられるので、九月四日護国寺に参拝し奉り、九月九、十日試験の最中、第二早高合宿が永福町題目教習所で行はれて居る故参加、十一日、漸く全く憩ふ暇もなく試験を終へ、翌十二日、同永福町題目教習所に於ける専門部合宿を指導【p260】十五日、寮生の壮行会、十八日依り三ヶ日、第一早高永福町に於ける合宿。全く西教寺合宿以来日夜を分たず闘って居ったのである。同二十日、加納、桑原、加部大兄満州視察に立。同夜、百武佐賀高校百武兄一週年遺稿集が出る。

翌二十一日、黒上先生十二週年慰霊祭を信濃町にて行はる。

献進歌 十七、九、二十一日

黒上先生の慰霊祭に連りて

師の君の御霊まつらむ今日の日に秋雨降りて心悲しも
動乱の最中にたちて戦ひ斃れし君が御心偲びて止まずも

どちらの出征を送るべき壮行会が盛大に行はれたのである。

正大寮生の壮行会にあたりて 一七、九、十五

出征の友を送る

国のため弓矢とりもち征く友のみ心偲べばいや励まさる
ことの葉の真の道に命もて戦ひ来りし友にしあれば
なす事のなくてふみことばに教知れぬ思ひ湧来くる来し方想へば
ともすれば弱くなり行く人心偲びて思へや今日の旅立
悲しがる益良夫とふ道命もて分けていらばやまけのまに／＼
九月二十三日、早大の同志諸兄を送るべく壮行会を新宿聚楽に於いて行ひ、滝本、森口、牛山、大橋の諸兄を送ったのである。

壮行会の際よめる歌 十七、九、二三

銃とりて武士の道に出で、行く大和男子の決意雄々しく

【p262】

圍の為弔矢とりもち征く友の御心偲べばいや励まさる
大君のまけのまに／＼み友らは野山越え分け進みゆくらむ
学び舎にまことの道を命もて説き来し人を忘れて思へや
なす事のなくてふみことばに教知れぬ想い湧き来る来し方想へば
征く人の悲しき願うけつぎて戦ひ進まむ一すじの道を
ともすれば弱くなりゆく人心忘れて思へや今日の門出を
悲しがる益良夫とふ道命もて分けていりなむまけのまに／＼
文と武の違ひはあれど国の為尽すてふ道は一つなりけり
二十五日、額賀兄の病氣を見舞、直ちに岡山の兄嫁の実家に行くべく汽車に乗ったのである。

思へば正大寮に四月帰り来て以来年一年も休養する事なく戦ひに疲れ、西教寺合宿に於ける苦悶を一人静かに考ふべく、一人遠く岡山にしばしの思索を求めて逃れていったのである。一週間に於ける豪溪の山壁、高梁川の清流、岡【p263】山、後樂園、備中高梁松山城の見物平田氏父娘と連れだつたの見物は、余に一汝⁶³⁾の家庭の温さを与

へて来れたのであった。
 新たな力を内的生命力を得て戦ふべく、一週間の休養は全く余にと
 って楽しい生活であったと言へる。

当時の余の心境は、全く矛盾に絶えぬ思ひであったであらう。懊惱、
 解脱、歓喜が屢々繰り返へされて居ったのである。

十月一日、高梁川土堤にたつて静かな流れに都塵をはなれて、今は征
 で立つであらう都の友、全国の友を偲びて、思ひ湧き出づる俣左の長
 詩をつつたのである。

苦悶の中に 豪溪河畔にたちて

十七年十月一日

夜汽車に乗りて
 交々の想ひに心乱れて
 統一するすべだに絶えて

【p.254】

力つき身弱り都を去りぬ。
 月明るき東海の道の辺行けば
 心安らぎ 夜更け行くも
 寝ぬるを忘れて 濱月に向ひぬ。

我が生の休息か、前進か
 あてなき目的尋ね来し 旅にしあれど
 心落ちつき疲れ忘れて

須摩の浦波、姫路の城に

無限の想 忘れかねつ、

汽車はひた行く、西日本へ。

自然の景色に心うばはれ

山肌の中河岸沿ひて

街道貫きて来し方想へば

【p.255】

浸入するこそ

真の戦ひと思へど・・・。

其の決意やうやく浮べ来りて

再び起てる人生の戦に

無限の果てしなき、想ひをこめて

帰り行く東路の旅に

愛しき人と別れ行くも

家庭よりも離れゆくも

如何んともすべだになき

今の我が身なれば

たゞ神に祈り

運命の力の前にすがるのみである。

抑留の父母、兄弟、姉妹

想へばどつきず

【p.258】

つきぬ想ひを一つにすべて

大御心にまけのまに〜

仕へゆく事の有難きかな

明治天皇御製を

日夜拝誦し奉りて

み民の悲願貫き行くこそ

大和島根に生を継ぐ

個体生命の全体生命への

没入と云ふべく

かしこくもさとし給へる

大御教をいたゞきまつる。

山、河、静かに虫の音、

のみすることの山奥の河岸

都路はるかに、友と離れて 一人住まひぬ
 都の戦を一人静かに思へどつきづ
 今の我が身に

されど戦は永遠にして我が道遠し
 久方の家庭の集ひ

新しき父母得たる心地して
 しばし忘れぬ、戦へる友を

妹と二人手をととりて

山を下れば、我が身に新たなる

観喜の世界開き

心苦るしき想ひも晴れて

心さやかに、幸ある一時に

分時の努め忘れる思ひす。

【p.257】

七日の楽しき集ひの中に
 新たに湧き来る人生の観喜
 なれど再び我は都路さして
 戦ひの最中に

かへり行く日の近きを想へば
 我が身にして我が身にあらざる
 と想へども

苦しきは人生

生の活路、うるほひ無き

来し方想へば、無限の力湧き来ず

噫々、只、一人となりても

正しき、雄々しき、

意志より湧き来る

戦ひに我が身を

に立ちて

静より動乱への世界への

突入を想へば、心乱るゝ思ひもするも

我が行くべき道は一つ

臣の正道一つにしあれば

行くべき道の変ることあれ

臣の正道変る事なきを思ひて

戦ひ、戦ひ進むべきなり。

上りの列車、汽笛と共に去りぬ

近き日我も又此の地を去るの日を

想へども

其は戦ひへの前進にして

今はその準備の秋なり

【p.259】

妹の学び舎より帰り来る時近く

又我去り行く日も近し

離れても、たゞ偲びて行くの日

道は開くる事を信じてのみ

我は生き行くべきなり。

本宮の妹達想へば胸せまりくる

ちぎれる想ひつゞくも

今の我が身に如何んともすべなく

神に祈り己の誠を尽し

共に生き共に死して行くてふ

外に道あるなきなり

都路に

新たらしき戦ひが

如何に、如何なる途にて

開かる、は知らねども
たゞ誠もて尽すてふ外に考へ
るすべだに無く

生くるべき道だに無く、
「み民我等もるともにまめやかに
吾が大君に仕へ奉らんと誓ひまつ
らむ」と

答えまわりて拝みまつりて

戦ひ行くこそ唯一の

道とこそ知れるなり。

命絶える事は恐れじ

たゞ名のすたるこそ惜しけれ

【p260】

益良夫の道こそふむべき

道なりと信んずるのである。

友は皆銃をとりて

大君に召されて雄々しく

今日の日征^ユきし事を偲びて

我も又十月一日の日

心固めて再び都に帰り行かなむ

苦しき障害と戦ひつゝ、

戦すむ迄

世界の平和来るてふ日迄

日本の永遠の栄^{ヤカユ}の来るの日迄

命の続く限り

眼には眼^メえねど

言葉は通はねど

両親、兄弟、姉妹

て当時の戦況を見たいと思ふのである。

《一貫せる道を

野沢浩

「全国同志諸兄、「運動の目標」といふ様なことはもう明確であらうと思ふ。教育改革の声も、たゞ僕らの捨身の努力に俟つより他に現実にも加へ得ないのだ。学生年短縮が青天の霹靂の如く突如として行はれたが、しかし、かゝる時代の声はたゞ僕らに対する切なる請願であると思ふ。

僕らはいまこそ本当に落ち着いて考へ、研究し、誰人も開かうとせぬ「協力の道」を広めて行かねばならない。協力の道―これは永久に残された課題である。学生運動は支那事変の勃発と共に急速に展開された。国際国内情勢の迫り来る危機を警告しつゝ、学園の思想的混【p263】迷とた、かひつゝ、その根強き個人主義的的人生観とた、かひつゝ、遂に純一の道を切り開き得たのである。そして我々は、今日かうして共に結ばれた。その過程は実に激しい、かひであった。しかし我らが体験した苦みは、心から新しき友に伝へねばならない。時代の痛苦濁乱を一身に味ひし僕らは心から友らに協力の道を開いてやらねばならない。僕らが今沈黙してゐたならば、日本の学生は一体何処に道を求めて行かむとするかを憂へずにはをれぬのである。道とは現実には協力の道である。この協力の道を広めるためにこそ、僕らは心を砕き自らを修めて来たのである。

「学生運動」、この名は光栄の名である。二千六百余年の日本歴史の悲劇は、学生運動によりて確固として受け継がれてゐるのだ。僕らは如何に苦しんでも良いと思ふ。選ばれた人として、僕らはその責務と共に光栄を感じるのである。

僕らがいま立ってゐる道は、亡き戦友の御霊に連る道である。【p264】学生生活にかゝる厳肅な道が存することを、全学生に知らしめねばならない。学生は誰も求めて生きむとしてゐる。しかし何人もその生きむとする意志に答へ、それを導きかうとはせぬ。文の道に於てこの意

都の文化の戦士としての友を
地方の同志^{トモ}を

第一線に銃をとりて戦へる

友を偲びつゝ、

戦ひ行かん事を固く誓ひぬ。

雨止めみて、太陽輝き始めぬ

苦悶は去りて、黎明輝きぬ

雨晴れて、地固まるとか

苦悶の中に血湧き出でる

戦へ、戦へ、永遠の後まで

反省のいとまもあらず

祖国防護の戦に

【p261】

帰り行かなむ

祖国の生命^{イチヂ}に。

十月一日

十月三日、新たなる意力に燃えて上京すべく、豪漢駅をたつたのである。途中、神戸湊川神社に参拝、大楠公の墓に詣で、徳川光圀公の筆になる『噫々忠臣楠子之墓』前にしばしたゞずみ、しばし想ひを七百年前建武の中興楠公父子の孤忠を反り見、決意を固めたのであった。

第五項 出進発式都下出発式

西教寺合宿、野外教練、学期末試験、帰省を経て、十月四日帰寮と共に二班に列せられた余の責任も重大となつて来たのである⁶³。

七日、都下同志に依つて、松陰神社に於いて合宿の悲壮な決意を面に、今や先輩、友あまたの多く戦線に送り、その意志を継いで茲【p262】に夕暗せまる神前に出発式の宣誓をなしたのであった。

昭和十七年十月十五日附『た、かひ』の巻頭言（野沢浩兄記）を以つ

志を正しく伸すことは実に至難だからである。しかし僕らはこの至難なるを深く痛感するが故に、心からこの道を友らと共に進まんと念願するのである。イエスは「何を言はむと思ひ煩ふ勿れ」と警めた。友らよ、一人にて生くるを得ぬ生の痛感を先づ共にしよう。あ、一信海はいよ／＼広く、いよ／＼深くあらねばならない。《（十、十四）斯く全国的運動は益々一人々々の信を求めて行くと共に、茲に又各都下大学に於ける熱烈なる同信協力が実現されぬばならなかつたのである。

早大に於ける学生運動の責任をとる余は、大庭、高木の両兄と共に、新たなる発展段界を求めねばならなかつた。茲に於いて同信寮を建設すべく、一ヶ月余り費した事は、実に其の効を見【p265】るとは言へ、我々の同信協力の具体化に外ならなかつたのである。

茲に於いて十七年十月五日附「た、かひ」を通して「早大同雄建寮建設に当りて」と題する高木三郎兄の文を見たいと思ふのである。

《全国同志諸兄！

何時の世にも変わらざる人の真心につながつて我等は生きてんと願ふのであります。「しぬび合い助けあひつゝ、うつしよにつきぬいのちを得つゝ、行くかな」といふ故黒上先生のみ歌のみ心がしみ／＼としぬばる、此頃です。秋の月を見ては友を偲ばれ、虫の音を聞いては遠く離れし友を慕はれつゝ、同信生活の唯一白道を直進し、遂に戦ひたふれ給ひし懐かしき故黒上先生を始め、諸先輩、友等の御霊ををろがみまつり、神国の神霊の御守りを切にいのりまつるのであります。我等早大同志七名は、今や尤にやまれぬ思ひにかられつゝ、東京近郊中野の一隅に雄建寮を建設せんとしてをります。

【p266】

学生運動の当初、あしかびの萌え出づる如く、各地に次々と寮の建設された頃のあの雄々しくも若々しい生命を再び奪回し、真に危機に頻せる祖国生命の最後の一点を死守してくだ／＼しきさやりを息吹きは

らひつ、今度こそ学園内運動の中心たらんと決意してをります。全国の友らよ、我等はこのさ、やかな家内に生る、生命の力を信じ、大君のまけのまに／＼炎となりて出で立たんとするのであります。キシマのミチは、やがてた、かひの雄たけびとなって諸兄の心と心とふ心に通ひ行く事でせう。歌はんかな、再生の歌を。友等よ。

早大雄建寮誕生のつどいひ臨みて 佐々木正治
胸内に湧き来る思ひそがま、になり出づるらむ雄建寮は
新しき寮作るとて集ひてし友等の顔の頼もしきかな

あふれ来る若き生命のみなぎりて語りつきせぬこの集ひはも

四とせ前国内に寮舎次々に生れ出でしを思ひ出でつ、

【p267】
みだれたる学校教育の具体的批判ぞ我等が寮建設は
湧き起る学生運動のまさきかけて今雄建寮は出れ出づるも

雄建の寮の名さながらに雄建びて進みゆくべしませらをも⁵⁵」
然しこれを色々障害があつて遂に建設を見る事が出来なかつたのである。然しこの燃えるが如き意気を持つて学生運動に挺身して居た事は、実に壮なるものであつたと云へる。

第五六項 全国高専巡廻合宿

《いづこより流れ来しか

この水よ

いづこより湧き出でしか

この水よ

流れてやまぬ

この水よ

これぞみくにのすがた

神ながらなる

【p268】

概念の約束の上に生【p270】を托する。かゝる不誠実、劣弱なることが真実より生きむとする青年の□堪へ得ることであらうか。かくして、われらの生の創造は、真実と虚偽の弁別より始まる。

青年の心は真疑⁵⁶を鋭敏に見分くるが故に、精神の改革を唱ふる者は先づ自ら真実であらねばならない。真情を自己の直接の思ひをありのまま、に述べ得る率直にしてを、しき精神ノ持主にして始めて青年を指導し得る。詩を解せぬ者は最早青年に何らの感激を与へ得ない。青年はかゝる愚鈍の精神に最早魅力を持たなくなつた。青年はつねに答へを望む。それ程に心は不安と疑問とに埋められてゐるのである。この現状を心から悲しむわれらは、又再び全国巡遊の旅に出たのである。しかしわれらの前途は如何に困難が重畳してゐることだらう。空寂の抽象思弁、不真面目の教養主義、確信無き文化主義等、凡る昏迷思想このた、かひは余儀なくされる。しかし唯国民精神の權威のために、われらに一すぢの道を開かむ⁵⁷【p271】するのである。計り知れぬ苦闘の果に生る、高き同信協力世界、日本学生生活に暁する同信生活、こゝに明け渡る生の歓喜、それを只ひたすらに求めてゆく巡廻の旅は、瀕降る秋の時雨と共に眠れる人々の心とふ心を呼び覚まし、一すぢの道をつぎ／＼と結び行く。

「何の為の学問か？」凡そ学生の心に尽きぬ不安はこれである。生きむとする切なる願。誰もこれに答ふる者はない。黙せる不安。われらは学生の眼差に無量の思ひを知るのである。時代の底流を支ふるは誰？現代はかゝる時代である。生を営む心を失せて閉す心いのかと光明を！絶えせぬ願。この願に巡回の旅は進み行く。疲れし時は友を偲び、失望の時は先哲の書を取り出してその生涯を仰ぎまつり。明治天皇御集一卷に、詔勅に学生運動の根本義を直接に仰ぎまつりつ、。神代ゆいまにたえぬいのち、興隆する祖国のいのちを全身に【p272】つづくく実感しつ、』⁵⁸（神代ゆいまに）より。

みくにのいのち》（三井甲之先生作）

協会解散の後、特に我々の憂慮して居つたのは、地方同志の動行である。其れが為には地方巡廻が最も重要視されなければならない。茲に極く秘密裡に地方巡廻が行はれた事は、運動に新たな進展を示したのである。

十月十二日、地方巡廻出発式を終へ、四国、松江班を先発に、次々に出発していった。

新潟班、北陸班、松本班、東海班、松江班、山口班、九州班、四国班、以上八班に別れ、起つたのである⁵⁹。

以上を全国高専巡廻合宿記第一号（十七、十、十七）第二号（十七、十、二十二）『神代ゆいまに』のはしがきを通じて見たいと思ふのである。

《神代ゆいまに

【p269】

生きむとする者の願は悲しく、純一である。微風にそよぐ小草の末に、人の眼の輝きに、生きむとする者の願を知る人は幸である。生きむとする至情の物に触れ、事に触れて、成り出づる。そこに生る芸術と宗教に生を托する人は幸である。而して、詩に祈念の感応相称する「滅私奉公」と言ふ心をは、先づ内心に立ち帰るにも、この最高の我らが生の標識を、この誇るべき我が道徳の最高規律を、いよ／＼厳肅ならしむべく、己が生の全体を顧みて、そこより出づる生の痛感にみ民の道を望むべきである。「翼賛」「臣道」「国体」と口にするは易々たり。しかし乍、概念其自体は死語である。概念を生命化し、確固たらしむるは内心の実感と確信であり、真実に生きむとする者の求めてやまざるはこの直接の思ひである。我らは断じてスローガンに生を托し得ない。スローガンに生を托して晏如たる者は、精神の感威厳を自ら放棄せし人、生命の翻弄者、不実の徒である。言葉を己が真心より語るに非ずして便法とする、かゝる思しきことがあらうか。幾つかの

巡回の友依り苦闘の程、歓喜、苦悶、様々報ぜられて来た。合宿が次々と行はれ、新同志も得る事が出来た。

だが、運動の苦闘は依然として変わらなかつたのである。我々は戦ふ以外道はないのである。

巡廻の友等を送つた後、第四回世界観大学が赤坂三會堂に於いて、十九日依三十日迄行はれ、毎日出席、新しき同志を獲得すべく尽力。三十一日、巡廻報告を研究所に於いて聞き、余暇を利用して半島学生を訪問すべく、飯田橋近き崇徳寮を数度尋ね、意見を交換。明治節には共に御製拝誦、君が代を奉唱し奉つたのである。

崇徳寮に行きし席上にて 十七、十一、三

大御歌をろがみ奉り臣の道内外問はずむつび行かなむ

其間、満州視察を終へて帰寮された、桑原、加納、加部三大兄の視察談を聞き、想ひを新にする事が出来たのである。

【p273】

茲に至る間、我々は早大学園に於いて、大隈大講堂に於いて行はれる課外講議⁶⁰に対しては根本的批判を加へる事を忘れなかつたのである。政経学部長□鹽澤先生⁶¹引退の後、中野登美雄⁶²先生就任の際に於ける、奥村喜和夫⁶³氏の『自由原則討滅の血戦』に対し、又は中野正剛氏の『天下は一人を以て興る』等⁶⁴にに対し批判、共鳴を語り合ふ事に最も重大意義であつたのである。

第七項 早大精神科学研究会出発式

《さまざまのさやりきりそけを、しくも建てらるべかりし雄建寮はも」

「あ、われら力の限りつくせども事ならざりしをかしこみまつる」これは我ら早大同志が如何にして実現せんとした早大雄建寮が種々の事情のために遂に建設し得なかつたその思ひを、一人の友が悲痛のシラベに歌ひ上げたのである。然しながら、我らの思ひはかくの如き

障害にも少しもくづほる事なく正大寮より一【p274】名の友が勇躍第一早高附近の集英館に基地を基け出陣してそこに他の二名の友と共に前進基地を構へて前進の態勢を整へたのである。去る十一月十三日夕暗迫る厳かき松陰神社に同志二十一名相集りて共々に天かけります松陰先生のみ霊の大前に出発式を行ったのである。正大寮より寺尾、佐々木両大兄を迎へて、友等一人一人の緊張した面持は無限にひらかる同信協力の道の前途に明るい予感を与へてくれた。友の一人の祝詞は友を思ふ心の切々を泌み入る如く、これに応へるべき我らの責任感をいよ／＼強く感じたのであった。載ひは式は御製拜誦、祝詞奏上、献身歌献詠と次第に進み、心はそれにつれて高揚し、最後に「神州不滅」を声を限りに合唱し、終わった時にはもはやあたりはずっかり夕闇につ、まれて、空には細き月かげがあらはれ、無数の星がまた、いて居た。高揚した思ひのまゝに、我らは社務所の二十一回猛士と号された松陰先生の掛軸のかゝつた部屋に集まつて懇談会を開いたので【p275】あった。友の一人は「我らは友の言葉に対してそれを論破するのではない。一人々々の友の苦しみを共に苦るしみ、道をきり開いて行かねばならぬのだ」と同信相談の苦しみを告白した。我らは自分だけの苦しみに閉ぢこもつて居てはならない。松陰先生は講孟余話の中に、「大儀なることを勉強すると人の情を思遣りて己の行をすとおりの学問は始まることにて、是強道の道なり」と云はれて、その確信を孟子の言葉に密着して述べられてゐる。思はず心激しく語る友の言葉に、何時か訴り新しき友らの眼も輝き、協力の思が内より湧き来るのを覚えた。高らかに維新の志士の歌を朗詠し、尽きせぬ思ひに出発式を終つたのである。我等の集ひはみ祖のみ霊のみちびきに依りて守られて、大御言葉につらなる無上の歓喜の中にひらかるゝを実感するのである。全国の友らよ、神州不滅の歌声あはせに諸事あはせて前進しよう。」^二

次に出発式祝詞を書いて置きたいと思ふ。

道をはたすに進みゆく、我等が行手をみ祖のみ霊又さきがけてたふれ給ひし黒上先生、諸先輩、友等のみ霊よ、まもらせ給へ。
昭和十七年十一月十三日^三

斯くて十五日、会員一同武州御嶽の想牛の地に、ハイキングを行ひ、御嶽神社に我等の運動を守らせ給はん事を祈願し奉り、来たつたのである。

然して全国的に次々と合宿は行はれ、京都正大寮、法政大学、明治大学、第一高等学校、東京外語、等々各地、各所で行はれたのであった。

第七項 正大寮解散

時代の流れは不可解である。人力には限度がある。学生運動の進展も又一進一退である。

【p279】覆うとしても覆ふ事の出来ない苦難の道、それが運動である。文武省依りの弾圧に加ふるに、軍部依りの干渉が加はつて来た今は、思想政治運動は勿論、民間に於ける思想運動は許されなくなつて来たのである。特に学生運動は注目されて来た。だが之に對するには、我々には幾多の打開すべき道はあるのである。然し打開し得ぬ問題が一つある。それは、経済的困窮である。

精神科学研究会に於いても此れに直面せざるを得なかつた。親子、否兄弟の間に立つ学生正大寮に於いても同様である。加ふるに、思想団体、特に我等に加はる批判の眼は最近急速に加はつて来たとも云へる。我等に寸分も批判の対象たるべき事をない事を確信してゐる。だが研究所に於ける意見の結果、茲に正大寮解散を撰ばねばならなかつた事も一応了解出来得るのである。

大東亜戦争勃発一週年記念の今由を迎へる七日の夜突然【p280】解散の事を言はれたのも、一応は驚きつゝ、も止むを得なかつたとも言ひ得るのである。

《昭和十七年十一月十三日早大精神科学研究会出発式【p276】に当り、秋漸く更けて色づけ初めし木群並み立ついかしき松陰神社の御社のみ前に額づきて、謹み畏しこみて我等が決意を告げまうらん。

顧みればとき昭和十四年、さきに支那事変勃発せしより二年経しに、みくにの生命守るべき学び舎に、こちたきあげつらひ臣の正道くらまして、た、かひを内に支ふべき原理を見失ひ行くを見るに忍びず。すこやかにのび行かんとする若き雄々しき生命のまゝに、日本学生協会につらなる友どち、祖国の生命ともろともに友より友によびかはしつ、燃ゆる火の炎となりて全国にむらがり立ちし時、早大校園内にひそみもだえたりし葛西大兄始め数名の友等相呼応して、同信協力の血路ひらき給ひてよりかぎりなき苦しみ悲しみのびたへつゝ、教育思想改革にた、かひ来りし。思へばその年月の長かりしかな。

昨年十二月八日、畏くも対米英に對し戦線の大詔換発【p277】あらせ給ひてより、皇軍の威武、朝日のみ旗を諸共に宇内に輝きわたりし中に、文の道に共々進み来りし友どちあまた。大君のまけのまに／＼醜のみ楯と征で行きてより、未だ幾何もた、ざるに、民主々義、共產主義の思想、いよ、はびこり、ひたすらに国民の上に注がせ給ふ大御心をなやませまつりつ、恥づる色なきを思へば、たゞならぬみ国の危機の心に迫り來。

又今年秋十月、五名の友等をみ軍に送り、今こゝに新たなる友あまた迎へて共々にみ祖のみ霊の大前につらなる事のかしこさよ

「身はたとひ武蔵野の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」と雄叫びてゆきまし、松陰先生のみふ給ひ来り道のなつかしくかへりみしられ、乱れに乱る、今の世の様、又学びやの様次々と思ひおこされ、我等のつとめいよ、重きを覚ゆ。

かたしとて思ひたゆむなとふ大御言葉をかしこみまつり、いかならむ事ある時も 歴代天皇御製並びに

明治天皇御製をおろがみよみまつりつ、同信協力の一【p278】すぢ

正大寮解散につき退寮するに当りて、十七、十二、八今日よりは力の限り身の限り強く雄々しく生きて行かなむ幾度か迷ひし事のみ多くしてなす事なかりし事のくひらる今よりは己が身の業事の代るとも一貫道は永久に変わらじをちこちに別れすむとも大御歌をろがみ奉り歌ひ通はむ友偲ぶ思ひの絶えし其の時は道の危きを思はるゝかな幾度か苦悶の末退寮する事を思ひ立つた事もあつたのであるが、全国運動の中心地正大寮生活が離れる事が出来なかつたのであるが、今茲に思ひもかけぬ解散の悲報に真に悲しみの湧いて来る思ひがあるのである。

かつては家郷への便りのはしに（本宮に）十七、十一、七日【p281】

益良夫の行くてふ道は悲しけり家をも捨て、旅立てる日は国の為憂き身も何かいとほなむ史のためしに多からましを梓弓帰らぬ旅に父母の残せし子らの秋の夕ぐれ

と歌つた自分ではあるが、真に正大寮を去り、学生運動の中心が正大寮依り離れて、各自各自の意志的統一の中にあるを思へば、一沙感無量なるものがあつたのである。

矛盾、撞着の激しい余の十年一年半の寮生活（実際には九ヶ月、入寮以来は一年半）ではあつたが、余の世界観人生観の漸く確立せんとして来た、此の時將して現実に具体的生活に没入すべき信念があると云ひ得るであらうか。

友偲ぶ世界、同信協力の世界、病ひの時には友に救はれ、合宿生活に幾度か友に救はれ、余の帰国以来丁度満二年の生活は友依り離れる事は出来なかつた。

寮解散は現実である。同信の世界を寮生活を離れて【p282】実感すべく、一人々々の憶念の世界、そこに我等は一步踏み出す事になつたのである。

国民生活学生生活、団体生活依り、国民生活、其処に我等の力を試すべき時期は来たったのである。

寮解散も自然の流れである。神の摂理と言へ様。今こそ我々の実生活への体験はためされるのである⁷³。

同志の一人々々が本郷に、渋谷に、神田に、中野に、諸々の想ひをいだいて別れて行くべく、最後のシキシマのミチ会を終へ、二十四日の解散式と共に別れて行く事となったのである。

不可解なる現実生活、統一し得ぬ諸々の思ひ、寮生活の矛盾、様々の想ひに堪え切れぬ俛に、二十四日の解散式を待たで一人故郷本宮に帰った事は、余の現実生活への第一歩への随順から来た精神的自然の流れの思ひであったと [p.283] 言へ様。同志との最後の訣別を告げる事なく、新しく変った実生活への新天地、淀橋柏木一室こそ、余自信、社会への前進を意味する根拠地であり、前進基地集英館から離れた生活を余自信欲して来たのも決して独善的意志にはあらず、実社会への闘の場所として撰んだ事は、余のしからしむるところであり、現実生活と理論学術思想の統一を把握する道たる事を痛感して居ったからである。

余の進路は不可解である。十八十有八才にして渡米、四年半の滞米生活依り帰るや否や、大東亜戦争勃発と同時に新たな決意に燃えたち上り、幾度か挫折の中に、正木寮学生運動に身を投じ正木寮病ひに斃れ、再起に燃えて起てば寮解散に会ふ。今茲に、柏木の一室に計り知れぬ思ひをいだいて次の前進の期を待つ。人は歴史を作つて行くのである。新たな歴史、昭想ひ出多き昭和十七年の師走の半ば [p.284] 過ぎ、多くの友を別れを告げてける暇もあらず、次の計画をいだいて、休養と、整理と、蓄積と、分析、人生の動乱の最中に、余自身の姿も流されて行くのであった。時十七年十二月十日十二月十三日移転。一週間の後、時十二月二十一日、本宮に帰った。

究の葉」第二六号、文生書院、二〇〇八年、一六頁。

8 小田村寅二郎の説明によれば、一九四〇年八月一七日、地方別合同合宿での田所廣泰による「本部長告辞」中に示された五項目よりなる「合宿綱領」(『学生生活』一九四〇年一〇月号、六一頁。『資料集成』II、第三卷、三〇七頁)の一部を下敷きに、翌年八月三〇日、日本世界観大学講座最終日に同じ田所廣泰によって一項目の「日本青年行動綱領」(『新指導者』一九四一年一〇月号、七四〜七五頁。『資料集成』II、第四卷、一九四〜一九五頁)と題して発表され、同日付のパンフレット(『資料集成』II、第七卷、二六一〜二六三頁)として公刊されたもの(小田村寅二郎『昭和史に刻むれらが道統』日本教文社、一九七八年、一九五頁。井上義和『精神科学研究所事業』『資料集成』II、第一〇卷、九二、九八頁)。その後一〇月一七日付で発行された『思想戦闘綱領』の「序」の前に置かれることとなるが、合宿への概文として作成された「合宿綱領」は、その第一項の一部と第四、第五項のごく一部とが重なるだけであり、『日本青年行動綱領』は、「合宿綱領」を参考にしつつも、事実上、新たに作成されたものであると考えるのが妥当であるように思われる。

9 「抗争」が欠落している。『資料集成』II、第七卷、三二五頁。

10 『資料集成』II、第七卷、三二五〜三二六頁。

11 「激励としよう」『資料集成』II、第七卷、三二六頁。

12 『資料集成』II、第七卷、三二六〜三二七頁。

13 本手記三四〇〜三四五頁。憲兵隊による取調に対しては、病氣療養中のことであり経緯は知らず、『思想戦闘綱要』そのものは焼却したと返答するに留めたが、彼自身、いくつかの条項、就中九六項と一〇五項について、「誰も不審を感じ、異様の感に打たれる事は否定しない。余自身も又この言葉の真義を解する事が出来ぬ」¹⁴「率直に其の非を認めてよからう」と記している。

14 「日記抄」には「十月十六日、地方同志諸兄来る」とあり、同会議

註

1 拙稿「菅野武雄『最後の手記』(一)」(JICA横浜海外移住資料館研究紀要』6、二〇一二年三月、一〇〇〜八一頁)、「菅野武雄『最後の手記』(二)」(『史学』第八二巻第三号、二〇一二年九月、一二七〜一七〇頁)参照。

2 「口今ノ所学生協会ニ対シテ文部省ハ弾圧スルト云フ意思ハ毛頭ナイ、寧口本当ノ根本精神ニ副ツテ、正シク発展シテ来ルコトヲ実ニ要望シテ居ル次第デゴザイマス」(第七六回帝国議会衆議院予算委員第二分科会議(速記)第二回)五二頁、橋田邦彦文部大臣の北吟吉の質問に対する答弁(一九四一年一月三一日)。国立国会図書館・帝国議会会議録検索システム <http://teikokuugikai.ndl.go.jp/SENTAKU/syugin/076/0122/main.html>。「学生運動の問題」未発表議会速記録(『新指導者』一九四一年四月号、五九頁。『日本主義的学生思想運動資料集成』I(以下、『資料集成』Iと略記)、柏書房、二〇〇七年、第四卷、六七頁)。

3 昭和一六年法律第九七号。JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. A0302250000、御署名原本・昭和十六年法律第九七号・言論、出版、集会、結社等臨時取締法(国立公文書館)。

4 「在学徴集延期期間ノ短縮ニ関スル件」一九四一年二月一九日公布(『官報』一九四一年一〇月一六日、国立国会図書館デジタルコレクション)。 <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2960932/28>。

5 「合宿新聞1」(『日本主義的学生思想運動資料集成』II(以下、『資料集成』IIと略記)、柏書房、二〇〇八年、第二卷、三二二頁)。「資料集成』II、第二卷、三二二頁)。

6 「八月一四日、小隊長としての態度賞せらる」(『日記抄』)。

7 「二つの祖国」と「人生一筋」(奥泉栄三郎校閲『在北米日系人研

の参加者たちは、当時武蔵野療園や東京市療養所(註16参照)に病氣療養中の「同志」を見舞ったようである。

15 引用史料不詳。

16 『思想戦闘綱要』には一部ずつ通し番号が振られており、所有者は名前を書き入れることになっていた。二五〇部印刷され、百数十部が会員たちに渡されたという。『思想情報』第五七号、文部省教学局、一九四四年四月一五日、三〜四頁。(荻野富士夫編・解説『文部省思想統制関係資料集成』第七卷、不二出版、二〇〇八年、三九四頁)。小田村寅二郎『昭和史に刻むれらが道統』一九六〜七頁。なお小田村は、『思想戦闘綱要』について「厳秘」扱ひにするまでもなかった、と思はれてならない」と述懐しているが、註13で菅野の見解を示したように、その内容は学生運動に傾倒していた学生でさえ納得出来ない点を少なからず含んでいた。

17 山県正明著、岩波書店、一九四〇年。東井義雄『おかげさまのどまんなか』校成出版社、一九九四年、六三頁参照。

18 大正九年五月二九日開所式が挙行された中野区江古田の東京市療養所。『大正九年同十年東京市療養所年報』第一回、東京市療養所、一九二六年、三〜四頁。跡地は現在、江古田の森公園となっている。

19 菅野は二九日に迎えに来た国分夫人に伴われ、翌日本宮に帰省した(『日記抄』)。

20 欄外の菅野の指示に従って、p.157の途中に、p.159〜p.160を挿入した。

21 頁番号「159」を「161」と書き直している。

22 註43参照。

23 岩崎英重編『山桜集』開発社、一九〇五年、一〇四頁。

24 『資料集成』II、第四卷、五二二〜五三頁。

25 「母ヨリ香港經由にて手紙来る(二ヶ月十日にて来る)」(『日記抄』)。

26 菅野が病氣療養中の昭和一六年一〇月一六日公布即日施行された、陸軍文部省令第二号(註4参照)によって、大学令に依る大学学部

に在学中の者の猶予期間はそれまでの二六才から、「一月二日ヨリ四月一日迄ノ間二出生シタル者」は「年齢二十三才迄」に短縮された。²⁷「二月三十一日、午後八時五十一分の汽車にて上京、桑野寮に泊す。二月一日正大寮、北澤（国分氏宅）、金川、張本兄訪問す。二月二日、寄留届（徴兵検査の為）を中野区役所にてなす。鈴木診療所にて診察を受く。二月三日、午後十時の汽車にて本宮に帰る」（『日記抄』）。

²⁸ 三月二十七日から三二日にかけて東伏見稲荷講社において春季都下学生合宿学術研究会が開かれていた。「都下学生運動 進撃の雄叫び」、『資料集成』Ⅱ、第五卷、六二四頁。

²⁹ 一七七頁が重複している。

³⁰ 日本世界観大学第二期（一九四二年一月～二月）の最終日に配布されたものと思われるが、不詳。南波恕一編になる同名の刊行物『正大寮紹介』（『資料集成』Ⅱ、第五卷、七～四二頁）は、一九四一年四月二十九日刊で、内容・形式とも全く異なったものである。

³¹ 「四月四日、早大精神科学研究会発会式」（『日記抄』）。

³² 『思想情報』第五八号、五～六頁。正大寮で寮内旬報として発行されていた同旬報『た、かひ』は、一九四〇年五月から正大寮の解散する一九四二年二月まで約一五〇部が発行され、各地の同志との情報交換に利用されていたが（『思想情報』一頁）、「旬報は取扱に注意し、いやしくも外部にもる、ことなからしむべく、受け取りたる場合はその者必ずお知らせ下さい。又回覧も慎重を乞ふ。」（『た、かひ』第二号、一九四〇年一月一日（『資料集成』Ⅱ、第五卷、五二三頁）、「今まで何度も申しした事でありましたが、「た、かひ」はその活用とその取扱ひに充分の考慮をお願いしたいと思います」（『た、かひ』第五号、一九四〇年一月一日（『資料集成』Ⅱ、第五卷、五三七頁）とあるように、部外者への閲覧は固く禁止された機密性の強いものであり、『思想戦闘綱要』とともに、文部省当局の強い疑惑を招く結果となった。

ついで言及している。「都下学生運動進撃の雄叫び」（『資料集成』Ⅱ、第五卷、六二五頁）。ここで言及されている「新しき法令」については、註3参照。

⁴⁵ 以下、「我々の確信は不動であり、我々の観察は死点をついてをり」が欠落している。

⁴⁶ 『思想情報』第五八号、一八～一九頁。なお、日本学生協会がそれまで発行所となっていた機関誌『新指導者』は、一九四二年六月号から精神科学研究所出版局に発行所を変えているが、学生協会の解散に関する言及は見られず、七月号の編集後記に「学生の手から既に学期を了へた先輩の研究所に移った」と記されているのみである。「日本主義的学生思想運動資料集成」Ⅰ、柏書房、二〇〇八年、第七卷、二八〇頁。

⁴⁷ 「学生ではあるけれども我々は無限の責任を負ふてゐる」が欠落している。

⁴⁸ 『思想情報』第五八号、一九～二二頁。

⁴⁹ 正大寮報『炎となりて』創刊号は未見。なお、「雄叫び 東北地方合宿号外」東北正大寮、昭和十七年七月に、第二行進曲がそのまま引用されている（『資料集成』Ⅱ、第五卷、五九四～五頁）。

⁵⁰ 引用史料未詳。

⁵¹ 引用史料未詳。

⁵² 「七月二十日、五班（合宿）の刷文をする。帰寮朝四時」（『日記抄』）。

⁵³ 引用史料未詳。

⁵⁴ 「七月二十七日、岩代熱海に行き一泊」（『日記抄』）。

⁵⁵ 菅野は七月二四日に、正大寮三班に「進級」していた（『日記抄』）。

⁵⁶ 「合宿新聞」2（『資料集成』Ⅱ、第二卷、三三二頁）。

⁵⁷ 『資料集成』Ⅱ、第二卷、三三二～三三三頁。なお、ここでの『マイン・キャンプ』の引用は、真鍋良一訳『我が闘争』上巻、興風館、一九四二年、五五頁の訳文に依っている。

³³ 政治学者（一八七五～一九四四）。一九一九年六月創設の共産主義撲滅を目的とする「皇化連盟」代表。「愛国政治思想教化団体『労働年鑑』昭和十三年版、協調會、一九三八年、五七九頁。ヒトラーの「マイン・キャンプ」を全訳したと言われているが、不詳。遠藤彰人「五来欣造教授の歌」（『土屋礼子ゼミジャーナル』vol.4 <http://www.waseda.jp/sem-journal/endo2.html>）。奥島孝康・中村尚美監修「稲門の群像」早稲田大学出版部、一九九二年、一七～一八頁。

³⁴ 経済学者（一八八七～一九七九）。一九三八年から四五年にかけて早稲田大学商学部長。『稲門の群像』一二三～一二五頁。

³⁵ 政治学者（一九〇〇～一九八四）。『稲門の群像』七三、七五～七七頁。

³⁶ 「四月二十四日、全国巡廻者の出発式を挙行す」（『日記抄』）。

³⁷ 一八八～一八九頁は欠番と思われる。

³⁸ 引用史料不詳。

³⁹ 五月十一日開始（『日記抄』）。

⁴⁰ 「五月二十九日、早大精研主催世界観大学座談会を学生ホールにて行ふ」（『日記抄』）。

⁴¹ 六月三日、五日、一七～一九日と、正大寮において松田福松の講話が持たれた（『日記抄』）。

⁴² 一九四二年九月二日付、『朝刊新聞』三三三頁。

⁴³ 菅野は、他の和歌の引用とは違って、海犬養岡麻呂と今奉部与曾布によるこの二つの万葉歌を、ごく自然に地の文の中に埋め込んでいいる。品田悦一「万葉集の発明―国民国家と文化装置としての古典」新曜社、二〇〇一年、一七九～一八二頁。佐佐木幸綱「万葉集の（われ）角川学芸出版、二〇〇七年、三〇～三二頁参照。

⁴⁴ 「六月十四日、学生協会解散につき都下同志代表会議を行ふ」（『日記抄』）。なお、菅野が本宮に帰省・静養中の昭和十七年二月、親友の額賀強三は「一ツの事実を」と題した短文で「新しき法令に依る学生協会解散の憂色がチラツとかすめる」と既に学生協会の解散に

⁵⁸ 『資料集成』Ⅱ、第二卷、三三二頁。

⁵⁹ 菅野は「余ノ現在尊拜スル人物（昭和）十五年五月二六日記」で、政治家、雄弁家、軍人、医者、四つにわけ人名を列挙しているが、医師を除く三つにすべて「ヒットラー」の名が記されている（『日記抄』）。

⁶⁰ 第八章、余の政治活動の始め「政綱立案者と政治家」（真鍋良一訳『我が闘争』上巻、三三二～三三三頁）をそっくりそのまま写し取っている。なお、真鍋の訳本と前後して刊行された石川準十郎「マイン・キャンプ」研究」第三分冊、国際日本協会、一九四二年七月、一二〇～一二五頁では、真鍋が「政綱立案者」と訳したヒットラー独自の用語 Programmatiker を躊躇いながらも「暫らく『経綸家』に訳して」（一二五頁）いる。菅野が石川の研究書を手にしたかどうかは不明であるが、本文で「政綱立案者、即ち経綸家」と記しており、また石川は詳細にヒットラーのテキストを分析し、いささか勇足的ではあるが「たゞ名誉や地位を獲んとすれば、多くの場合、主義も節操も無きに限る。殊に濁世に於いては『成功の秘訣』は其処に在りと言へる。が、男児産れて真に感ずるあり、真に国家社会に寄与せんとすれば、その経綸家たる政治家たるを問はず、如上の認識と覚悟とを必要とするであらう」（一二〇頁）と解説しており菅野が石川の文章に刺激を受けたとしても不思議ではない。

⁶¹ 三井甲之「祖国禮拜」原理日本社、一九二七年、一六～一八頁。

⁶² 「八月二十三日、出征学生千野、名川大兄を囲む座談会を新宿三河屋にて夜行はる」（『日記抄』）。

⁶³ 「十月十日、一、二班会議（地方巡廻につき）余二班となる」（『日記抄』）。

⁶⁴ 「秋季巡回ノ件」（『資料集成』Ⅱ、第二卷、三三四～三三七頁）。

⁶⁵ 引用史料未詳。

⁶⁶ 実際の班編成と若干の相違がみられる。『資料集成』Ⅱ、第二卷、

“Last Notes” by Takeo Sugano (3):
The Life and Thoughts of a Second-Generation Japanese-American
Who Has Become “Japanese” in Japan.

Toshio Yanagida (Keio University)

Sugano regained his health and then returned to Seidai Ryo of the Student Association of Japan, where he resumed the activity. However, as war broke out between Japan and the US, he gradually had to deal with tough situations, both financially and mentally. At the same time, he began to feel skeptical about the conceptual manner of the activity as instructed by a leader who graduated from an imperial university. The notion that imperial universities were superior to private universities, and that dormitory grouping favored the students of imperial universities kept him away from the activity. In June 1942, the Student Association of Japan voluntarily disbanded, followed by Seidai Ryo also being dissolved by the end of 1942. Sugano then began his life as a lodger at that time, with the foothold gained at Waseda University's Mental Science Seminar.

Keywords: Student Association of Japan, Waseda University, student movement, departure of students for the battlefield

三二四～三二七頁参照。
67 引用史料未詳。

68 塩沢昌貞（二八七〇～一九四五）。早稲田大学第四代学長、第二代総長。一九四三年一月四日、政治経済学部長辞任。早稲田大学大
69 学史編集所『早稲田大学百年史 総索引年表』早稲田大学出版部、
一九九七年、一三二～一三三、二八〇頁。『稲門の群像』八〇～八二頁。
70 憲法学者（二八九一～一九四八）。早稲田大学第五代総長。『早稲田
71 大学百年史 総索引年表』一三四、二八〇頁。『稲門の群像』七三～
七五頁。

70 奥村喜和男（一九〇〇～一八六九）。東京帝国大学卒業後、逓信省
71 入省。後企画院に入り統制経済の推進役となる。国立国会図書館憲
72 政資料室所蔵「奥村喜和夫関係文書」[http://nrv.indi.go.jp/kensei/
entry/okunurakiwao.php](http://nrv.indi.go.jp/kensei/entry/okunurakiwao.php)。

71 引用史料未詳。
72 引用史料未詳。
73 『た、かひ』最終号、一九四二年二月二〇日（『思想情報』第五八号、
二一～二六頁）。

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

CONTENTS

Preface	Toshihiro Obata
On Publishing the Journal of the JOMM	Masako Iino
Articles _____	
Cultural Continuity Seen in Hawaii's Traditional Bon Dance: The Case Study of Iwakuni Ondo	1 Noriko Shimada
Research Notes _____	
The position, image, and form of acceptance of Japanese dishes (restaurants) in São Paulo	21 Koichi Mori
Second-generation migrants of Brazilian origin and the bilingual illustrated book project: Report on an approach by the Shizuoka University of Art and Culture in Hamamatsu	59 Shigehiro Ikegami Nancy Naomi Ueda
Review on Scholarly Materials _____	
The first Japanese sake produced in Brazil, as recorded in <i>Shuzo-kojo Enkaku-shi</i> ("history of a sake brewery") owned by <i>Fazenda Monte d'Este do Brasil</i>	71 Taeko Akagi
A Study on Japanese Immigrant Haiku Collections in WRA Camps in the US	95 Teruko Kumei
"Last Notes" by Takeo Sugano (3): The Life and Thoughts of a Second- Generation Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan.	116 Toshio Yanagida

執筆者一覧
Authors

島田法子 (日本女子大学・名誉教授)
Noriko Shimada (Japan Women's University)

森 幸一 (サンパウロ大学・教授)
Koichi Mori (University of São Paulo)

池上重弘 (静岡文化芸術大学・教授)
上田ナンシー直美 (静岡文化芸術大学・准研究員)
Shigehiro Ikegami (Shizuoka University of Art and Culture)
Nancy Naomi Ueda (Shizuoka University of Art and Culture)

赤木妙子 (目白大学・教授)
Taeko Akagi (Mejiro University)

桑井輝子 (白百合女子大学・教授)
Teruko Kumei (Shirayuri College)

柳田利夫 (慶應義塾大学・教授)
Toshio Yanagida (Keio University)

JICA 横浜 海外移住資料館 研究紀要 9

2014 年度

発行：国際協力機構横浜国際センター
Japanese Overseas Migration Museum
海外移住資料館

発行年月：2015 年 3 月

問い合わせ先

JICA 横浜 海外移住資料館
〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港 2-3-1 JICA 横浜
Tel 045-663-3257 / Fax 045-211-1781
Web:<http://www.jomm.jp/> E-mail:info@jomm.jp

本研究紀要は、海外移住資料館『研究紀要』執筆要領に則り編集を行っています。
ただし、原稿の特質、執筆者の意向等を尊重し、一部異なった体裁・表記の部分が
あります。

Journal of the Japanese Overseas Migration Museum

JICA Yokohama

Vol. 9
2014

Articles —————

Cultural Continuity Seen in Hawaii's Traditional Bon Dance:
The Case Study of Iwakuni Ondo

Noriko Shimada

Research Notes —————

The position, image, and form of acceptance of Japanese dishes (restaurants)
in São Paulo

Koichi Mori

Second-generation migrants of Brazilian origin and the bilingual illustrated book
project:

Report on an approach by the Shizuoka University of Art and Culture in Hamamatsu
Shigehiro Ikegami · Nancy Naomi Ueda

Review on Scholarly Materials ———

The first Japanese sake produced in Brazil, as recorded in *Shuzo-kojo Enkaku-shi*
("history of a sake brewery") owned by *Fazenda Monte d'Este do Brasil*

Taeko Akagi

A Study on Japanese Immigrant Haiku Collections in WRA Camps in the US

Teruko Kumei

"Last Notes" by Takeo Sugano (3): The Life and Thoughts of a Second-Generation
Japanese-American Who Has Become "Japanese" in Japan.

Toshio Yanagida

